

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第637集

ひねよし
峯岸遺跡発掘調査報告書

防災集団移転促進事業(峯岸地区)関連遺跡発掘調査

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第637集

峯岸遺跡発掘調査報告書

2015

2015

岩手県大船渡市

(公財)岩手県文化振興事業団

岩手県大船渡市
（公財）岩手県文化振興事業団

峯岸遺跡発掘調査報告書

防災集団移転促進事業(峯岸地区)関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、防災集団移転促進事業(峠岸地区)に関連して、平成25年度に発掘調査を実施した峠岸遺跡の調査成果をまとめたものであります。

今回の調査では、大船渡湾を見下ろす高台で縄文時代前期を中心とする堅穴住居や貯蔵穴など当時の生活に密着した遺構が多く検出され、遺構からは縄文土器、石器など多数出土いたしました。県内でも比較的検出例が少ない時期の集落遺跡であることから当時の生活を知るうえで貴重な事例となりました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解に繋がると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および本報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県大船渡市をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成27年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 菅野洋樹

例　　言

- 1 本書は、岩手県大船渡市末崎町峯岸121番地ほかに所在する峯岸遺跡の調査成果を収録したものである。
- 2 今回の発掘調査は、防災集団移転促進事業(峯岸地区)に伴い、岩手県教育委員会生涯学習文化課の調整を経て大船渡市災害復興局による委託を受けた公益財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターがおこなったものである。
- 3 岩手県遺跡データベースによる峯岸遺跡の遺跡コードは NF69-0063であり、調査時の遺跡略号は MG-13である。
- 4 発掘調査期間は平成25年4月8日～10月31日、調査面積は4,512m²、調査担当者は、星 雅之・福島正和・芋坪祐樹、佐々木隆英である。
- 5 室内整理期間は、平成25年11月1日～平成26年3月31日、整理担当者は、星 雅之・福島正和・芋坪祐樹である。
- 6 本書の執筆は各担当者が分担執筆し、最終的な編集・構成は福島が担当した。
- 7 発掘調査に関わる基準点測量は株式会社菊池技研コンサルタント、航空写真撮影は東邦航空株式会社にそれぞれ業務委託した。
- 8 調査で検出した火山灰の分析は株式会社パリノ・サーヴェイ、各種炭化物による年代測定は株式会社加速器分析研究所、石器のデジタル図化業務の一部を株式会社ラングにそれぞれ業務委託した。
- 9 土層および土器の色調観察には、農林省農林水産技術会議事務局、財團法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」を、地図は国土地理院発行の50,000分の1を使用した。
- 10 発掘調査・整理作業・報告書作成あたっては下記の機関と方々にご指導・ご助言を賜った。記して感謝の意を表する(敬称略)。
- 熊谷常正(盛岡大学)、金野良一・神原雄一郎・村田匠・鈴木めぐみ・工藤やよい(大船渡市教育委員会)。
- 11 発掘調査による成果は、現地説明会、遺跡報告会および「平成25年度発掘調査報告書」等で公表しているが、内容も含め本書を正式な報告とする。
- 12 今回の発掘調査による出土品及び記録資料は岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

序

例言

報告書抄録（巻末）

〔本文〕

I 経緯と経過

1 調査経緯..... 1

2 調査経過..... 1

II 位置と環境

1 遺跡の位置..... 3

2 地質的環境..... 3

3 歴史的環境..... 5

III 調査方法

1 発掘方法..... 7

2 整理方法..... 8

3 掲載方法..... 8

IV 調査成果

1 調査概要..... 9

2 検出遺構..... 13

3 出土遺物..... 65

V 分析と測定

1 試料と目的..... 147

2 火山灰分析..... 148

3 年代測定..... 152

4 結果と意義..... 156

VI 総括

1 遺構のまとめ..... 157

2 遺物のまとめ..... 160

3 集落の消長..... 164

4 結語..... 166

[図 版]

第 1 図 遺跡の位置	2	第 38 図 堪穴住居 5 間連遺物	70
第 2 図 遺跡範囲と調査範囲	4	第 39 図 堪穴住居 6 ~ 8 出土遺物	71
第 3 図 大船渡湾周辺の遺跡	6	第 40 図 堪穴住居 10 ~ 13 間連遺物	73
第 4 図 調査区平面・基本層序	10	第 41 図 堪穴住居 13 ~ 16 間連遺物	75
第 5 図 遺構配置	11	第 42 図 堪穴住居 17 間連遺物	76
第 6 図 住居群 A	14	第 43 図 堪穴住居 20 間連遺物	78
第 7 図 堪穴住居 1	15	第 44 図 貯蔵穴・土坑出土遺物	82
第 8 図 堪穴住居 2・3	17	第 45 図 土坑 12 ~ 39 出土遺物	83
第 9 図 堪穴住居 4	18	第 46 図 土坑・柱穴出土遺物	84
第 10 図 住居群 B	19	第 47 図 遺物包含層 1 出土遺物 (1)	89
第 11 図 堪穴住居 5	21	第 48 図 遺物包含層 1 出土遺物 (2)	90
第 12 図 堪穴住居 7	23	第 49 図 遺物包含層 1 出土遺物 (3)	91
第 13 図 堪穴住居 8	25	第 50 図 遺物包含層 1 出土遺物 (4)	92
第 14 図 堪穴住居 9	26	第 51 図 遺物包含層 2 出土遺物 (1)	99
第 15 図 住居群 C	27	第 52 図 遺物包含層 2 出土遺物 (2)	100
第 16 図 堪穴住居 10	28	第 53 図 遺物包含層 2 出土遺物 (3)	101
第 17 図 堪穴住居 11	30	第 54 図 遺物包含層 2 出土遺物 (4)	102
第 18 図 堪穴住居 12 平面	32	第 55 図 遺物包含層 2 出土遺物 (5)	103
第 19 図 堪穴住居 12 断面	33	第 56 図 遺物包含層 2 出土遺物 (6)	104
第 20 図 堪穴住居 13 ~ 15・21	35	第 57 図 遺物包含層 2 出土遺物 (7)	105
第 21 図 堪穴住居 16	36	第 58 図 遺構外出土遺物 (1)	109
第 22 図 堪穴住居 17・19・20 平面	38	第 59 図 遺構外出土遺物 (2)	110
第 23 図 堪穴住居 17・19・20 断面	39	第 60 図 遺構外出土遺物 (3)・陶器・土製品	
第 24 図 堪穴住居 18	40		111
第 25 図 貯蔵穴 1 ~ 3	44	第 61 図 刺片石器 (1)	114
第 26 図 貯蔵穴 4 ~ 9	45	第 62 図 刺片石器 (2)	115
第 27 図 貯蔵穴 10・焼土遺構 1	46	第 63 国 刺片石器 (3)	116
第 28 国 土坑 1・4 ~ 9	54	第 64 国 刺片石器 (4)	117
第 29 国 土坑 2・3・10 ~ 13・15 ~ 17	55	第 65 国 刺片石器 (5)	118
第 30 国 土坑 14・18 ~ 25	56	第 66 国 刺片石器 (6)	119
第 31 国 土坑 26 ~ 33	57	第 67 国 刺片石器 (7)	120
第 32 国 土坑 34 ~ 37	58	第 68 国 刺片石器 (8)	121
第 33 国 柱穴群	60	第 69 国 刺片石器 (9)	122
第 34 国 遺物包含層 1	62	第 70 国 刺片石器 (10)	123
第 35 国 遺物包含層 2	63	第 71 国 石斧	124
第 36 国 堀	64	第 72 国 踏石器 (1)	125
第 37 国 堪穴住居 1 出土遺物	67	第 73 国 踏石器 (2)	126

第74図	礫石器(3)	127
第75図	礫石器(4)	128
第76図	礫石器(5)	129
第77図	礫石器(6)	130
第78図	礫石器(7)	131
第79図	礫石器(8)	132

第80図	石製品	133
第81図	調査区全体図	159
第82図	土器の分類	160
第83図	型式と文様属性	163
第84図	遺構の変遷	165

[表]

表1	新旧遺構名対照表	8
表2	柱穴計測表	61
表3	掲載遺物一覧(土器)	134

表4	掲載遺物一覧(土製品)	140
表5	掲載遺物一覧(石器・石製品)	141
表6	不掲載石器・石製品集計	146

[写真図版]

写真図版1	航空写真(斜め方向)	169
写真図版2	航空写真(直上)	170
写真図版3	調査区近景	171
写真図版4	基本層序	172
写真図版5	堅穴住居1(1)	173
写真図版6	堅穴住居1(2)	174
写真図版7	堅穴住居2・3(1)	175
写真図版8	堅穴住居2・3(2)	176
写真図版9	堅穴住居2・3(3)	177
写真図版10	堅穴住居4	178
写真図版11	堅穴住居5(1)	179
写真図版12	堅穴住居5(2)	180
写真図版13	堅穴住居6	181
写真図版14	堅穴住居7(1)	182
写真図版15	堅穴住居7(2)	183
写真図版16	堅穴住居8	184
写真図版17	堅穴住居9	185
写真図版18	堅穴住居10	186
写真図版19	堅穴住居11	187
写真図版20	堅穴住居12(1)	188
写真図版21	堅穴住居12(2)・作業風景	189
写真図版22	堅穴住居13・15・21(1)	190
写真図版23	堅穴住居13・15・21(2)	191
写真図版24	堅穴住居16・作業風景	192
写真図版25	堅穴住居17・19・20(1)	193
写真図版26	堅穴住居17・19・20(2)	194

写真図版27	堅穴住居18	195
写真図版28	貯蔵穴1~3	196
写真図版29	貯蔵穴4~7	197
写真図版30	堅穴住居8~10・土抗1	198
写真図版31	土坑2~5	199
写真図版32	土坑6~9	200
写真図版33	土坑10~14・作業風景	201
写真図版34	土坑15~20	202
写真図版35	土坑21~24	203
写真図版36	土坑25~28	204
写真図版37	土坑29~32	205
写真図版38	土坑33~37・焼土遺構1	206
写真図版39	柱穴2~5・16・19・52・63	207
写真図版40	柱穴67・35・36・64・65・69・71 ・72	208
写真図版41	遺物包含層1	209
写真図版42	遺物包含層2	210
写真図版43	遺物包含層2・塹1	211
写真図版44	縄文土器(1~12)	212
写真図版45	縄文土器(13~23)	213
写真図版46	縄文土器(24~34)	214
写真図版47	縄文土器(35~48)	215
写真図版48	縄文土器(49~63)	216
写真図版49	縄文土器(64~72)	217
写真図版50	縄文土器(73~83)	218

写真図版 51	縄文土器 (84 ~ 94)	219	写真図版 73	縄文土器 (307 ~ 315)	241
写真図版 52	縄文土器 (95 ~ 109)	220	写真図版 74	縄文土器 (316 ~ 323)	242
写真図版 53	縄文土器 (110 ~ 123)	221	写真図版 75	縄文土器 (324 ~ 331)	243
写真図版 54	縄文土器 (124 ~ 130)	222	写真図版 76	陶器 (332)・土製品 (333 ~ 335)・石器 (336 ~ 350)	244
写真図版 55	縄文土器 (131 ~ 138)	223	写真図版 77	石器 (351 ~ 382)	245
写真図版 56	縄文土器 (139 ~ 149)	224	写真図版 78	石器 (383 ~ 414)	246
写真図版 57	縄文土器 (150 ~ 159)	225	写真図版 79	石器 (415 ~ 442)	247
写真図版 58	縄文土器 (160 ~ 168)	226	写真図版 80	石器 (443 ~ 467)	248
写真図版 59	縄文土器 (169 ~ 178)	227	写真図版 81	石器 (468 ~ 482)	249
写真図版 60	縄文土器 (179 ~ 186)	228	写真図版 82	石器 (483 ~ 495)	250
写真図版 61	縄文土器 (187 ~ 193)	229	写真図版 83	石器 (496 ~ 510)	251
写真図版 62	縄文土器 (194 ~ 206)	230	写真図版 84	石器 (511 ~ 524)	252
写真図版 63	縄文土器 (207 ~ 215)	231	写真図版 85	石器 (525 ~ 533)	253
写真図版 64	縄文土器 (216 ~ 229)	232	写真図版 86	石器 (534 ~ 553)	254
写真図版 65	縄文土器 (230 ~ 237)	233	写真図版 87	石器 (554 ~ 569)	255
写真図版 66	縄文土器 (238 ~ 246)	234	写真図版 88	石器 (570 ~ 585)	256
写真図版 67	縄文土器 (247 ~ 258)	235	写真図版 89	石器 (586 ~ 604)	257
写真図版 68	縄文土器 (259 ~ 265)	236	写真図版 90	石器 (605 ~ 615)・石製品 (616 ~ 622)	258
写真図版 69	縄文土器 (266 ~ 275)	237	写真図版 91	石製品 (623 ~ 629)	259
写真図版 70	縄文土器 (276 ~ 280)	238			
写真図版 71	縄文土器 (281 ~ 291)	239			
写真図版 72	縄文土器 (292 ~ 306)	240			

I 経緯と経過

1 調査経緯

峯岸遺跡は、「防災集団移転促進事業峯岸地区」の宅地等造成工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

防災集団移転促進事業（峯岸地区）は、平成23年3月11日に発生した東日本大震災により被災した住民の生命、身体及び財産を災害から保護するため、安全な高台に住居の集団的移転を促進するための事業である。事業対象地域である「峯岸地区」においては、大船渡市と地域の被災住民間で協議を重ね、復興まちづくりに向けた合意形成がなり、国土交通大臣と協議し、平成24年12月25日にその同意を得て、集団移転促進事業計画が策定された。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取り扱いについても協議が重ねられた。岩手県においては市町村が主体となる開発に関連する埋蔵文化財調査は市町村教育委員会が担当することとなっており、復興関連調査の増大と調査員不足の状況から、県教育委員会が協議・調整を行い、本調査においては公益財團法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、大船渡市災害復興局集団移転課から平成24年8月24日に大船渡市教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

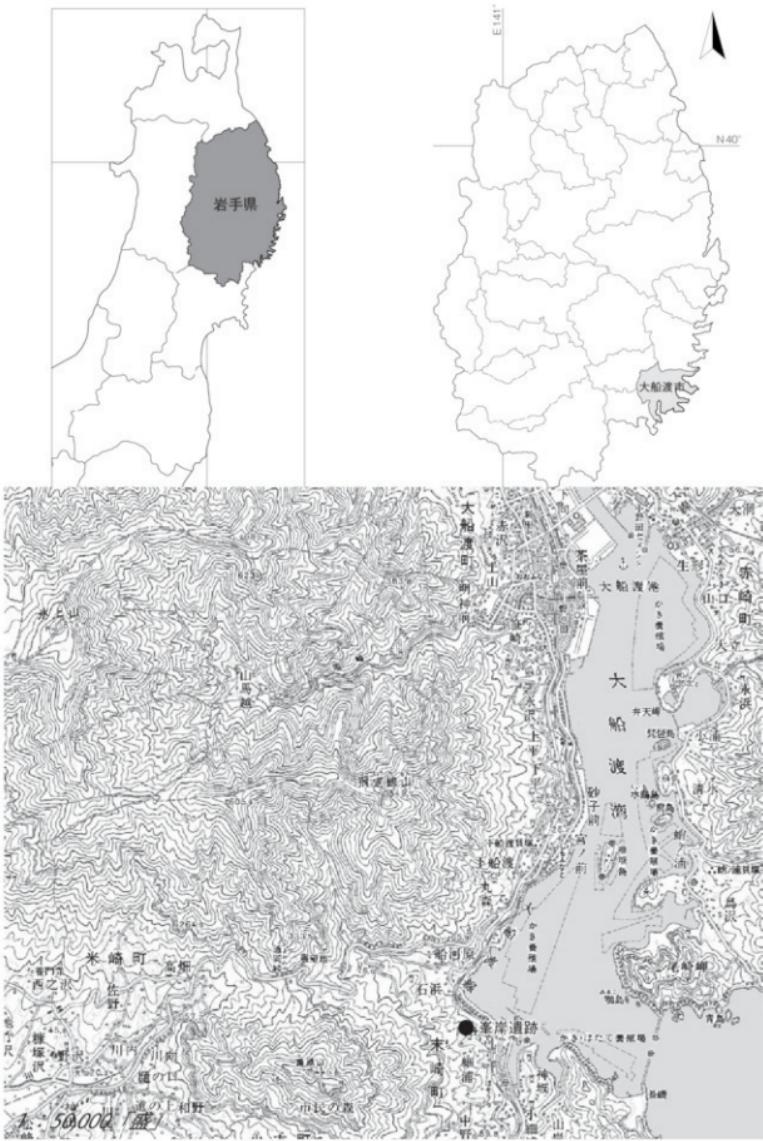
依頼を受けた大船渡市教育委員会は平成24年9月24日から10月4日にかけて試掘調査を実施し、工事に着手するには峯岸遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成24年10月11日付け教生第251号「防災集団移転促進事業に伴う埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」により通知した。

その結果を踏まえて大船渡市災害復興局集団移転課は岩手県教育委員会及び大船渡市教育委員会と協議し、調整を受けて平成25年4月1日付けで公益財團法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（大船渡市災害復興局）

2 調査経過

平成25年4月1日付けで契約となった峯岸遺跡の発掘調査は、平成25年4月8日に現地での調査を開始した。4月から6月中旬にかけて重機による表土除去および人力による遺構検出や一部遺構掘削作業をおこなった。調査区への進入路が狭小であるため中～大型重機の現場投入が困難であった。そのため表土除去は小型の重機でおこない、当初の見込みよりもこの作業に時間を費やした。その後、6月下旬から本格的に検出した遺構の調査を進めた。雨の多かった7月には現場での作業ができない日があったが、調査で出土した遺物が大量にあったためこれらの水洗作業をおこなった。遺跡全体の様相が把握できるところまで進んだ段階の平成25年10月12日（土）午後には現地説明会を開催し、広く一般への公開をおこなった。現地説明会では近隣住民の方々を中心に約100人の参加があった。調査終盤には不順な天候が続いたが、平成25年10月29日（火）に天候が回復したため調査現場を上空から撮影することができた。平成25年10月31日（木）に調査を完全に終え、翌11月1日午前に資材を撤収し、調査担当者は次の調査現場へと移動した。



第1図 遺跡の位置

II 位置と環境

1 遺跡の位置

峯岸遺跡は、岩手県大船渡市末崎町峯岸121ほかに所在する。大船渡市は岩手県沿岸南部に位置し、市域西側は北上山地、東側は三陸海岸にそれぞれ面する。昭和27年大船渡町・盛町の2町、赤崎村・猪川村・立根村・日頃市村・末崎村の5村による合併で大船渡市として市制が開始され、平成13年には三陸町を編入し、現在の市域となり、人口39,163人(平成25年11月末現在)を擁している。北部で釜石市、南部で陸前高田市、北西部で気仙郡住田町とそれぞれ市域が接している。大船渡市の主要な産業は、大船渡湾を中心とした水産業、北上山地を中心とした木材加工業等が盛んである。また、石灰岩を多く産出することから大規模なセメント工場も優勢である。気候は穏やかで、夏涼しく、冬は比較的温暖である。遺跡の位置する末崎町は、大船渡市の最南端にあり、南は陸前高田市と接している。末崎町には、大船渡湾にある大船渡漁港や陸中海岸国立公園の景勝地として知られる碁石海岸等がある。大船渡湾は末崎町で小規模な細浦湾が形成されており、峯岸地区はこの細浦湾入り口に面している。峯岸地区はこの細浦湾に注ぐ沢を中心に宅地が広がっており、遺跡はこの峯岸地区集落の北側の高台に位置している。遺跡の調査前現況は、西半が植林された山林、東半が畑であった。また、調査区北側には大きな崖状地形があるが、これは現代になってから土取りのため人工的に改変されたことが判明している。

2 地質的環境

峯岸遺跡の立地する大船渡地域は東側の大船渡湾に面し、その他三方を丘陵および山地によって囲まれている。大船渡湾は三陸海岸特有のアリスト式海岸の典型であり、氷河期以降の海水面変動によつて生じた地形であるとされている。大船渡地域は沿岸南部最高峰である五葉山が北側に控え、これに連なる山地である今出山山地・水上山山地から洪積層の丘陵地が南北に延び、その下位には沖積平野である大船渡平野が大船渡湾に面して広がっている。末崎町峯岸地区はこの大船渡平野から南に位置する段丘および開析谷からなる地域である。北にある飛定地山(標高550m)と南にある箱根山(標高447m)との間に位置しており、東から派生した大船渡湾へ注ぎ出る沢に沿った立地である。これら2つの山はいずれも中生代白亜紀の地殻変動によって形成されたものと考えられる。特に、箱根山付近では古生代でも最も古い箱根山層がみられる。峯岸地区は船原層に該当する地質が基盤となっており、礫岩、凝灰岩、砂岩などで構成されている。また、洪積段丘は細浦湾近くまで張り出しており、峯岸地区の高台もこの中にあるものと考えられる。現在の峯岸地区的集落は、この沢地形の低位部分を中心に広がりをみせている。平成23年3月11日に発生した東日本大震災では、大船渡湾に面したより低い立地での津波被害があり、集落入り口付近においては甚大な被害を受けた。ただし、今回調査をおこなった峯岸遺跡は、集落が広がる沢地形の北側の丘陵地に立地しており、直接的な津波被害は受けていない。遺跡の立地する丘陵は、大船渡湾岸まで舌状に張り出す地形であり、調査地は標高35m前後の丘陵端部に近い場所である。調査地からは大船渡湾入り口が見える眺望環境である。



第2図 遺跡範囲と調査範囲

3 歴史的環境

峯岸遺跡が所在する大船渡地域には、縄文時代を中心に多くの遺跡が確認されている。大船渡湾に近い湾岸地域では縄文時代の貝塚が多く分布している状況が明らかになっている。特に、学史的に著名な貝塚が数多く確認されており、蛸の浦貝塚、長谷堂貝塚、下船渡貝塚、大洞貝塚等はその内容も特に充実している。東北地方の縄文時代を語るうえで欠くことのできない地域である。このような地域史的観点から時代順に概要を記述することとする。

縄文時代に先行する時代の資料として碁石遺跡の旧石器時代の石器が挙げられる。碁石遺跡では、発掘調査によって後期旧石器時代とされる石器が出土している。石器は尖頭器や彫刻刀形石器など豊富な資料が出土しており、遺跡の性格は石器製作址という評価が得られている。縄文時代に入ると早期に位置付けられる尖底土器が閑谷洞窟で出土している。その後、縄文時代前期になると遺跡数は増加し、大船渡湾に面する立地で集落が継続的に営まれている様子が把握されている。その後、縄文時代中期では長谷堂貝塚で大規模な集落が検出されており、地域の拠点的な集落がより明確となる。しかし、縄文時代後期になると確認されている遺跡は少なくなり、長谷堂貝塚や下船渡貝塚でわずかながらその痕跡を認めることができる。縄文時代晩期になると、この時期の土器編年標識遺跡となっている大洞貝塚がある。大船渡湾に面する縄文時代前期～中期の貝塚の多くは、標高30～40mに立地するが、晩期を中心とする大洞貝塚はそれよりもやや低位にある点で特徴的である。

弥生時代では、長谷堂貝塚で外柱穴を有する竪穴住居が調査されている。時期は弥生時代中期であるとみられる。縄文時代に比べると遺跡数および出土遺物量は少なく、地域的様相は未だ判然としない状況である。

古墳時代～古代の遺跡も数少ないながら遺物の出土が確認されているが、様相が把握できる状況ではない。特に、当該期の遺物の出土は盛川下流から河口付近に集中してみられる。今後、調査事例が増加すれば、当該期の集落が発見される可能性があるが、これらはこれまで確認されている縄文時代の貝塚とは重ならない立地であるのかもしれない。また、特筆すべきは、殿位跡地で墳墓、地ノ森遺跡で薙手刀が出土している点である。

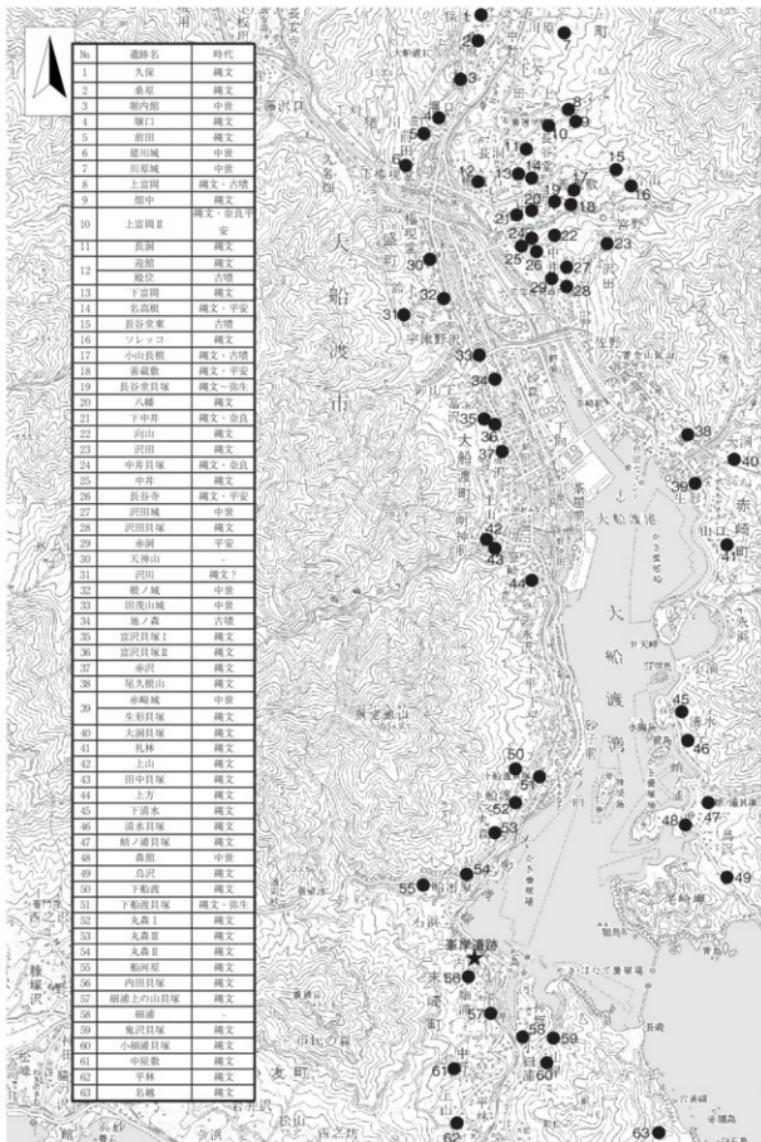
中世においては、猪川跡(猪川城)等の城館の調査がおこなわれている。現在の大船渡市街地付近にはある程度の拠点があり、その勢力によって築かれたものであろう。

なお、峯岸遺跡も以前から縄文時代の遺跡として認知されていた。縄文時代前期の遺跡のうち、蛸の浦貝塚・内田貝塚・清水貝塚・下中井遺跡などが峯岸遺跡と同時代の遺物が多い遺跡である。

(福島)

引用・参考文献

- 奥山(楠瀬)康子 1996 「ユニークな地質系博物館(14)大船渡市立博物館」「地質ニュース499」
- 大船渡市 1978 「大船渡市史第1巻 地質・考古編」
- 阿部勝則 2004 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第434集 長谷堂貝塚発掘調査報告書」(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 鈴木めぐみ 2012 「気仙地方における縄文遺跡の分布傾向と特徴について」「岩手考古学 第23号」 岩手考古学会



第3図 大船渡湾周辺の遺跡

III 調査方法

1 発掘方法

今回の調査区の調査前現況は、概ね東半が畠地、西半が山林であった。東半は雑物もほとんどなく掘削可能な状態であったが、山林部分は伐採後の枝葉等が一面に残存していたためこれの撤去をおこなった。雑物撤去後には人力によるトレンチを数箇所設定し、初期段階での層位および遺構の把握をおこなった。その結果南側微高地は削平されているが、北側の斜面下方に掘り進めるにしたがって遺構および遺物が多く確認されることが判明した。このトレンチの結果を加味しながら、その後は重機により表土除去をおこなった。重機による掘削が終了した部分については、順次遺構検出作業を人力でおこなった。

調査区内には、電柱が東西方向に2本存在するためこれを目安に調査区を大きく3地区に分けた。2本の電柱のうち、東側に位置する1本より東側のエリアをⅠ区、電柱2本間のエリアをⅡ区、西側をⅢ区とした。この地区分けは、おもに表土および遺構検出中の遺物取り上げに用いた。これとは別に検出した遺物包含層については2m単位のグリッドを設定した。このグリッドは、調査区全体を網羅するように設定したが、おもに遺物包含層の検出範囲で利用した。調査区は、平面直角座標X系を基準とした場合、東西100m・南北80mの範囲に収まるため、これを分割した20m四方を大グリッドとした。大グリッドは、東西方向を西から東へアルファベット大文字「A」～「F」までとし、南北を北から南へローマ数字「I」～「IV」までとした。したがって、大グリッドでは、北西隅の区画が「I A」、この「I A」東隣の区画が「I B」、「I A」南隣の区画が「II A」となる。さらに、これを細分した小グリッドは、東西方向を西から東へアルファベット小文字「a」～「e」までとし、南北を北から南へ算用数字「1」～「5」までとした。したがって、大グリッド「I A」を細分した北西隅の区画が「I A1a」、この「I A1a」東隣の区画が「I A 1b」、「I A1a」南隣の区画が「I A2a」となる。以上、遺物包含層については、このグリッドと層位により区分して遺物の取り上げをおこなっている。

調査に際して、遺跡名および調査年を略号(MG-13)で表現し、調査で記録したものすべてが、この略号によって管理されている。

遺構の掘削作業は2分法あるいは4分法で掘削し、その断面により堆積状況の把握に努め、同時に図および写真によって記録した。

遺構名については、調査においては汎用的な遺構略号を用いた。遺構略号は堅穴住居や堅穴建物を「SI」、独立した土坑を「SK」、独立した柱穴を「SP」、独立した焼土遺構を「SF」、不明遺構を「SX」とし、これら種別毎に「01」から番号を付与した。なお、堅穴住居に属する施設と考えられる遺構については、主体遺構名の後に「-」を付け、種別によって「S」と「0」を外して表現している。すなわち、今回の調査で検出した「堅穴住居 1」内にある付属遺構の土坑については「SI01-K1」、同じく柱穴については「SI01-P1」となる。

遺構実測は、電子平板による測量を基本とし遺構平面図を作成し、遺構断面図は手書きによる実測方法を採用した。また、遺構の写真撮影は、一眼レフデジタルカメラによる撮影を基本とし、6×7判モノクロによる写真を保存用として適宜撮影した。撮影に際しては、撮影カードの記入・写し込みをおこない、撮影写真的整理に活用した。

2 整理方法

発掘調査終了後の整理作業は、当センターの室内で行った。

遺構実測図はデータを基に編集し、遺構図版としての体裁を整えた。この作業は発掘現場で取得した点のデータを基に作成しており、これら各測点は変更せず必要な点や線を加えて整えた。これらのデータの座標値等はデータとしても保存している。

発掘調査現場で撮影した写真は、デジタル写真データは台帳を作成し、データ毎フォルダ整理をおこなった。これらは遺構毎に分類してある。また、ネガフィルムについては、それぞれアルバムによる整理をおこなった。

出土した遺物は、すべて洗浄および注記を行い、その過程を経たものの接合作業を行った。これらの内、本書に掲載する遺物を選択し、実測と写真撮影をおこなった。遺物の実測作業は、原寸での作業を基本とした。原寸で行った実測図は、縮尺を整えトレースを行い、図版用の版下を作成した。また、縄文土器表面は湿拓により拓本とした。遺物の写真撮影は、一眼レフデジタルカメラを用いて当センター内でおこない、撮影したデータは編集し、写真図版として本書に掲載した。

すべての処理が終了した記録類および遺物は、所定の場所へ収納した。遺物の収納は、掲載遺物と不掲載遺物に分けて収納している。

3 記載方法

遺構名は、調査で使用した遺構略号から新たに本書記載用の遺構名へと変更した。その変更については下記の一覧表にて示した。

掲載遺物は、種別を問わず通し番号により掲載番号を付与している。これは遺物実測図および写真図版に付記してある番号が共通している。

掲載した実測図のスケールは図版にスケールバーを付けた。遺構は原則的に1/40で掲載し、遺物は土器・陶磁器・礫石器は1/3、剥片石器は2/3、土製品・石製品は1/2で掲載した。なお、写真図版の遺物については縮小を基本としそれぞれ任意の大きさとした。

(福島)

表1 新旧遺構名対照表

旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名
S101	堅穴齿1	S217	堅穴齿2	S220	土块2	S219	土块18	S217	土块34
S121	堅穴齿2	S218	堅穴齿3	S222	土块3	S220	土块19	S218	土块35
S122	堅穴齿3	S219	堅穴齿4	S223	土块4	S221	土块20	S219	土块36
S123	堅穴齿4	S220	堅穴齿5	S224	土块5	S223	土块21	S220	土块37
S102	堅穴齿5	S213	堅穴齿6	S225	土块6	S224	土块22	S201	地土通稱1
S103	堅穴齿6	S205	堅穴齿1	S227	土块7	S225	土块23	S201	地
S107	堅穴齿7	S204	堅穴齿2	S228	土块8	S229	土块24	S207	柱穴
S108	堅穴齿8	S205	堅穴齿3	S229	土块9	S225	土块25	S208	
S109	堅穴齿9	S206	堅穴齿4	S230	土块10	S226	土块26	S209	
S110	堅穴齿10	S207	堅穴齿5	S231	土块11	S227	土块27	S210	
S111	堅穴齿11	S208	堅穴齿6	S232	土块12	S228	土块28	S211	
S112	堅穴齿12	S209	堅穴齿7	S233	土块13	S229	土块29	S212	
S113	堅穴齿13	S223	堅穴齿8	S234	土块14	S230	土块30	S213	
S114	堅穴齿14	S206	堅穴齿9	S235	土块15	S231	土块31	S214	
S115	堅穴齿15	S222	堅穴齿10	S236	土块16	S232	土块32	S215	
S116	堅穴齿16	S202	土块1	S237	土块17	S233	土块33	S216	

IV 調査成果

1 調査概要

(1) 調査区微地形

今回調査をおこなった峯岸遺跡は、大船渡湾を見下ろす高台に位置する。調査区は舌状に張り出す段丘稜線上から連続する緩斜面地のより平坦な面に該当する。調査区の地形は後世の造成により失われている部分もあるが、その旧地形を推測できる。ただし、北側の急斜面はかなり大規模な土取りがおこなわれたらしく本来の地形を大きく逸脱している。遺跡の立地する地形面はこの土取り範囲を超えJR 大船渡線の線路手前まで緩やかに傾斜していたものと考えられる。調査区全体では、調査区南西隅が調査区最高位に位置し、対して調査区北西隅が調査区最低位である。概して、この軸方向に沿って緩やかに傾斜している地形であり、ある程度本来の地形を示しているものと考えられる。

前章で述べた通り、今回の調査区は東西に延びているため、これをⅠ～Ⅲ区の3分割した地区名を与えた。

(2) 基本層序

遺跡の基本層序は、調査当初Ⅲ区中央に設けた土層観察用のベルト(以下、メインベルトと呼称)を基本とした。メインベルトは概ね南北方向に設定し、調査区の微地形による高低差を反映している。なお、各層の色調および土質は、このメインベルトで確認したもので統一する。調査区南側は標高が高く、北になるほど標高が低くなる。以下の通り、最上層から順次層名を付与した。

I 層(10YR4/3にぶい黄褐色シルト)

表土・耕作土・近現代の盛土表土は調査区西側において森林腐植土層が主体であり、東側は耕作土と畑の造成に伴うであろう盛土が部分的にみられる。いずれも本来下位にある縄文時代の遺物を含んでいるが、絶対量は少ない。

II 層(10YR4/4褐色シルト)

縄文時代以降の自然堆積層である。おもに、山林部分に分布しており、部分的にやや縮まっている。直上のⅠ層および直下のⅢ層との層界は比較的明瞭であるが、Ⅲ層が分布しないエリアではⅣ層との層界がやや不明瞭である。Ⅰ層と同じく縄文時代の遺物を含むが、その量は多くない。

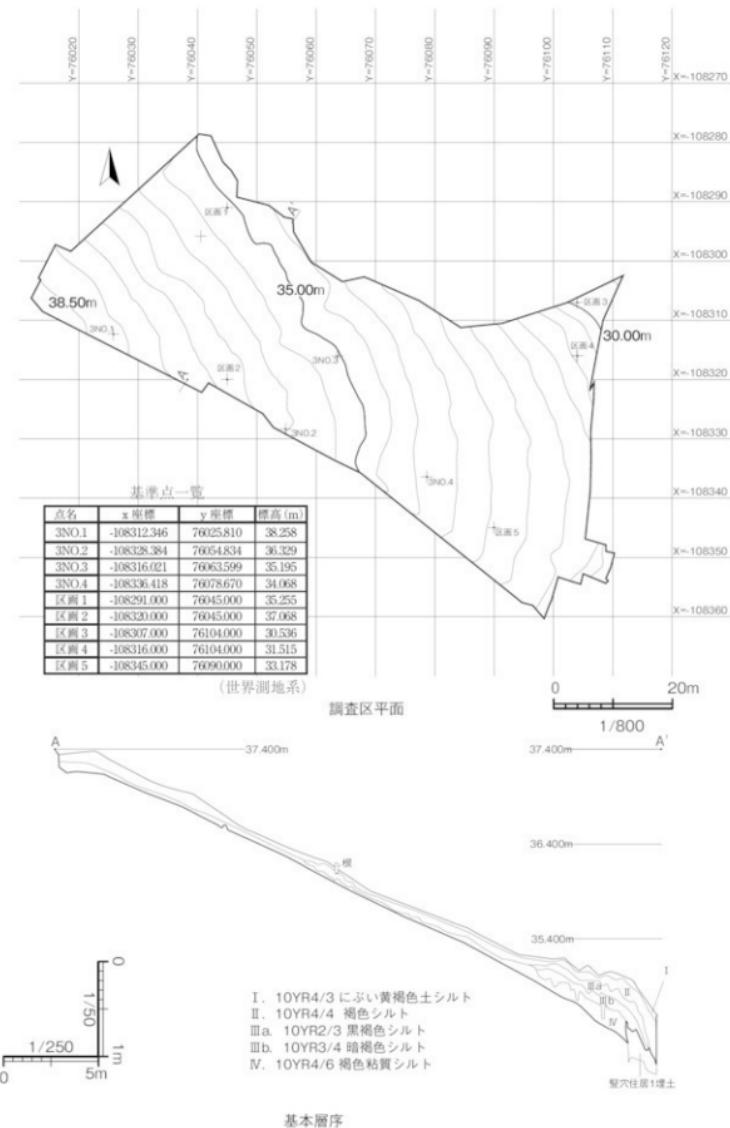
Ⅲ a 層(10YR2/3黒褐色シルト)

縄文時代の遺物包含層である。一様ではないが炭化物等を含み、おもに縄文時代前期後葉の遺物を多く包含する。調査区内でもより微低地の限られたエリアに分布する。この直下面において遺構が検出できる場合もある。これより下位のⅢ b 層との層界はやや不明瞭であるが、この層の方が濃い色調であり、総まりも少ない。

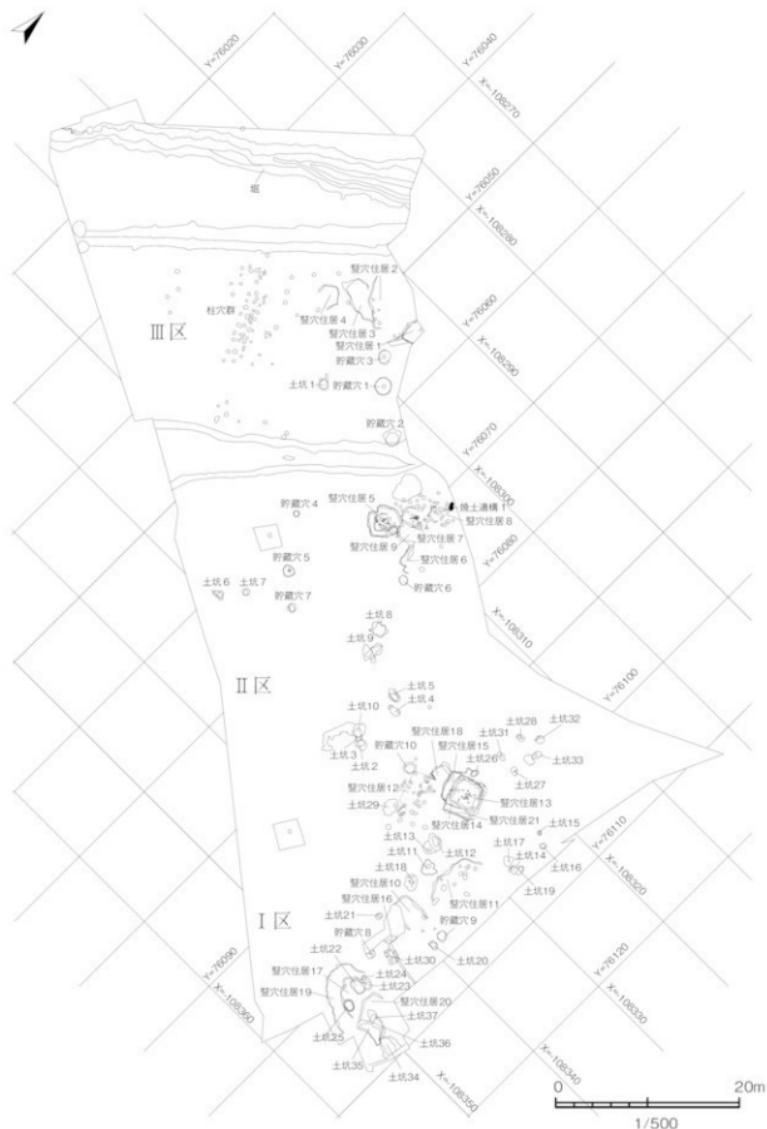
Ⅲ b 層(10YR3/4暗褐色シルト)

縄文時代の遺物包含層である。おもに縄文時代前期後葉の遺物を多く包含する。Ⅲ a 層と同様に調査区内でもより微低地の限られたエリアに分布する。部分的に火山灰が含まれるが、2次的な堆

1 調査概要



第4図 調査区平面・基本層序



第5図 遺構配置

積であると考えられる。火山灰が分布するエリアではより固く締まっており、ある時期の地下水や流水の作用が影響している可能性が考えられる。ただし、長期間滞水した痕跡は認められない。

IV層(10YR4/6褐色～10YR5/6黄褐色粘質シルト)

無遺物の自然堆積層であり、この遺跡では地山であると認識した。Ⅲ層と異なり、比較的明るい色調を呈する。上下分層可能であり、上位がやや暗めで下位がより明るい色調である。全般的に締まっており、大半の遺構をこの上面で検出した。

V層(10YR6/6明褐色シルト～礫)

無遺物の自然堆積層であり、この遺跡では地山である。調査区の高位面およびやや深度のある遺構壁面等でみられる。調査区北側にある急斜面に設定したトレンチでも斜面下方まで及んでいたため、かなり厚みのある堆積層であると推測できる。礫を主体とし、もっとも堅固な基盤層である。

(3) 遺構・遺物の概要

検出した遺構の平面的な分布をみると、調査区北側縁辺部から東側の微低地部分で多くみられる。基本層序でIV層とした地山面が認められるエリアに重なるように分布する。これは、すでにIV層が削平によって失われている調査区南側の微高地では、より下位のV層が露出しており、V層にまで掘削深度が及ぶような遺構しか見出せないことは想像に難くない。したがって、集落域はこの微高地エリアまで延びていた可能性も考えられる。これは、削平を受け底面のみが残存する貯蔵穴1基がV層上面で検出できたことも証左となろう。

検出した遺構の種別としては、縄文時代前期の竪穴住居、貯蔵穴、土坑等がおもに見られたもので、竪穴住居は比較的密集するように検出される。このことは、近接あるいは重複する竪穴住居同士にはある程度の時間差が存在することを示唆している。なお、竪穴住居の位置的関係を便宜的にまとまりで示すこととした。竪穴住居が集中する地点は、大別すると3地点に分けることができる。西側Ⅲ区に位置するまとまりから順に「住居群A」、Ⅱ区に位置する「住居群B」、おもにⅠ区に位置する「住居群C」とそれぞれ呼称する。ただし、これらは調査・整理および事実報告による便宜的なものであり、考古学的な分析に基づいたものではないことを断っておく。次に貯蔵穴も竪穴住居が分布するエリア内にあり、これらは竪穴住居とは重複しないが、近在する傾向がある。竪穴住居と密接な関係にあったことが考えられる。遺構が分布するエリアよりやや低地では、遺物包含層が広がっている。この遺物包含層は基本層序Ⅲ層が該当し、やはり縄文時代前期を中心とした遺物が多く出土した。また、縄文時代以外の遺構としては、中世に機能したと考えられる堀を1条検出した。

調査内では、近現代の擾乱もみられ、大きなものでは調査区を南北に貫流する数条の溝状を呈する擾乱が挙げられる。これらはいずれもある程度の深度を保った状態で、削平の著しい南側から連続しており、削平後の地形面に新たに掘り込まれたものである。また、調査区内現況に存在する土地利用区分の段差に方向および位置が重なっていることから最も新しい擾乱であると理解される。ただし、Ⅲ区山林部を南北に貫流する擾乱は植林以前とみられ、さらに底面に礫が敷かれた暗渠となっている。これは、近世以降、植林以前と判断される。その他、ゴミ捨て穴、植栽痕や風倒木痕など様々な擾乱が調査区内に散在する。近現代の土地利用と密接に関係しているものが多いが、風倒木の中には縄文時代に遡るものもあると推測される。

出土遺物は全域で縄文時代前期を中心とする土器・石器等が認められる。遺構から出土する土器は破片資料が多いが、遺物包含層出土の土器の中には残存度の良好なものも一定割合含まれる。

(福島)

2 検出遺構

(1) 壊穴住居

前節で述べた通り、壊穴住居は遺跡の中でおもに斜面下方に多く分布する傾向である。そのうちもっとも西側に展開する住居群A、もっとも東に位置する住居群C、それらの間に位置する住居群Bがそれぞれ位置的なまとまりとして捉えられる。住居群Aは壊穴住居1~4、住居群Bは壊穴住居5~9、住居群Cは壊穴住居10~21というまとまりである。

これら壊穴住居は全般的に平面検出が非常に困難なものが多く、そのプランを捉える作業には苦労した。また、密集して検出される壊穴住居群はその切り合い関係も有効な断面を抽出することが困難な場面も多々あった。

(福島)

壊穴住居1(第7図、写真図版5・6)

調査区北西Ⅲ区、壊穴住居群Aに位置する。立地する地形面はほぼ平坦であるが、北方向に向けてわずかに下り傾斜する。

検出層位は基本層序用メインベルトが掛かるため、検出状況が断面からも明らかであり、Ⅲb層を除去するとⅣ層上面で検出できる。検出当初、貯蔵穴が周辺に存在するため、この種の土坑であると想定したが、西半を底面まで掘り進めた後に平坦な床面と周溝が確認できたため壊穴住居であると認識を改めた。

他の遺構とは直接重複していないが、南東に位置する貯蔵穴3と近接する。北側は土取りによつて失われている崖面になる。また、木の根が床面まで及んでおり、部分的に擾乱されている。

平面形態は1箇所のコーナーが確認できるため方形基調であると考えられる。ただし、側辺が2辺のみであるため正確な輪方向および長方形か正方形かは不明である。

規模は残存する計測値であるが、南北長2.46m、東西辺の長さ1.33m、深さ41cmである。

埋土は大別3層からなり、南側斜面上方から流入するように堆積しており、自然堆積によるものであると考えられる。遺構直上のⅢ層では、縄文土器を中心に多くの遺物が出土したが、遺構埋土より出土する土器はわずかであり、特に埋土中位以下ではほとんど遺物は出土しなかった。

側壁は、2辺のみの残存であるが、いずれもほぼ直立するように立ち上がり、上方でわずかに外方へ開く。

床面は平坦で、比較的固く締まっており、柱穴1基と周溝を検出した。

柱穴は平面円形、深さ32cmである。この柱穴は部分的に木の根によって壊されている。周溝は部分的に途切れるが、住居壁面に沿ってほぼ全周するようにみられる。

出土遺物は住居埋土より縄文土器が出土した。埋土より出土した土器は前期後葉のものであり、検出面より上位では前期末の土器が出土した。

遺構の特徴および出土遺物から縄文時代前期後葉の壊穴住居であると考えられる。

(福島)

壊穴住居2(第8図、写真図版7~9)

調査区北西Ⅲ区、住居群Aに位置する。立地する地形面はわずかに北方向へと下る緩斜面である。検出時、わずかに残存するⅢ層によって被覆されており判然としなかったが、Ⅲ層を除去すると南

2 検出遺構

住居群A



第6図 住居群A

側の輪郭が微かに確認できる。堅穴住居1と近接しているが、直接的な重複関係はない。しかし、南に位置する堅穴住居3とは重複しており、これによって切られていると判断した。木の根等の擾乱があり、全体の形状は的確に把握できなかった。

平面形態は不整な長楕円形であると考えられる。長軸はおおむね斜面等高線に沿うように東西南向を指向するものとみられる。

規模は長軸5.76mであるが、短軸は北側の床面範囲が不明瞭で計測できない。深さは最も壁が残存する北側で13cmである。

埋土はほぼ上下2層に分けられ、様々な混入物がみられるが、自然堆積であると考えられる。ただし、埋土最上位に火山灰が塊状に認められる。火山灰は分析試料として採取した。結果については次章で詳述するが、おおむね十和田中振火山灰であるという結果が得られた。埋土にはわずかに遺物細片が含まれる。

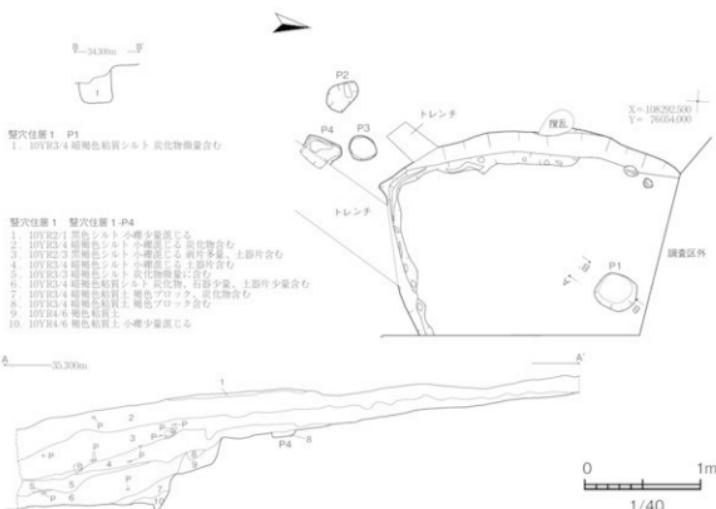
側壁は北側のみで緩やかに立ち上がるが、その他の側壁は不明瞭である。

床面は北側にわずかに傾斜するが、東西方向は平坦である。床面には柱穴が5個検出できたが、床面に伴うものかどうか判断できない。それぞれ埋土の色調も異なるため多くは遺構埋土の上から切り込まれたものかもしれない。

時期の判明する出土遺物が皆無であるため詳細な時期は不明だが、検出面から考えると縄文時代前期後葉以前の堅穴住居であると考えられる。

(福島)

堅穴住居1



第7図 堅穴住居1

竪穴住居3(第8図、写真図版7～9)

調査区北西Ⅲ区、住居群Aに位置する。立地する地形面はわずかに北方向へと下る緩斜面である。検出時、わずかに残存するⅢ層によって被覆されており判然としなかったが、Ⅲ層を除去すると南側の輪郭が確認できる。北に位置する竪穴住居2と重複しており、これを切っていると判断した。平面形態は不整な楕円形あるいは長方形であると考えられる。長軸は東西方向を指向するものとみられる。

規模は確認できる長軸6.19mで、短軸は東側の床面範囲が不明瞭で計測できない。深さは最も壁が残存する北側で18cmである。

埋土はほぼ上下2層に分けられ、様々な混入物がみられるが、自然堆積であると考えられる。埋土にはわずかに遺物細片が含まれる。

側壁は北側のみで立ち上がるが、その他は不明である。

床面は北側にわずかに傾斜するが、東西方向は平坦である。床面には柱穴がみられないが、竪穴住居2の範囲内で検出した柱穴にこの住居のものが含まれている可能性が考えられる。

時期の判明する出土遺物が皆無であるため詳細な時期は不明だが、検出面から考えると縄文時代前期後葉以前の竪穴住居であると考えられる。

(福島)

竪穴住居4(第9図、写真図版10)

調査区北西Ⅲ区、住居群Aに位置する。立地する地形面はわずかに北方向へと下る緩斜面である。検出はⅢ層の残存していない箇所であるためⅠ層直下で確認した。北に位置する竪穴住居3と近接しているが、直接的な重複関係はない。

平面形態は不整な楕円形であると考えられる。長軸は南北方向を指向するものとみられる。

規模は残存する長軸1.98mであるが、本来はもっと連続する可能性が高い。短軸は東側の床面範囲が不明瞭で計測できない。深さは最も壁が残存する北側で17cmである。

埋土はほぼ上下2層に分けられ、様々な混入物がみられるが、自然堆積であると考えられる。

側壁は北側のみで立ち上がる。

床面は南北方向でわずかに傾斜するが、東西方向は平坦である。床面には柱穴1個がみられるが、この住居に伴うものか不明である。

時期の判明する出土遺物が皆無であるため詳細な時期は不明だが、周辺の遺構を考慮すると縄文時代前期後葉以前の竪穴住居であると考えられる。

(福島)

竪穴住居5(第11図、写真図版11・12)

調査区北側中央Ⅱ区、住居群Bに位置する。立地する地形面は、全体的にはわずかに北方向へと下る緩斜面であるが、住居の立地面はほぼ平坦である。

検出面は、Ⅰ層を除去すると遺構輪郭が確認できる。北に位置する竪穴住居7と近接、竪穴住居9と重複しており、これを切っていると判断した。

平面形態はおおむね方形であると考えられるが、北側でやや窄まり、ホームベース形に近い形態である。さらに、南西隅には極端に折れ曲がるクランクがあり、当初は別の遺構が重複している可能性が想定されたが、周溝・埋土等から複数の遺構ではないことが考えられる。長軸は東西方向を指向するものとみられる。

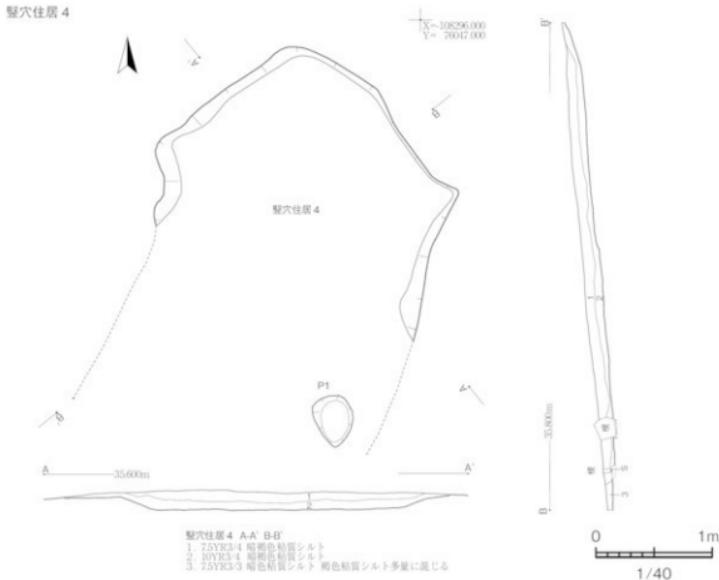
規模は東西長3.81m、クランク外側を含めた南北長2.98mである。深さは最も側壁が残存する南西

豎穴住居 2・3

in



第8図 豊穴住居 2・3



第9図 竪穴住居 4

側で36cmである。

埋土はほぼ上下2層に分けられ、上層には炭化物等様々な混入物がみられる。また、埋土下層には焼土粒の混入も確認できる。埋土上位には土器片が多く含まれる。埋土は全般的にシルト質の粘土であり、粒度は比較的細かい。部分的にIV層由来のブロック土がみられるが、顕著な様子ではない。

側壁は斜面下方側のみ立ち上がりが認められないが、残りはすべて周溝外側から連続するように垂直気味に立ち上がる。

床面はほぼ平坦であり、部分的に固く縮まっている。床面には柱穴がみられないが、周溝はおおむね遺構輪郭に沿って全周するが、この竪穴住居の平面形態の争点となるクランク部分においては周溝が途切れしており、連続性にやや欠ける。床面中央には炭化物が集中する箇所があり、その炭化物直下ではわずかに焼化した部分が確認できるが、範囲は不明瞭で赤化深度も数mmである。この中央部分が炉であった可能性が高いが、使用頻度は低いものであったのかもしれない。

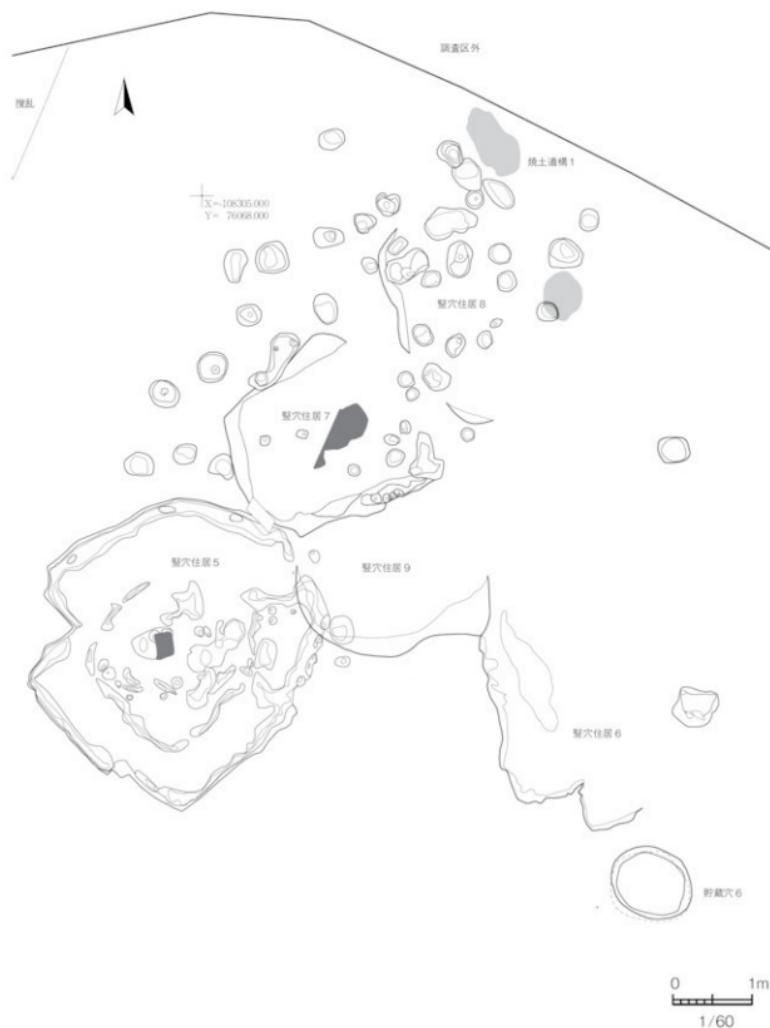
出土遺物は埋土上位では大木4式の土器、埋土下位では大木3式~4式の土器がそれぞれ出土しており、縄文時代前期中葉~後葉の竪穴住居であると考えられる。

(福島)

竪穴住居 6 (第10図、写真図版13)

調査区北側中央II区、住居群Bに位置する。立地する地形面はほぼ平坦である。

検出面はI・II層を除去すると遺構の輪郭が確認できる。竪穴住居9と重複しており、これに切られていると判断した。



第10図 住居群B

平面形態は方形あるいは長方形であると考えられるが、南辺で方形の張り出しを有すると考えられる。長軸は南北方向を指向するものとみられる。

規模は残存する長軸2.74mであり、短軸は1.48mを測る。

埋土は単層の暗褐色シルトであるが、壁際ではわずかに褐色シルトが堆積している。埋土には巨礫が複数流入しており、これらは床面にまでその影響を及ぼしている。巨礫の流入はこの遺構の機能停止、埋没後に上から抉り込むように入ったものと考えられる。このことは、土石流のような自然災害が大きく作用している可能性が考えられる。

側壁は西側で立ち上がるが、南側は不明瞭である。

床面はほぼ平坦である。床面には柱穴が1個みられるが、堅穴住居に伴うものかどうか不明である。

時期の判明する出土遺物が皆無であるため詳細な時期は不明だが、縄文時代前期後葉以前の堅穴住居であると考えられる。

(寺坪)

堅穴住居7(第13図、写真図版14・15)

調査区北側中央II区、住居群Bに位置する。立地する地形面はわずかに北方向へと下る緩斜面である。堅穴住居5とは近接するが、切り合い関係は判然としなかった。

検出面は、緩斜面上方側である西半はI層除去後のIV層上面、斜面下方側である東半では遺物包含層であるIII層除去後IV層上面においてそれぞれ平面の輪郭を確認した。

平面形態は東側が不明瞭であるが、おおむね長方形であると考えられる。長軸は東西方向を指向するものとみられる。

規模は長軸2m以上であると考えられるが、短軸は最大で2.34mを測る。深さは最も壁が残存する西側で27cmである。

埋土は最大で6層に分けられ、様々な混入物がみられるが、自然堆積であると考えられる。埋土の主体土はシルト質粘土であり、小礫がまばらに含まれる。また、埋土にはわずかに遺物細片が含まれる。

側壁は西側から北側、西側から南側で立ち上がり、西側壁はその他の側壁と異なり、垂直気味である。

床面はほぼ平坦である。床面には柱穴等はみられないが、炭化物が集中する部分がみられた。集中する炭化物は細かく柔らかな藁のような繊維質のもので、住居の柱材等ではなさそうである。床面に密着するように認められたことから床面に敷かれた敷物などが炭化したのではないかと推測される。

出土遺物は埋土より縄文土器が一定量出土した。埋土上位にはおおむね大木4式に帰属するとみられる土器が出土しているが、埋土下位にはそれ以外に大木3式の土器もみられる。

床面に集中していた炭化物による年代測定では約5,000年前という結果が得られており、総合的に判断すると縄文時代前期中～後葉の堅穴住居であると考えられる。

(福島)

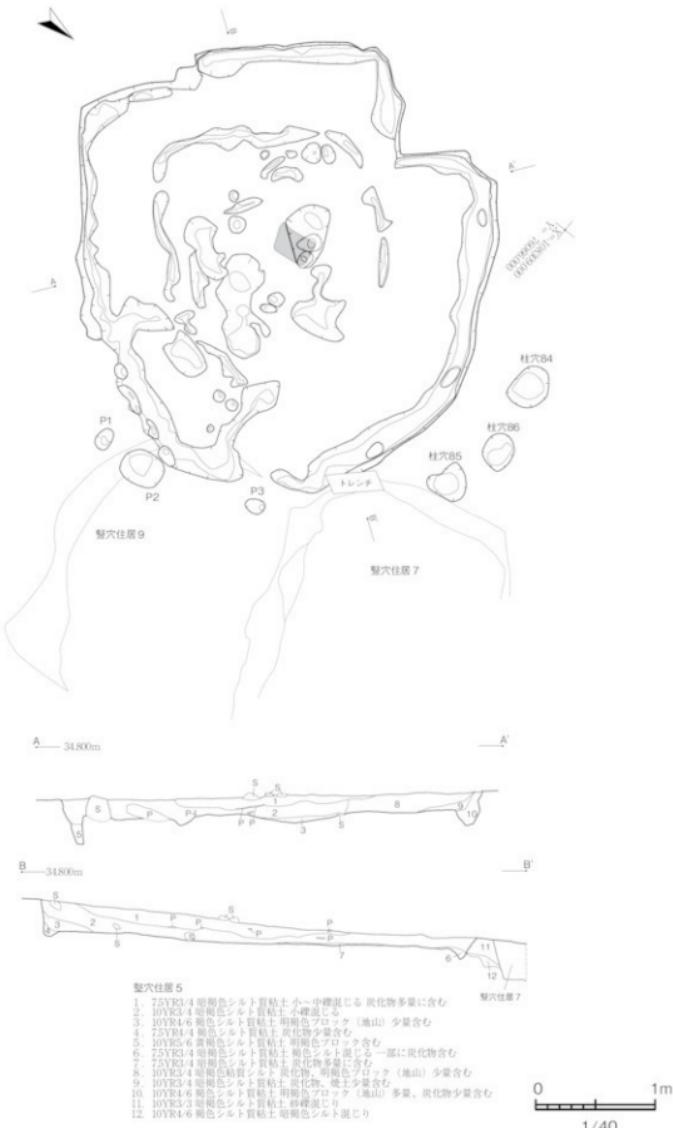
堅穴住居8(第14図、写真図版16)

調査区北端中央II区、住居群Bに位置する。立地する地形面はわずかに北方向へと下るが、ほぼ平坦である。

検出時、III層によって被覆されており判然としなかったが、III層を除去すると南側の輪郭が確認でき、焼土等が確認できた。南に位置する堅穴住居7と重複しており、これを切つていてと判断した。

平面形態は不整な楕円形であると考えられる。長軸は東西方向を指向するものとみられる。

規模は長軸3m以上であるが、詳細な住居範囲が定かでなく計測できない。深さは最も壁が残存する西側で23cmである。



第11図 堪穴住居 5

埋土はほぼ上下2層に分けられ、様々な混入物がみられるが、自然堆積であると考えられる。堅穴住居埋土とこれを被覆する遺物包含層であるⅢ層との区分が明確ではなく、そのため堅穴住居の形態や規模が不明瞭である。

床面はほぼ平坦である。床面には多数柱穴がみられるが、検出した柱穴にこの住居のものである確証はない。

床面より大木3式相当の土器が出土しており、さらに遺物包含層除去後の遺構検出面から考えると縄文時代前期中～後葉の堅穴住居であると考えられる。

(李坪)

堅穴住居9(第15図、写真図版17)

調査区北側中央Ⅱ区、住居群Bに位置する。立地する地形面はほぼ平坦であるが、北側はわずかに下る緩斜面である。

検出面はⅠ層を除去すると、Ⅳ層上面で輪郭が確認できる。北に位置する堅穴住居5と重複しており、これを切っていると判断した。

平面形態は不整な楕円形あるいは方形であると考えられる。長軸は東西方向を指向するものとみられる。

規模は不明である。深さは最も壁が残存する箇所でも5cmである。

埋土はほぼ単層であり、比較的固く締まったシルト層である。自然か人為か堆積の状況は不明である。また、埋土には縄文土器片をわずかに含むがいずれも細片である。

側壁は全体的に立ち上がり不明瞭であり、上部が大きく削平されたものとみられ、本来は側壁がある程度立ち上がった可能性が考えられる。

床面は北側にわずかに傾斜するが、東西方向はほぼ平坦である。床面は周辺の地山並みに縮まっているが、柱穴はみられない。

時期の判明する出土遺物が皆無であるため詳細な時期は不明だが、検出面、遺構の残存度、重複関係などから考えると縄文時代前期後葉以前の堅穴住居であると考えられる。

(福島)

堅穴住居10(第17図、写真図版18)

調査区東側Ⅰ区、住居群Cに位置する。立地する地形面はほぼ平坦である。周辺には土坑および貯蔵穴などが多く検出される。

検出面はⅠ層を除去したⅣ層上面であるが、一部V層も露出した面である。これは周囲も含め後世の削平がなされたものと考えられる。また、現代の大きな擾乱により特に南側は損なわれており、不明瞭な部分が多い。

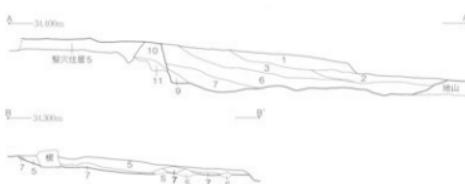
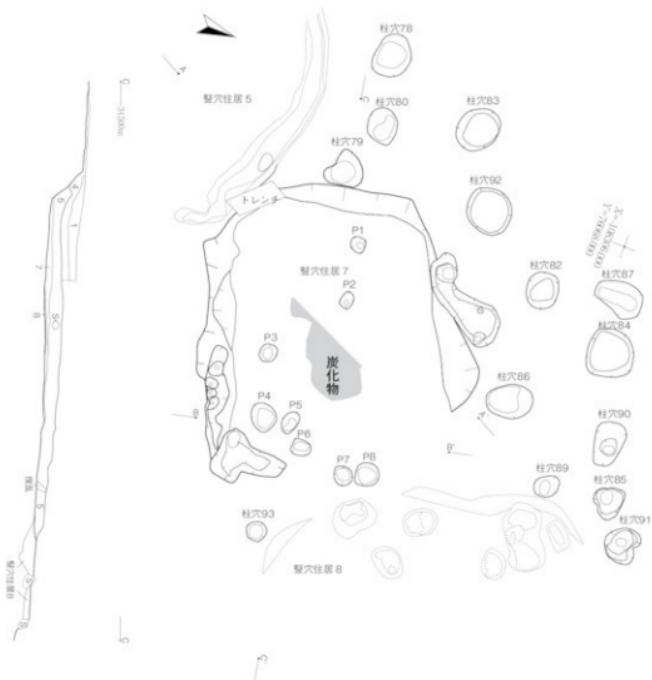
平面形態は北西隅に該当する箇所で明瞭なコーナーを検出したことから、本来長方形であると考えられる。長軸は東西方向を指向するものとみられる。

規模は残存する長軸5.52mであり、擾乱を受けていない残存する短軸は2.0mである。深さは最も壁が残存する西側で9cmである。

埋土はほぼ2層に分けられ、シルト主体の堆積である。埋土には様々な混入物がみられるが、自然堆積か人為堆積かの判断はできなかった。埋土にはわずかに遺物細片が含まれる。

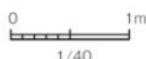
側壁は南側以外で立ち上がるが、残存する高さは数cmの立ち上がりである。また、立ち上がり角度もあまり急角度ではないものと推定される。

床面はほぼ平坦であり、床面には柱穴2個がみられる。ただし、P2は埋土の上から切り込んでい



堅穴住居7

1. 10YR3-4 嫡褐色シルト 粒性 壤色ブロック混じる 壁土一部含む
2. 7.5YR2-3 嫡褐色シルト質粘土 壤色ブロック多量に混じる
3. 10YR4-6 嫡褐色シルト質粘土 嫡褐色シルト質粘土上に現 碓骨埋没じる
4. 10YR3-3 嫡褐色シルト質粘土 壁土一～3cm幅時窓れすかに混じる
5. 10YR3-3 嫡褐色シルト質粘土 嫡褐色ブロック多量に混じる
6. 10YR3-3 嫡褐色シルト質粘土
7. 7.5YR3-4 嫡褐色シルト質粘土 嫡色ブロック少量、炭化物わずかに混じる
8. 10YR3-3 嫡褐色シルト質粘土 嫡色ブロック、破片埋没じる
9. 10YR4-6 嫡褐色シルト質粘土
10. 10YR3-3 嫡褐色シルト質粘土 砂埋没じる
11. 10YR4-6 嫡褐色シルト質粘土 嫡褐色シルト混じる



第12図 堅穴住居7

るため、この住居に伴うものではない。

時期の判明する出土遺物が皆無であるため詳細な時期は不明だが、検出面から考えると縄文時代前期後葉以後の堅穴住居であると考えられる。

(福島)

堅穴住居11(第17図、写真図版19)

調査区東側中央、I区東端、住居群Cに位置する。立地する地形面はほぼ平坦である。

検出面はI層を除去すると、IV層上面で輪郭が確認できる。北に位置する遺物包含層2と一部重複しており、これを除去すると輪郭が確認できるものと判断した。また、この場所には柿の木が植樹されており、その根によって堅穴住居輪郭のかなりの部分が不明瞭であった。

平面形態は不整な楕円形であると考えられる。長軸は東西方向を指向するものとみられる。

規模は長軸6.54mであるが、短軸は東側の床面範囲が不明瞭で計測できない。深さは最も壁が残存する部分で22cmである。

埋土はおおむね上下2層に分けられ、様々な混入物がみられるシルトである。また、堆積状況は自然堆積であると考えられる。

側壁は西側のみで立ち上がり、東側は検出時から不明瞭であった。本来は東側でも確認できるはずだが、その範囲も含め不明である。

床面は北側にわずかに傾斜するが、東西方向は概ね平坦である。床面には多くの柱穴がみられるが、すべてがこの住居に伴うものかどうか判断できない。

出土遺物は埋土より縄文土器の破片がいくつか出土しており、特に埋土下層より大木5式に属する土器が出土した。

検出面および出土遺物から考えると縄文時代前期後葉以前の堅穴住居であると考えられる。

(福島)

堅穴住居12(第18・19図、写真図版20・21)

調査区東側I区、住居群Cに位置する。立地する地形面はほぼ平坦であり、周囲には堅穴住居13~15、堅穴住居18等の堅穴住居、貯蔵穴10、土坑29等の遺構が近在する。堅穴住居18は平面的に重なっている可能性が高いが、その関係性は不明確であった。

検出面はI層を除去した段階で焼土や炭化物が著しく認められ、V層の礫面が露出する面である。このことから検出面は大きく削平を受け、遺構本来の切り込み面からかなりの深さで下がっているものと考えられる。したがって、遺構の範囲は不明である。

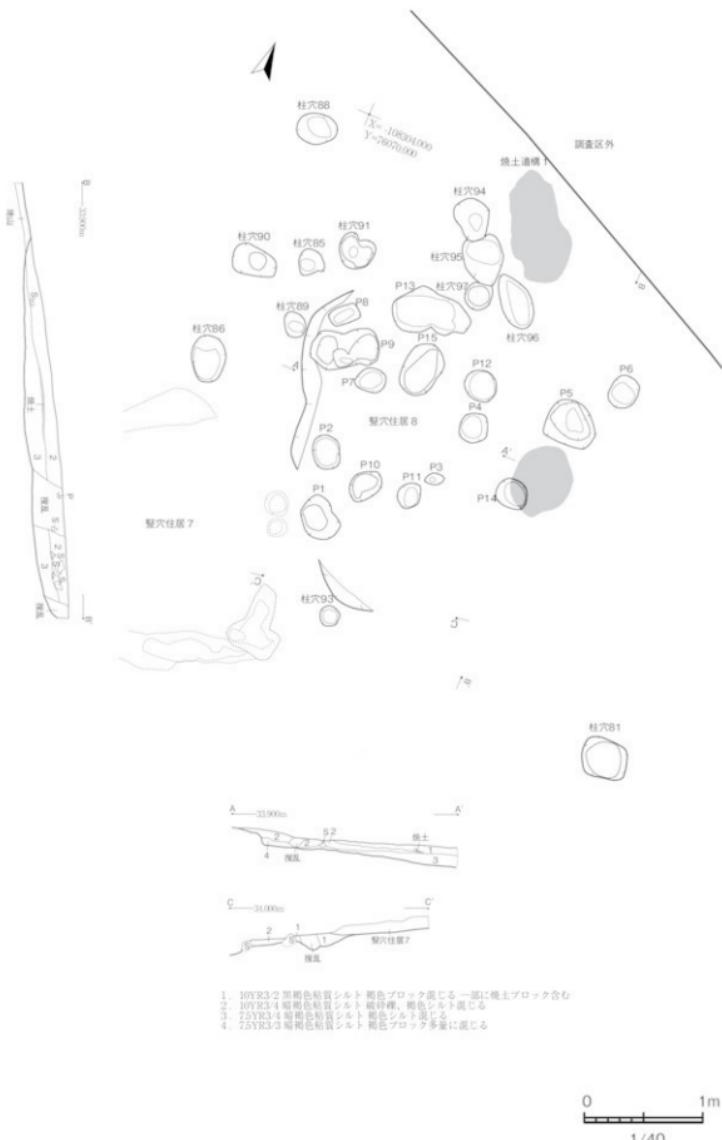
平面形態は不整な楕円形あるいは長方形であると考えられる。長軸は東西方向を指向するものとみられる。これは焼土の並びで推定したものと過ぎない。

規模は全体形が不明であるが、少なくとも長軸4m以上になるものと見込まれる。短軸も2m以上であると考えられるが、床面範囲が不明瞭で計測できない。深さは残存する箇所で2~5cmである。

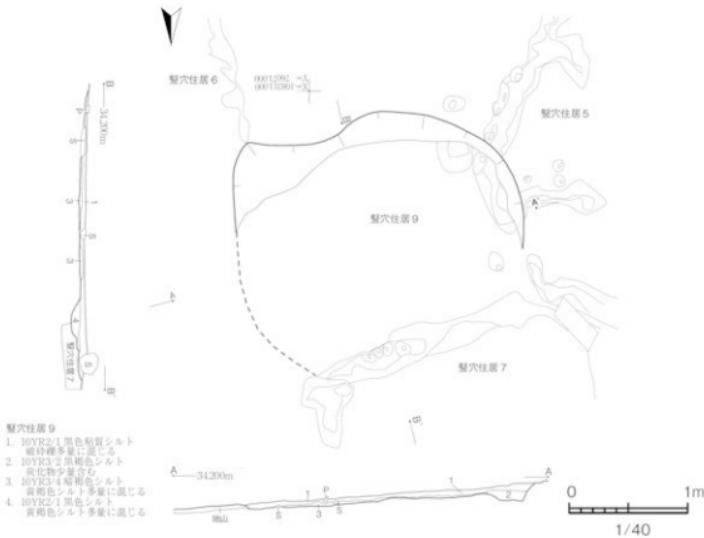
埋土はほぼ単層であり、炭化物等が含まれるシルトである。また、埋土にはV層由来の礫が混入している。

床面と思われる面は焼土を手掛けたり検出した。この床面と考えられる面は平坦であり、焼土や柱穴が多くみられた。柱穴は確実に住居埋土の上から切り込まれているものが多く含まれているため、この堅穴住居に伴うものではないと考えられる。焼土は住居内の地床炉群であると考えられるが、すべて同一住居のものか判断できない。

時期の判明する出土遺物が皆無であるため詳細な時期は不明だが、検出面から考えると縄文時代前



第13図 壁穴住居8



第14図 壊穴住居9

期後葉以降の壊穴住居であると考えられる。ただし、検出した焼土すべてが同一住居に帰属するものであれば、今回調査した他の壊穴住居にはみられない様相である。したがって、壊穴を伴わない住居や屋外の施設などの可能性も考える必要がある。

(福島・芋坪)

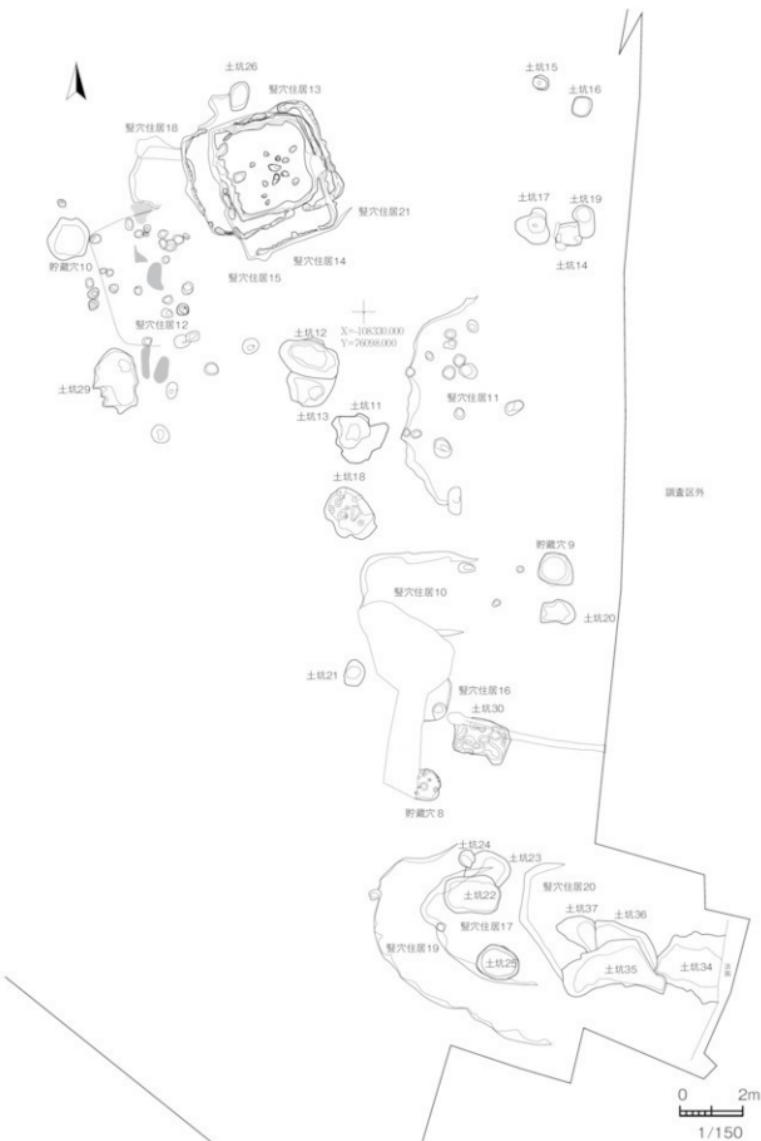
壊穴住居13~15・21(第20図、写真図版22・23)

調査区東側Ⅰ区、住居群Cの同一地点にいずれの壊穴住居も位置する。立地する地形面はほぼ平坦であるが、遺構の西側から東側に向かって微妙に下る緩斜面地である。

これら住居の北東側には遺物包含層2が広がっており、壊穴住居21の東端に近接するように遺物包含層であるⅢ層の堆積が始まっている。調査では遺物包含層との層位的な上下関係は必ずしも明らかにできなかつたが、Ⅲ層に含まれる遺物と共通する時期の遺物がこれら壊穴住居検出中に多く出土していたことから考えて、壊穴住居の最上層は一部遺物包含層2のⅢ層相当層が及んでいた可能性が高い。したがって、遺物包含層2の形成時期とこれら壊穴住居の完全埋没時期がほぼ同じ時期である可能性を指摘しておきたい。

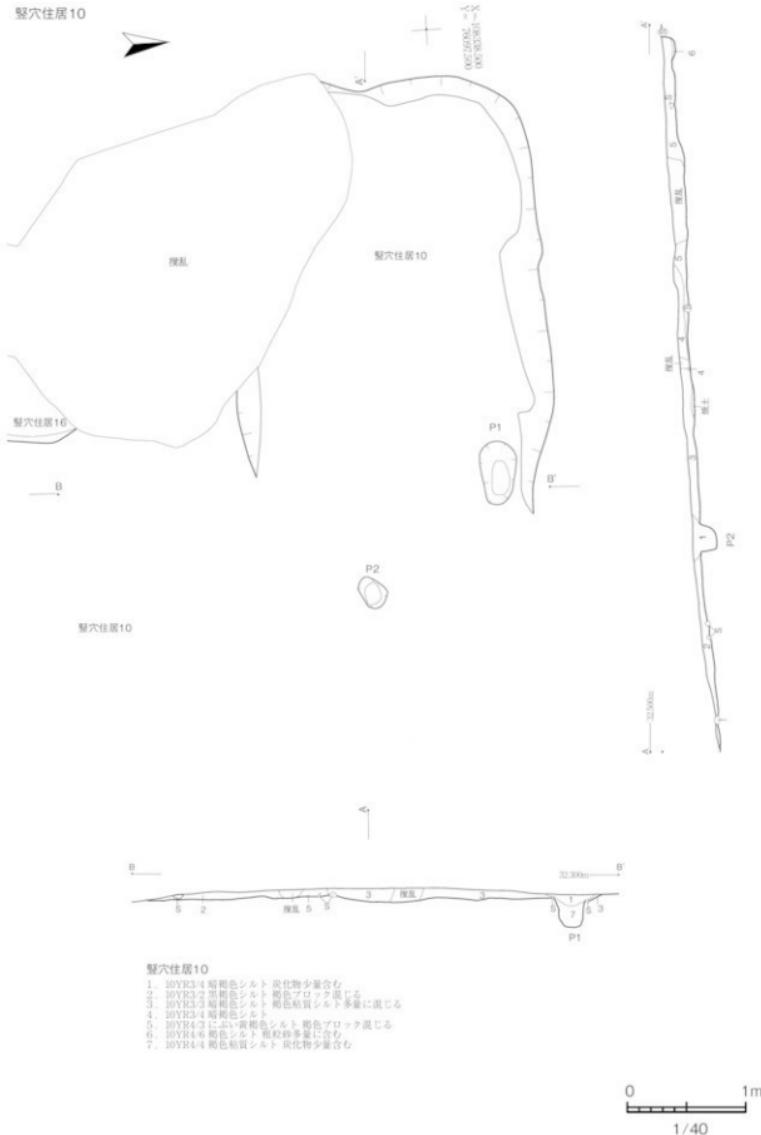
壊穴住居が錯綜するように重なっており、それぞれ壊穴住居13~15・21の名称を与えたが、改築や増築も考えられる。

これらの中、壊穴住居13~14・21はほぼ同一の床面レベルである。壊穴住居13は最も規模の小さな壊穴住居であり、これをやや外側に広がるように壊穴住居21が存在する。さらに、南北側に広がるもののが壊穴住居14である。壊穴住居15のみ他の3棟とは床面レベルが異なり、完全な切り合い関係にあると考えられ、やや床面が高い位置にある壊穴住居15はより深い壊穴住居13(ほか3棟)に切られているようである。



第15図 住居群C

竪穴住居10



第16図 竪穴住居10

また、堅穴住居15は堅穴住居18の東側と重なっているものと考えられる。堅穴住居15と18の床面の標高が異なり、堅穴住居18の床面がほぼ水平に連続するすれば東側の床面は堅穴住居15あるいは13などの住居埋土最上層よりも上面に位置すると考えられる。よって、堅穴住居18の床面はすでに失われているとみられ、堅穴住居15などが完全に埋没した後、その埋土より上位に堅穴住居18の床面が構築されていた可能性が考えられる。これはわずかに東側に傾斜する地形と水平に延びる床面との関係を想像しても蓋然性が高いと思われる。

検出面はⅠ層およびⅡ層を除去したⅣ層上面で焼土粒、炭化物、土器片が多量に検出され、その輪郭を確認した。先述した通り、遺物包含層2に存在するⅢ層が、堅穴住居の最終的な凹みに堆積したと考えるならば、Ⅲ層の残りが検出面で見えていたものと判断できる。これは、遺物等が含まれる平面的な範囲が堅穴住居中心部にのみ広がり、住居の端部まで及んでいなかったこともその証左であるとみられる。

平面形態はいずれも方形を基調とした形態であると考えられる。これら住居の軸方向はいずれも同一の軸であり、地形面のわずかな勾配に沿うように正方位より少し軸角の傾きが認められる。地形的条件によって構築されているようである。ただし、重なって存在する堅穴住居13・14・21の3棟の中で堅穴住居21のみがわずかに軸角が異なり度数の角度差が認められる。

堅穴住居13の平面形態はほぼ正方形であり、四隅のうち南東隅がやや丸みを有する以外は比較的鋭角のコーナーが作り出されている。ただし、このコーナーは堅穴住居14や堅穴住居21のものである可能性も考えられる。

堅穴住居14の平面形態はやや南北方向に長い長方形であると考えられる。その他の堅穴住居とは異なり、南側に大きく張り出している。四隅は比較的鋭角のコーナーを有するが、北東隅では周溝がやや丸みを持っている。

堅穴住居15は先述した通り、他の3棟とは床面を異にしている。北東隅ではクランク状の部分が認められ、住居群Aに所在する堅穴住居5で同様のクランクがみられたため何らかの共通する遺構である可能性が考えられる。調査当初は、このクランク部分に別の遺構が切り合って存在するものと推測して調査を進めたが、埋土の差、床面あるいは底面の段差等が認められず、調査を進めるにつれ徐々に同一の遺構である可能性が高いと判断するに至った。

堅穴住居21も堅穴住居13と同様にはほぼ正方形の平面形態である。堅穴住居13とは、北東隅を共有した相似形をなしているものと考えられる。

これら4棟の形態差はクランクを有する堅穴住居15以外は全て方形あるいは長方形を呈しており、床面レベルの異なる堅穴住居15の特異性が現出している。

規模はそれぞれ異なるが、最小規模である堅穴住居13は、全ての辺が他の堅穴住居よりも小規模である。

堅穴住居13は南北長3.28m、東西長3.26mを測り、ほぼ正確な正方形である。深さは西側最深部において31cmを測るが、北東隅は検出面から数cmの深さで床面が現れる。

堅穴住居14は南北長4.28m、東西長3.30mである。深さは、他の堅穴住居と重なっていない南側で32cmである。

堅穴住居15は、クランクによって外方へ張り出した部分も含めた最大長4.51mであり、クランクの張り出し幅は0.75mを測る。同じく南北方向のクランク状張り出し部を除外するとやや短くなり3.65mである。深さは、最深部で26cmであり、他3棟の堅穴住居より浅く、床面標高が高いという特がある。

堅穴住居21は南北長3.53m、東西長3.76mであり、わずかながら南北方向に長い方形である。深さ

2 検出遺構



第17図 堅穴住居11

は大半が堅穴住居13と重なっているため計測できないが、堅穴住居13と同じ床面レベルであることを考えるとこれと大きく異なるものとみられる。

埋土は上段に位置する堅穴住居15と、下段に位置する堅穴住居13・14・21の3棟とに大きく分けられる。

堅穴住居13を中心とする下段の住居群については先述した通り、上層である暗褐色シルトが遺物包含層のⅢ層に相当すると考えた。

埋土上層には土器、破碎礫、炭化物、焼土粒等の不純物が多く含まれている。土器類は、より検出面に近い最上位で集中して含まれており、下位になると比較的その数量は減少する。その土器類の含まれる割合は、東に広がる遺物包含層のⅢ層、特にこの住居群に近い地点の様相と酷似している。しかし、炭化物その他の混入物は、遺物包含層の方がやや分散傾向にあり、堅穴住居埋土はより高密度で含まれる。

埋土下層も暗褐色シルトであるが、上層に比べるとやや薄く明るい色調である。さらに、炭化物等の不純物はほとんど認められないが、Ⅳ層に近いシルトのブロック土がまばらにみられる。

最下層は明るい色調の粘質シルトが薄く堆積しており、これには細かな粒子の炭化物が微量含まれる。この層は床面と見間違うほど全般的に固く縮まっている。

以上、下段の堅穴住居の埋土は3層に大別できるが、基本的に緩斜面上方側である南西側から自然流入を示すような堆積状況である。しかし、検出面から埋土最上層については自然流入する土壤に土器などの投棄行為がおこなわれた可能性が考えられる。これは堅穴住居の範囲よりもより狭い範囲で遺物が際立つこと、その遺物の摩滅が進んでいないことからも推測できる。

次に上段に位置する堅穴住居15の埋土は上下2層に分けることができる。

埋土上層は暗褐色シルトで破碎礫を少量包含する。やや砂粒も混じっており、色調は下段の堅穴住居埋土上層に似ているが、質感が微妙に異なる。

埋土下層は暗褐色の粘質シルトである。炭化物を少量含むが、その他不純物および遺物の細片が少量含まれる。

側壁は全体の傾向として緩斜面上方側において立ち上がるが、斜面下方に位置する東側については側壁の立ち上がりはほぼ認められない。

下段に位置する堅穴住居は周溝と対応する側壁はほとんど認められないが、西側側壁は3棟ともに共通するためか明確に立ち上がる。また、最も南に突き出す堅穴住居14の側壁も同様にある程度の角度で立ち上がる。これら3棟の立ち上がりを考えた場合、東西方向において周溝外側から連続して立ち上がる側壁は北側の最も外側のラインと最も南側のラインである。このことから最も南側に突き出している堅穴住居14はその内側に位置する堅穴住居21・13の側壁が想定される2箇所を壙して構築されたと考えるべきである。同時に、北側側壁はほぼ3棟とも一致するが、堅穴住居21のみがわずかに軸が異なるため完全な一致をみることができない。

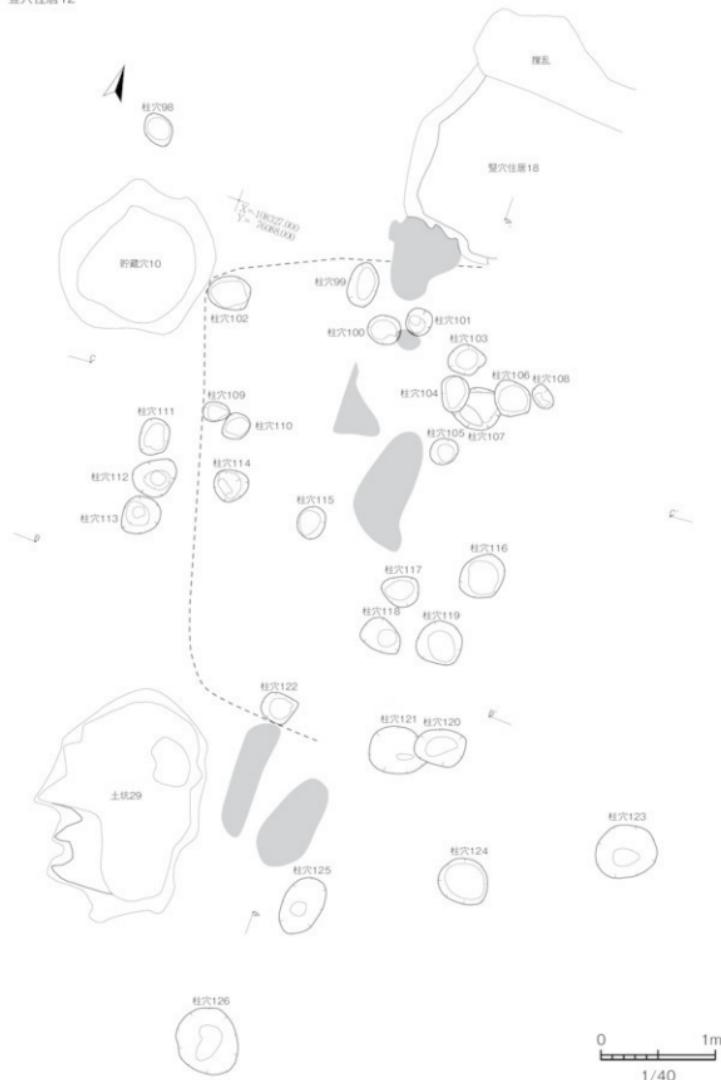
上段に位置する堅穴住居15も緩斜面上方側である東側壁は明瞭に立ち上がる。また、北側のクランク部分についてもわずかながら立ち上がりを有する。

床面はいずれの堅穴住居とも緩斜面地形に規制されることなくほぼ平坦である。

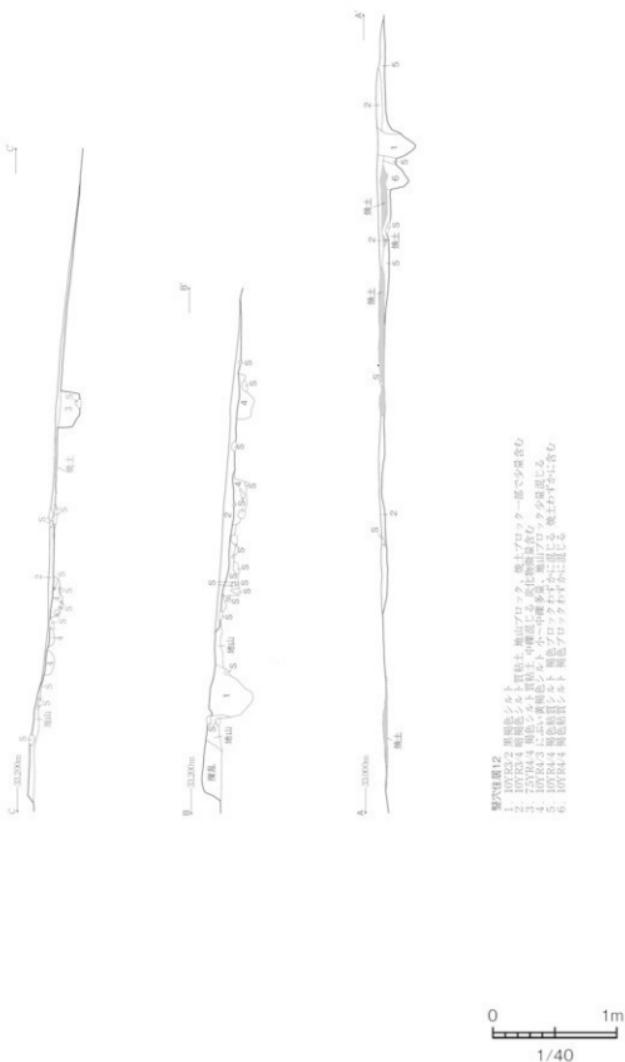
上段に位置する堅穴住居15の床面は非常に固く縮まっている、壁際には周溝が途切れながらも存在する。ただし、クランク状の張り出し部分には周溝は認められない。

下段に位置する3棟の堅穴住居床面は同一面であるためそれぞれ対応が困難である。3棟の床面中央付近には焼土が認められ、地床炉であったと考えられる。焼土の上部には炭化物が密集しており、

竪穴住居12



第18図 竪穴住居12平面



第19図 竪穴住居12断面

この薄い炭化物層を除去すると焼土面が現れる。これら3棟分の周溝の切り合い関係を示すと、堅穴住居21の周溝はやや軸が異なっており、堅穴住居13・14の周溝に切られている。次に堅穴住居13の周溝は堅穴住居21の周溝を切り、堅穴住居14の周溝に切られている。堅穴住居14の周溝は堅穴住居13・21の周溝を切っている。

出土遺物は下段の堅穴住居の上層から多くの縄文土器片が出土した。縄文土器は前期中葉～後葉にかけてのものである。また、この住居埋土からは土器以外に3点の玦状耳飾りの他石器類も多く出土した。

上段の堅穴住居15の埋土からはわずかに縄文土器片が出土した。土器はやはり前期中葉～後葉に帰属するものである。

当初1棟の堅穴住居として遺物を取り上げていたため堅穴住居13の遺物として大半を取り上げたが、堅穴住居15については早い段階でこれらとは別に取り上げた。ただし、大半は堅穴住居13の範囲内で出土しており、土器の時期差もほとんど認められない。

以上のように、密集して存在するこれら4棟の堅穴住居についてまとめると、確実にそのあり方が異なるのは堅穴住居15である。まず、大きく異なるのは床面標高が異なり、立地する地形面がやや上方である。この堅穴住居15はその範囲の大半部分が下段の堅穴住居に切られている。一方、下段の堅穴住居3棟は床面の区別が困難であり、様相が複雑である。しかし、軸角と周溝の切り合いを手掛かりに推察すると、軸角が異なり、周溝が他の住居に切られている堅穴住居21が先行して築かれ、これとはほぼ同一地点に堅穴住居13がやや規模を縮小しながらも正方形という平面形態を踏襲して築かれたと考えられる。最後に、いずれの周溝も切っている堅穴住居14が、堅穴住居13と一部壁を共有しながらも同一地点に築かれたものと考えられる。

堅穴住居21が先行して存在し、これが廃絶した後に一段下方で堅穴住居15が構築され、やがて堅穴住居13に改築がおこなわれ、これが機能している間に堅穴住居14が南側へと増築されたものと考えられる。最終的な堅穴住居14への増築は現地の地形を考えると、南側に平坦面が続きより効率的な増築が可能であったとみられる。その後、これらすべての堅穴住居が機能を停止し、埋没する過程で遺物が投棄されたものと推測される。

いずれの堅穴住居も縄文時代前期の堅穴住居であり、この地点において長く営まれたものと考えられる。

(福島)

堅穴住居16(第21図、写真団版24)

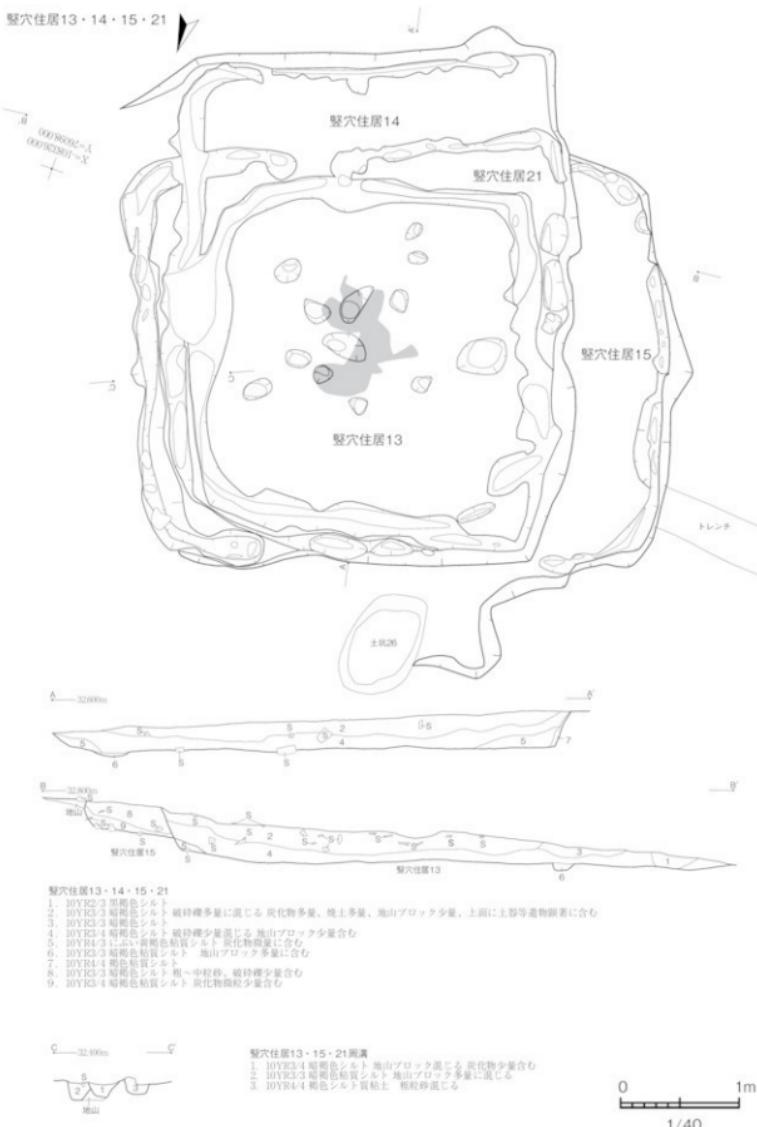
調査区東端I区、堅穴住居群Cに位置する。立地する地形面は比較的平坦であるが、削平および擾乱を受けているエリアである。

検出面はI層を除去したIV層上面で暗褐色の平面プランを確認した。周辺には堅穴住居16、貯蔵穴8、土坑21、土坑30などの遺構がみられるが、直接的な切り合い関係を有する遺構は認められない。堅穴住居16とはかなり近接しているため重複関係にある可能性も考えられるが、これらの間に大規模な擾乱が存在するためこれらの関係性は不明である。

平面形態は南東側にコーナーと思われる曲線があることから方形あるいは長方形を指向するものと考えられるが、擾乱によって全体の様相が把握できないため不明である。

規模はすべて残存値であるが、南北長123m、東西長0.68mを測る。深さは直接擾乱の影響を受けない箇所の最深部で14cmである。

埋土は上下2層に分けられ、上層は炭化物を微量に含む暗褐色シルト、下層は褐色粘質シルトであ



第20図 竪穴住居13～15・21

る。下層にはやや地山ブロックを少量含む。範囲が狭く堆積の状況が不明瞭であり、自然堆積か人為堆積か判断できない。

側壁は緩やかに立ち上がるが、コーナー付近はほぼ垂直気味に立ち上がる。

床面はほぼ平坦である。床面にはコーナーにおいて柱穴が1個認められ、10cm以下の浅い掘り込みである。柱穴の埋土は褐色シルトであった。

時期の判明する出土遺物が皆無であるため詳細な時期は不明だが、検出面から考えると縄文時代前期～中期初頭の竪穴住居であると考えられる。

(星・亭坪)

竪穴住居17(第22図、写真図版25・26)

調査区南東隅1区調査区境界付近、竪穴住居群Cの竪穴住居および土坑類が高密度で集中して検出される地点に位置する。遺構の立地する地形面はほぼ平坦であるが、遺構の東側はわずかに東方向へと下り始める地形である。また、この地点は耕作地と雑種地との境となっており、これを境に調査区外側に向かって築段されている。この人工的な段は下段側において切り土がなされていたものと考えられる。しかし、調査をおこなう前の現地表面ではその境界は不明瞭となっていた。

当初設定された調査区で検出された遺構であるため、現地において協議した結果、遺構を追跡して調査区を必要最低限拡張して調査をおこなうこととした。

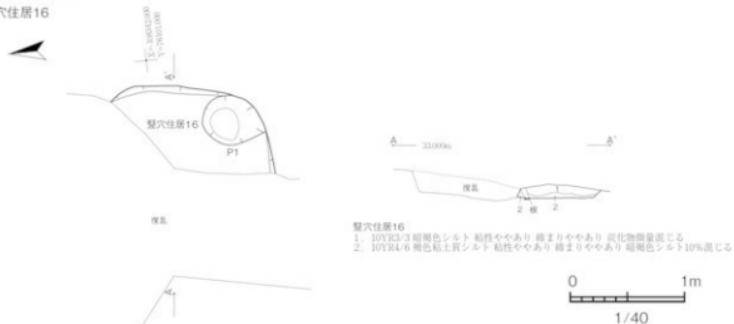
検出面は比較的厚いI層を重機と人力によって除去した結果、IV～V層上面において褐色の大きな輪郭が微妙に確認できる。明確なプランではなかったが、検出時に遺物がまとまって認められたため遺構であると推測した。また、平面プランの範囲内において、特に大小の礫が多く認められ、周辺域と比べ、ある種異常な状況であった。

各種遺構が密集しているエリアであるため多くの遺構と重複関係あるいは近接関係にある。竪穴住居19・20、土坑22～25、土坑35～37と重複または近接しており、直接的には竪穴住居19・20、土坑22・23を切っており、土坑25には切られている。したがって、重複する3棟の竪穴住居の中では最も新しい竪穴住居であると考えられる。

平面形態は東側が調査区外へ延びるため不明確であるが、検出範囲で見る限りでは不整な梢円形であると考えられる。調査区外方向へ長く延びるため、東西方向を指向するものとみられる。

規模は長軸4m以上であり、判明する範囲で短軸3.80mである。深さは最も壁が残存する西側で36cmである。

竪穴住居16



第21図 竪穴住居16

埋土はほぼ上下2層に分けられ、上層は褐色粘質シルト、下層は暗褐色シルトである。自然堆積であると考えられるが、埋土上層には大小の礫が含まれ、本来の地形による斜面上位、すなわち西側から流入した土石流のような堆積が一気に覆ったものと考えられる。

側壁は遺構が比較的良好に残存する西半のみで立ち上がり、床面から緩やかな角度である。

床面は北側に向か微かに傾斜するが、全体的に平坦である。床面には柱穴が1個みられるが、堅穴住居に伴うものか判断できない。

埋土を中心に多くの遺物が出土した。出土した縄文土器はいずれも大木6式～大木7式に相当すると考えられ、縄文時代前期末～中期初頭の堅穴住居であると考えられる。

(星・茅坪)

堅穴住居19(第22図、写真図版25・26)

調査区南東隅I区調査区境界付近、堅穴住居群Cの堅穴住居および土坑類が高密度で集中して検出される地点に位置する。遺構の立地する地形面はほぼ平坦であるが、遺構の東側はわずかに東方向へと下り始める地形である。

当初設定された調査区で検出された遺構であるため、現地において協議した結果、遺構を追跡して調査区を必要最低限拡張して調査をおこなうこととした。

検出面はI層をV層上面において暗褐色の大きな輪郭が明瞭に確認できる。

各種遺構が密集しているエリアであるため多くの遺構と重複関係あるいは近接関係にある。堅穴住居17・20、土坑22～25、土坑35～37と重複または近接しており、直接的には堅穴住居17と土坑25に切られている。

平面形態は東側不整な楕円形であると考えられ、東西方向を指向するものとみられる。

規模は長軸6m以上と推定され、判明する範囲で短軸は最大5m前後であると考えられる。深さは最も壁が残存する西側で8cmである。

埋土は暗褐色シルトの單層であり、軟質で縮まりがほとんび認められない。

側壁は床面から緩やかな角度で立ち上がる。

床面は残存範囲が限られているが、ほぼ平坦であると考えられる。

出土した縄文土器はいずれも大木6式～大木7式に相当すると考えられ、縄文時代前期末～中期初頭の堅穴住居であると考えられる。

(星・茅坪)

堅穴住居20(第22図、写真図版25・26)

調査区南東隅I区調査区境界付近、堅穴住居群Cの堅穴住居および土坑類が高密度で集中して検出される地点に位置する。遺構の立地する地形面は、わずかに東方向へと下る。

当初設定された調査区を拡張した結果、検出された遺構である。

検出面はI層を人力によって除去したIV～V層上面において褐色の輪郭が微妙に確認できる。堅穴住居17・19、土坑22～25、土坑35～37と重複または近接しており、堅穴住居17に切られ、土坑36・37を切る。

平面形態は不整な楕円形であると考えられ、東西方向を指向するものとみられる。

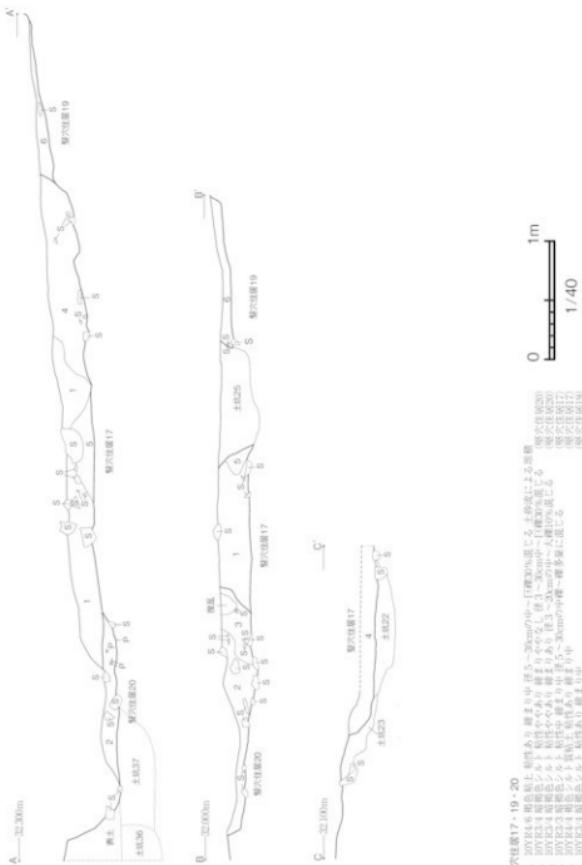
規模は長軸2m以上であり、判明する範囲で短軸3m前後であると推測される。深さは最も壁が残存する西側で17cmである。

埋土は暗褐色シルトの單層である。中小の礫や炭化物が含まれる。

側壁は遺構が比較的良好に残存する西半のみで緩やかに立ち上がる。



第22図 壇穴住居17・19・20平面



第23図 縫穴住居17・19・20断面

床面はほぼ平坦である。

埋土を中心に多くの遺物が出土した。出土した縄文土器はいずれも大木6式～大木7式に相当すると考えられ、縄文時代前期末～中期初頭の縫穴住居であると考えられる。

(星・芋坪)

竪穴住居18(第24図、写真図版27)

調査区東側I区、住居群Cに位置する。立地する地形面はほぼ平坦であるが、この遺構よりも北はわずかながら北東へ向けて下る緩斜面となる。

竪穴住居12~14・21等が近在し、竪穴住居12とは重複関係にあると推測されるがその関係性は不明である。また、竪穴住居15によって切られているものとみられる。

検出面はI・II層を除去した後、IV層上面であるが、IV層は周辺よりも固く締まっており、検出は難航した。

平面形態は方形あるいは長方形であると考えられる。軸方向は残存している状況から東西方向を指向するものとみられるが定かではない。

規模は推定で長軸2m以上であると考えられ、単軸は長軸よりも短いものと見込まれる。深さは最も壁が残存する西側で11cmである。

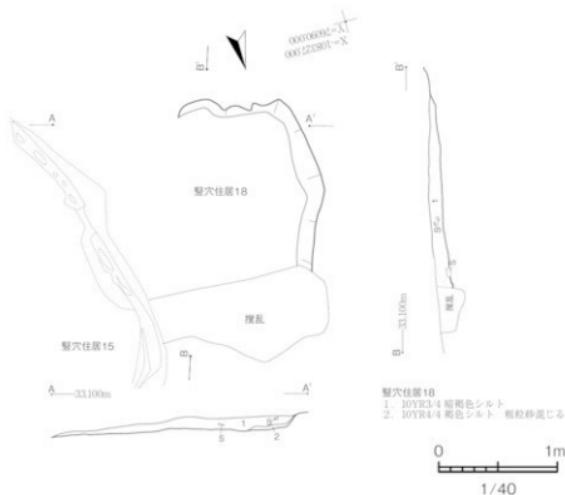
埋土はほぼ上下2層に分けられ、様々な混入物がみられるが、自然堆積であると考えられる。埋土にはわずかに遺物細片が含まれる。埋土は検出面に広がるIV層と色調の区別が困難であったが、IV層よりわずかに暗い色調であった。

側壁は西側と南側のみで立ち上がる。側壁立ち上がりの角度は比較的緩やかであり、底面付近は丸みを有する箇所も認められる。

床面はほぼ平坦であり、当初土坑に類する遺構とも考えたが、この床面をもって竪穴住居と認識した。時期の判明する出土遺物が皆無であるため詳細な時期は不明だが、検出面から考えると縄文時代前期後葉以降の竪穴住居であると考えられる。

(福島)

竪穴住居18



第24図 竪穴住居18

(2)貯蔵穴

貯蔵穴は10基を検出した。おもに、I区とII区を跨ぐように分布するが、I区では斜面下方に、I区とII区境界付近では斜面上方に分布する傾向である。

これら貯蔵穴の中には断面フラスコ形を呈するものもあり、また底面中央付近に副穴を有するものも存在する。

貯蔵穴1(第25図、写真図版28)

調査区北西I区の北側崖縁辺に位置する。周囲には貯蔵穴2や貯蔵穴3が存在するが、近接あるいは直接的な切り合いは認められない。

検出面はI・II層を除去したIV層上面である。遺物包含層には被覆されておらず、近現代の削平を受けている可能性も考えられる。

平面形態は極めて正円に近い円形で、浅い掘り込みが残存している。

側壁は南西側から北側において垂直気味に立ち上がる。

埋土は3層に細分でき、最上層は炭化物を多量に含み、小礫がわずかに混じる。

底面はほぼ平坦であり、ほぼ中央に副穴が認められる。副穴の埋土には炭化物が含まれ、貯蔵穴の埋土下層が自然に流入したような堆積を示す。本来はフラスコ形を指向するものと考えられるが、上部は後世の削平を受けたものとみられる。

出土遺物は埋土上位より石器の剥片が多くみられ、埋土中より前期末葉の縄文土器片が出土した。出土した遺物より縄文時代前期末葉頃に属するフラスコ形の貯蔵穴であると考えられる。

(福島)

貯蔵穴2(第25図、写真図版28)

調査区北西II区に位置する。周囲には貯蔵穴1や貯蔵穴3が存在するが、近接あるいは直接的な切り合いは認められない。

検出面はI・II層を除去したIV層上面である。遺物包含層には被覆されておらず、近現代の削平を受けている可能性も考えられ、遺構東端は近現代の溝によって切られており、上端部が一部失われている。

平面形態は円形であるが、やや東西方向が長くなる長円形である。

埋土は細かく細分でき、炭化物を少量含む層も存在する。埋土には焼土粒や炭化物も含まれる。いずれも自然堆積であると考えられる。

底面はほぼ平坦であるが、外周にわずかな凹凸が認められる。また、底面は比較的固く締まっている。

出土遺物は埋土中より前期中～末葉の縄文土器片が出土した。

出土した遺物より縄文時代前期末葉頃の貯蔵穴であると考えられる。

(福島)

貯蔵穴3(第25図、写真図版28)

調査区北西II区に位置する。周囲には貯蔵穴1や貯蔵穴2が存在するが、近接あるいは直接的な切り合いは認められない。

検出面はI・II層を除去したIV層上面である。平面形態は円形であるが、やや東西方向が長くなる長円形である。

埋土は7層に細分でき、炭化物を少量含む層もある。ほぼ自然堆積であると考えられる。

底面はほぼ平坦であり、ほぼ中央に副穴が認められる。底面はほぼ平坦であり、ほぼ中央に副穴が認められる。副穴の埋土は貯蔵穴の埋土と連続しないため、副穴の埋没後、やや時間を置いて遺構内の堆積が進んだようである。

出土遺物は埋土中、特に埋土上位より前期中～末葉の縄文土器片が出土したが、下位では時期を特定する遺物が出土しなかった。

出土した遺物より縄文時代前期末頃の貯蔵穴であると考えられる。

(福島)

貯蔵穴4(第26図、写真図版29)

調査区中央I区とII区境界付近に位置する。やや斜面上方に立地しており、削平されたエリアであると考えられる。

検出面はI層を除去したV層上面である。

平面形態はほぼ正円を指向する円形であるが、その他の貯蔵穴よりも平面規模が小さく、直径55cmである。

埋土は3層に細分でき、縮まりの無い粘質土である。いずれもほぼ自然堆積であると考えられるが、ブロック土の混入が認められる。

底面はほぼ平坦であり、底面に副穴は認められない。

遺物は出土しなかったため詳細な時期は特定できないが、縄文時代前期の貯蔵穴であると考えられる。

(福島)

貯蔵穴5(第26図、写真図版29)

調査区ほぼ中央II区に位置する。

検出面はI層を除去したV層上面である。平面やや不整な円形である。遺構上部は後世の削平により大半が失われている。

埋土は本来の最下層のみ残存するものと考えられる。

底面はV層の固く締まった礫面であり、礫面の凹凸は存在する者のほぼ平坦である。底面中央北寄りに副穴が認められる。副穴の埋土は貯蔵穴の埋土と連続しないため、副穴の埋没後、やや時間を置いて遺構内の堆積が進んだようである。

遺物は出土しなかったため詳細な時期は特定できないが、縄文時代前期の貯蔵穴であると考えられる。

(芋坪)

貯蔵穴6(第26図、写真図版29)

調査区北西II区、堅穴住居群B付近に位置する。

検出面はI・II層を除去したIV層上面である。遺物包含層には被覆されておらず、近現代の削平を受けている可能性も考えられる。

平面梢円形である。壁はオーバーハング気味に立ち上がっており、フラスコ形を指向するものと考えられる。

埋土は8層に細分でき、炭化物を少量含む層もある。ほぼ自然堆積であると考えられるが、埋土上半部に様々な混入物が際だって認められるため、これらについては完全な埋没前にゴミ捨て場として再利用された可能性が考えられる。

底面はほぼ平坦であり固く締まっている。ただし、底面には副穴と思われるような掘り込みは認められない。

出土遺物は埋土上位で獸骨等の微細片が認められ、埋土中位より前期中葉の縄文土器片が出土した。

出土した遺物より縄文時代前期中～後葉の貯蔵穴であると考えられる。

(福島)

貯蔵穴7(第26図、写真図版29)

調査区北西Ⅱ区、堅穴住居群B付近に位置する。

検出面はI層を除去したV層上面である。検出面はこのV層に含まれる礫面の露出が顕著で、後世に大きく削平された箇所の一つであると考えられる。

平面形態はおむね楕円形である。測壁は垂直に立ち上がる部分と緩やかな角度で立ち上がる部分が認められる。

埋土は4層に細分でき、自然堆積であると考えられる。また、埋土にはV層由来の小礫等が混入している。

底面はV層の固く締まった礫面であり、礫面の凹凸は存在する者のほぼ平坦である。底面に副穴は認められない。

出土遺物は認められず、詳細な時期は不明であるが、縄文時代前期～中期初頭の貯蔵穴であると考えられる。

(福島)

貯蔵穴8(第26図、写真図版30)

調査区南東側Ⅰ区、住居群C付近に位置する。遺構西半は現代の搅乱によって損なわれており、さらに全体的に遺構上部も後世の削平によって失われている。

検出面はI層を除去したIV層上面である。

平面形態は円形を指向するものと考えられる。

埋土は上下2層に細分でき、ほぼ自然堆積であると考えられる。

底面は植物等の自然作用による凹凸は認められるが、本来の遺構底面はほぼ平坦であったものと考えられる。

遺物は出土しなかったため詳細な時期は特定できないが、縄文時代前期の貯蔵穴であると考えられる。

(亨坪)

貯蔵穴9(第26図、写真図版30)

調査区南東側Ⅰ区、住居群C付近に位置する。遺構西半は現代の搅乱によって損なわれており、さらに遺構上部も耕作による後世の削平の影響を少なからず受けている。

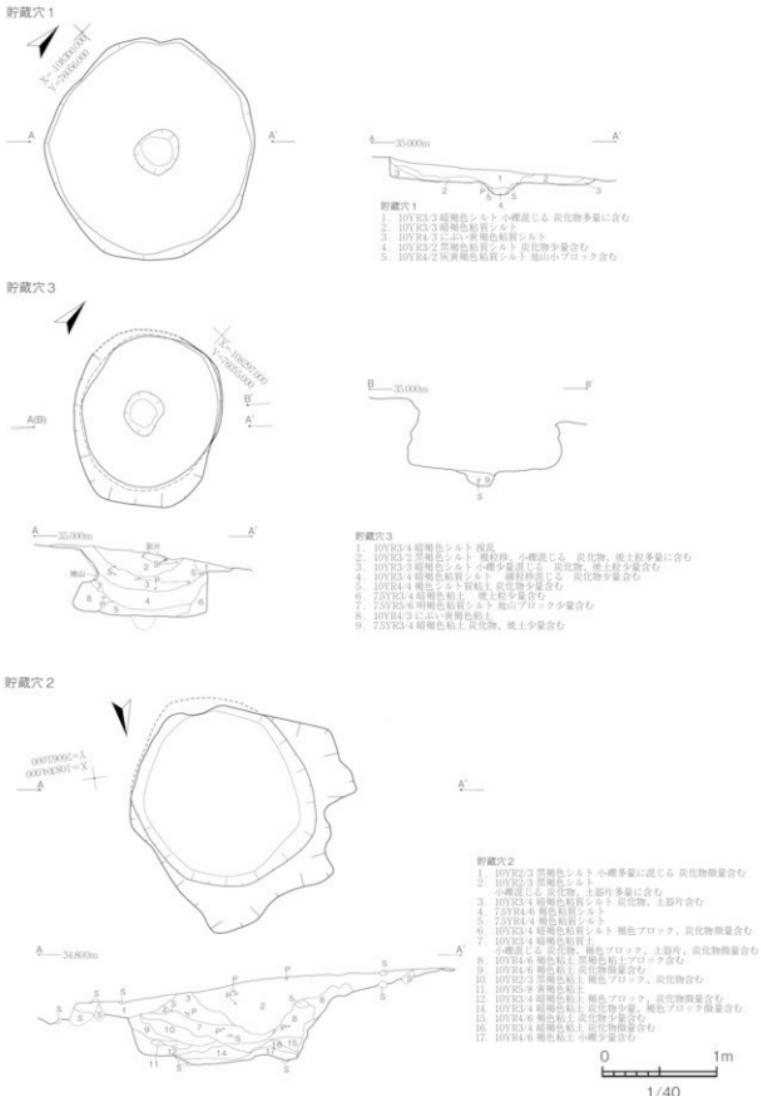
検出面はI層および搅乱を除去したIV層上面である。

平面形態は円形を指向し、測壁が著しくオーバーハングしており、断面フラスコ形であると考えられる。

埋土は遺構内で4層に細分でき、ほぼ自然堆積であると考えられる。底面は湧水著しく、検出が非常に困難であった。

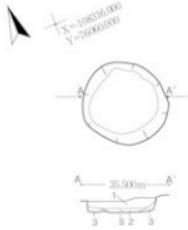
時期を特定する遺物が出土しなかったため詳細な時期は特定できないが、縄文時代前期の貯蔵穴であると考えられる。

(亨坪)



第25図 貯藏穴 1～3

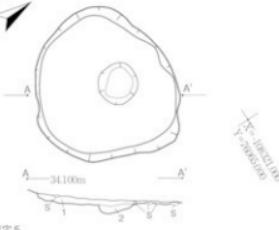
貯藏穴 4



貯藏穴 4

1. 7.5YR3/4 嫌褐色シルト質粘土 棕色ブロック少量含む
2. 10YR3/4 嫌褐色シルト質粘土 破片混じる 棕色ブロック多量に含む
3. 7.5YR4/4 棕色シルト

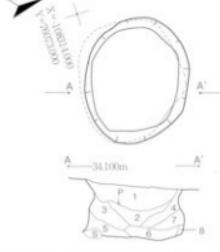
貯藏穴 5



貯藏穴 5

1. 10YR3/4 嫌褐色粘土 少量にじる 棕色ブロック多量、土器片少量、調片少量、炭化物微量含む
2. 10YR3/4 嫌褐色粘土 小塊少量混じる 棕色ブロック、土器片少量、炭化物微量含む

貯藏穴 6



貯藏穴 6

1. 10YR3/4 嫌褐色粘土 小塊少量混じる 棕色ブロック、土器片少量含む
2. 10YR3/4 嫌褐色粘土 小塊多量混じる 棕色ブロック、土器片少量含む
3. 2.5YR3/4 嫌褐色粘土 小塊多量混じる 土器片少量含む
4. 7.5YR3/4 嫌褐色粘土 小塊多量に混じる 土器片少量含む
5. 7.5YR4/4 嫌褐色粘土 小塊多量に混じる 土器片少量含む
6. 10YR4/4 嫌褐色粘土 小塊多量に混じる 棕色ブロック含む
7. 10YR4/6 棕色粘土 小塊少量混じる 嫌褐色ブロック含む
8. 10YR4/6 棕色粘土 嫌褐色ブロック含む

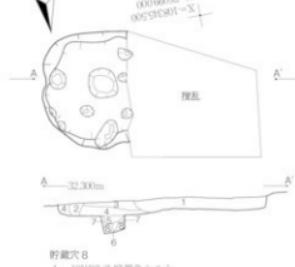
貯藏穴 7



貯藏穴 7

1. 10YR3/4 嫌褐色シルト
2. 10YR3/4 嫌褐色粘土トロトロ10cmの中層混じる 棕色ブロック含む
3. 10YR3/4 嫌褐色シルト質粘土 1cmの小塊少量混じる
4. 10YR4/6 棕色シルト質粘土

貯藏穴 8



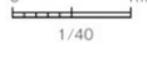
1. 7.5YR3/3 嫌褐色シルト
2. 10YR3/2 嫌褐色粘土シルト
3. 10YR3/4 嫌褐色シルト質粘土
4. 10YR4/4 嫌褐色シルト質粘土 棕色ブロック混じる
5. 10YR4/4 嫌褐色シルト質粘土
6. 2.5YR4/4 嫌褐色シルト質粘土
7. 10YR4/6 嫌褐色シルト質粘土 棕色シルト質粘土混じる
8. 10YR4/4 嫌褐色シルト質粘土 棕色ブロック混じる

貯藏穴 9



貯藏穴 9

1. 10YR3/4 嫌褐色粘土シルト 棕色ブロック多量、炭化物少量含む
2. 10YR3/3 嫌褐色粘土シルト 棕色ブロック多量含む
3. 10YR3/4 嫌褐色粘土シルト 土器片少量に含む
4. 10YR3/4 嫌褐色粘土シルト質粘土 中層混じる
5. 2.5YR3/2 嫌褐色シルト質粘土 中層混じる
6. 10YR4/4 嫌褐色シルト質粘土 棕色ブロック多量に含む
7. 10YR4/4 嫌褐色シルト質粘土 棕色ブロック多量含む



第26図 貯藏穴4~9

貯蔵穴10(第27図、写真図版30)

調査区ほぼ中央Ⅱ区に位置する。

検出面はI層を除去したV層上面である。

平面形態は、やや不整な円形である。遺構上部は後世の削平により大半が失われていると考えられ、本来はさらに深さを有する遺構であったと想定される。また、その他の貯蔵穴と同様、底面は比較的平坦であり、さらに側壁は垂直あるいは場所によってやや内傾しながら立ち上がる。

埋土は2層に細分される。底面はほぼ平坦である。

遺物は出土しなかったため時期は特定できないが、縄文時代前期の貯蔵穴であると考えられる。

(芋坪)

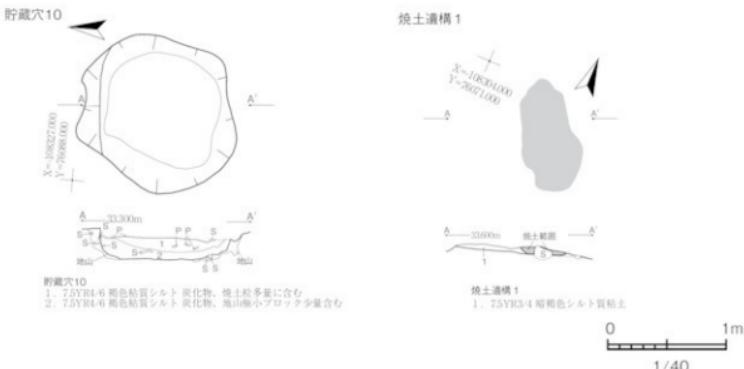
(3) 焼土遺構

焼土遺構1(第27図、写真図版38)

堅穴住居床面の地床炉以外で独立した焼土は1箇所で検出した。住居群Bに位置するが、このエリア内に内包される堅穴住居のものではない可能性が考えられることから独立したものと認識した。これは平面からみると、堅穴住居8の床面範囲外であり、層位的には床面よりもやや高い位置で燃焼部が確認できた。このことからも堅穴住居に付随するものではないとする方が妥当であると判断した。さらに、この上面を覆う遺物包含層1を掘削除去した面で検出でき、遺物包含層形成段階よりも古ないと考えられる。焼土範囲は赤褐色に被熱変色しており、さらに上面は著しく硬化している。よって、被熱範囲はかなりの高温で被熱した、あるいは断続的に同じ箇所で長期間かけて被熱したかのどちらかが考えられる。

焼土内から直接出土した遺物はないが、上部の遺物包含層起源の縄文土器が出土した。検出層位から考えて縄文時代前期中葉頃の焼土であると見込まれる。

(芋坪)



第27図 貯蔵穴10・焼土遺構1

(4) 土 坑

調査した遺構のうち、土坑とした遺構は37基を数える。同規模の遺構でも、貯蔵穴とした遺構はそれぞれ貯蔵穴としての特徴を具備しており、今回は土坑という表記はしなかった。一方、土坑と表記した遺構については、いずれも貯蔵穴としての特徴は認められず、その規模・形態等も一律ではない。これら土坑類の平面的な分布は、調査区の北西に位置するⅢ区には極端に検出数が少なく、Ⅱ区から分布が始まり、Ⅳ区でもっとも検出数が多くなる傾向にある。

土坑1(第28図、写真図版30)

調査区北西Ⅲ区の緩斜面地に位置する。削平されたエリアに位置し、Ⅳ層というよりV層により近い層位で検出した。検出したエリアは貯蔵穴の分布するエリアであるため、当初これらと同様の貯蔵穴である可能性も考えたが、本来の深さが失われており、さらに失われた深さを想定しても貯蔵穴として機能する程の深さにはならない遺構であると推定されることから貯蔵穴ではなく土坑とした。

一部擾乱により失われているが、平面形態は円～不整な楕円形を呈する浅い土坑である。

埋土は暗褐色粘質シルトの単層であり、自然堆積であると考えられる。機能および用途は不明であるが、埋土の状況から縄文時代の遺構であると考えられる。

(福島)

土坑2(第29図、写真図版31)

調査区ほぼ中央Ⅱ区の削平された平坦面に位置する。削平された検出面であるため、礫を多く含んだV層上面で検出した。土坑3と切り合いか認められ、これを切っている。平面形態は不整な方形を呈する。

埋土は上下2層からなり、いずれも焼土や炭化物が混入しているが、自然堆積であると考えられる。下層はやや粘質が強まるシルトであり、地山であるV層由来の中小の礫が混入する。機能および用途は不明であるが、埋土の状況から縄文時代の遺構であると考えられる。

(芋坪)

土坑3(第29図、写真図版31)

調査区ほぼ中央Ⅱ区の削平された平坦面に位置する。削平された検出面であるため、礫を多く含んだV層上面で検出した。比較的小規模な遺構である。土坑2・10とそれぞれ切り合いか認められ、これらによって切られている。平面形態は両土坑によって大きく損なわれているため不明である。

埋土は3層からなり、自然堆積であると考えられる。機能および用途は不明であるが、埋土の状況から縄文時代の遺構であると考えられる。

(芋坪)

土坑4(第28図、写真図版31)

調査区ほぼ中央Ⅱ区の平坦面に位置する。遺構西側は擾乱によって損なわれている。平面楕円形の小規模な遺構であり、底面も不整である。

埋土は上下2層からなる。埋土中にブロック土を含むため人為堆積の可能性も考えられる。機能および用途は不明であるが、埋土の状況から縄文時代の遺構であると考えられる。

(芋坪)

土坑5(第28図、写真図版31)

2 検出遺構

調査区ほぼ中央Ⅱ区の平坦面に位置する。平面梢円形の小規模な遺構である。底面は比較的平坦であるが、西側のみやや凹む形態である。

埋土は上下2層からなる。埋土中に炭化物を少量含むが、自然堆積であると考えられる。機能および用途は不明であるが、埋土の状況から縄文時代の遺構であると考えられる。

(茅坪)

土坑6(第28図、写真図版32)

調査区中央やや西寄りの削平された平坦面に位置する。全体的に不整形な平面形態の小規模な遺構である。

埋土に少量の焼土粒が含まれるため遺構であると判断した。また、検出面がV層でも下部に該当しているため遺構上部が大きく削平されているものとみられる。このことから、検出した状況よりも大きな平面形態を有する遺構の底面付近に該当する可能性も考えられる。出土遺物はみられず時期不明であるが、埋土の特徴から縄文時代の遺構であると考えられる。

(福島)

土坑7(第28図、写真図版32)

調査区中央やや西寄りの削平された平坦面に位置する。平面円形の小規模な土坑である。周辺の遺構と同様、V層下部が露出している検出面であるため本来の遺構上部は大きく失われている可能性が考えられる。

埋土にはごく少量の焼土粒を含み、堆積状況から自然に堆積したものであると考えられる。出土遺物はみられず時期不明であるが、埋土の特徴から縄文時代の遺構の下部に該当する可能性が高い。

(福島)

土坑8(第28図、写真図版32)

調査区ほぼ中央Ⅱ区の平坦面に位置する。検出面は削平のためV層が露出した面である。不整形の平面形態であり、比較的浅い遺構である。周辺の遺構と同様、V層下部が露出している検出面であるため本来の遺構上部は大きく失われている可能性が考えられる。

埋土には暗褐色のシルトが堆積しており、埋土中より縄文土器片が出土した。埋土の特徴および出土遺物から縄文時代の遺構下部に該当する可能性が考えられる。

(福島)

土坑9(第28図、写真図版32)

調査区ほぼ中央検出面は削平のためV層が露出した面である。周辺の遺構と同様、V層下部が露出している検出面であるため本来の遺構上部は大きく失われている可能性が考えられる。不整形の平面形態であるが、梢円形を基調とするものとみられる。底面から壁にかけては長軸方向において緩やかな立ち上がりを有する。

埋土は3層からなり、炭化物や地山ブロックを含みながらも自然に流入した様子が観察できる。埋土からは少量の縄文土器片が出土した。埋土の特徴および出土遺物から縄文時代の遺構下部に該当する可能性が考えられる。

(福島)

土坑10(第29図、写真図版33)

調査区中央やや西寄りの削平された平坦面に位置する。削平された検出面であるため、礫を多く含んだV層上面で検出した。土坑3と重複しており、これを切っている。また、遺構南西側は擾乱によつて損壊されている。平面形態はやや不整な方形であり、緩やかに立ち上がる壁と平坦面を有する底

面からなる。

埋土は4層に区分され、全体的に小礫が混じり、おおむね自然堆積であると考えられる。遺構の性格は不明であるが、埋土の特徴から縄文時代の遺構であると考えられる。

(茅坪)

土坑11(第29図、写真図版33)

調査区東側平坦面に位置する。IV層上面において検出した。平面形態は不整であるが、底面は円形を基調とするものとみられる。

埋土は5層からなり、1層、4層で少量の縄文土器片が出土した。5層は地山に酷似しているが、若干粗粒砂が多い印象を受けたため掘削したが、本来は地山の一部であった可能性もある。埋土および出土遺物から縄文時代前期の遺構であると考えられる。

(福島)

土坑12(第29図、写真図版33)

調査区東側平坦面に位置する。IV層上面において検出した。土坑13と重複し、これを切っている。平面形態は楕円形であり、底面においても上部と相似形である。底面はやや丸みを持ち、緩やかに壁面立ち上がる。

埋土は上下2層からなり、いずれにも焼土および炭化物が混入する。埋土からは縄文土器片が少量出土しているが、詳細な時期は不明である。性格は不明であるが、埋土の特徴や出土遺物からみて縄文時代の土坑であると考えられる。

(福島)

土坑13(第29図、写真図版33)

調査区東側平坦面に位置する。IV層上面において検出した。土坑12と重複し、これに切られている。平面形態は楕円形であると考えられるが、土坑12によって北側が一部失われているため断定できない。

埋土は上下2層からなり、砂質分が多いシルトである。底面は比較的平滑だが、性格は不明である。また、遺物は出土しなかったが、土坑12に切られていることを考えれば、少なくとも縄文時代以前の遺構であると考えられる。

(福島)

土坑14(第30図、写真図版33)

調査区東端の緩斜面に位置する。検出面は、このエリアに広がる遺物包含層2を除去した面である。層位的にみればⅢ b層より下位の面である。土坑19と重複しており、平面では判然としなかつたが、断面ではこれを切っていることを確認した。植物の擾乱により一部失われているが、平面形態は方形を指向するものとみられる。

埋土は上を覆うⅢ層起源の堆積層が自然に流入、堆積したものであると考えられる。なお、遺物包含層2に多く含まれる火山灰等の混入は、この遺構内では認められなかった。時期を特定するような遺物は出土しなかったが、検出面および埋土の特徴から縄文時代前期中葉以前の遺構であると考えられる。

(福島)

土坑15(第29図、写真図版34)

調査区東端の緩斜面に位置する。検出面は、遺物包含層2を除去した面である。層位的にみればⅢ b層より下位の面である。平面円～方形の小規模なピットである。柱穴のような遺構である可能性も

あるが、痕跡からそれと認識できなかった。

埋土には炭化物が含まれるが、遺物は出土しなかった。検出面および埋土の特徴から縄文時代前期中葉以前の遺構であると考えられる。

(福島)

土坑16(第29図、写真図版34)

調査区東端の緩斜面に位置する。検出面は、遺物包含層2を除去した面である。層位的にみればⅢb層より下位の面である。平面方形の小規模なピット状の遺構である。規模や平面形態等の特徴から柱穴のような性格の遺構である可能性もあるが、その深さがあまりにも浅いため柱穴ではないとも思われる。

埋土には多量の炭化物が含まれており、浅いが自然の凹みではないものと考えられる。時期を特定するような遺物は出土しなかったが、検出面および埋土の特徴から縄文時代前期中葉以前の遺構であると考えられる。

(福島)

土坑17(第29図、写真図版34)

調査区東端の緩斜面に位置する。検出面は、遺物包含層2を除去した面である。層位的にみればⅢb層より下位の面である。平面不整な円形の小規模な土坑である。

埋土は遺物包含層よりもやや明るい色調の埋土であり、このことから遺物包含層2の堆積開始時にはすでに埋没していたものと考えられる。時期を特定するような遺物は出土しなかったが、検出面および埋土の特徴から縄文時代前期中葉以前の遺構であると考えられ、他の周辺の遺構よりも遡る可能性がある。

(福島)

土坑18(第30図、写真図版34)

調査区東端の緩斜面に位置する。検出面は、遺物包含層2を除去した面である。層位的にみればⅢb層より下位の面である。平面不整な円形で全体的に深い遺構である。底面は凹凸著しく、壁はほとんど立ち上がりがない。ただし、中心部に他よりも深い箇所があり、遺構の主体はこの小ピットである可能性が考えられる。

埋土は遺物包含層2由来のものであり、自然堆積であるとみられる。時期を特定するような遺物は出土しなかったが、検出面および埋土の特徴から縄文時代前期中葉以前の遺構であると考えられる。

(福島)

土坑19(第30図、写真図版34)

調査区東端の緩斜面に位置する。検出面は、遺物包含層2を除去した面である。層位的にみればⅢb層より下位の面である。土坑14と重複しており、平面では判然としなかったが、断面ではこれに切られていることを確認した。平面橢円形で底面は北側に傾斜する。

埋土はやや粘性の強い土壤である。遺物は出土しなかったが、検出面および埋土の特徴から縄文時代前期中葉以前の遺構であると考えられる。

(福島)

土坑20(第30図、写真図版34)

調査区東端の平坦地に位置する。検出面はⅣ層上面である。平面形態はやや不整な楕円形であり、浅い凹みである。

埋土は黒色土を主体としており、比較的縄文時代前中期～中期初頭の堅穴住居の埋土に近い特徴を

持つ。遺物は出土しなかったが、先述の通り、埋土の特徴から縄文時代前期末～中期初頭の遺構である可能性が考えられる。

(福島)

土坑21(第30図、写真図版35)

調査区東端の削平された平坦地に位置する。検出面はV層である。平面楕円形の小規模な遺構である。削平のためか非常に浅い。底面は緩やかに和丸みを持ち、壁は直立気味に立ち上がる。

埋土は粘質シルトとシルト質粘土の上下2層からなり、下層には炭化物を少量含む。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から縄文時代の遺構であると考えられる。

(福島)

土坑22(第30図、写真図版35)

調査区南東隅の平坦地に位置する。当初の設定調査区際であり、その他の遺構がその設定調査区外へ連続することが明らかになったため部分的に拡張して調査をおこなった。この土坑は平面長方形で竪穴住居17に上面は切られている。

埋土は褐色シルト単層であるが、土器片が多く含まれている。出土遺物は縄文時代前期末の土器が出土した。埋土の特徴および出土遺物から縄文時代前期末～中期初頭の遺構であると考えられる。

(星)

土坑23(第30図、写真図版35)

調査区南東隅の平坦地に位置する。当初の設定調査区際であり、その他の遺構がその設定調査区外へ連続することが明らかになったため部分的に拡張して調査をおこなった。この土坑は平面長方形であると考えられるが、南半部分は土坑22によって切られているため判然としない。土坑22と同様に竪穴住居17によって遺構上面が切られている。

埋土は褐色シルト単層であるが、土器片が少量含まれている。出土遺物は縄文時代前期末の土器が出土した。埋土の特徴および出土遺物から縄文時代前期末～中期初頭の遺構であると考えられる。

(星)

土坑24(第30図、写真図版35)

調査区南東隅の平坦地に位置する。当初の設定調査区際であり、その他の遺構がその設定調査区外へ連続することが明らかになったため部分的に拡張して調査をおこなった。この土坑は小規模な平面円形であり、底面が丸みを有する。

埋土は上下2層からなり、いずれもやや粘性のあるシルトである。深さは最深部で12cmである。遺構東半分は土坑23を切っているため、竪穴住居17の床面に存在する柱穴などの付属施設である可能性も考えられる。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴から縄文時代前期末～中期初頭の遺構であると考えられる。

(星・芋坪)

土坑25(第30図、写真図版36)

調査区南東隅の平坦地に位置する。当初の設定調査区際であり、その他の遺構がその設定調査区外へ連続することが明らかになったため部分的に拡張して調査をおこなった。この土坑は平面楕円形で、竪穴住居17を切っている。

埋土は大半が褐色シルトであるが、土器片が少量含まれている。出土遺物は縄文時代前期末の土器が少量出土した。埋土の特徴および出土遺物から縄文時代前期末～中期初頭の遺構であると考えられる。

(星)

土坑26(第31図、写真図版36)

調査区東側の平坦地に位置する。堅穴住居15と重複しており、これを切っているものとみられる。平面楕円形であり、北側がやや深い形態である。埋土は上下2層からなっており、上層は炭化物を一定量含む暗褐色粘質シルトであり、やや固く縮まっている。下層は褐色粘質シルトで地山ブロックを含んでいる。埋土の特徴および出土遺物から縄文時代前期末～中期初頭の遺構であると考えられる。

(福島)

土坑27(第31図、写真図版36)

調査区東側、遺物包含層2に近接する土坑である。平面不定の楕円形であり、底面は比較的平坦である。周辺の土坑と同様、機能および性格は不明である。

埋土はにぶい黄褐色シルトの単層であり、やや粘性を帯びる。周辺の土坑と同様、機能および性格は不明である。埋土から遺物は出土しなかったが、埋土の特徴および検出面からみて縄文時代前期の遺構であると考えられる。

(福島)

土坑28(第31図、写真図版36)

調査区東側やや北寄りに位置する。平面楕円形であり、底面は緩やかに丸みを有する。深さは最深部で22cmであり、この最深部に関しては比較的平坦である。

埋土は3層の粘質シルトからなり、やや明るい色調で炭化物を少量含む。周辺の土坑と同様、機能および性格は不明である。埋土から遺物は出土しなかったが、検出層位から縄文時代前期の遺構であると考えられる。

(福島)

土坑29(第31図、写真図版37)

調査区東側に位置する。平面不定な楕円形であり、底面も凹凸を有する。深さは最深部で18cmであり、最深部は比較的平坦である。

埋土は層の粘質シルトおよびシルト質粘土が複雑に堆積している。埋土には比較的大きな礫が混在しており、より高位面からの転石である可能性が考えられる。機能および性格は不明である。埋土から少量の縄文土器片が出土した。検出層位および出土遺物から縄文時代前期の遺構であると考えられる。

(李坪)

土坑30(第31図、写真図版37)

調査区南東隅の平坦地に位置する。堅穴住居16に近接して存在するが、直接的な重複関係は認められない。平面長方形であるが、底面は凹凸著しい。

埋土は暗褐色粘質シルトであり、炭化物を多く含む。遺物は埋土から縄文土器片が少量出土した。遺構の形態的特徴から粘土探掘土坑の可能性も考えられる。遺構の時期は埋土から縄文時代であると考えられる。

(星)

土坑31(第31図、写真図版37)

調査区東側やや北寄りに位置する。遺物包含層2の範囲に近在する。平面不整な楕円形であり、底面も凹凸が認められる。

埋土は上下2層からなり、遺物は出土しなかった。周辺の土坑と同様、機能および性格は不明であるが、検出層位から縄文時代前期の遺構であると考えられる。

(福島)

土坑32(第31図、写真図版37)

調査区東側やや北寄りの緩斜面地に位置する。遺物包含層2の範囲に近在する。平面円形で底面は平坦であるため上部が削平された貯蔵穴である可能性も考えられたが、微低地に位置すること、その上に中揮火山灰が散見されることから削平されたとは考えられない。

埋土は上下2層のシルト～粘質シルトであり、炭化物を微量含む。遺構の機能および性格は不明であるが、検出層位から縄文時代前期の遺構であると考えられる。

(福島)

土坑33(31図、写真図版38)

調査区東側やや北寄りの緩斜面地、遺物包含層2の範囲に近在する。平面は不整な楕円形であり、底面に丸みを有し、一部オーバーハングする。これは植物等の作用である可能性も考えられるが、調査では判然としなかった。

埋土は上下2層からなり、上層はシルト、下層は粘質シルトである。遺物包含層2との関係から縄文時代前期の遺構であると考えられる。

(李坪)

土坑34(第32図、写真図版38)

調査区南東隅の平坦地に位置し、調査区外東へ連続する。ただし、これより東へは地形がやや下がっていく傾向にあるため調査区内と同じように連続するかどうか不明である。平面不整な楕円形であるが、本来は長方形を指向するものであった可能性も考えられる。

埋土は概ね暗褐色シルトの単層である。埋土から縄文時代前期末～中期初頭の土器片が多く出土した。遺構の帰属時期も出土遺物と同じであると考えられる。

(福島)

土坑35(第32図、写真図版38)

調査区南東隅の平坦地に位置する。比較的大規模な土坑が密集するエリアに存在するが、遺構の切り合いはきわめて不明瞭である。平面は不整な長方形である。

埋土は黒褐色シルトの単層で、前期末の縄文土器片を多く含む。遺構の機能および性格は不明であるが、縄文時代前期末～中期初頭は遺構であると考えられる。

(星)

土坑36(第32図、写真図版38)

調査区南東隅の平坦地に位置する。比較的大規模な土坑が密集するエリアに存在するが、遺構の切り合いはきわめて不明瞭である。平面は不整な長方形から楕円形である。

埋土は上下2層のシルトからなる。出土遺物は少量の縄文土器片である。縄文時代前期末～中期初頭の遺構であると考えられる。

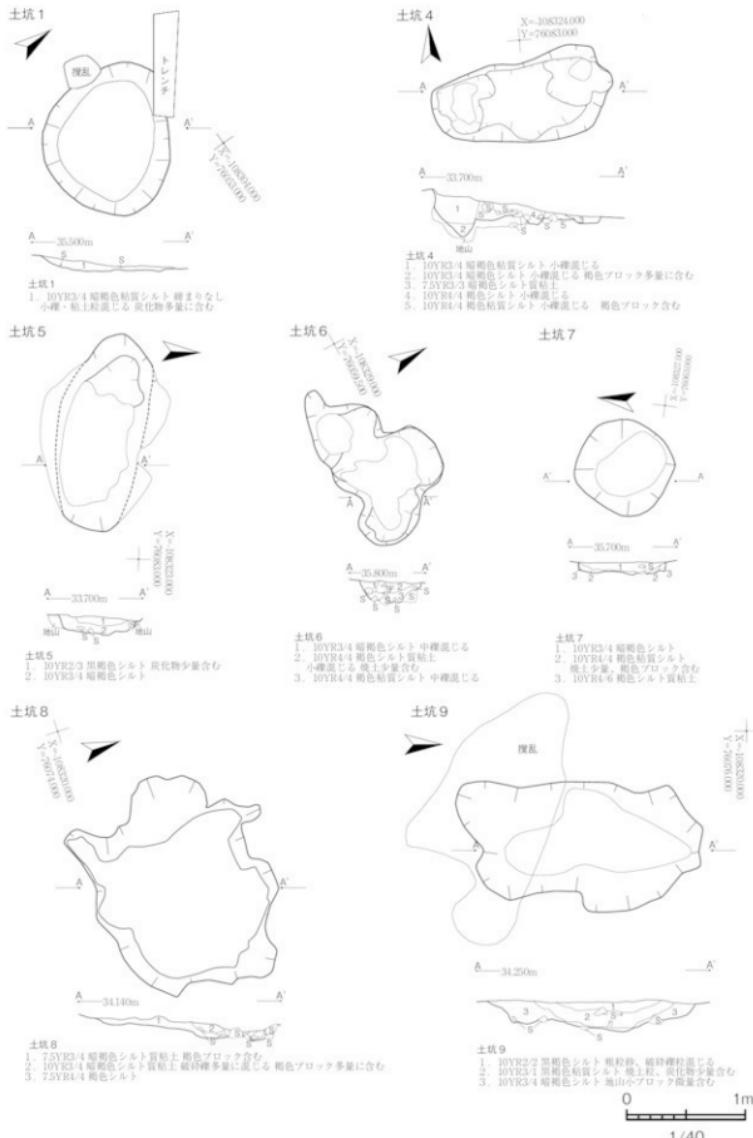
(星)

土坑37(第32図、写真図版38)

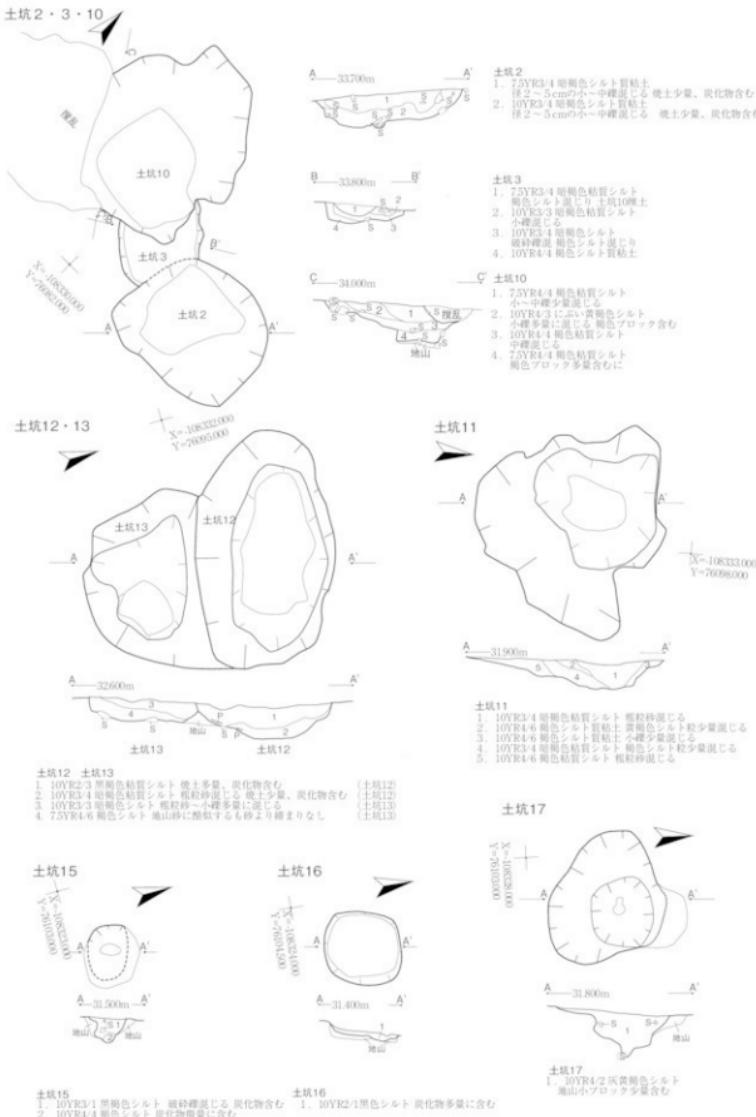
調査区南東隅の平坦地に位置する。比較的大規模な土坑が密集するエリアに存在するが、遺構の切り合いはきわめて不明瞭である。平面は不整な楕円形である。

埋土は単層の暗褐色シルトであり、焼土および炭化物粒が含まれる。出土遺物は少量の縄文土器片直線的な器形である。縄文時代前期～中期初頭の遺構であると考えられる。

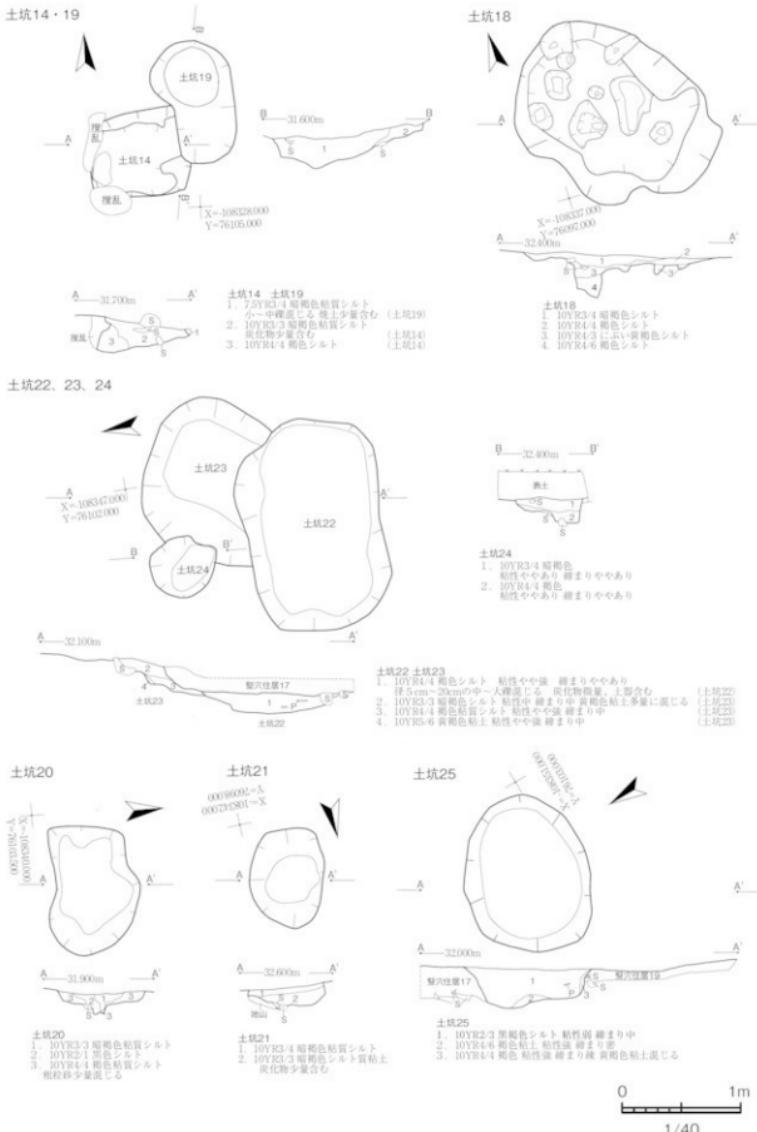
(福島)



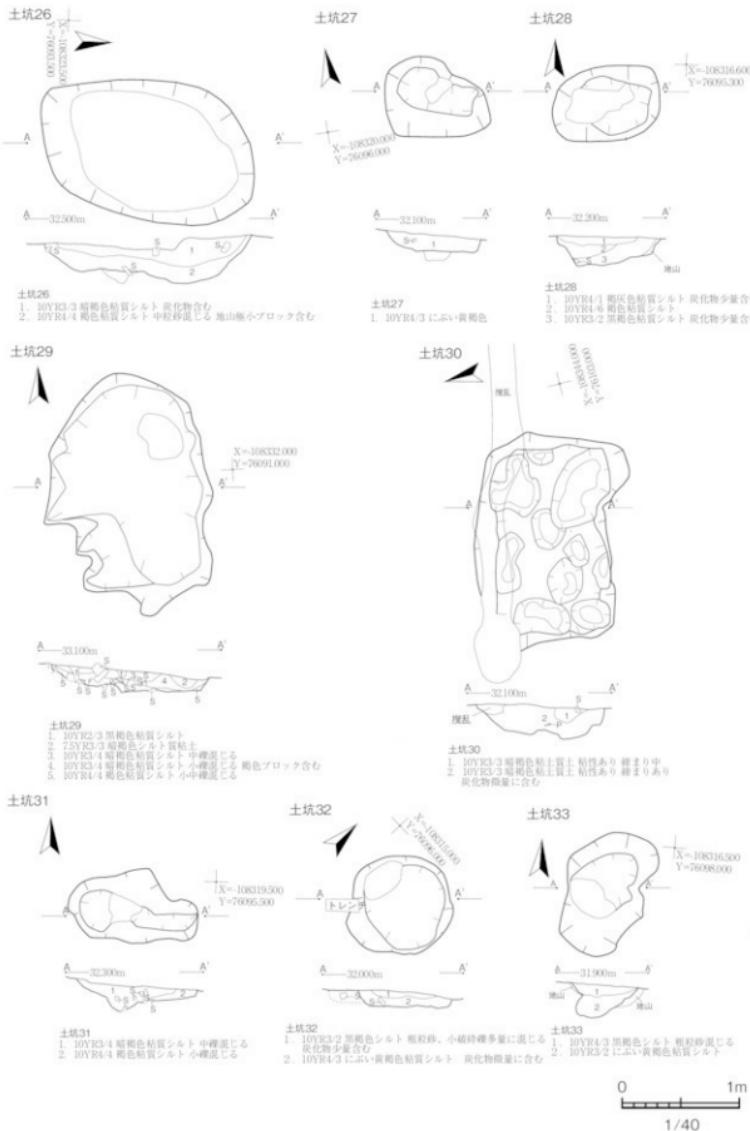
第28図 土坑 1・4～9



第29図 土坑2・3・10~13・15~17

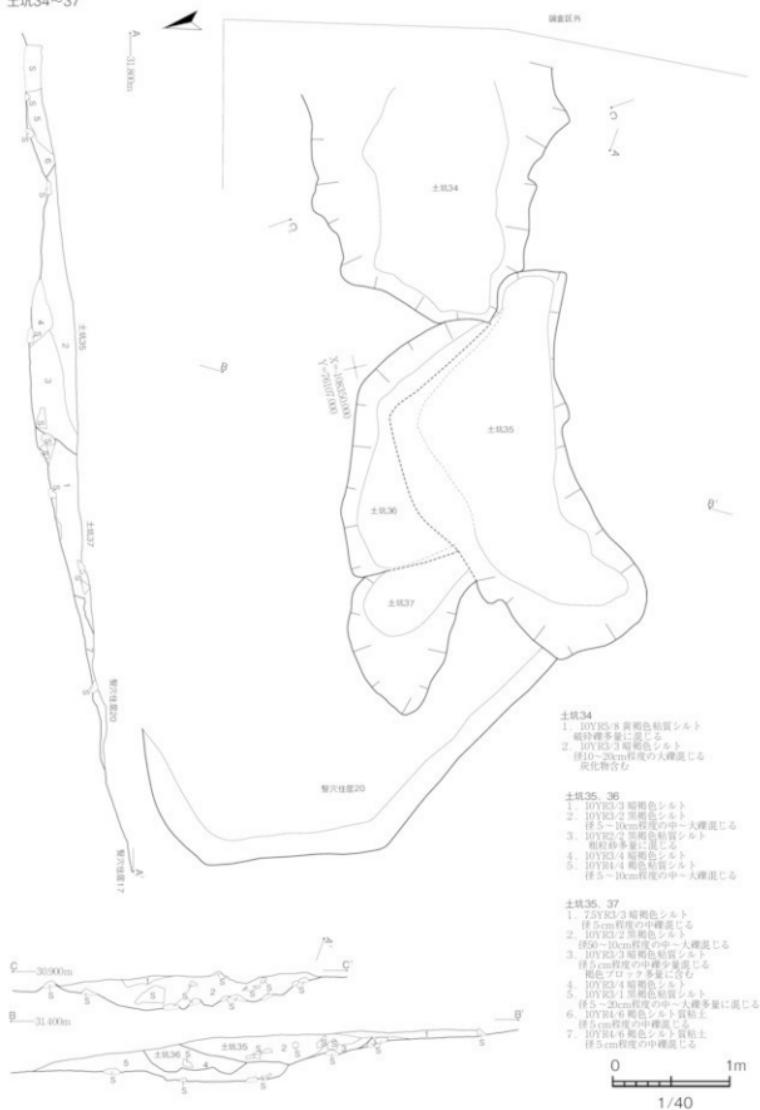


第30図 土坑14・18~25



第31図 土坑26~33

土坑34~37



第32図 土坑34~37

(5) 柱穴

柱穴 1～150(第33図、写真図版39・40)

同じく堅穴住居内以外で検出した柱穴は150個であり、特にⅢ区中央の緩斜面中腹で集中して分布する。Ⅳ・Ⅴ層上面で検出したが、一部Ⅲ層除去後検出される。

規模は様々であるが、その計測値は表2に示した。また、平面形態はいずれも円形を呈し、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。Ⅲ区中央における柱穴配置は等高線に沿うように東西方向に並んで分布する。いずれの柱穴も半裁し、その断面の観察をおこなった。その結果、柱掘方と柱痕跡が認められるものもあるが、規則性はまったくみられない。

埋土は2大別でき、Ⅲ層に近似するものと、それよりもⅣ層に近似するものとに分けられる。前者は比較的柱穴開口部の直径が大きいものが中心となり、後者は比較的小規模な柱穴を中心とする傾向がある。

埋土には全てではないが、縄文時代前期の土器や石器が出土した。現段階では縄文時代の掘り込みを伴わないあるいは掘り込みがあっても浅い建物に伴うものである公算が強い。

検出面、埋土、出土遺物から総合的に判断して、縄文時代前期の柱穴群であると考えられる。

(福島・李坪)

(6) 遺物包含層

遺物包含層はⅡ区北端、Ⅰ区北東端の2箇所でみられ、それぞれの範囲はⅡ区・Ⅰ区の境で連続せず途切れる。Ⅱ区に広がるもの遺物包含層1とし、Ⅰ区に広がるものを遺物包含層2とする。

遺物包含層1(第34図、写真図版41)

Ⅱ区北端、住居群Bとほぼ重なる部分に位置する。住居群Bで検出した遺構は、大半がこの遺物包含層1のⅢ層を除去した後に検出される。北へ向かって徐々に下る地形面に沿って堆積しており、北端の崖面付近まで残存する。基本層序のⅢa層に相当すると考えられる黒褐色シルトが主体となって堆積しており、部分的に火山灰がブロック状に集中する箇所が認められる。Ⅲa層は最も厚い箇所で約30cmの厚みを持つ。出土遺物は土器を中心に多く出土し、北端では土圧で押し潰されたような状態の土器も散見されるが、大半は小破片が多い印象である。

この遺物包含層出土遺物は縄文時代前期末頃のものが多く、この時期のものは比較的残存度も良好である。

遺物包含層2(第35図、写真図版42)

Ⅰ区北東端、住居群Cよりも低位面に位置する。不定形の土坑類がこの遺物包含層を掘削除去した後に検出される。地形は北に向かって下る緩斜面だが、北端部は遺物包含層の分布が認められず、表土直下に地山面が広がるため、このエリアで後世一定の削平行行為がおこなわれたものと判断される。基本層序のⅢb層が主たる堆積層となっており、その上面に部分的にはあるが、火山灰が層状あるいはブロック状に点在する。

この遺物包含層出土遺物は縄文時代前期中葉～後葉頃のものがもっとも多く、やや上位で出土する前期末～中期初頭のものは少量である。

(福島)



第33図 柱穴群

表2 柱穴計測表

柱穴名	開口部径 (cm)	底径 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)
柱穴 1	542	329	239	37.09
柱穴 2	405	35.0	306	36.96
柱穴 3	360	33.1	283	37.01
柱穴 4	403	28.4	19.1	36.30
柱穴 5	369	24.3	21.1	36.21
柱穴 6	325	19.6	11.3	36.11
柱穴 7	347	23.2	9.7	36.21
柱穴 8	246	17.4	16.1	36.16
柱穴 9	268	22.5	8.6	36.13
柱穴 10	433	36.3	17.4	36.22
柱穴 11	317	22.2	23.5	36.24
柱穴 12	304	20.9	19.0	36.07
柱穴 13	359	25.5	12.6	36.20
柱穴 14	422	24.7	20.2	36.12
柱穴 15	378	33.7	14.5	36.18
柱穴 16	513	34.4	36.7	36.07
柱穴 17	41.1	24.1	35.8	35.96
柱穴 18	357	23.1	22.4	36.15
柱穴 19	539	40.2	46.6	35.83
柱穴 20	429	22.9	21.0	36.25
柱穴 21	29.1	18.8	20.0	36.12
柱穴 22	31.0	18.8	18.0	36.21
柱穴 23	26.9	19.4	20.0	36.26
柱穴 24	34.5	23.8	10.8	36.31
柱穴 25	47.5	28.9	17.6	36.25
柱穴 26	39.6	28.4	13.9	36.38
柱穴 27	30.6	17.8	11.5	36.42
柱穴 28	35.3	29.5	22.3	36.25
柱穴 29	33.5	26.0	13.0	36.28
柱穴 30	29.7	24.0	33.0	36.08
柱穴 31	37.0	30.7	19.7	36.41
柱穴 32	50.6	44.2	15.7	36.18
柱穴 33	24.5	19.5	16.1	36.18
柱穴 34	24.7	19.4	9.0	36.38
柱穴 35	39.1	29.8	16.0	36.30
柱穴 36	29.1	22.1	15.4	36.19
柱穴 37	67.8	60.9	13.6	36.13
柱穴 38	49.1	39.8	13.5	36.05
柱穴 39	31.3	21.7	5.4	36.12
柱穴 40	27.6	15.5	10.8	36.01
柱穴 41	23.5	11.5	35.8	35.81
柱穴 42	16.8	38.5	13.8	35.79
柱穴 43	50.6	19.6	33.4	35.59
柱穴 44	34.0	28.0	11.5	36.24
柱穴 45	23.3	18.0	6.0	36.18
柱穴 46	29.1	23.0	10.4	36.17
柱穴 47	31.3	22.7	20.8	35.90
柱穴 48	20.0	14.8	20.6	35.87
柱穴 49	43.1	29.3	14.3	35.21
柱穴 50	44.4	31.6	22.9	35.35

(7) 媚

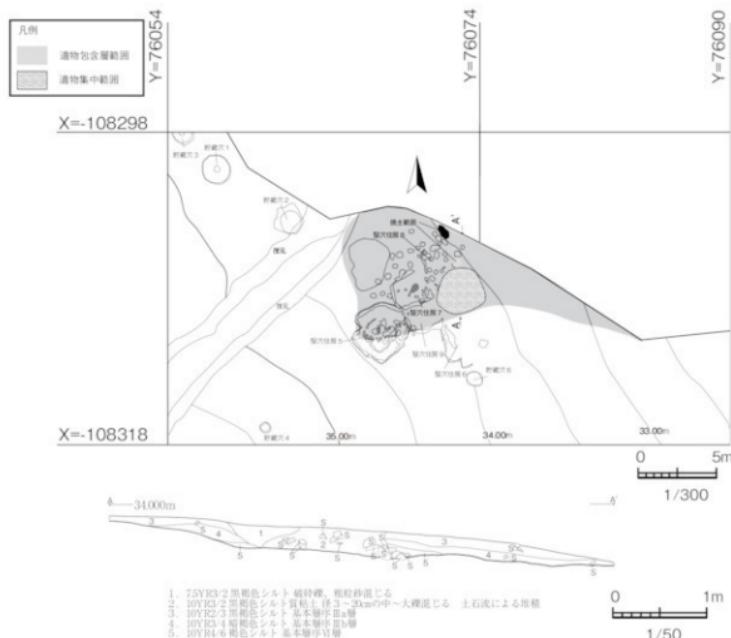
図1(第36図、写真図版43)

堀は1条のみ検出した。Ⅲ区西端、調査区境に位置し、調査区を貫流するように検出した。南から北へ向けて下る緩斜面地に等高線に直行する方向で延び、流末であると考えられる南東側が最も幅広となり、反対側の南西侧は検出面の削平のため最底面のみの浅くか細い形態である。

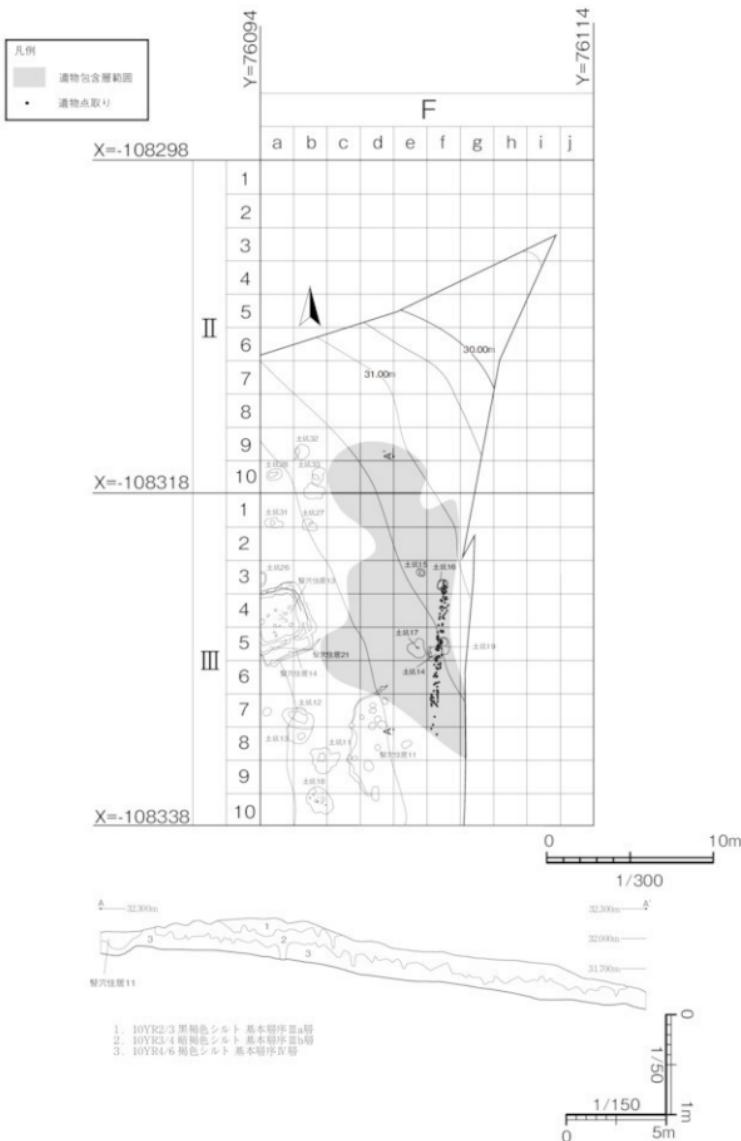
埋土は静かに堆積したと考えられるシルト質土壤を、その後の土砂流入により削り取られている。そのため北側流末は、堀の肩部を大きく損ない、オーバーフローしたものと考えられ、二又に分岐している。すなわち、堀としての機能停止後自然埋没したが、肩部まで埋まらず、内部が溝状に凹んでいるところに、土砂を多く含んだ水流によって調査した遺構形状となったものと考えられる。したがって、内部から出土した遺物もこのような埋没過程で混入したものとみることができる。

出土遺物の大半が繩文前期の土器・石器であるが、最上層にて陶器片1点、鉄滓1点が出土した。陶器は、志野焼椀であり、16世紀後半頃の時期が考えられる。堀の性格およびその機能は不明であるが、16世紀代にはほぼ埋没した可能性が考えられる。中世の城館に伴う施設である可能性も考えられるが、付随するその他の施設が今回の調査では不明であるため積極的に評価できない。

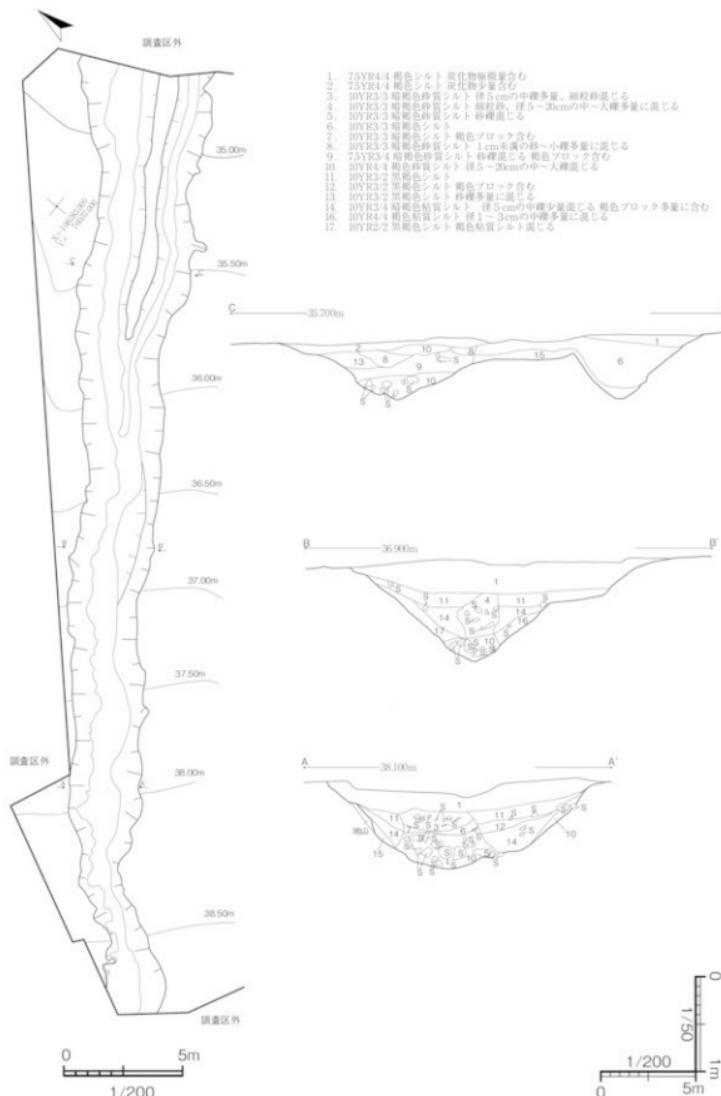
(福島)



第34図 遺物勾査図1



第35図 遺物包含層2



第36図 地図

3 出土遺物

(1) 繩文土器

出土した縩文土器を概観すると前期中葉に位置付けられる大木2b式を最古として、中期初頭の大木7式までの土器型式が認められる。なお、出土した土器は大木2b式以前および大木7式以降の型式は認められず、より限定された時代の土器群であると考えられる。さらに、堅穴住居等の遺構より出土した土器はいずれも大木3～7式であり、これら土器型式の時間幅が概ね集落が機能する時期を示しているものと考えられる。

以下、出土土器について遺構毎のまとまりで記述する。

堅穴住居1出土土器(第37図、写真図版44)

1～8は堅穴住居1内およびその検出面において出土した縩文土器である。1～6は堅穴住居1埋土より上位に堆積する遺物包含層由来の土器であると考えられる。すなわち、堅穴住居1が機能を停止し埋没した後、堆積した土層に含まれるものと判断できる。この堅穴住居はメインベルトの下位で検出したことによって、このような堅穴住居機能後埋没までの期間の遺物と完全埋没後の堆積期間の遺物とに分離することが可能であった。結果、出土土器も明らかな時期差を見出すことができた。

1は体部のみの破片である。残存する体部は、わずかに彎曲し立ち上がる。外面は横位LRの縩文が施されている。中～大形の深鉢片であると考えられる。

2は体部のみの破片である。体部最大径部分が破片の中位にあるため体部中位がやや膨らむ形態であると推測できる。外面は横方向のケズリが全面施されている。本来、地文が施されていたかどうかは不明である。内外面とも輪積み痕跡が明瞭である。

3は口縁部から体部上半にかけての破片である。波状口縁であり、突出部直下には突起が貼り付けられている。体部外縁は縦位の撓糸による縩文が全面施されている。器形および文様の特徴から前期末葉～中期初頭に属する中～大形の長胴形深鉢片であると考えられる。

4は口縁部の破片である。口縁部外傾する口縁部に屈曲する頭部の一部が確認できる。内面は丁寧なミガキ調整が施されており、器表面が非常に平滑である。口縁部外面の文様帶は竹管状の工具の端部を断続的に引きするように押し当てられている。これは頭部にもみられるが、頭部のものはその単位がより細かい。器形および文様の特徴から前期末葉～中期初頭に属する中～大形の深鉢片であると考えられ、頭部の屈曲角度から球胴形を指向するものとみられる。

5は底部のみの破片である。底部外縁には種実のようなものの圧痕が認められる。比較的小形の土器であると考えられる。底部縁辺部の摩耗が顕著であるため、破損後円盤として再利用された可能性も考えられる。

6は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部はわずかに外方へ屈曲する。口縁部および頭部には直線で構成される沈線が施されている。体部には横位のRL縩文が施されている。器形および文様の特徴から前期末葉の大木6式に属する深鉢であると考えられる。

7は口縁部から体部上半にかけての破片である。直線的な形態で、口縁端部には端面を有する。口縁端部には粘土紐貼付文が1条波状に巡る。体部にも同様の貼付文の一部が認められる。体部外面は地文である横位のLR縩文が展開する。

8は口縁部から体部上半にかけての破片である。最頂部は欠失しているが、大きな波状口縁であるとみられる。波状に沿うように口縁部外面には粘土紐貼付文が施されており、梯子状を呈する。地文は横位LRの繩文が施文されている。器形および文様の特徴から前期後葉の深鉢であると考えられる。

竪穴住居5出土土器(第38図、写真図版44・45)

9～23は竪穴住居5より出土した繩文土器である。

9は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部はやや外方へ開くがその曲線は緩やかである。頸部付近に波状をなす粘土紐貼付文が1条認められ、これより下位では繩文が施文されている。繩文は器表面の摩減により不鮮明であるが、節の方向から横位のRLであると思われる。器形および文様の特徴から前期後葉の大木5式に属する中形の深鉢であると考えられる。

10は口縁部の破片である。端部から粘土紐貼付文が縱方向に走り、これには刻みが伴う。中形の深鉢片であると考えられる。

11は口縁部の破片である。やや外反する形態であり、端部は厚みが減じ丸く認められる。口縁部直下より極細の粘土紐貼付文が縱方向に入り、これに細かな刻みが伴っている。地文は不鮮明であるが、胎土に微量の纖維の混入が認められる。器形および文様の特徴から前期中葉の大木3式に属する中形の深鉢であると考えられる。

12は体部下端から底部にかけての破片である。底部が概ね水平であるとすると、体部はやや内傾しながら立ち上がる。外面に地文等は認められない。

13は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は鋭く外方へ屈曲し、体部は直立する器形であると考えられる。外面は繩文が施文されており、横位のRLであると思われる。器形および文様の特徴から前期中葉頃に属する中～小形の深鉢であると考えられる。

14は体部の破片である。竹管による円文が認められる。文様の特徴から前期中葉の大木3式に属する深鉢片であると考えられる。

15は体部下端の一部から底部にかけて残存する。体部は直立気味に立ち上がる。外面に地文等は認められない。

16は体部の細片である。外面には2条の沈線文がみられる。

17は口縁部の破片である。口縁部は著しく外反する器形である。口縁部内面に波状の粘土紐貼付文が2条平行して巡る。焼成後の穿孔がなされており、補修孔であるとみられる。器形および文様の特徴から前期後葉に属する中形の深鉢であると考えられる。なお、これと接合しないが同一個体の破片に付着した炭化物のAMS年代測定をおこなっている。この測定結果についての詳細はV章に記載している。

18は口縁部から体部にかけて残存する。水平口縁で体部から口縁部にかけて著しく外反し、朝顔形に開く形態である。口縁部内面最上端および体部外面に波形を基調とする粘土紐貼付文が施されている。器表面は摩減が著しく付加されていた粘土紐貼付文の多くが剥落していると思われる。形態および文様の構成から前期後葉に位置付けられる中形の深鉢である。

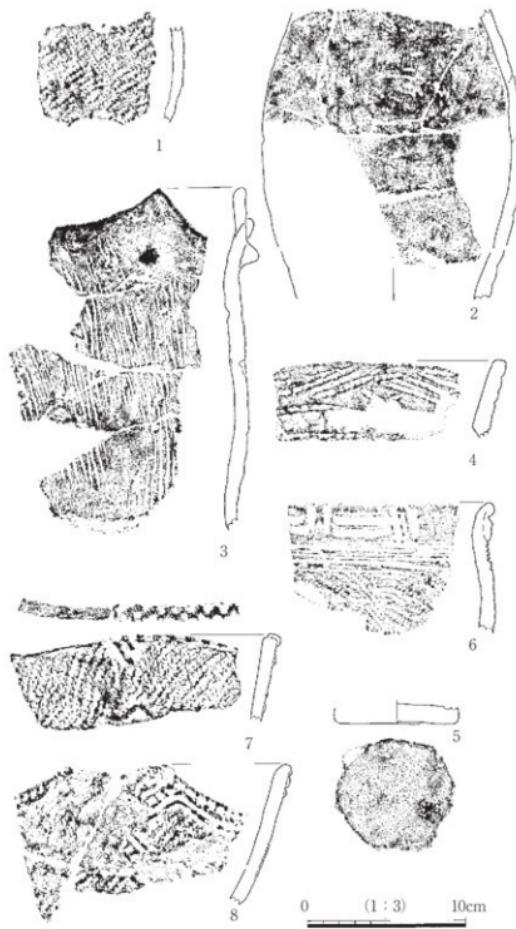
19は口縁部から底部までの大半が残存する。体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。口縁端部は残存する擬口縁から外方へ貼り付けられる口縁部帯が存在したものと推測される。これは擬口縁部分と貼り付け部分の双方がそれぞれみられるためである。体部外面には繩文施文後に波形を基調とする粘土紐貼付文が施されている。繩文は不鮮明であるが、横位のLRの可能性が考えられる。形態および文様の構成から前期後葉に位置付けられる中形の深鉢である。

20は口縁部から底部までの大半が残存する。体部上半はやや丸みを有しながら立ち上がるが、下半は極端に窄まる形態である。口縁は水平口縁で、外方へ貼り付けによって突出する。口線上端面は平坦面を持ち、ここに細い粘土紐貼付文が一部残存する。残存する粘土紐貼付文をみると、内面側と外面側にそれぞれ波形が配され、これらの間に同じ太さの粘土紐貼付文が1条巡っている。体部外面は口縁部直下に無文帯が巡り、体部中位には粘土紐貼付文が展開する。これら体部粘土紐貼付文は、上端部で1条の波形文が巡り、これより下位では斜格子状直線文あるいは部分的にはしご状文や波形文と組み合わされている。体部下半は無文であるが、体部粘土紐貼付文の下地には縄文が施されている。形態および文様の構成から前期後葉に位置付けられる中形の深鉢である。

21は体部下端から底部にかけて残存する。体部はやや外反しながら立ち上がる。内底面は丁寧になで調整がおこなわれており、丸みを持つ。底部外面には木葉痕が認められる。やや小形の土器であると考えられる。

22は体部下半から底部にかけての破片である。内底面は丁寧にナデ調整されており、器表面が滑らかである。体部はわずかに外傾しながら立ち上がる。外面にかすかに地文らしきものが認められるが摩滅により判然としない。比較的小形の土器であると考えられる。

23は体部の破片である。外面は横位の綾織縄文が認められる。中～大形の深鉢であると考えられる。



第37図 構造1出土遺物

竪穴住居6出土土器(第39図、写真図版46)

24~26は竪穴住居6より出土した縄文土器である。

24は体部下端から底部にかけて残存する。体部外面はミガキのような器面調整により、地文は認められない。

25は体部の破片である。わずかに彎曲し、竹管による円文が1点認められる。円文には沈線が複合するようで、円文内区に2条の沈線がわずかに存在する。地文は残存部全面に施されており、横位のRL原体に同一方向の付加条が加えられたものであると判断される。文様の特徴から前期中葉の大木3式に属する深鉢片であると考えられる。

26は体部の破片である。文様は地文である横位RLの縄文に沈線による曲線の文様が認められる。体部のみであるが、文様の特徴から前期中葉の大木3式に属する深鉢片であると考えられる。

竪穴住居7出土土器(第39図、写真図版46)

27~31は竪穴住居7より出土した縄文土器である。

27は口縁部の破片である。口縁端部はわずかに肥厚し、端部で端面を持つ。立ち上がりはやや外反傾向である。外面には竹管による円文と沈線による直線文の組み合わせで構成されている。文様の特徴から前期中葉の大木3式に属する大形の深鉢であると考えられる。

28は体部上半の破片である。外面には縄文施文後の粘土紐貼付文が展開している。縄文は斜位のLRであると考えられる。文様の特徴から前期後葉に属する中~大形の深鉢であるとみられる。

29は体部下半の破片である。下端は底部との接合面で破損している。器形は直立気味に立ち上がり、外面は下半で丁寧なナデ調整が施されている。よって、この範囲においては地文も消されている。比較的小形の土器であると考えられる。

30は体部の細片である。外面には波状の粘土紐貼付文が巡る。器形および文様の特徴から前期後葉の深鉢片であると考えられる。

31は口縁部から体部上半にかけての破片である。わずかに内彎する器形であり、口縁上端部に端面を持つ。口縁端部正面には斜め方向に粘土紐貼付文が連続し、体部外面には波状の粘土紐貼付文が巡る。これは部分的に2条となっている。粘土紐貼付文より下部は横位LRの縄文が施されている。器形および文様の特徴から前期後葉の深鉢片であると考えられる。

竪穴住居8出土土器(第39図、写真図版46)

32・33は竪穴住居8より出土した縄文土器である。

32は体部上半の破片である。外面には縄文施文後の粘土紐貼付文が展開している。縄文は横位のLRであると考えられる。文様の特徴から前期後葉に属する中~大形の深鉢であるとみられる。

33は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁端部は端面を持ち、体部から口縁部は直線的に外傾するものとみられる。外面には細い横方向の粘土紐貼付文2条が細かな刻みを持ちながら巡る。地文は不鮮明ながら横位の付加条の縄文が認められる。口縁部直下の文様帯は半裁竹管による鋸歯状の文様が巡っている。また、胎土にはわずかに細かな纖維の混入がみられる。形態および文様の特徴から前期中葉の大木3式に属する中~大形の深鉢であると考えられる。

竪穴住居10出土土器(第40図、写真図版46・47)

34~37は竪穴住居10より出土した縄文土器である。

34は底部のみの破片である。底部外面には敷物等の痕跡はみられない。比較的大形の土器底部であると考えられる。

35は口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部に突出部を持ち、頸部が「く」字形に屈曲する。頸部には隆線が水平方向に巡り、これには刻みが施されている。器形および文様の特徴から前期末に属する中～大形の深鉢片であると考えられる。

36は口縁部の破片である。口縁部は肥厚し、やや内彎する。文様は水平方向の沈線文が文様帯を醸成しており、文様帯内は縦方向の連続する沈線文が巡っている。さらに、粒状の貼付文が3個並んでいる。これら文様の特徴は前期末頃であることを示しており、この時期に帰属する中～大形の深鉢であると考えられる。

37は体部のみの細片である。やや内彎し、残存する上部は半截竹管沈線文、下部は横位のRL縦文が施されている。文様の特徴から前期末～中期初頭の深鉢であると考えられる。

竪穴住居11出土土器(第40図、写真図版47)

38～44は竪穴住居11より出土した縄文土器である。

38は口縁部の破片である。口縁部がわずかに外傾するのみで直線的である。残存部で文様はみられない。また、胎土に微量の繊維の混入が認められ、このことから前期中葉の土器であると想定できる。比較的小形の土器であると考えられる。

39は口縁部の破片である。口縁部がわずかに外傾するが、その他は直線的な形態である。外面には半截竹管による沈線文がみられ、口縁上部が水平方向、その直下が波形である。後者の沈線文が、前者の沈線文を切っている様子が観察できる。文様の特徴から前期中葉の大木3式に属する中～大形の深鉢であると考えられる。

40は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部がわずかに外傾する。外面には撲糸による地文が施されている。詳細な時期は不明だが、中～小形の深鉢片である。

41は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は著しく外反し、端部が丸く收められている。この外反部分には2条の波状沈線文が巡る。体部には地文があるとみられるが、器表面の摩滅により不鮮明である。器形および文様の特徴から前期中葉から後葉に属する中～大形の深鉢であると考えられる。

42は体部下半から底部にかけての破片である。内底面は丁寧にナデ調整されており、器表面が滑らかである。体部は直立気味に立ち上がる。比較的小形の土器であると考えられる。

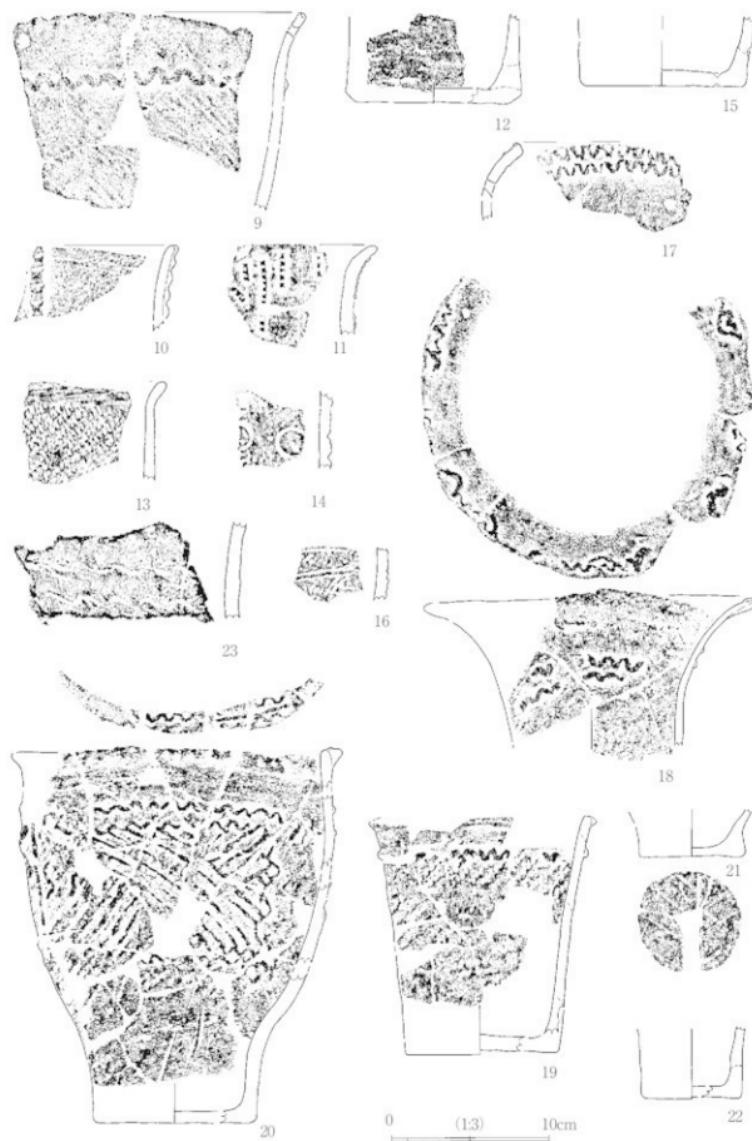
43は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部・頸部・体部の境界は作り出されておらず、直線的な器形である。口縁上端部には直線と波状を組み合わせた粘土縦貼付文が巡る。外面にはやはり粘土縦貼付文が梯子状、直線、曲線をして展開する。器形および文様の特徴から前期後葉に属する中～大形の深鉢片であると考えられる。

44は体部下端から底部にかけての破片である。残存する体部はやや外傾しながら立ち上がるが、全体的にはやや外反するものと推定される。底部外面は丁寧にナデ調整が施され、敷物等の痕跡はみられない。中～大形の土器であると考えられる。

竪穴住居12出土土器(第40図、写真図版47)

45・46は竪穴住居12より出土した縄文土器である。

45は底部のみ残存する。側辺部が著しく摩耗しているため、円盤として再利用された可能性も考え



第38図 壁穴住居 5 間連遺物

られる。外面は滑らかにナデが施されている。

46は口縁部片(46-1)と体部片(46-2)に分かれているが同一個体である。口縁部は3個1単位の突出部を有し、その直下に2個の小さな瘤状の貼付がみられる。口縁部外面には縁取りの沈線文が巡るが、それ以外の文様は表面が剥落しているため不明である。体部外面は地文である編み目繩文が施されしており、内面は丁寧な調整で器表面が滑らかである。長胴形の深鉢であると考えられ、器形および文様の特徴から前期末頃のものと判断される。

竪穴住居13出土土器(第40図、写真図版48・49)

47~68は竪穴住居13より出土した繩文土器である。

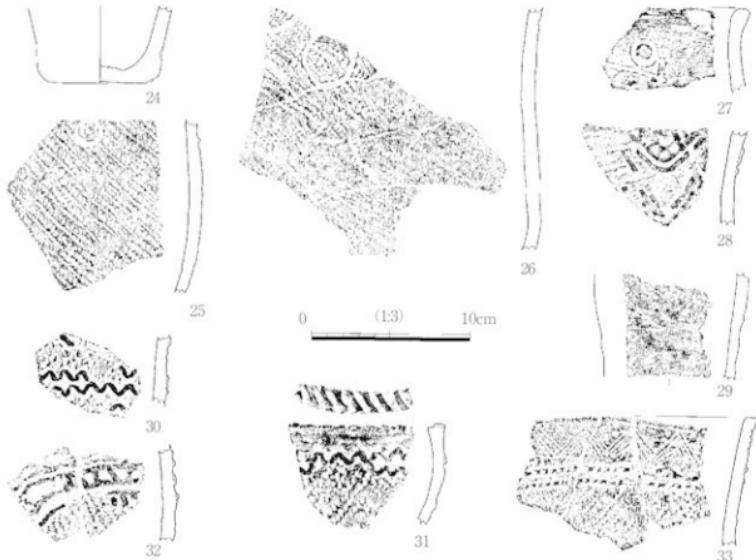
47は底部の破片である。底部外面は上げ底状になっており、縁辺部に強いナデが全周する。このことから底部下端に台状のものが貼り付けられていた可能性も考えられる。

48は口縁部の破片である。口縁端部は丸く、残存する部位は無文である。中~小形の深鉢片であると考えられる。

49は体部の破片である。文様は横位のLR繩文に、粘土紐貼付文が付加されている。粘土紐貼付文は太いものと細いものとの2種で構成されており、太いものの周辺を細いものが縁取るように展開する。文様の特徴から前期後葉の中~大形の深鉢片であると考えられる。

50は口縁部の破片である。口縁端部および外面に粘土紐貼付文が施されており、口縁端部のものは波形、外面のものは梯子状の意匠がみられる。器形および文様の特徴から前期後葉の深鉢であると考えられる。

51は体部下端から底部にかけての破片である。残存する体部はやや内傾した後、やや外反するよう



第39図 竪穴住居6~8出土遺物

に立ち上がる。内底面は丁寧なナデにより底部と体部との継ぎ目が消されている。小～中形の土器であると考えられる。

52は体部下端から底部にかけての破片である。体部が底部から外傾しながら立ち上がる小形の土器である。

53は口縁部の破片である。口縁端部に突起が付与されており、突起は立体的な渦巻き形状である。中～大形の深鉢片であると考えられる。

54は体部上半の破片である。外面には横位のLR縄文の上に粘土紐貼付文が付加されている。文様の特徴から前期後葉の深鉢片であると考えられる。

55は体部下半から底部にかけての破片である。残存する体部は直立気味に立ち上がるが、これより上位の残存していない部分に向かってやや外反傾向が認められる。比較的小形の土器である。

56は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は小波状を呈し、小さく外傾気味である。体部外面には横位から斜位のLR縄文が全面施されている。中～大形の深鉢片であると考えられる。

57は体部下端から底部にかけての破片である。体部は外傾から外反傾向である。中～大形の土器である。

58は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部はわずかに外傾し、体部は直線的である。口縁端部には波形が認められる。

59は口縁部から体部上半にかけての破片である。比較的直立する形態である。文様は外面に横位LRの縄文が全面みられ、この上に太めの粘土紐貼付文が施されている。粘土紐貼付文は菱形から直線が延びるような構成である。また、口縁端部に突起が付与されており、突起は立体的な渦巻き形状である。器形および文様の特徴から前期後葉の深鉢であると考えられる。

60は口縁部から体部上半にかけての破片である。直線的であるが、本来の器形は口縁部に向かって外傾するものとみられる。体部外面には沈線文と竹管による円文が認められる。沈線は最上部が波形、その直下が2条の平行する沈線がそれぞれ巡る。この沈線より下へ垂下する短沈線に円文が結合する。地文は横位LRの縄文が施されているようである。器形および文様の特徴から前期中葉の大木3式に属する中～大形の深鉢片であると考えられる。

61は体部の細片である。外面には太い粘土紐貼付文と細い粘土紐貼付文によって文様が構成されており、細いものは一部梯子状を呈する。文様の特徴から前期後葉に属する中～大形の深鉢片であると考えられる。

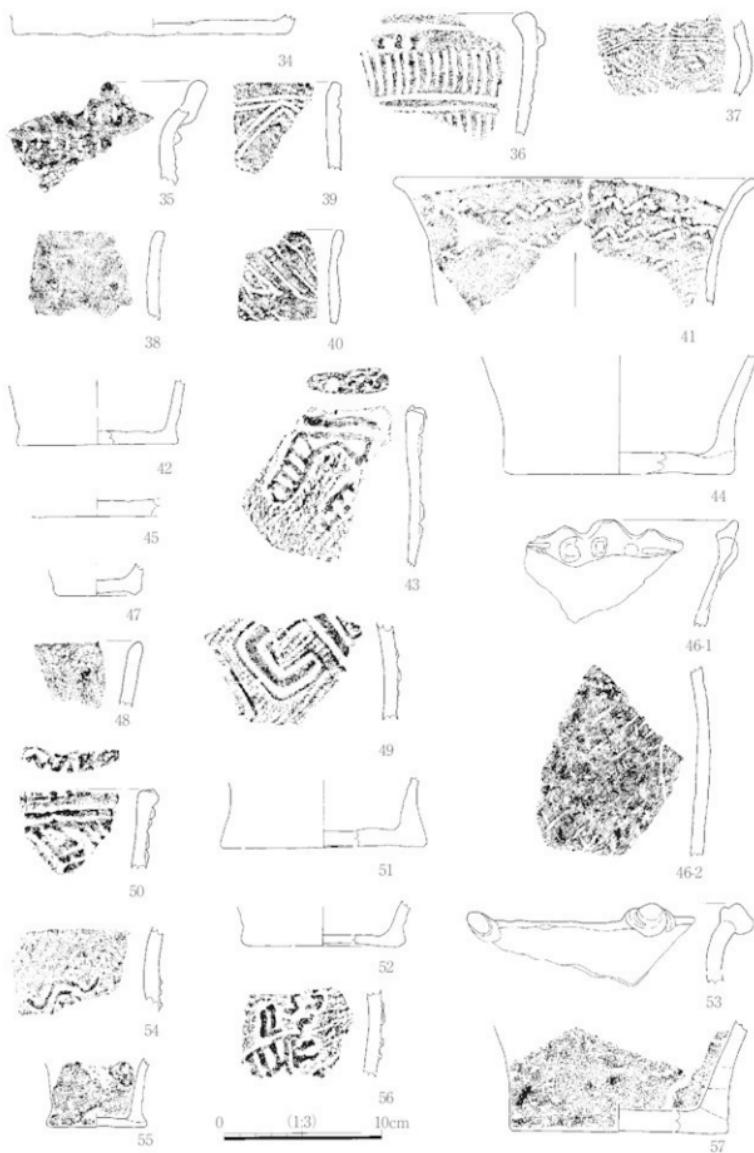
62は体部下端から底部にかけての破片である。体部はほぼ直立するように立ち上がる。内底面は丁寧なナデにより底部と体部の継ぎ目が消されている。中形の深鉢であると考えられる。

63は口縁部の破片である。外反する水平口縁であり、口縁端部には粘土紐貼付文が波形に配されている。器形および文様の特徴から前期後葉の大木5式に属する中～大形の深鉢片であると考えられる。

64は口縁部から体部上半にかけての破片である。ほぼ直立する体部にわずかに外反する水平口縁である。外面は地文のみで、縦位の单軸絡条帶である。内面は指頭圧痕が顕著にみられる。長胴形で中形の粗製深鉢である。

65は口縁部から体部上半にかけての破片である。体部は直線的で垂直に立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。頸部には円形の刺突文が連続して上下2列巡り、これらは先端部の尖った棒状工具でなされたような形状である。胎土にわずかに纖維の混入があるようにみえる中形の深鉢片である。

66は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁端部は丸く收められ、わずかに外傾するものと見込まれる。外面には横位のLR縄文が施文されており、水平方向の直線的な沈線文が深く刻まれている。胎土には微量の纖維の混入があるものと思われる。器形および文様の特徴から前期中葉の



第40図 竪穴住居10~13関連遺物

大木3式に属する中～大形の深鉢であると考えられる。

67は体部下半の破片である。上位は縄文が認められ、下位は調整によって消されている。縄文は横位のLRであると考えられる。中～大形の深鉢片であると考えられる。

68は体部下半から底部にかけて残存する。体部は外傾しながら立ち上がり、残存する部分は直線的である。外面には縄文が施されているが、器表面が摩滅しているため不鮮明である。縄文は横位LRであり、底部には網代痕が認められる。中形の深鉢であると考えられる。

豊穴住居15出土土器(第41図、写真図版49)

69・70は豊穴住居15より出土した縄文土器である。

69は底部のみの破片である。底部外面には網代痕等は認められない。中～小形の土器であると考えられる。

70は口縁部の破片である。口縁端部には粘土紐貼付文が波形に配されている。外面には縄文が微かに認められ、横位のLR縄文であるとみられる。中～小形の深鉢片であると考えられる。

豊穴住居16出土土器(第41図、写真図版49)

71は豊穴住居16より出土した縄文土器である。

71は体部下端から底部にかけての破片である。体部は外傾気味に立ち上がる。底部外面には網代痕等は認められない。中形の土器であると考えられる。

豊穴住居17出土土器(第42図、写真図版49・50)

72～83は豊穴住居17より出土した縄文土器である。

72は頸部の破片である。頸部は強い稜線を持ちながら「く」の字形に屈曲する。口縁部の大半は残存していないが、肥厚し沈線による文様帯が展開するものと推測される。この文様は残存する部分から沈線文と刺突文によるものとみられる。文様の特徴から前期末～中期初頭の中～大形の深鉢片であると考えられる。

73は底部の破片である。底部外面には網代痕が明瞭に認められる。中形の深鉢片であると考えられる。

74は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は体部より肥厚し、文様帶を有する。体部は縄文が施されており、結束を有する縱位の縄文である。器形および文様の特徴から前期末～中期初頭に属する中形の深鉢片であると考えられる。

75は体部下端から底部にかけての破片である。体部は外傾気味に立ち上がる。中～大形の深鉢片であると考えられる。

76は口縁部の破片である。口縁部はやや外傾し、端部は丸く収められている。口縁部は一部小波状をとるものとみられる。中～小形の深鉢であると考えられる。

77は口縁部から体部上半にかけての破片である。直線的に立ち上がり、わずかに外傾する。口縁端部は貼付により肥厚する。中～大形の深鉢片であると考えられる。

78は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部には立体的な貼付がなされている。体部上半は半裁竹管による波状の沈線文が施されている。地文は横位のLR縄文が全面に施文されている。文様の特徴から前期末頃に属する中～大形の深鉢片であると考えられる。

79は口縁部の破片である。わずかに外反し、口縁端部は端面を有する。頸部付近と思われる位置に沈線による文様が認められるが、摩滅が著しく判然としない。ただし、沈線の刻みは比較的深く、



第41図 積穴住居13~16間連遺物

綴の単沈線および円文がみられる。中形の深鉢片であると考えられる。

80は口縁部の破片である。直線的に直立する器形であると考えられる。外面には粘土紐積み上げ痕跡が消されずに残存する。中~小形の深鉢片であると考えられる。

81は底部の破片である。底部外面には網代痕が残存する。器形は不明であるが、中~大形の深鉢

片であると考えられる。

82は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は折り返しによって肥厚し、口縁全体は外反傾向である。文様は地文の上に2条1対の隆線が平行して縦位に付加されている。地文は横位のLR繩文で、肥厚する口縁部にまで及んでいる。器形および文様の特徴から前期末～中期初頭の深鉢であると考えられる。

83は口縁部の破片である。波状口縁である。口縁部以下は残存していないが、わずかに頸部の屈曲が認められる。器表面の摩滅著しく文様は不鮮明であるが、縦方向の隆線が微妙にみられる。器形および文様の特徴から前期末～中期初頭に属する中～大形の深鉢片であると考えられる。

竪穴住居20出土土器(第43図、写真図版51・52)

84～101は竪穴住居20より出土した繩文土器である。

84は体部下半から底部にかけての破片である。体部は外傾しながら立ち上がり、直線的である。内面にはコゲが多く量に付着しており、煮沸に用いられたものと推察される。底部には網代痕が認められる。中形の深鉢であると考えられる。

85は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は折り返しによりわずかに肥厚する。体



第42図 竪穴住居17関連遺物

部は直線的に立ち上がり、頸部の屈曲は認められない。肥厚する口縁部外面には刺突文が連続して施文されているが、地文等は不明である。中～大形の深鉢片であると考えられる。

86は口縁部から体部上半にかけての破片である。体部から口縁部にかけて直線的な器形であると考えられる。文様は粘土紐貼付文と沈線文で構成されており、口縁部に「U」字形の貼付文が1箇所みられる。体部の粘土紐貼付文は幅広で、逆「U」字形の意匠となっており、その上から円形の刺突が施されている。器形および文様の特徴から前期後葉に属する中～大形の深鉢片であると考えられる。

87は口縁部の破片である。外傾するものと推定され、外面には継位の隆線が刻みを伴いながら施されている。口縁部は折り返しにより肥厚し、この部分には繩文が認められる。前期末～中期初頭にかけての中～大形の深鉢片であると考えられる。

88は口縁部から体部上半にかけての破片である。器形はやや丸みを有しており、ボウル形を指向すると考えられる。文様は口縁部に水平方向隆線が付与され、体部には連続する刺突文が2列間隔を空けてみられる。中形の浅鉢片であると考えられる。

89は口縁部から体部上半にかけての破片である。頸部がわずかに屈曲し、体部は緩やかな曲線を描く。口縁部文様帶には横位のひょうたん形貼付が一箇所でみられ、下地には横位のLR繩文が施文されている。頸部には細い竹管文が連続で刺突されており、全周する可能性がある。体部にもいくつか同様の竹管文があるが、その構成は定かではない。中形の深鉢片であると考えられる。

90は口縁部から体部上半にかけての破片である。頸部に屈曲があり、口縁部は外方へ開く形態である。頸部および口縁部には隆線が刻みを持ちながら展開する。また、口縁部は細い平行沈線によつて鋸歯状文様が施されている。体部外面には結束のある継位繩文が施文されている。器形および文様の特徴から前期末頃に属する中形の深鉢であると考えられる。

91は口縁部の破片である。口縁部は折り返しによって肥厚し、口縁全体は外反傾向である。文様は地文の上に2条1対の隆線が平行して継位に付加されている。地文は横位のLR繩文で、肥厚する口縁部にまで及んでいる。器形および文様の特徴から前期末～中期初頭の深鉢であると考えられる。

92は体部下端から底部にかけて残存する。体部は外傾しながら立ち上がるが、やや外反傾向である。内外面とも摩滅が著しい。比較的小形の土器であると考えられる。

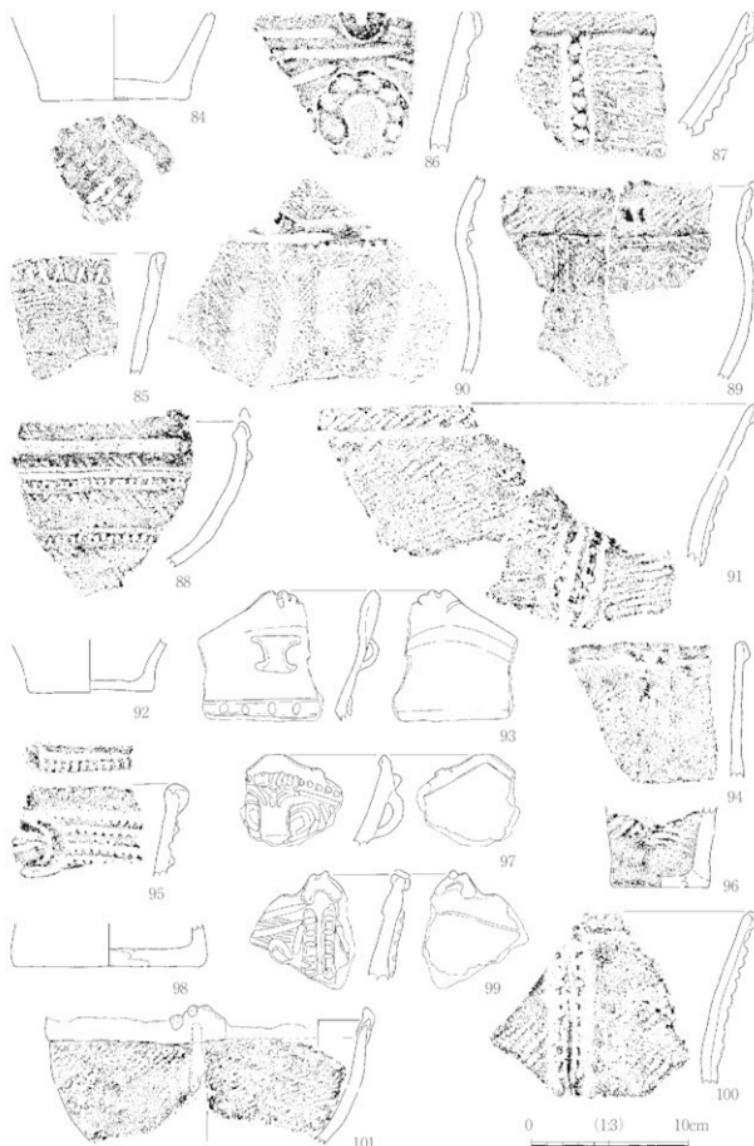
93は口縁部から頸部にかけての破片である。波状口縁の突出部に該当すると考えられる。口縁端部はやや肥厚し、外面に橋状突起が付加されている。頸部には扁平な隆帶が巡り、これには刻目が伴う。中形の深鉢であり、文様および形態的特徴から前期末～中期初頭のものであると推測される。

94は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は折り返しによって肥厚する。この肥厚部から2条の隆線が垂下するものとみられるが、大半が剥落している。体部外面の地文も摩滅によつて不明である。中形の深鉢である。

95は口縁部の破片である。水平口縁であると思われ、口縁端部には隆線が施されている。平行する沈線文に連続する刺突文がそれぞれ伴う。器形および文様の特徴から前期末～中期初頭の深鉢片であると考えられる。

96は体部下端から底部にかけての破片である。体部はほぼ直立するように立ち上がる。体部外面には繩文が施された形跡はあるが、不鮮明である。中形の深鉢片であると考えられる。

97は口縁部片である。波状口縁の突出部に該当すると考えられる。口縁端部内面には隆帶、口縁部外面には橋状突起が付加されている。文様は沈線で曲線が描かれ、口縁ラインに沿つて竹管による連続刺突文が認められる。外面には炭化物が多く付着している。中～小形の深鉢であり、文様および形態的特徴から前期末～中期初頭のものであると推測される。



第43図 桁穴住居20間連遺物

98は体部下端から底部にかけての破片である。体部はやや内傾気味に立ち上がる。中形の深鉢であると考えられる。

99は口縁部の破片である。波状口縁の突出部に該当すると考えられる。突出部には内外面とも「C」字形の貼り付けがなされ、口縁端部上面でこれらを結ぶ隆線が2条認められる。外面は地文の上に継方向2条の隆帶が刻目を伴い垂下し、他に沈線による区画文もみられる。中～大形の深鉢であるとみられ、文様および形態的特徴から前期末～中期初頭のものであると推測される。

100は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は長くやや外傾する形態である。口縁部は肥厚し、これより継位2条の平行隆線が垂下する。2条の隆線には直交する刻みが連続して認められる。器形および文様の特徴から前期末～中期初頭に属する深鉢であると考えられる。

101は口縁部から体部上半にかけての破片である。丸みを有する体部に折り返しの口縁部が連続する。外面は横位のLR繩文が全面に施されており、これは口縁部にも及ぶ。また、継位の隆線が剥落しているが、その痕跡が認められる。中形の浅鉢であると考えられ、器形および文様の特徴から前期末頃のものであると考えられる。

貯蔵穴・土坑出土土器(第44～46図、写真図版52～56)

102・103は貯蔵穴1より出土した繩文土器である。

102は口縁部の破片である。直線的に立ち上がり、わずかに外傾するものと思われる。口縁部外面には連続する刺突文が2列巡る。これら刺突文は下から押し上げるように施文されており、そのため立体的な形狀である。地文は編み目状の撚糸文であるとみられる。胎土には纖維が多量に混入している。文様の特徴から前中期葉に属する中～大形の深鉢であると考えられる。

103は口縁部の破片である。継横の沈線文が施されている。文様の特徴から前中期葉に属する中形の深鉢であると考えられる。

104～112は貯蔵穴2より出土した繩文土器である。

104は口縁部から体部上半にかけての破片である。外面には粘土紐貼付文によって文様が施されている。文様は継方向の波形と口縁部に円形のものが認められる。中～小形の深鉢片である。

105は口縁部から体部上半にかけての破片である。直線的な器形であるが、口縁部に向けてやや外傾するものと思われる。体部外面には横位LRの繩文が施文され、継位の粘土紐貼付文が押圧を伴いながら付加されている。中形の深鉢片であると考えられる。

106は体部細片である。外面には沈線による同心円文が認められる。器壁が薄いことから、かなり小形の土器であると考えられる。

107は口縁部の破片である。口縁部は貼付あるいは折り返しによって肥厚する文様帯を有する。この文様帯には斜位の短沈線による連続する文様が巡る。器表面は摩滅が著しく、その他の文様は不明である。文様の特徴から前中期葉に属する中形の深鉢であると考えられる。

108は口縁部の破片である。頸部は残存していないが屈曲するものとみられる。口縁部の文様帯は横方向の沈線文が、上から直線、波状、直線、波状、直線の順で交互に巡る。直線文内部には小さな刺突文が伴っており、波状の沈線にはこれが伴わない。また、口縁部には1箇所突起が付き、これより下には剥落しているが隆線が垂下するものと考えられる。器形および文様の特徴から前中期葉の深鉢であると考えられる。

109は体部細片である。外面にはやや太めの沈線による継位ジグザグ文が連続する。地文は継位の撚糸文である可能性が考えられる。文様の特徴から前期後葉の大木5式に属する深鉢である。

110は口縁部の破片である。外面には細い粘土紐貼付文が施されている。文様の特徴は前期後葉であり、かなり小形の土器であると考えられる。

111は口縁部の破片である。波状口縁であると考えられ、隆帶によって肥厚する。その他文様等は不明であるが、器形からみて前期末～中期の深鉢片であると考えられる。

112は体部中位から底部にかけて残存する。体部は直立するように立ち上がる。上半部で縄文が微かに認めら、縄文は縦位～斜位の RL であると思われる。中形の深鉢である。

113～117は貯蔵穴3より出土した縄文土器である。

113は口縁部から頸部にかけての破片である。口縁端部は端面を持ち、頸部がわずかに屈曲する。頸部外面には横方向の沈線文と竹管文の連続刺突が巡る。文様の特徴から前期末～中期初頭の中～小形の深鉢であると考えられる。

114は体部の細片である。外面には横位の LR 縄文が施され、沈線による曲線と直線が深く刻まれている。文様の特徴から前期中葉の大木3式に属する深鉢であると考えられる。

115は口縁部の破片である。外面には沈線文と竹管文が施されている。竹管文は連続しており、直径が小さいものである。胎土には纖維が混入しているとみられる。文様および胎土から前期中葉の小形の深鉢であると考えられる。

116は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部はわずかに外反する。口縁部に無文帶があり、体部には横位の LR 縄文が施されている。頸部に当たる部分では、極細の粘土紐貼付文が横走し、これには細かな刻みが伴う。器形および文様の特徴から前期中葉の大木3式に属する深鉢片であると考えられる。

117は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は波状となっており、貼付によって肥厚する。体部はわずかに丸みを持つ。器表面が摩滅しており文様が不鮮明であるが、口縁部直下に連続する刻み目が読み取れる。器形および文様の特徴から前期末頃の深鉢片であると考えられる。

118は土坑5より出土した縄文土器である。

118は口縁部の破片である。口縁端部は端面を持ち直線的な器形である。外面に細い沈線による文様が全面隙間無く認められる。

119～122は貯蔵穴6より出土した縄文土器である。

119は底部のみの破片である。体部は残存していない。中～大形の土器であると考えられる。

120は体部細片である。外面には鋸歯状の沈線文と竹管による円文が認められる。胎土には微量の纖維が混入する。文様の特徴から前期中葉の大木3式に属する深鉢であると考えられる。

121は口縁部の破片である。端部は丁寧な面取りがなされており、明瞭な端面を持つ。口縁部はわずかに外傾するが、頸部の屈曲はみられない。外面に横位の RL 縄文が施されしており、縦位の沈線文が1条認められる。胎土には微量の纖維が混入する。文様の特徴から前期中葉の大木3式に属する深鉢片であると考えられる。

122は底部のみの破片である。体部は直立しながら立ち上がる。内外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。比較的小形の深鉢である。

123・124は貯蔵穴10より出土した縄文土器である。

123は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は外傾し、頸部に刺突を伴う隆線が1条巡る。体部は縦位の单軸絡条体の地文が認められる。

124は体部の破片である。緩やかな曲線から球胴形の器形が想定できる。文様は縦位の結節である。

125・126は土坑9より出土した縄文土器である。

125は体部の破片である。外面には半裁竹管による沈線文がみられ、直線あるいは緩やかな曲線をなすものと鋸歯状のものとがみられる。文様の特徴から前期末の深鉢であると考えられる。

126は口縁部の細片である。口縁部は帯状に肥厚し、その外面には細い竹管による刺突文が施されている。形態および文様の特徴から前期末～中期初頭の土器であると考えられる。

127～130は土坑12より出土した縄文土器である。

127は口縁部から体部上半にかけての破片である。緩やかに外反し、端部は平坦である。外面には半裁竹管による多条の沈線が横走り、口縁部直に円形貼付文が2個縱に並ぶ。器形および文様の特徴から前期末～中期初頭の深鉢であると考えられる。

128は口縁部の破片である。端部は丸く収められ、外面には波形の粘土紐貼付文が2条巡る。文様の特徴から前期後葉の大木5式に属する土器であると考えられる。

129は口縁部の細片である。比較的大めの粘土紐貼付文が菱形をなし、これは突出部となつてゐると考えられる。文様の特徴から前期後葉の大木5式に属する深鉢片であると考えられる。

130は体部から底部にかけて残存するが、体部下半は欠失部分が多い。体部はわずかに外傾しながら直線的に立ち上がる。体部外面には縄文が施されているが、摩滅のため不鮮明である。接合しないが、同一個体であるとみられる破片の器表面から縦位から斜位の縄文である可能性が考えられる。底部外面には微かに網代痕が認められるが、ナデ消された残りである。比較的大形の深鉢である。

131は土坑16より出土した縄文土器である。

131は口縁部から体部上半にかけての破片である。頭部には緩やかな括れがみられ、口縁端部に1箇所環状の釣り手状突起が付加されている。外面には極細の粘土紐胎土文が刻みを伴いながら存在し、これは口縁部直下に2条、これらから「X」字形に垂下するものが派生する。微量の纖維の混入が認められる。器形および文様の特徴から前期中葉の大木3式に属する深鉢片であると考えられる。

132は土坑18より出土した縄文土器である。

132は体部細片である。粘土紐貼付文が認められ、渦巻きと波形を意匠としている。文様の特徴から前期後葉の土器であると考えられる。

付き縄文の地文のみである。

133は土坑22より出土した縄文土器である。133は口縁部の破片である。口縁部肥厚瀧があり、沈線文は水平および鋸歯状に巡る。

134～139は土坑34より出土した縄文土器である。

134は頭部から体部の破片である。頭部と考えられる部位には刺突を伴う隆線がみられる。体部は摩滅著しく不鮮明だが、横位のLR縄文が施文されている。

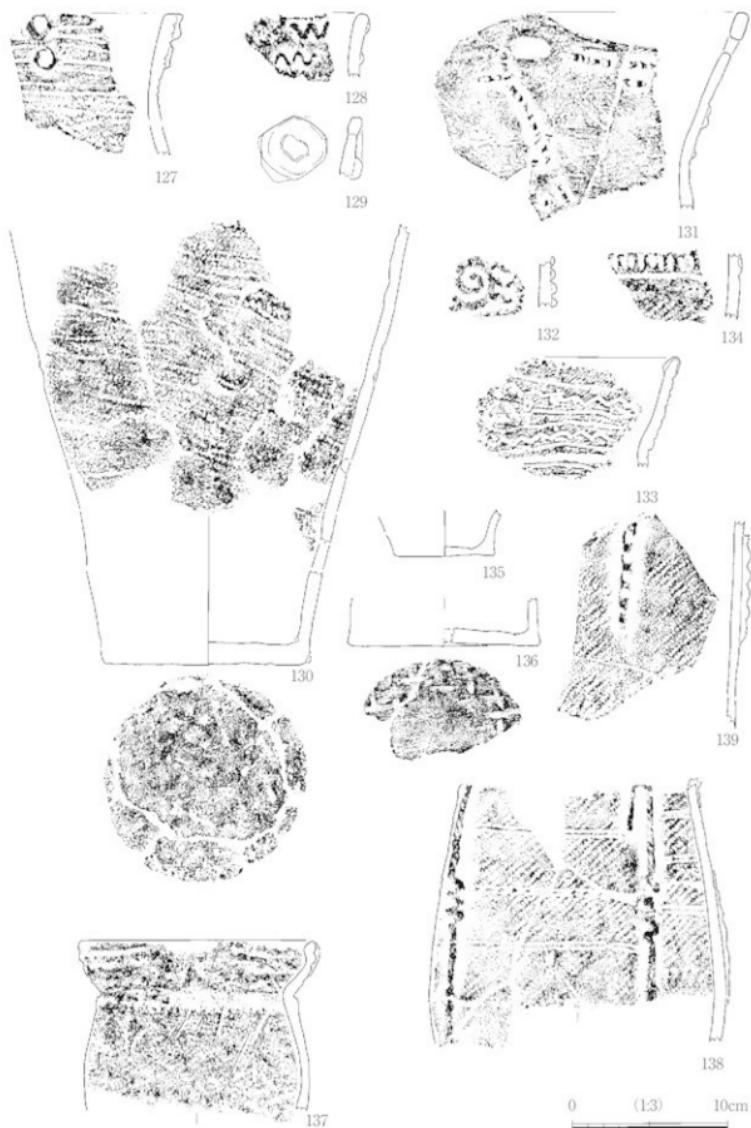
135は体部下端から底部にかけての破片である。体部は外傾気味に立ち上がる。器表面は荒れており文様等は確認できない。全体形状は不明であるが、小形の土器である。

136は体部下端から底部にかけての破片である。体部は直立するが、残存部ではやや内傾する傾向にある。内外面ともに丁寧なナデ調整がおこなわれているが、底部外面には網代痕が残存する。中形の土器であると考えられる。

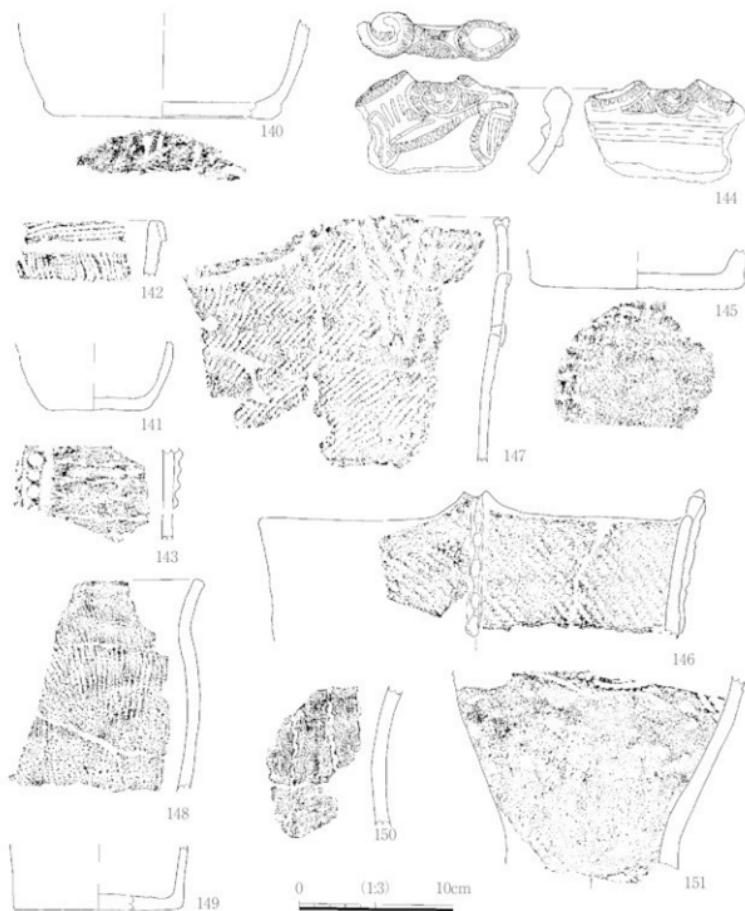
137は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は内彎し、頭部が屈曲する器形である。体部は肩部の張りは弱いが、体部中位にかけて緩やかな丸みを有する。器表面は摩滅が著しく、文様は不鮮明であるが、口縁部外面には3条の沈線、1箇所に縱方向の貼り付け文が微かに認められる。頭部には、不鮮明ながら細かな連続刺突文が巡るようである。中形の深鉢であり、文様および形態的特徴から前期末～中期初頭のものであると推測される。



第44図 貯蔵穴・土坑出土遺物



第45図 土坑12～39出土遺物



第46図 土坑・柱穴出土遺物

138は体部の破片である。体部は上半がやや内傾気味である点から上部で窄まる器形であると考えられ、残存する上端部は頭部に接続するものと推定される。外面には全面地文が施され、その上に垂下する隆線が2条配されている。隆線は沈線を伴わないが、これと直交する横方向に半裁竹管による沈線が3条認められ、中央の1条は中に刺突のような刻みが連続して充填されている。中形の深鉢であり、文様および形態的特徴から前期末～中期初頭のものであると推測される。

139は体部の破片である。直線的な器形であり、外面には地文の上に1条の縦位隆線が連続する

刺突を持ちながら垂下する。地文は横位のLR縄文が施文されている。胎土には雲母粒が特に顯著である。器形および文様の特徴から前期末～中期初頭の深鉢であると考えられる。

140～147は土坑36より出土した縄文土器である。

140は体部下端から底部にかけての破片である。体部は外傾気味に立ち上がり、やや丸みを有する。底部には網代痕が認められる。形態的特徴から球胴形の土器である可能性が考えられる。

141は体部下端から底部にかけての破片である。全体的に器表面の剥落が顯著で文様等は不明である。体部は外傾しながら立ち上がり、内底面丸みを有する。小形の土器であると考えられる。

142は口縁部の破片である。口縁端部は端面を持ち、口縁部は貼付あるいは折り返しによって肥厚する。肥厚部は横位、体部側は縦位の単軸絡条体によって施文されている。中～小形の土器であると考えられる。

143は体部の破片である。文様は円形刺突を有する縦位の隆線、横位のS字状連鎖沈文で構成されている。

144は口縁部のみの破片である。口縁端部は著しく肥厚し、2つの突起が付与されている。外面には刻目を持つ隆線が貼付けられ、これにより区画が創出されているようである。口縁端部には沈線による細やかな曲線が描かれている。口縁部の突起が2個1対の並列関係と捉えて図化したが、両者は意匠が不揃いであるため、より手の込んでいる方が1点だけの突出部であることも考えられる。また、内面には水平方向の隆帯が施されている。中～大形の深鉢であり、文様および形態的特徴から前期末～中期初頭のものであると推測される。

145は体部下端から底部にかけての破片である。体部下端は直立気味に立ち上がる。中～大形の深鉢であると考えられる。

146は口縁部から体部にかけての破片である。口縁部は水平であるが、突出部を有する。突出部は中央が窪む山形であり、この窪みより下方へ直線的な隆線が垂下する。隆線には棒状工具側面による刻目が伴う。外面にはほぼ全面縄文が施されており、口縁端部付近までみられる。体部から口縁部にかけてわずかに外反するが、器形全体としては直線的な立ち上がりである。中～大形の深鉢であり、文様および形態的特徴から前期末～中期初頭のものであると推測される。

147は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は肥厚し、体部は直線的に立ち上がる。外面には「Y」字状の隆帯が貼付され、この隆帯上面および体部全面に横位のLR縄文が施文されている。器形および文様の特徴から前期末～中期初頭の深鉢片であると考えられる。

柱穴・性格不明遺構出土土器(第46図、写真図版56・57)

148は柱穴1より出土した縄文土器である。口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部から頸部にかけて緩やかに外反する。体部外面には地文である縦位の単軸絡条体縄文が施文されている。長胴形の深鉢であると考えられる。

149は柱穴18より出土した縄文土器である。体部下端から底部にかけての破片である。体部はほぼ直立する。焼成がやや不良で、さらに外面とも摩滅が顯著である。

150は柱穴130より出土した縄文土器である。体部の破片である。外反傾向の器形に縦位の結節付き縄文の地文が施文されている。中～大形の深鉢片であると考えられる。

151は性格不明遺構1より出土した縄文土器体部下半の破片である。体部中位より下半にかけて窄まる器形である。外面には押し引き沈線の曲線文が認められる。器形および文様の特徴から前期末～中期初頭の球胴形深鉢であると考えられる。

遺物包含層1出土土器(第47~50図、写真図版57~63)

152~208はⅡ区に広がる遺物包含層1より出土した縄文土器である。152~155は層位確認のためのトレンチより出土したものである。158~165は表土であるⅠ層より出土した。167~206は遺物包含層の主体層であるⅢ層より出土した土器である。

152は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は肥厚しながら外反し、山形の突出部を有する。体部には半裁竹管沈線による直線文がみられ、口縁部直下には2条の直線が巡る。文様の意匠等は296と似ているが、色調が全く異なっている。器形および文様の特徴から前期前~中葉に属する中形の深鉢であると考えられる。

153は体部上半の破片である。外面には半裁竹管による沈線が直線文をなしながら認められる。文様の意匠等は296と似ているが、色調が全く異なっている。器形および文様の特徴から前期前~中葉に属する中形の深鉢であると考えられる。

154は口縁部から体部上半にかけての破片である。直線的であるが、本来の器形は口縁部に向いや外傾するものとみられる。体部外面には沈線文と竹管による円文が認められる。沈線は最上部が波形、その直下が2条の平行する沈線がそれぞれ巡る。この沈線に重なるように円文が付与されている。地文は横位RLの網文が施文されているようである。器形および文様の特徴から前期中葉の大本3式に属する中~大形の深鉢片であると考えられる。

155は体部下端から底部にかけての破片である。体部はわずかに外傾しながら立ち上がり、底部は平坦である。中~大形の深鉢片であると考えられる。

156は体部下端から底部にかけての破片である。体部は直立気味に立ち上がり、底部は平滑である。底部外面には網代痕が認められ、底径から考えて中形の深鉢であるとみられる。

157は口縁部から体部上半にかけての破片である。直線的に立ち上がる体部にわずかに外傾する口縁部が連続する。口縁端部は端面を持ち、内面の器表面は丁寧に調整されている。口縁部から体部にかけての外面には角棒状工具先端による刺突文が2列対に連続しており、横方向および縦方向に展開する。中~大形の深鉢片であると考えられる。

158は体部の破片である。直線的に立ち上がる体部の外面には地文の上から沈線による波状、直線が交互に巡る。中~大形の深鉢片であると考えられる。

159は口縁部の破片である。口縁部は直線的だが、外傾するとみられる。口縁部直下の外面には円形貼付文がみられ、その周囲は沈線文が埋める。沈線文は横方向に多段あり、それらの内区を斜方向の単沈線によって充填される。これら沈線の組み合わせが矢羽根状になっている。中~大形の深鉢片であると考えられる。

160は口縁部から体部下半にかけての破片である。体部はわずかに曲線を持ちながら立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。口縁部外面には1条の隆線が巡り、隆線の上から地文の原体である撚糸の圧痕が認められる。体部外面には全面木目状撚糸文がみられる。中形の深鉢である。

161は口縁部の細片である。口縁部は外傾あるいは外反するものとみられる。口縁部内面に粘土紐貼付文が施されている。文様の特徴から前期後葉の深鉢であると考えられる。

162は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は「く」の字形に屈曲し、体部は下へ向けて広がり口縁部は外傾する。口縁部外面には文様帶が画され、大きな波形を描く細い隆線が配され、屈曲部には同じく細い隆線が横方向に巡る。これら隆線には細かに連続する刺突文が伴い、この刺突文は小さな半円形であることから半裁竹管端部によるものであると推測される。体部には半円形貼付が1箇所あるが、その他は沈線による直線が縦、横、斜めに展開する。この沈線も断面に丸み

を有するため口縁部の刺突と同一の半裁竹管工具の外側面を使用したものと考えられる。器形および文様の特徴から前期末頃に即する中～大形の深鉢であると考えられる。

163は体部下半の破片である。上半は外方へ開き、下半は直線的に窄まっている。外面には縄文が端節の縄文が施文されている。器形から前期末頃に属する球胴形深鉢片であると考えられる。

164は口縁部の破片である。口縁端部は玉縁肥厚し、「く」の字形に屈曲する頭部を有する。外面は沈線文、連続する竹管文、押し引き沈線文がみられ、これらは同一工具によるものとみられる。器形および文様の特徴から前期末頃に属する深鉢であると考えられる。

165は口縁部から体部上半にかけての破片である。外面のみ粘土紐輪積み痕を留めたままの無文小形の深鉢である。

166は体部下半の破片である。わずかな丸みを持ちながら立ち上がる。外面には単軸絡条体の木目状撫糸文がみられる。中～大形の深鉢片であると考えられる。

167は体部から底部にかけて残存するミニチュア土器である。底部外面は凹み、体部はやや球胴形を呈する。外面は無文だが、指頭圧痕が顕著に認められる。

168は体部中位から底部にかけて残存する。体部はやや膨らみを持ち、中位で最大径となるものとみられる。体部外面は全面縱位の単軸絡条体の撫糸文が施文されている。中～大形の深鉢であると考えられる。

169は口縁部から体部中位にかけての破片である。口縁部は外傾し、頭部は「く」の字形に屈曲する。体部は比較的直線的である。肥厚する水平口縁外面にクレーター状に丸く窪む刺突文が連続して施文されている。体部には縱位の撫糸による文様が全面に施されている。器形および文様の特徴から前期末の大木6式に属する土器であると考えられ、器形は長胴形を呈する中形の深鉢である。

170は口縁部から体部下半にかけて残存する。直線的に開く器形であり、口縁部には肥厚帯を持つ。また、口縁部には環状と思われる突出部が付いた痕跡が認められ、勘定した半分が器体に残っている。口縁部肥厚帯には細い竹管文が無数に刺突されている。竹管文は肥厚帯上下端で横方向に連続し、その間を縱方向の連続刺突で繋いでいる。体部は横位LRの縄文が施文されている。器形および文様の特徴から前期末～中期初頭に属する中形の深鉢であると考えられる。

171は底部の破片である。底部外面には網代痕が部分的に残存する。底径からみて大形の深鉢であると考えられる。

172は口縁部の破片である。微かに外反するものとみられ、口縁部には肥厚帯が付加されている。文様は口縁部肥厚帯には連続する刺突文が上下2列あり、2箇所の縱方向貼付があり、これらにも連続する刺突文が続いている。肥厚帯直下には貼付円文が2個あり、これらは上方にある縱位貼付とそれぞれ対応している。この円文の周囲は沈線による直線文がみられる。文様の特徴から前期末～中期初頭に属する中形の深鉢であると考えられる。

173は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部には突起があり、上向きの環状である。直線的な立ち上がりであるが、多少外傾するものとみられる。細い粘土紐貼付文が外面にみられ、一部梯子状を構成している。器形および文様の特徴から前期後葉に属する深鉢であると考えられる。

174は口縁部の破片である。口縁端部は丁寧に丸く認められ、直線的であるが、わずかに外傾するものとみられる。外面には粘土紐貼付文が刻みを有して1条巡っている。また、沈線が弧状にみられ、これは粘土紐貼付文が上に乗っている状態である。胎土には極微量の纖維が混入しているようである。体部には横位RLの縄文が施されていると考えられる。器形および文様の特徴から前期中葉の深鉢であると考えられる。

175は口縁部の破片である。口縁端部は端面を持ち、外面には沈線文が認められる。沈線は鋸歯状を呈するものと弧状のものがみられる。外面には横位LRの縄文が施文されている。文様の特徴から前期中葉の深鉢であると考えられる。

176は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は直立し、端部は丸く収められている。口縁部は無文帯があり、体部には横位LRの縄文が施されている。中～大形の深鉢であると考えられる。

177は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部はわずかに外傾し、端部は端面を持つ。口縁部外面には沈線による文様がみられ、鋸歯状に巡る1条、並行に巡る2条の直線が主体を成す。これに竹管による円文等が、この横方向沈線の上下する位置に配されている。器形および文様の特徴から前期中葉大木3式に属する深鉢であると考えられる。

178は体部下半から底部にかけて残存する。体部はやや外傾しながら立ち上がる。体部外面には文様が認められない。底径からみて大形の深鉢であると考えられる。

179は口縁部の破片である。波状口縁の突出部であるとみられ、口縁部全体が肥厚する。外面には刺突による円文が山形となった突出部直下に位置しており、その他は沈線による文様が施されている。沈線は太めのものと細めのものの2種類あり、上部が前者で下部が後者である。器形および文様の特徴から前期末頃に属する大形の深鉢であると考えられる。

180は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部には肥厚帯を有し、肥厚帯上部には半裁竹管によるものとみられる連続刺突文が1列、この下部には弧状とこれに対応する微曲線からなる。体部には半裁竹管沈線が1条巡り、その直下に緩やかな波状のものが巡る。器形および文様の特徴から前期末頃に属する中～大形の深鉢であると考えられる。

181は口縁部の破片である。端部1箇所に突出部を有し、上部に刻みが施されている。口縁部文様帶は沈線文全面にみられ、一部渦巻きを指向する。器形および文様の特徴から前期末頃に属する中形の深鉢であると考えられる。

182は体部下端から底部にかけての破片である。体部は直立気味に立ち上がり、底部は平滑である。

183は口縁部から体部上半にかけての破片である。体部上位に最大径があり、頸部が屈曲しながら外傾する口縁部へと連続する。口縁部には肥厚帯があり、縦位の連続する短沈線が無数に認められる。口縁は波状を呈し、波状の突出部には刺突による円文がある。器形および文様の特徴から前期末頃に属する中形の深鉢であると考えられる。

184は口縁部の破片である。口縁端部は端面を有し、比較的直線的な形態である。口縁端部には粘土紐貼付文が波状に巡り、口縁部外面にも同様の文様が2条みられる。地文は横位LRの縄文であると考えられる。文様の特徴から前期後葉に属する中～小形の深鉢であると考えられる。

185は体部下端から底部にかけての破片である。体部はほぼ直立するように立ち上がり、底部は平滑である。底径からみて大形の深鉢であると見込まれる。

186は口縁部から体部下半にかけて残存する。体部は緩やかに膨らみ、頸部に括れを明瞭に持ち、口縁部はやや内脣気味に上方へ延びる。口縁部は波状口縁であり、波状頂部から口縁部のラインに平行するように沈線が4～5条刻まれている。器形および文様の特徴から前期末頃に属する中形の深鉢である。

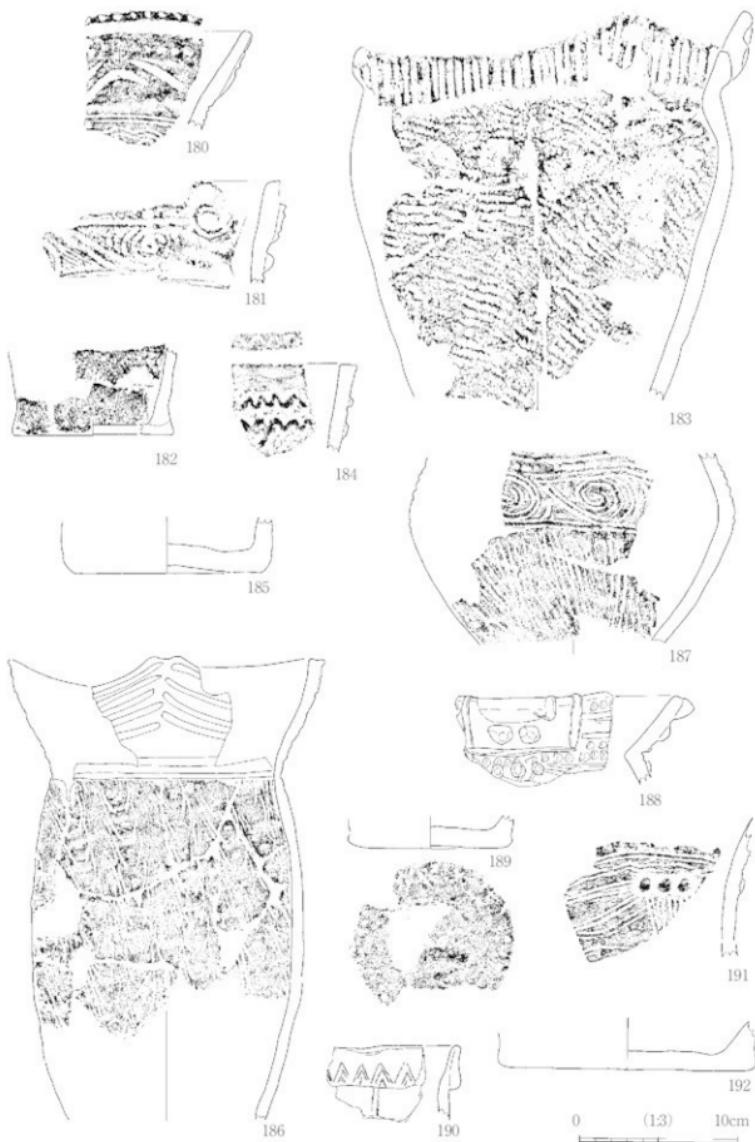
187は体部上半から下半の破片である。体部は球胴形を指向しており、最大径となる体部中位を境に文様の変化がみられる。上半は文様帶が巡り、ここでは沈線による渦巻き文、その上部には刺突列がある。これらの文様は半裁竹管によるものであると考えられ、同一工具であるとみられる。下半は縦位の単軸絡条体による地文が全面認められる。器形および文様の特徴から前期末頃に属す



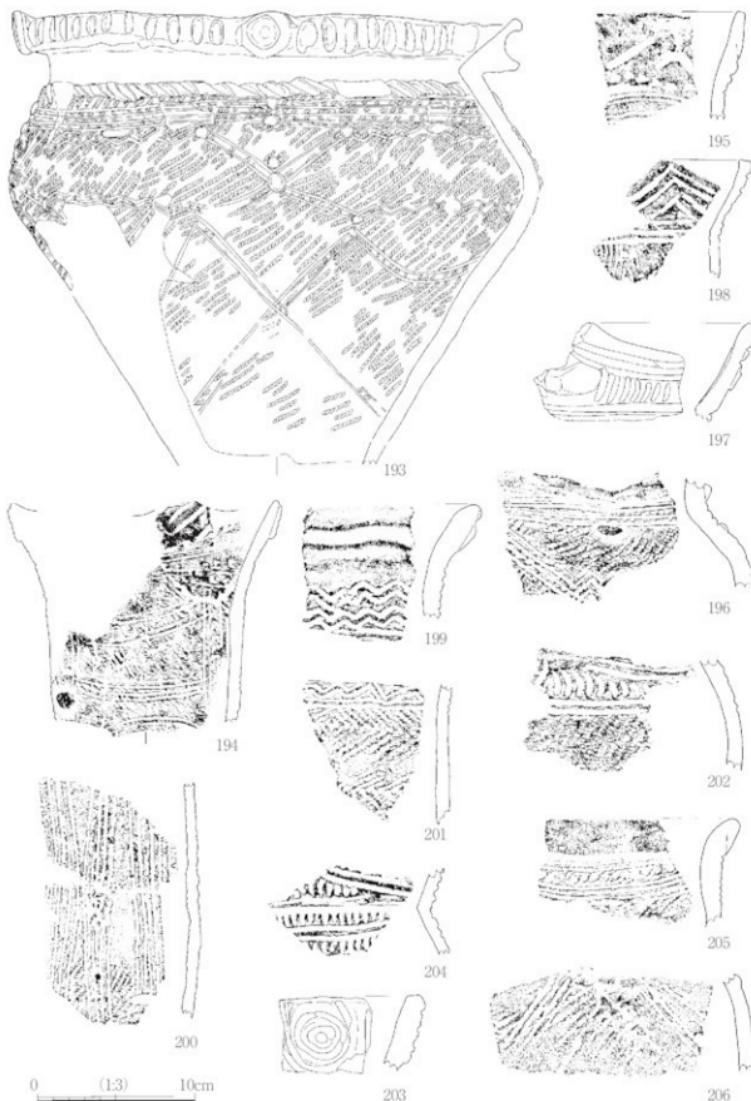
第47図 遺物包含層1出土遺物(1)



第48図 遺物包含層1出土遺物(2)



第49図 遺物包含層1出土遺物(3)



第50図 遺物包含層1出土遺物(4)

る中形の深鉢であると考えられる。

188は口縁部から体部上半にかけての破片である。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は外方へ開く。口縁部は隆線、沈線、半円形連続刺突によって加飾されており、これに瘤状の貼付が複数付加されている。口縁端部には横位の丸棒状突起が前面に貼り付けられている。器形は体部が膨らむ球胴形を指向するとみられる。器形および文様の特徴から前期末～中期初頭の深鉢であると考えられる。

189は体部下端から底部にかけての破片である。底部外面には微かに敷物の痕跡が認められる。底径からみて中形の深鉢であると考えられる。

190は口縁部の破片である。口縁部は折り返しによって肥厚し、この肥厚帯に非常に細く弱い沈線文が巡る。沈線文は鋸歯状を呈し、3条1対となっている。器形および文様の特徴から前期末～中期初頭の深鉢であると考えられる。

191は体部上半の破片である。外面には沈線による文様がみられ、瘤状の貼付文が3個付加されている。器形および文様の特徴から前期末頃に属する深鉢であると考えられる。

192は体部下端から底部にかけての破片である。外傾気味に立ち上がる体部に平滑な底部が連続する。底径からみて大形の深鉢であると考えられる。

193は底部以外のほとんどが残存する。口縁部は外傾し、頸部に明瞭な括れを有する。体部は上半に屈曲部を持ち、下半は直線的に外傾する球胴形である。口縁部は肥厚し、円文を中心継縦位の刻みが連続する。体部上端は隆帶が巡り、斜位の刻みが加えられている。体部には横位のLR繩文施文後に細い沈線が上半に4条巡り、中位には波状のものや斜交するものなどが展開する。これら沈線を統合するように貼付円文がアクセントとして付加されている。器形および文様の特徴から前期末の大木6式に属する深鉢であると考えられる。

194は口縁部から体部上半にかけての破片である。直立する体部に外傾する口縁部が緩やかに連続する。口縁部文様帯は肥厚し、これにやや太めの沈線が伴う。体部は横位RLの繩文施文後に細い沈線が縱横無尽に走る。さらに、1箇所貼付円文が付加されている。器形および文様の特徴から前期末の深鉢であると考えられる。

195は口縁部の破片である。口縁部は肥厚し、この肥厚帯には太めの沈線文、連続する半円形刺突文が施されている。両者は同一工具によるものと推察される。一方、頸部に当たる部分には細めの沈線文が横位に巡る。文様の特徴から前期末頃に属する深鉢であるとみられる。

196は口縁部から体部上半にかけての破片である。体部は膨らみ、口縁部はわずかに屈曲する球胴形を指向するとみられる。体部上端には3～4条の沈線が巡り、体部にはやはり4条からなる平行する沈線が認められる。これは部分的に鋸歯状を呈するとと思われ、その併走関係は厳密であることから櫛条の工具が用いられた可能性が高い。さらに、体部上端にある平行沈線の直下には1箇貼付が付加されているが、正面観は楕円形を呈する。器形および文様の特徴から前期末～中期初頭に属する中～大形の深鉢であると考えられる。

197は口縁部の破片である。波状口縁の突出部付近であると思われる。太めの沈線が口縁のラインに沿うように巡り、口縁部文様帯下端にも巡る。これらの間を継縦位の沈線が連続しながら繋ぐ。突出部下には横位の把手状貼付が立体的に付加される。文様の特徴から前期末頃の深鉢片であるとみられる。

198は口縁部の破片である。波状口縁の突出部が残存する。口縁部は内傾気味に上方へ延び、頸部に明瞭な屈曲が認められる。頸部屈曲部には2～3条の沈線が巡るとみられ、口縁部には口縁のラインに沿うように3条の沈線が山形をなしている。器形および文様の特徴から前期末～中期初頭

の深鉢であると考えられる。

199は口縁から頸部の破片である。口縁部には隆帯によって肥厚し、頸部には波形の沈線が多条に巡る。器形および文様の特徴から前期末～中期初頭に属する深鉢であると考えられる。

200は体部の破片である。直線的に立ち上がる器形であるとみられる。外面には横位LRの繩文を施文後、櫛状沈線が縦位に長く施されている。中形の深鉢片であると考えられる。

201は口縁部から体部上半にかけての破片である。接合せず図化していないが、口縁部片も出土している。口縁部文様帶には半裁竹管沈線文が波形と直線が交互に配置されて巡る。体部は地文のみで、横位の結束羽状繩文である。破片上部と下部で原体天地を逆転させて施文しているようである。文様の特徴から前期末～中期初頭の深鉢であると考えられる。

202は口縁部から体部上半にかけての破片である。緩やかに丸みを持つ。口縁部には文様帶があり、沈線による文様が展開する。体部は地文のみで、横位RLの繩文が施文されている。文様の特徴から前期末の深鉢であると考えられる。

203は口縁部の細片である。口縁部は肥厚しており、同心円状の沈線がこれを飾る。文様の特徴から前期末～中期初頭の深鉢であると考えられる。

204は口縁部から体部上半にかけての破片である。球胴形を指向するため「く」の字形に屈曲する頸部を持ち、外面は横位の沈線文が巡り、これらを短沈線が繋ぐように施されている。器形および文様の特徴から前期末頃に属する深鉢であると考えられる。

307は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は無文ながら、顯著に肥厚する。体部外面には横方向の半裁竹管沈線が上下に巡り、これらの間は同一工具による刺突文が連続する。器形および文様の特徴から前期末～中期初頭の深鉢であると考えられる。

206は体部の破片である。体部は微かに丸みを持つ形態である。横位のLR繩文施文後、細めの平行する沈線が斜位に認められる。文様の特徴から前期末～中期初頭の深鉢であると考えられる。

207は口縁部から体部上半にかけての破片である。4～5単位の波状口縁であり、波状頂部は大きく二又になる。口縁部は外反し、体部上半は窄まる形態である。口縁部は肥厚し、肥厚帯に太めの沈線が4条件走しながら巡る。体部には地文が前面認められ、縦位の綾繩文が線文されている。器形および文様の特徴から前期末頃に属する大形の深鉢であると考えられる。

208は口縁部から体部中位にかけての破片である。頸部には括れがあり、口縁部に肥厚帯を有する。肥厚帯にはクレーテー状の円形刺突文が連続する。体部外面は縦位の單軸絡条体撲糸文が施文されている。器形および文様の特徴から前期末頃に属する中形の深鉢であると考えられる。

遺物包含層2出土土器(第51～57図、写真図版63～72)

209～295はI区に広がる遺物包含層2より出土した繩文土器である。

209は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部はわずかに外傾するものとみられる。頸部には隆線が巡り、これには円形の刺突が連続して伴う。体部には横位LRの繩文が施文されている。器形および文様の特徴から前期末～中期初頭の深鉢であると考えられる。

210は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は外反気味に聞く。外面には粘土紐貼付文が横位のものが波状になり、2条1対で展開する曲線文がこれらに結合する。文様の特徴から前後葉の深鉢片であると考えられる。

211は体部の破片である。外面には粘土紐貼付文が同心円状に展開する。地文には横位および斜位RL繩文が施文されている。文様の特徴から前後葉の深鉢である。

212は口縁部の破片である。口縁部は直立するものとみられ、口縁部直下には2条の粘土紐貼付文が波状に巡る。下段の波状粘土紐には部分的に「V」字形のアクセントが加えられており、局部的にハート形を呈する。文様の特徴から前期後葉の深鉢であると考えられる。

213は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁端部には横向きの突起が認められ、側面觀は渦巻き形を呈する。外面には粘土紐貼付文が認められ、梯子状が変形したような文様構成である。また、口縁上端面にも波形粘土紐貼付文が1条巡る。文様の特徴から前期後葉の深鉢であると考えられる。

214は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は水平口縁であるが、突出部を有する。体部から口縁部まで横位のLR縄文が施文されている。器形の特徴から前期後葉の深鉢であると考えられる。

215は口縁部から体部下半にかけて残存する。「く」の字形に屈曲する頭部に丸みを有する体部からなる。口縁部には水平方向の押し引き沈線文が3条平行に巡る。体部外面には直線から渦巻きへと派生する押し引き沈線文が器表面全面を埋めている。器形および文様の特徴から前期末～中期初頭の球胴形深鉢であると考えられる。

216は口縁部から体部下半にかけて残存する。ほぼ直立する器形である。口縁直下に刺突を持つ隆帯が1条巡る。体部にはS字状連鎖沈文が全面展開する。胎土に極微量の纖維が認められる。器形および文様の特徴から前期中葉の深鉢であると考えられる。

217は体部下半の破片である。下半から下半に向け緩やかに窄まる器形である。外面には横位のLR縄文が施文されているが、下半部には認められない。器形および文様の特徴から前期後葉の深鉢片であると考えられる。

218は口縁部から体部上半にかけての破片である。水平口縁で小さな突出部を有する。口縁部外面には斜位の短沈線が連続する。体部外面には横位のLR縄文が施文されている。

219は口縁部の細片である。口縁部はわずかに肥厚する。外面には細く弱い沈線が山形に施されている。器形および文様の特徴から前期末～中期初頭の深鉢であると考えられる。

220は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部はわずかに外反する。口縁部には無文帶を有し、内面は丁寧なミガキ調整がみられる。外面には細かな刻みある極細の粘土紐貼付文が1条巡り、その直上には縦位の短沈線が連続する。器形および文様の特徴から前期中葉の深鉢片であると考えられる。

221は体部下端から底部にかけて残存する。底部外面は非常に丁寧なナデ調整がおこなわれており、平滑である。中～小形の土器であると考えられる。

222は口縁部の破片である。刺突を伴う環状突起を有し、口縁端部には斜格子の沈線が深く刻まれている。外面にも縦位の鋸歯状沈線が施されており、地文は横位のRL縄文である。器形および文様の特徴から前期後葉の深鉢であると考えられる。

223は口縁部から体部上半にかけての破片である。頭部から口縁部にかけてわずかに外傾する器形である。口縁部直下に細い隆帯が1条巡り、これに縦位の刻みが連続して施されている。それ以外の外面には縄文が全面施文されており、S字状連鎖沈文と呼ばれる文様が展開する。胎土には纖維の混入が認められるものの砂粒が細かく、焼成は非常に良好である。器形および文様の特徴から前期前～中葉に属する中形の深鉢であると考えられる。

224は体部下端から底部にかけての破片である。体部は外傾気味に立ち上がり、底端部は外方へわずかに突出する。中～小形の深鉢であると考えられる。

225は口縁部の破片である。口縁部はやや外傾するが、口縁端部はわずかに外方へ開く。口縁部は無文帶を有するが、頭部には意匠不明だが沈線が認められる。器形および文様の特徴から前期中葉の深鉢であると考えられる。

226は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は折り返しによる肥厚帯を有し、その上から体部にも連続して横位のLR繩文が施されている。器形等の特徴から前期末～中期初頭の深鉢であると考えられる。

227は口縁部の破片である。口縁端部は丸く收められ、これの外面に幅広の粘土紐貼付文が波形に配される。この貼付文から下方向に2条の細い粘土紐貼付文が直線で垂下する。地文は横位のLR繩文が施文されている。器形および文様の特徴から前期後葉の深鉢であると考えられる。

228は口縁部の破片である。口縁部は肥厚するが、体部にかけて直線的な器形である。体部には地文がみられないが、丸棒状工具による鋸歯状の沈線文が2条巡る。器形および文様の特徴から前期末～中期初頭の深鉢であると考えられる。

229は口縁部の破片である。口縁端部は丸く收められ、これの外面に幅広の粘土紐貼付文が波形に配される。これ以外の粘土紐貼付文は波形および梯子状の円形などで構成されている。地文は横位のLR繩文が施文されている。器形および文様の特徴から前期後葉の深鉢であると考えられる。

230は口縁部の破片である。口縁端部は外方へ突出する。体部外面には地文が施されているが、不鮮明である。中～小形の深鉢であると考えられる。

231は口縁部の破片である。口縁端部は欠損している。外面には粘土紐貼付文が斜格子をなしている。文様の特徴から前期後葉の深鉢片であると考えられる。

232は体部の破片である。外反する器形であり、外面には粘土紐貼付文が波形を基調とするよう付加されており、これから派生する2条の粘土紐貼付文が直線的に上方向へ延びる。器形および文様の特徴から前期後葉の深鉢片であると考えられる。

233は口縁部の細片である。口縁部に2個の突起が認められ、これらの上面觀は粘土紐によって渦巻き形を形成している。外面には横位のLR繩文が施文されている。器形および文様の特徴から前期後葉の深鉢片であると考えられる。

234は口縁部から体部下端にかけて残存する。体部中位で膨らみ、頭部で括れ、口縁部は外方へ開く器形である。口縁部は4単位の波状口縁で、端部内面は折り曲げられ丸く收められている。文様は地文である横位のLR繩文が体部下半全面に認められる。一方、器体上半部は口縁部文様帶、頭部文様帶、体部上半文様帶がそれぞれ横方向に展開する。口縁部文様帶では、波状口縁に即した単位区画があり、突出部頂点を中心に両側の凹部までを1区画として捉えることができる。この凹部には縦に短冊状の貼付文があり、これには縱方向3本の沈線、口縁端部に掛かる部分に2条の短沈線が施されている。口縁部に沿うように施されている2条の沈線文は、それぞれが単位区画末端の短冊状貼付文手前で結合し、同一沈線となる。単位区画中心部である突出部延長線下部には円形の刺突文とそれより一回り大きい円形貼付文がみられる。頭部文様帶は、上下境界をそれぞれ横方向の沈線によって区分されており、その文様内部を丸棒状工具による刺突文が連続して巡っている。刺突文は「D」字形を呈しており横方向から工具端部が押し当てられている。体部上半文様帶は横方向の平行沈線によって文様帶が区割されており、単位区画中心部である突出部延長線上には、平行沈線が渦巻きをなしている。これら沈線で区割された内区を縦方向の短沈線の連続によって充填されている。器形および文様の特徴から前期末～中期初頭の大木6式に属する土器であると考えられ、器形は球胴形を呈する中形の深鉢である。

235は口縁部の細片である。口縁部は端面を持ちほぼ水平だが、1箇所微かな高まりがある。外面には地文の上にわずかな粘土紐貼付文が残存する。地文は横位のLR繩文であるとみられる。文様の特徴から前期後葉の深鉢片であると考えられる。

236は体部下半から底部にかけての破片である。体部は外反気味に立ち上がる。内外面ともに器表面は丁寧な器面調整が施されている。中～小形の深鉢であると考えられる。

237は体部下半から底部にかけての破片である。体部は外傾気味に立ち上がる。内外面ともに器表面は丁寧な器面調整が施されている。中形の深鉢であると考えられる。

238は2破片に分かれる口縁部の破片である。大きな波状口縁となり、体部は直線的な形態であると思われる。波状頂部には装飾的な円孔があり、その他2箇所に補修孔が認められる。口縁部を中心に粘土紐貼付文が展開し、部分的に梯子状を呈する。器形および文様の特徴から前期後葉の深鉢であるとみられる。

239は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は外反し、端部は丸く取められる。口縁部は無文帯を有し、体部側には地文である横位のRL繩文が施されている。さらに、沈線による波状になると思われる文様が認められる。胎土には極微量の纖維の混入がみられる。器形および文様の特徴から前期中葉の大木3式に属する深鉢であると考えられる。

240は口縁部の破片である。平縁の水平口縁に幅広の波形粘土紐貼付文が貼付されている。体部外面には不鮮明ながら繩文が施されている。横位LRであると思われる。文様の特徴から前期後葉に属する中形の深鉢であると考えられる。

241は口縁部から体部上半にかけての破片である。体部から口縁部までは直線的な形態である。口縁端部には幅広の粘土紐貼付が波形に付けられる。横位のLR繩文に粘土紐貼付文による波状および曲線からなる文様が展開する。器形および文様の特徴から前期後葉に属する大形の深鉢であると考えられる。

242は体部下半から底部にかけての破片である。体部下端は直立気味に立ち上がる。底部外面には網代痕が明瞭に認められる。

243は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁端部は端面を持ち、わずかに外方に突出する。口縁部は体部から連続して緩やかに外反する。文様はすべて繩文が施されるのみである。口縁部のみ結節回転文が横位にみられるが、体部は横位のLR繩文である。胎土には、微量の纖維が混入している。特徴を総合すると前期中葉の深鉢であると考えられる。

244は体部の破片である。体部はわずかに外反する器形である。外面には粘土紐貼付文が直線と曲線で展開し、一部梯子状になる。地文は横位のLR繩文であり、粘土紐貼付文の下地となる。器形および文様の特徴から前期後葉に属する中形の深鉢であると考えられる。

245は口縁部から体部にかけて残存する。口縁部は外傾し、体部は球胴形を指向する。体部外面には付加条繩文のみが全面施されている。胎土には纖維を含む。器形および文様の特徴から前期中葉の深鉢であると考えられる。

246は体部の破片である。体部外面には粘土紐貼付文が波状にみられ、剥落しているが円形を指向している文様に接続するものとみられる。文様の特徴から前期後葉の深鉢であると考えられる。

247は頭部から体部にかけての破片である。外反する器形であり、外面には地文の上から竹管工具による円文が2個認められる。地文は横位のLR繩文である。器形および文様の特徴から前期中葉の深鉢片であると考えられる。

248は口縁部から体部上半にかけての破片である。直立する体部に口縁部がわずかに外傾する。

外傾する口縁部は無文帶となり、体部には大まかな鋸歯状の半裁竹管沈線文が2条平行する。軟質で器表面は摩滅著しい。器形および文様の特徴から前期中葉の深鉢片であると考えられる。

249は体部の破片である。外面には地文の上から竹管状工具による円文と水平方向の沈線文が結合する。地文は横位の単節繩文である。文様の特徴から前期中葉の深鉢片であると考えられる。

250は体部微細片である。外面には竹管状工具による円文とこれに結合する沈線文が認められる。文様の特徴から前期中葉の深鉢片であると考えられる。

251は口縁部から体部上半にかけての破片である。波状口縁の可能性があり、口縁端部は中心部が筋状に凹む。わずかな外反傾向があるが、形態による頭部は不明瞭である。外面は地文の上から細かで鋭利な刻みを有する粘土紐貼付文が直線と曲線を融合しながらみられる。地文は横位のLR繩文であるが、原体末端を処理している可能性も考えられる。胎土には少量の纖維を含む。器形および文様の特徴から前期中葉の深鉢片であると考えられる。

252は口縁部の破片である。口縁端部には連続する刻みが認められる。口縁部外面には無文帶があり、体部には地文が展開する。器形および文様の特徴から前期中葉の深鉢片であると考えられる。

253は口縁部の破片である。短くわずかに外反する。口縁端部は丸く収められ、外方へわずかに突出する。外面には刻みを伴う粘土紐貼付文が円弧状に認められる。器形および文様の特徴から前期中葉の深鉢片であると考えられる。

254は口縁部から体部上半にかけての破片である。大きく外反する形態であり、口縁端部には粘土紐貼付文が波状に巡る。頭部にもやはり波状の粘土紐貼付文が1条巡るが、所々「u」字形のアクセントが加えられている。地文は横位のLR繩文であると思われるが、節・条ともに乱れており、一様ではない。器形および文様の特徴から前期後葉の深鉢であると考えられる。

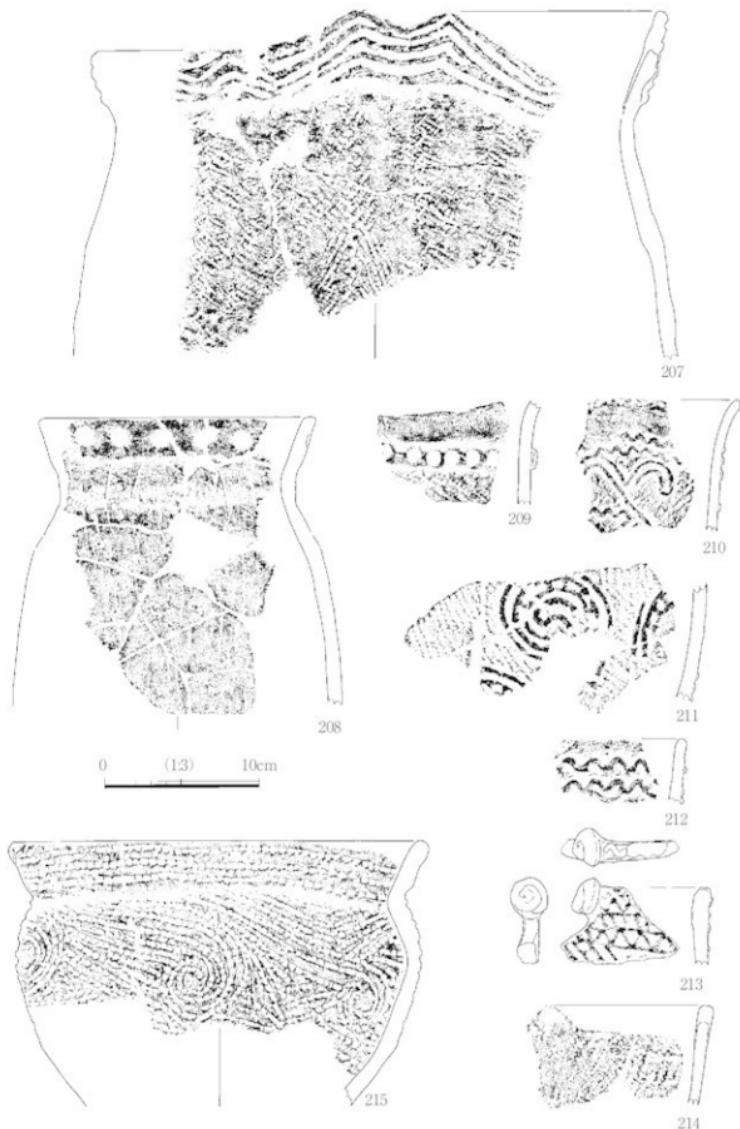
255は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部はわずかに外反するが、体部は直線的に立ち上がる。胎土に纖維を少量含む。器形および文様の特徴から前期中葉の深鉢であると考えられる。

256は口縁部から体部上半にかけての破片である。器壁は薄く、均一であり、口縁端部は丸く収められている。体部上半は緩やかな曲線を描く球胴を指向し、これに続く口縁部はやはり緩やかな曲線を描きながら外方へ開く。体部外面には端部に面を持つような工具先端で鋸歯状の沈線が上下2条巡る。さらに、頭部には斜位に刻みのような短い沈線が連続して巡っている。体部の沈線、頭部の沈線とともに幅が同じであることから同一工具が想定される。文様の特徴から前期中葉に属すると思われ、器種は中形で球胴形の深鉢である。

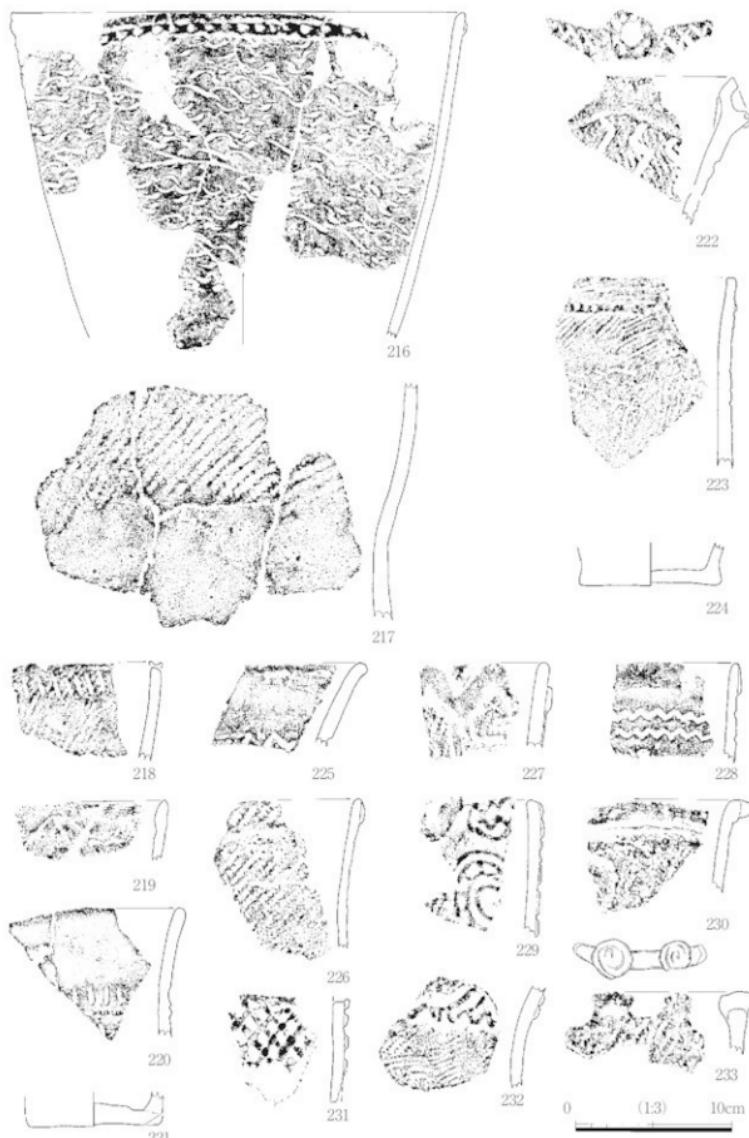
257は体部の破片である。梯子状によって構成される粘土紐貼付文が交差するように展開する。地文は横位のLR繩文である。文様の特徴から前期後葉の深鉢片であると考えられる。

258は口縁部から体部上半にかけて残存する。体部から口縁部へ連続して外傾する器形である。口縁部は水平口縁であるが、丸い棒状工具によって刻みが細かな単位でみられる。また、1箇所「u」字形の突起が付加されており、各頂部に1つずつ、竹管状工具による刺突が深く施されている。体部上端に外面には、連続して1列の刺突文が巡る。この刺突文は、先端部の丸い工具を土器下方側へ押し込むようにして施文されており、その列は直線的には並ばない。刺突文より下位には、横位LRの繩文が認められる。口縁部付近に1箇所補修孔とみられる焼成後の穿孔が認められる。形態・文様の特徴から前期後葉の深鉢であると考えられる。

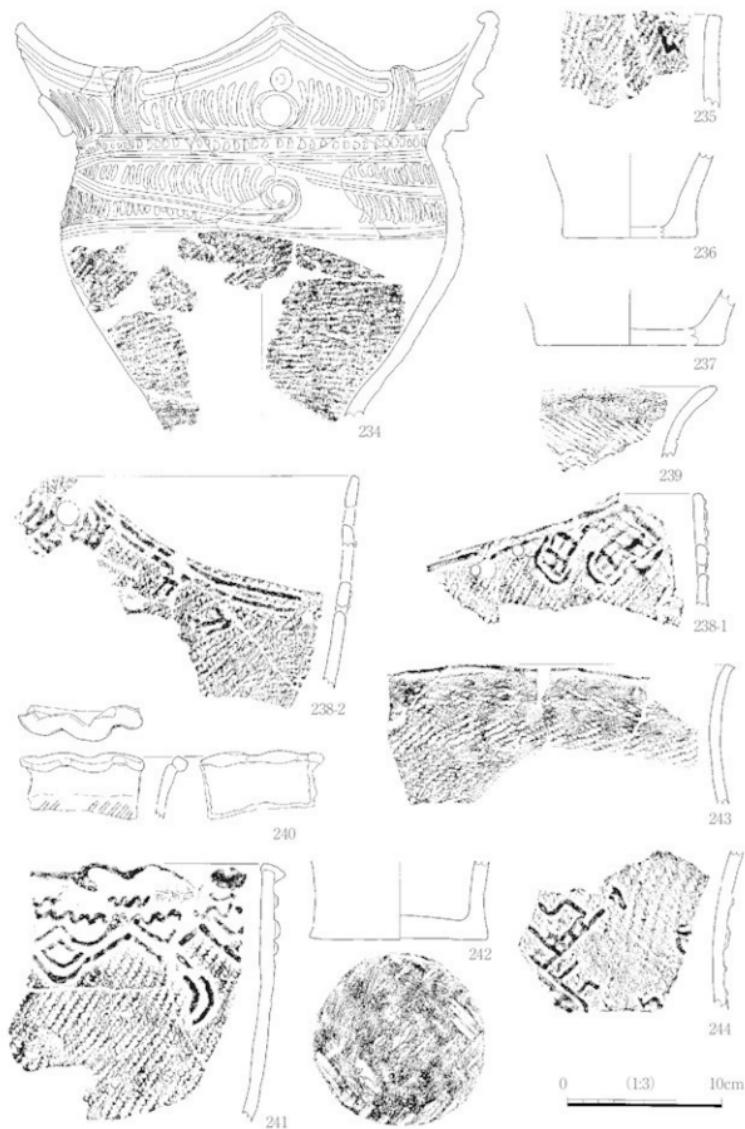
259は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は大きく外反し、端部は端面を有する。口縁部外面は無文帶が認められ、直下には地文および粘土紐貼付文がわずかにみられる。器形および文様の特徴から前期中葉の深鉢片であると考えられる。



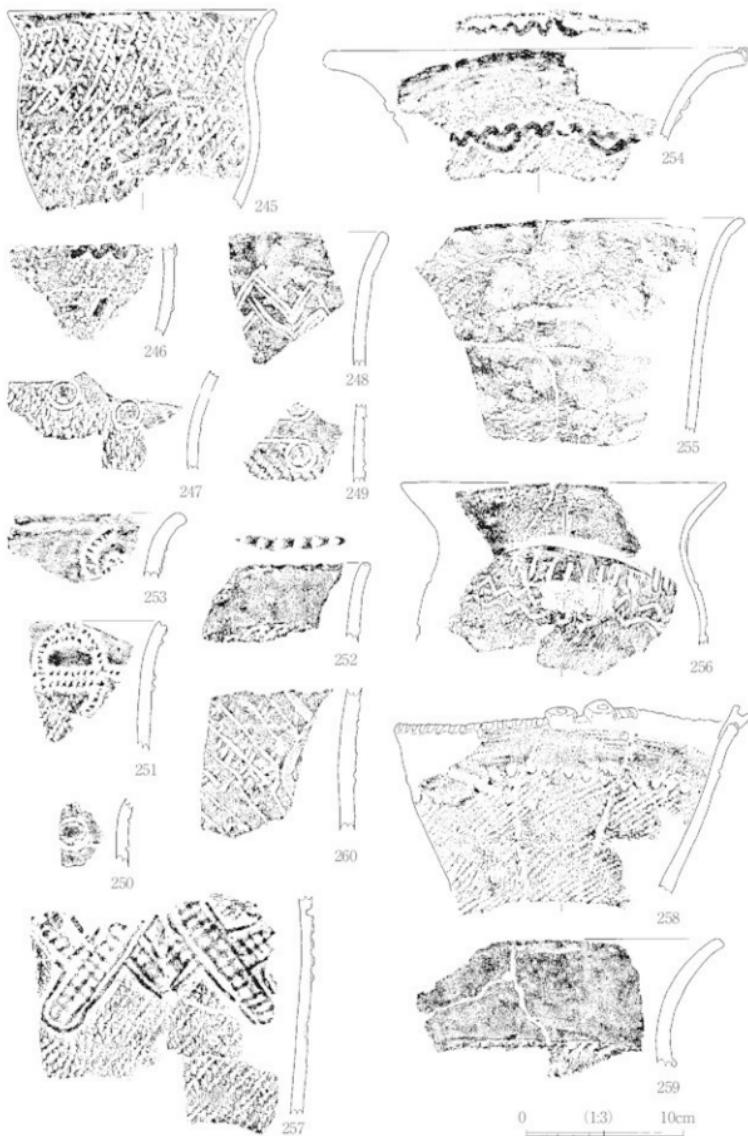
第51図 遺物包含層2出土遺物(1)



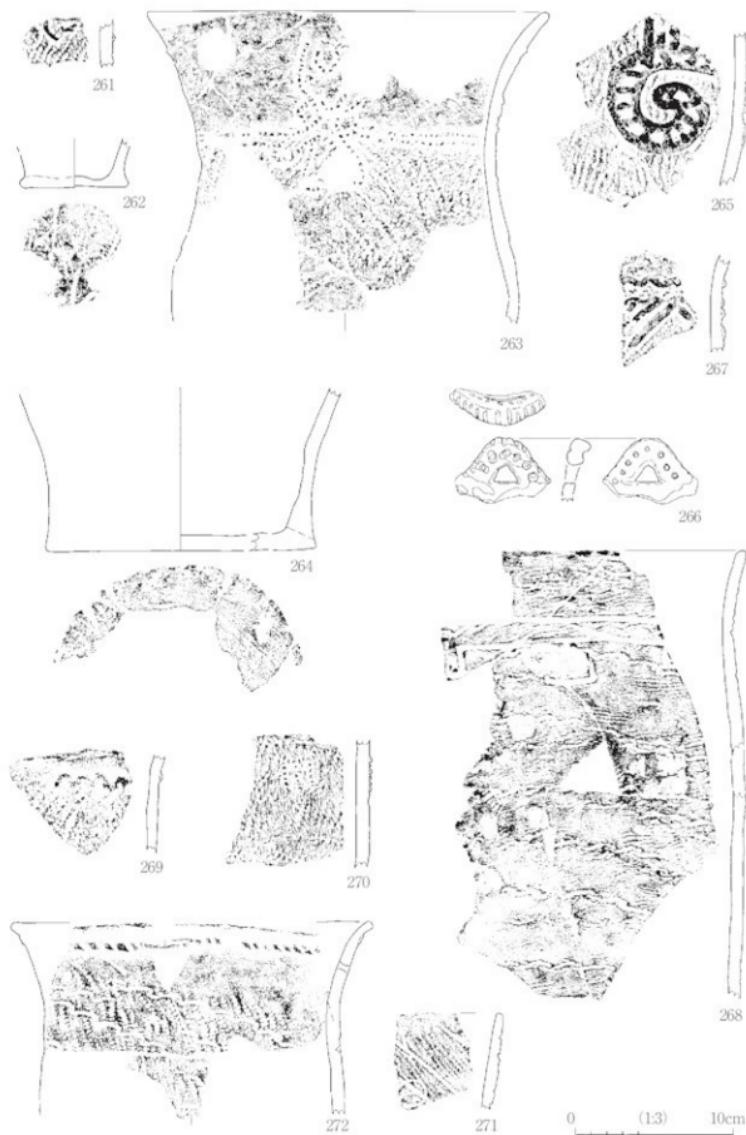
第52図 遺物包含層2出土遺物(2)



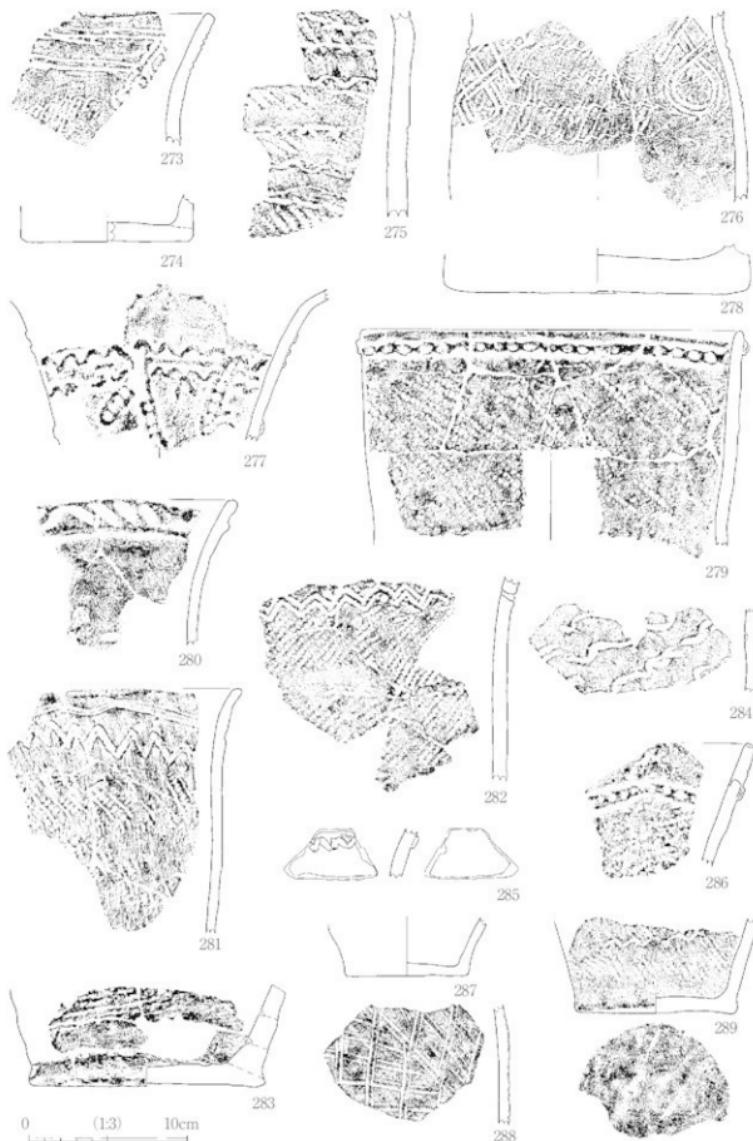
第53図 遺物包含層2出土遺物(3)



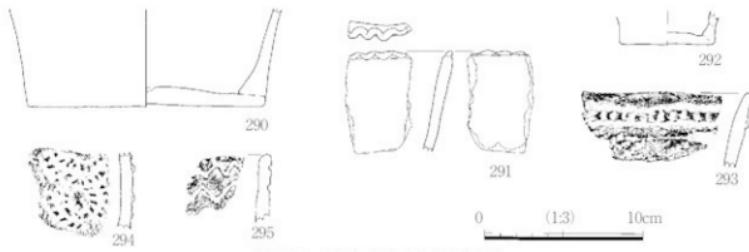
第54図 遺物包含層2出土遺物(4)



第55図 遺物包含層2出土遺物(5)



第56図 遺物包含層2出土遺物(6)



第57図 遺物包含層2出土遺物(7)

260は体部の破片である。地文は付加条の縄文であり、わずかに角棒状の工具による曲線の沈線文が認められる。文様の特徴から前期中葉の深鉢片であると考えられる。

261は体部の細片である。刺みを持たない細い粘土紐貼付文と竹管状工具による円文が共存する。地文は横位のLR縄文である。文様の特徴から前期中葉の深鉢片であると考えられるが、大木3式と4式の要素を併せ持つものである。

262は体部下端から底部にかけて残存する。体部下端は外傾気味に立ち上がり、底部側縁は外方へ突出する。内底面は丁寧なナデ調整によって体部と底部の離ぎ目が消されている。底部外面には木葉痕が認められるが、葉脈が非常に細かである。時期は不明だが、小形の深鉢である。

263は口縁部から体部中位にかけて残存する。器形は緩やかな曲線で頭部がわずかに窄まり、口縁は外傾しながら開き端部は丸く收められる。体部中位に最大径があるとみられるが、この体部の膨らみも極めて緩やかである。体部外面の文様は、頭部を中心幅3mm程度の極細粘土紐貼付文が展開しており、その上から刺目が細かな単位で鋭利に刻まれている。この貼付文の展開は4単位の区分がなされており、単位の中心となる意匠は交差あるいは連結・結合しながら幾何学的に表現されている。また、これら文様単位同士を2条の平行する横方向貼付文によって繋がれている。地文は体部全面にみられ、基本的には横位LRであると思われるが、部分的に付加条の縄文が残る。内面は丁寧なミガキ調整により滑らかであり、特に外傾する口縁部内面においてその調整は顕著である。これは口縁外面にもみられる調整であり、器表面が非常に密な状況であるため、成形後一定の乾燥を経た器面調整であることが推測される。さらに特筆すべきは、この丁寧に調整された器表面を観察すると細かな繊維がわずかに看取できる点である。器形および文様の特徴から前期中葉の大木3式に属する大形の深鉢であると考えられる。

264は体部下半から底部にかけての破片である。同一個体の部位は複数出土しているが、接合しないものが多い。体部は外傾から外反気味に立ち上がる。体部外面には縄文が施されしており、図化していない体部片を観察すると、横位のLRであると思われる。大形の深鉢であると考えられる。

265は体部の破片である。梯子状に組まれた粘土紐貼付文が渦巻きを構成する。文様の特徴から前期後葉の深鉢であると考えられる。

266は口縁部の突起部分である。正面觀は三角形のアーチ状を呈し、形状に沿って内外面ともに刺突文が連続する。刺突文は外面が大きめの径、内面が小さめの径となっている。上端部にはこれら沈線を施した丸棒状工具側面押圧による刻みが施されている。文様の特徴から前中期～中期初頭の土器であると考えられる。

267は体部の細片である。粘土紐貼付文が波状に2条巡る。これより下部には波状に結合、派生す

るよう直線的な粘土紐貼付文がみられる。地文は横位のLR縄文である可能性が高い。文様の特徴から前期後葉の深鉢片であると考えられる。

268は口縁部から体部下半にかけての破片である。ほぼ直立する体部にわずかに外傾する口縁部が連続する。頭部に該当する部分には直線の沈線が1条巡り、その直下にはクランクを有する直線の沈線が1条巡る。地文は横位のS字状連鎖沈文が全面に展開する。胎土に微量の纖維を含む。器形および文様の特徴から前期中葉の深鉢であると考えられる。ただし、地文・器形は大木2b式にみられる特徴、沈線文の意匠は大木3式にみられる特徴であり、両型式の特徴を併せ持つ点で重要である。

269は口縁部から体部上半にかけての破片である。粘土紐貼付文が波状に1条巡る。地文は横位のLR縄文である。文様の特徴から前期後葉の深鉢であると考えられる。

270は体部の破片である。鋭利な刻みを持つ極細の粘土紐貼付文が認められる。地文は横位の結節縄文であるとみられる。胎土には微量の纖維を含む。文様の特徴から前期中葉の深鉢であると考えられる。

271は口縁部の破片である。直立する器形であるとみられ、口縁端部は丸く収められている。外面には地文の上から斜位の直線沈線文が多条にみられ、竹管状工具による円文と一部重なっている。地文は横位のLR縄文である。胎土には極微量の纖維を含む。文様の特徴から前期中葉の深鉢であると考えられる。

272は口縁部から体部上半にかけての破片である。頭部から口縁部にかけて緩やかに外反する器形である。口縁部直下に粘土紐貼付文が1条巡り、これに斜位の刻みが連続して施されている。これより下位は繩文が全面施されおり、S字状連鎖沈文と呼ばれる文様が展開する。口縁部文様帯直下に1箇所焼成後の穿孔が認められ、補修孔として機能したものと考えられる。胎土には纖維の混入が認められるものの砂粒が細かく、焼成は非常に良好である。器形および文様の特徴から前期中葉に属する中形の深鉢であると考えられる。

273は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は微妙に外反し、口縁端部は端面を持つ。口縁部直下には半截竹管沈線文が2条平行に巡り、これに結合するよう斜位の文様が同一工具により展開する。破片下部にはS字状連鎖沈文が施されている。胎土には多量の纖維が含まれる。器形および文様の特徴から前期中葉の深鉢であると考えられる。276と同一個体であり、体部片である276の口縁部に該当する。

274は体部下端から底部にかけての破片である。体部は直立気味に立ち上がり、底部は平滑である。

275は体部の破片である。直線的な器形であるとみられる。外面には全面的にS字状連鎖沈文が展開する。器形および文様の特徴から前期中葉の深鉢片であると考えられる。

276は体部上半の破片である。残存部位の形態は緩やかな曲線を描き、上半でやや窄まる形態である。体部外面には半截竹管沈線文が交差しながら展開し、一定間隔を保持する5条の細い沈線が波状に巡る。繩文が施された可能性が考えられるが、器面調整によってほとんど確認できない。内面は丁寧なミガキ調整により全面滑らかである。また、胎土には細かな纖維が認められる。器形および文様の特徴から前期中葉の深鉢であると考えられる。273と同一個体であり、口縁部片である273の体部に該当する。

277は口縁部から体部上半にかけて残存する。残存部は概ね外反する形態であり、口縁端部は端面を有する。文様は口縁部から体部上端部分に粘土紐貼付文によって2条の波状が巡り、これら2条の間を1条の水平貼付文が埋めている。これら文様帯から下へ梯子状貼付文が結合しており、これらが体部上半の主たる文様となっているものと思われる。地文は、微かに横位LRの縄文が施されている。

ると考えられるが不鮮明である。器形および文様の特徴から前期後葉の大木5式に属する中形の深鉢であると考えられる。

278は底部のみの破片である。底径および厚みから大形の深鉢底部であると推測される。

279は口縁部から体部上半にかけての破片である。直立する口縁部に1条の隆帯が巡る。隆帯は丸みを持つ工具先端による押圧が連続する。体部は地文のみで、横位 RL の繩文が施文されている。胎土には纖維が顯著に含まれている。器形および文様の特徴から前期中葉大木2b式の深鉢であると考えられる。

280は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部はわずかに外反傾向である。口縁部は肥厚帯を有し、この肥厚帯に太めの短沈線が斜め方向に連続する。文様の特徴から前期末頃の深鉢片であるとみられる。

281は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部はやや雑な仕上げである。体部はほぼ直立するが、口縁部はわずかに外反する。外反する口縁部には角棒状工具による2条の水平方向の沈線が巡り、上の1条は直線、下の1条は鋸歯状を呈する。体部は地文のみで横位の付加条繩文が展開する。胎土には纖維が顯著に含まれている。表面的な見方をすると大木3の要素が強いが、実測図に現れない質感等は大木2bの要素が強い。

282は体部の破片である。ほぼ直立する器形である。破片上部には近接する2条1対の鋸歯状沈線文が巡る。地文は横位のLR繩文である。胎土には少量の纖維を含む。器形および文様の特徴から前期中葉の深鉢片であると考えられる。

283は体部下半から底部にかけての破片である。体部は外傾しながら立ち上がり、底部は中心部が接地面から浮く。外面には地文がみられ、横位のLR繩文であると考えられる。外面の粘土紐輪積み痕がナデ消されず明瞭に残存する。大形の深鉢であると考えられる。

284は体部の破片である。外面にはS字状連鎖沈文が全面展開する。胎土には纖維を含む。特徴から前中期中葉の深鉢片であると考えられる。

285は口縁部付近の破片であると考えられる。外傾もしくは外反すると思われる。波形の粘土紐貼付文が外面に認められる。文様の特徴から前中期後葉のものであると推測される。

286は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は山形に突出する部分がみられ、突出部頂部には2箇所刻みが伴う。外面には、連続する刺突を持つ1条の細い隆帯が巡る。地文は不鮮明だが横位のLR繩文であると思われる。器形および文様の特徴から前期末葉～中期初頭の小形深鉢片であると考えられる

287は体部下半から底部にかけての破片である。薄い器壁であり、体部の立ち上がりは外傾傾向である。

288は体部の破片である。外面には半截竹管による浅い沈線文が格子状あるいは斜格子状に錯綜する。胎土には纖維を少量含む。文様の特徴から前期中葉の深鉢であると考えられる。

289は体部下半から底部にかけての破片である。体部は外傾しながら立ち上がる。外面には繩文が施されており、横位の綾繩文である。文様の特徴から前期末～中期前葉の中形深鉢であると思われる。

290は体部下端から底部にかけての破片である。体部はわずかに外傾しながら立ち上がる。中～大形の深鉢であると考えられる。

291は口縁部の細片である。傾きは不明であるが、残存する器壁は直線的であるため外反しない器形であるとみられる。水平な口縁端部には端面を持ち、細い粘土紐貼付文が波形に付加されている。文様の特徴から前期後葉に属する中～小形の深鉢であると考えられる。

292は体部下端から底部にかけての破片である。体部はほぼ垂直に立ち上がるが、残存部上方では開き気味となる。器壁は薄く、底径も小さいため小形の深鉢であると考えられる。

293は口縁部の破片である。口縁端部は端面を持ち、直線的な器形である。口縁部直下の外面には1条の隆帯がみられ、隆帯には半裁竹管じょうの工具によって同一方向の刺突が連続する。胎土には少量の繊維が混入している。器形および文様の特徴から前期中葉の深鉢片であると考えられる。

294は体部の細片である。外面には地文を下地にして粘土紐貼付文が曲線的に展開する。この粘土紐貼付文には細かく銳利な刻みが伴う。文様の特徴から前期中葉の深鉢であると考えられる。

295は口縁部の細片である。端部は端面を持つ。外面には2条の鋸歯状沈線文が巡り、欠損部にもう1条存在する可能性がある。器形および文様の特徴から前期中葉の深鉢片であると考えられる。

堀1・遺構外出土土器(第58~60図、写真図版72~75)

296~303は堀1より出土した縄文土器である。

296~303はいずれも口縁部が残存する。いずれも厚さ等は異なるが、口縁部に肥厚帯を有する。

298は加飾された橋状の突起が認められる。299は球胴形を指向する器形であると考えられる。300は多条の沈線文が波状に巡る。

304~311は遺構外出土の縄文土器である。

304・307・310・318・315・319・326・327・329は前期末~中期初頭にかけての土器である。307はボウル形の浅鉢である可能性が考えられる。318~319は球胴形の土器である。327は外面には細い半裁竹管による沈線文が施され、斜位の直線あるいは弧状をなす部分がみられるが、1つの文様帯を構成しているようである。329は口縁部には肥厚帯を持ち、これの直下より沈線による直線文、波形文が2条ずつ交互に巡る。

305・306・308・309・312は沈線文が施された前期中葉の深鉢片である。ただし、312は鋸歯状の半裁竹管沈線文が巡り、刻みを伴わない粘土紐貼付文が共存する。これは大木3式の沈線文と大木4式の粘土紐貼付文との共存で、両型式を繋ぐ資料であると考えられる。

313・314・316・323・324・328・330・331は前期後葉の土器であると考えられる。

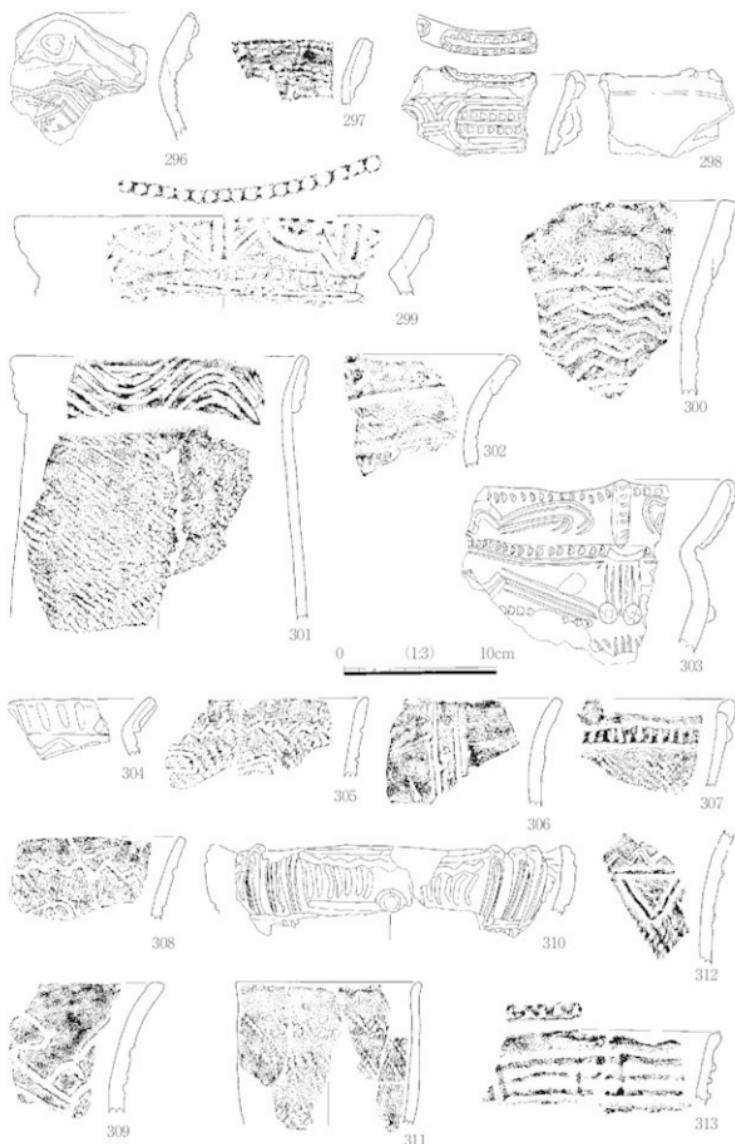
328は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は外反気味で、体部はほぼ直立するものとみられる。口縁端部の一部には連続する刻みを有する。口縁部には無文帯があり、体部には粘土紐貼付文による文様が認められ、これは曲線主体で構成されている。内面は丁寧な調整により器表面が滑らかである。器形および文様の特徴から前期後葉の大木4式に属する中~大型の深鉢片であると考えられる。331は波状口縁で、体部は緩やかな曲線を描く。口縁部には環状突起が上を向いて付加されており、上面には体部と共通の地文が認められる。この突起直下および口縁部のラインに沿うように粘土紐貼付文が施され、これは梯子状を呈しながら巡っている。体部外面の地文は、横位のLR縄文が全面施文されている。

323は地文のみで時期不明だが、単軸絡条体の撚糸文をそれぞれ交差させて施文している。

出土土器の胎土・色調

出土した土器の実測図や写真で表現できない観察所見をまとめて報告する。掲載した縄文土器は縄文時代前期中葉から中期初頭までのものであることは先に述べたとおりである。これらを肉眼観察した結果、いくつかの特徴および傾向を把握した。

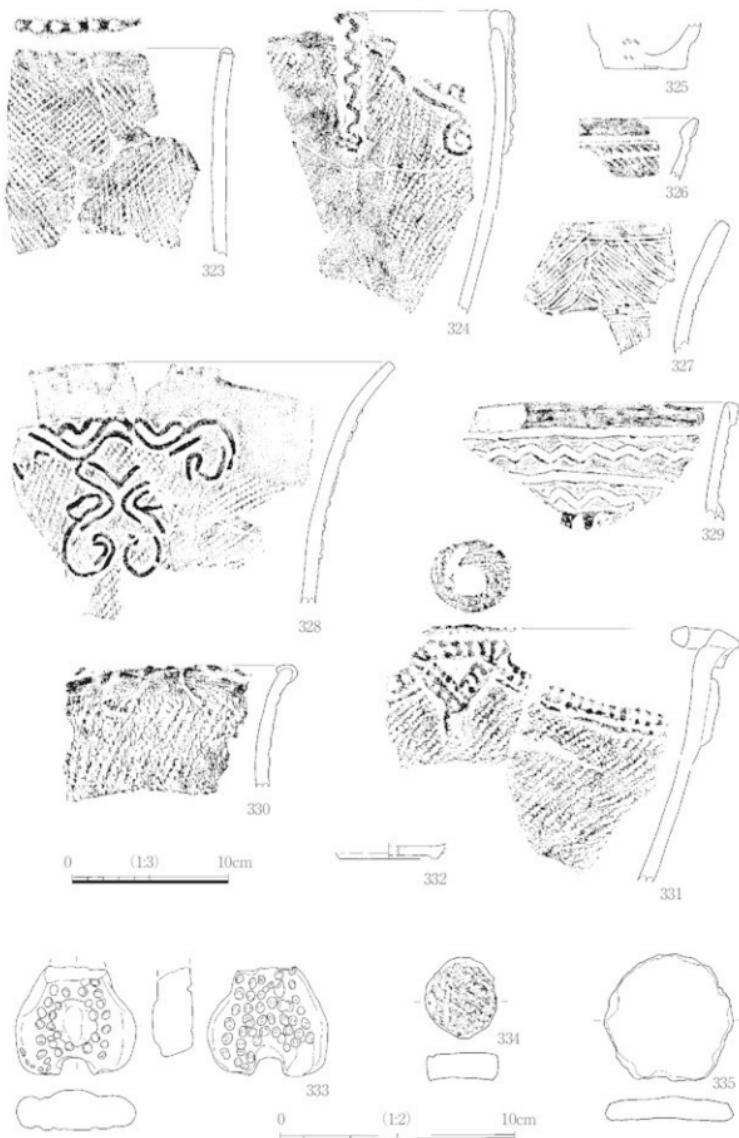
第一に、土器の胎土についてである。通常、土器胎土には様々な鉱物あるいはその他混入物が認め



第58図 遺構外出土遺物(1)



第59図 遺構外出土遺物(2)



第60図 遺構外出土遺物(3)・陶器・土製品

られるが、今回出土した土器では、混和剤としての繊維の有無が挙げられる。峯岸遺跡では前期中葉のものに限って繊維の混入が認められるが、この時期のもの全点に認められるものではない。傾向としては大木2b式に該当する土器には、かなりの高確率で繊維の混入が認められ、その量も多い傾向にある。一方、大木3式に該当する土器については繊維の混入が認められるものと認められないものが半々である。また、その量も大木2b式土器に比して少ない傾向である。鉱物については、石英・角閃石・長石・雲母・クサレ礫(赤色風化皮殻を有する軟質破碎礫)などの代表的な鉱物に注意した。石英は出土した全時期の土器に共通して含まれるが、特に大木3～5式に該当する土器胎土に顕著にみられる。角閃石も全時期の土器に共通して認められるが、大木3～5式に該当する土器胎土に含まれるものは粒径が大きく非常に目立ち、大木6式以降のものは粒径が小さくまばらである。長石も全時期の土器に共通して認められるが、大木6式以降のものは粒径が大きい傾向である。雲母は偏在性が認められ、大木4式以前の土器胎土にはほとんど認められない。一方、大木5式以降の土器胎土に含まれるもののがわずかに存在する。クサレ礫も大木4式以前の土器胎土にはほとんど認められないが、大木5式以降の土器胎土には頻出する傾向にある。

第二に、土器の色調についてである。これも大まかな傾向を提示すると、前期中葉の土器のうち大木2b式に該当する土器の色調は明るい発色のものから暗い発色のものまで様々である。しかし、大木3式に該当する土器の色調は明らかに暗い色調のものが多い傾向である。特に黒褐色を呈するものが多くみられる。前期後葉の土器は全体的に黒褐色・褐色・褐灰色のものが多く、特に軟質焼成のものは灰色が強い傾向である。前期末以降の土器は明るい色調のものが大半を占めており、橙色に発色しているものが際立っている。また、色調に呼応するかのように焼成の度合いも良好であるものが多いようである。

(2) 陶 器

志野焼椀(第60図 写真図版76)

332は堀1埋土上層より出土した志野焼の陶器椀片である。堀の埋没年代を考える上で貴重な遺物である。体部下端から底部にかけての破片であり、陶質の素地に全面施釉されている。外面の色調は乳白色でやや灰色掛かる。内面見込みには図文の一部と思われる色調が異なる部分があるため何らかの図文が展開するのかもしれない。全体の器形は不明であるが、茶器であると考えられる。

(3) 土 製 品

土製品(第60図、写真図版76)

土製品は土偶1点、円盤状土製品2点である。

333は上半身欠損の土偶である。腹部に円形の膨らみが表現されており、へそあるいは腹部に該当するものとみられる。表裏面とも細い竹管状工具による刺突が無数に施されているが、側面は無文である。脚部は丸みを持つ股下が表現されている。欠損しているが、破面の範囲を考えると、足首より下部も突出部として表現されていたようである。

334・335は土器片を再利用したと考えられる円盤状土製品である。それぞれ破断面は顕著に研磨痕跡が認められないが、一部に研磨した痕跡が認められることから破片となった土器片を何らかの用途で再利用したものと考えられる。334は曲面がみられることや器表面に縄文がみられることから体部の破片を再利用したもので、一方335は底部を再利用したものであるとみられる。

(3) 石 器

石鎚(第61～66図、写真図版)

336～467は石鎚である。寸法はそれぞれ異なるが、形態は無茎のものが大半を占める。石材としては頁岩のものが最も多く、その他の石材のものはごく少量である。出土土器からみていずれも縄文時代前期～中期初頭に帰属するものと考えられる。確実に有茎のものは456の1点があるのみで、その他は無茎の石鎚である。また、左右下端が突出する双脚のものと突出しない無脚のものが混在するが、前者の方がやや数的優勢である。

340は先端部が欠損しているが、やや不自然に窄まる形態である。このことから石鎚から石錐へと転用された可能性も考えられる。

344・359・387は厚みがあり、基部等が不定形であるため石鎚以外の刺突具である可能性も考えられる。

石匙(第66・67図、写真図版81・82)

470～485は石匙であると考えられる。基部あるいは刃部の大半が欠損しているものも存在する。材としては頁岩のものが最も多く、その他の石材のものはごく少量である。出土土器からみていずれも縄文時代前期～中期初頭に帰属するものと考えられる。形態は縦長形態、横長形態の2大別に分けることができ、数的には前者が優勢である。また、基部を垂直軸にして見た場合、刃部が斜軸方向であるものもみられる。また、474のように基部を有し、縦長の匙状に刃部が付けられているものも存在する。

後述する削搔器類と刺突具類の一部と判断に困る形態のものも存在するが、基部の有無あるいは基部調整や形状にわずかな違いが認められる。すなわち、尖頭器等の刺突具は石匙のそれよりも細かな調整が加えられているものとみられる。

その他の削片石器(第68～70図、写真図版82・84)

石鎚および石匙以外の削片石器は、いわゆる削搔器類が大半を占めるが、刺突具類や石箠等もわずかに認められる。削搔器は、その多くが不定形であるが、これらには刃部調整が認められる。

487は堅穴住居13より出土した大型の尖頭器である。全面に細かな調整が加えられており、刃部先端は銳利である。

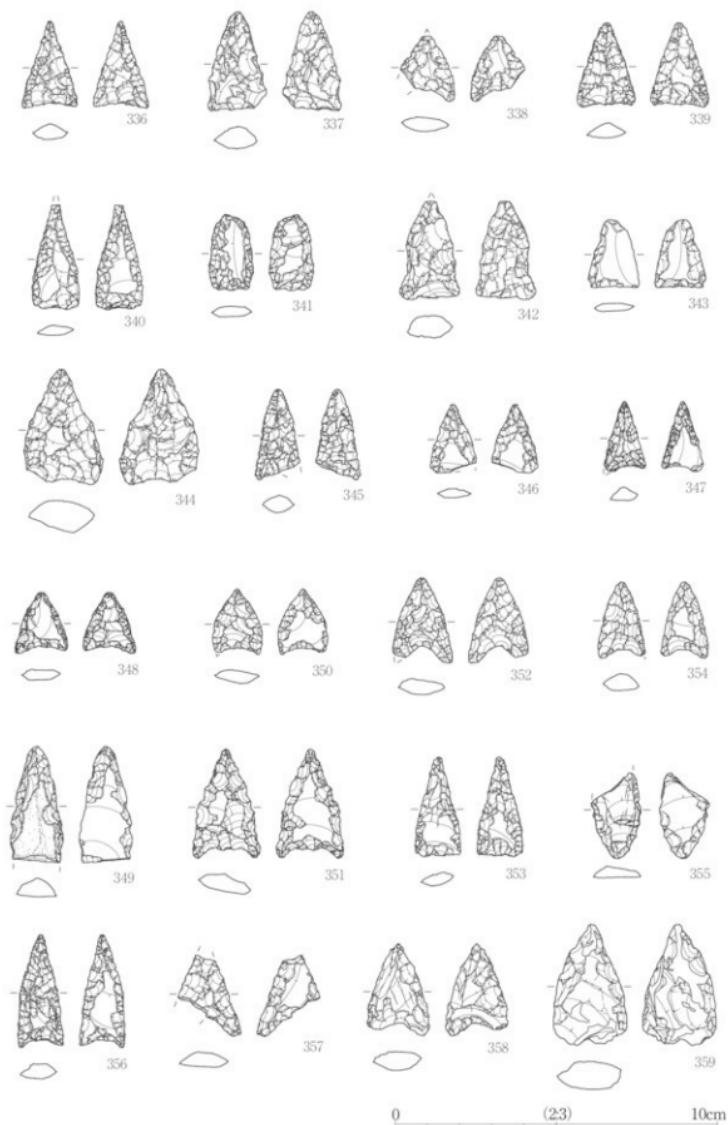
500・501は石箠であると考えられるが、500は刃部先端の調整が甘く、削搔器である可能性も考えられる。

石斧(第71図、写真図版85)

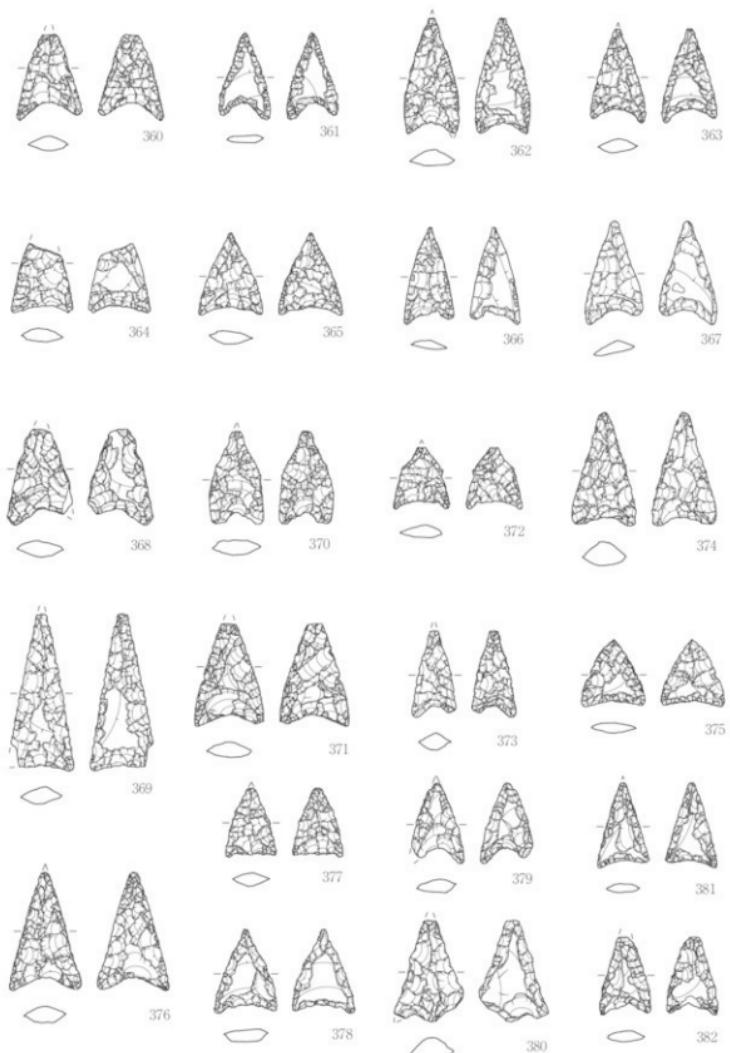
石斧は全部で10点(524～533)出土したが、524のみが打製石斧あるいは石斧未成品であると考えられ、残り9点はすべて磨製石斧である。

礫石器(第72～79図、写真図版86～90)

敲磨器を中心とする礫石器は大半が円礫の磨石である。一側面のみを顕著に使用した特殊磨石や堅科類の殻割りに使用されたと考えられる敲石および凹石は極端に少ない携行である。

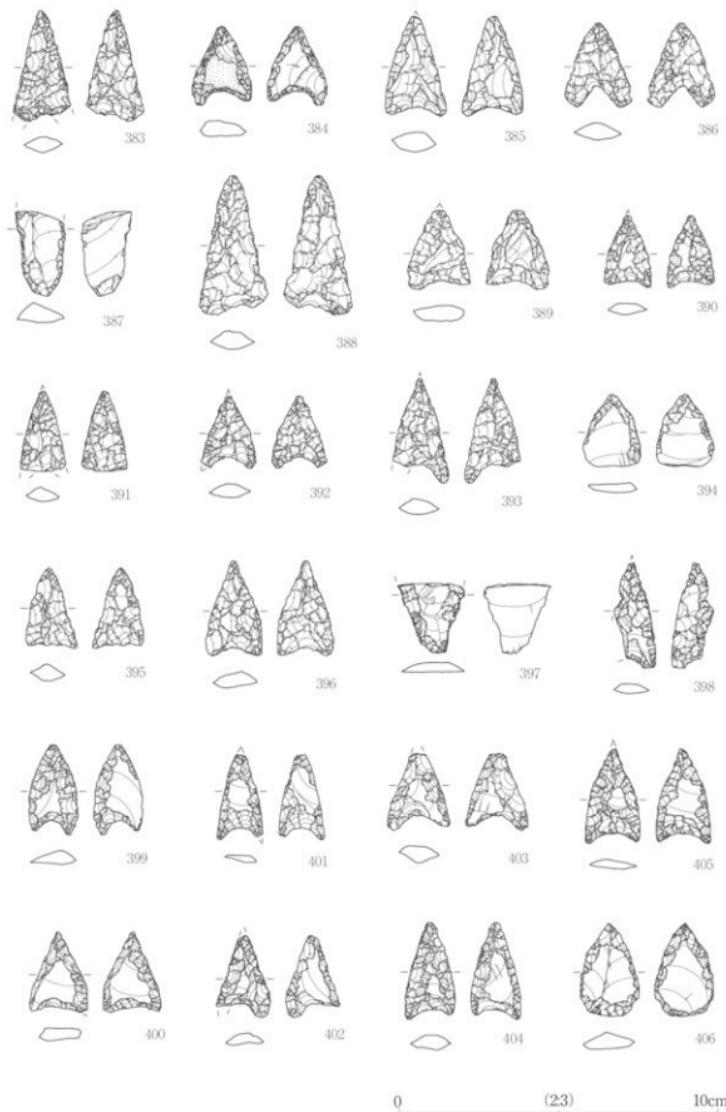


第61図 剥片石器(1)

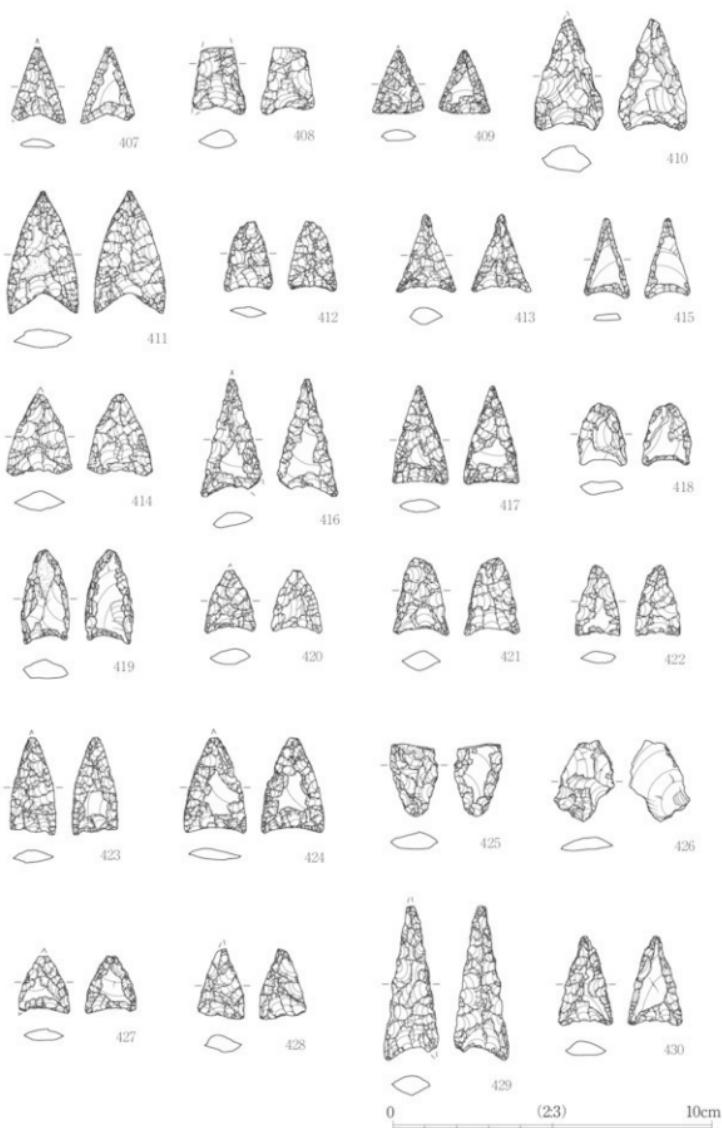


0 (2:3) 10cm

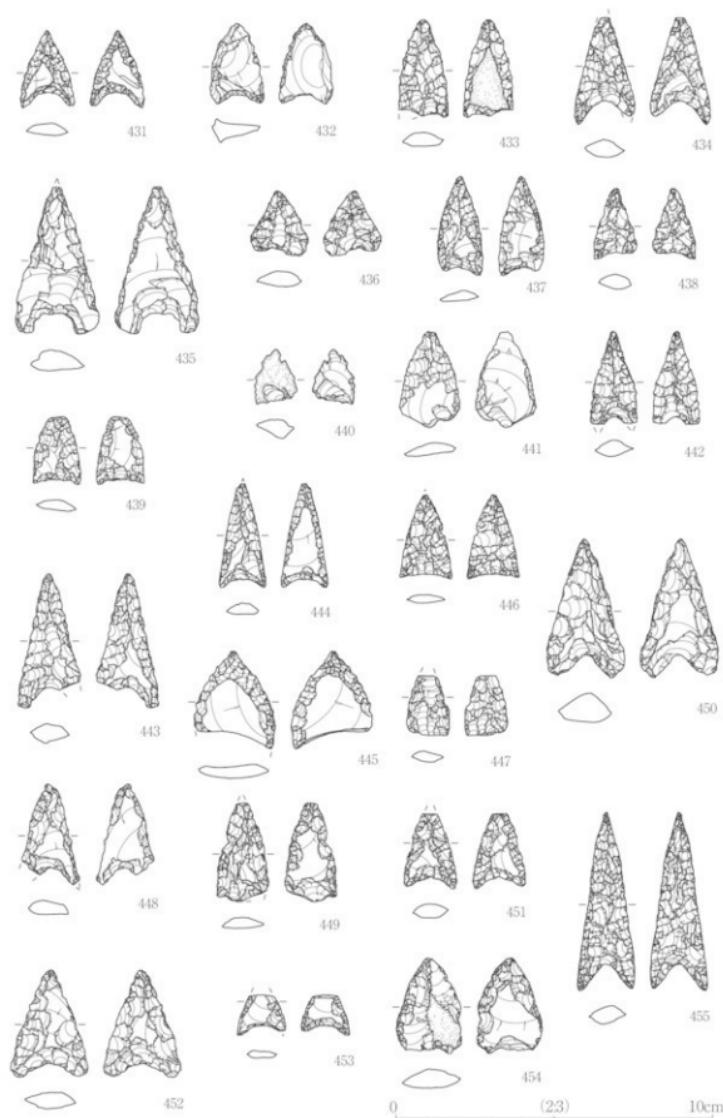
第62図 剥片石器(2)



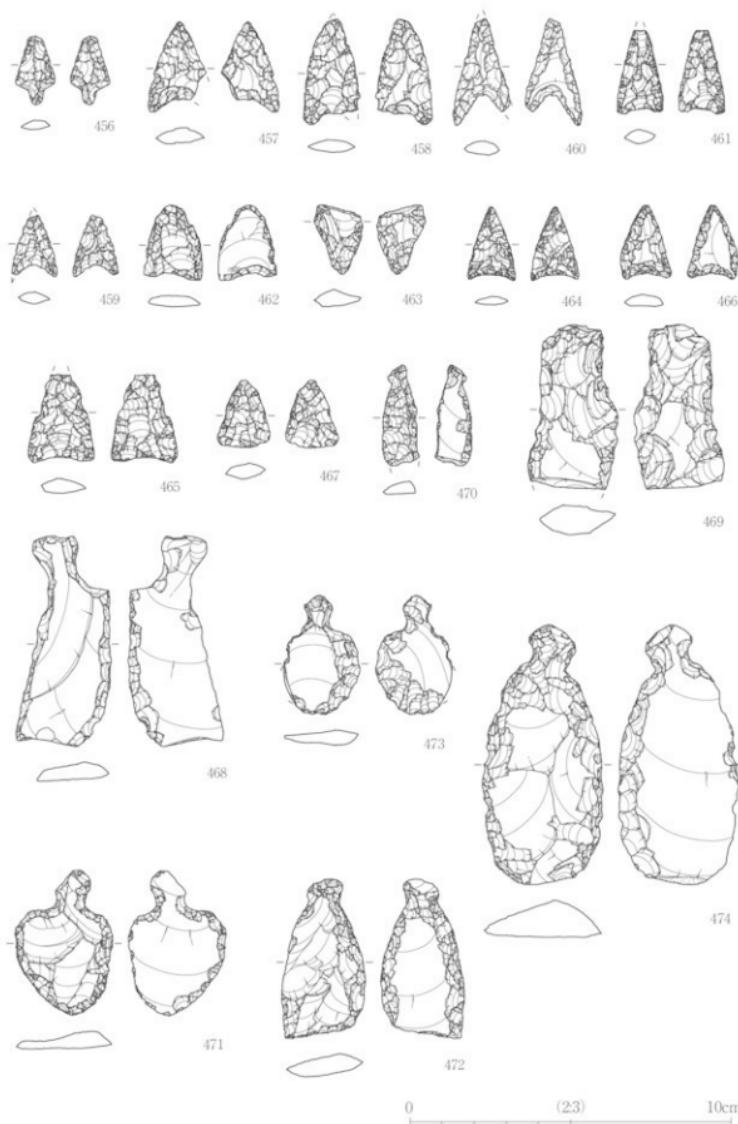
第63図 剥片石器(3)



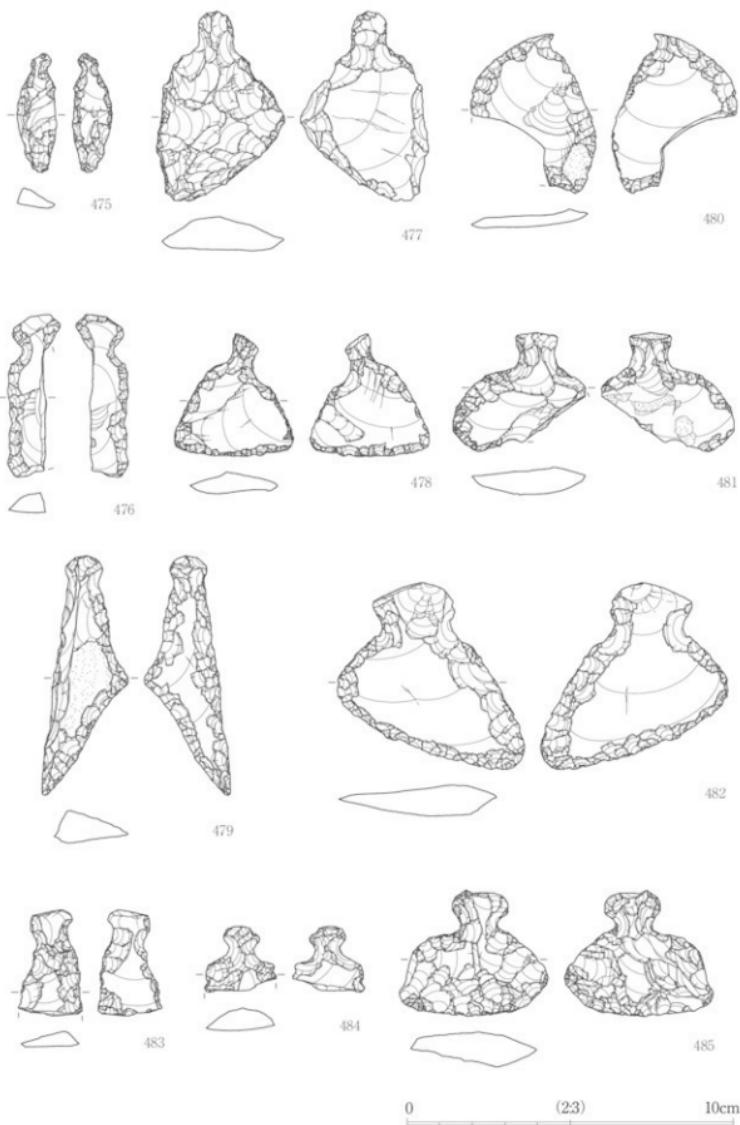
第 64 図 剥片石器 (4)



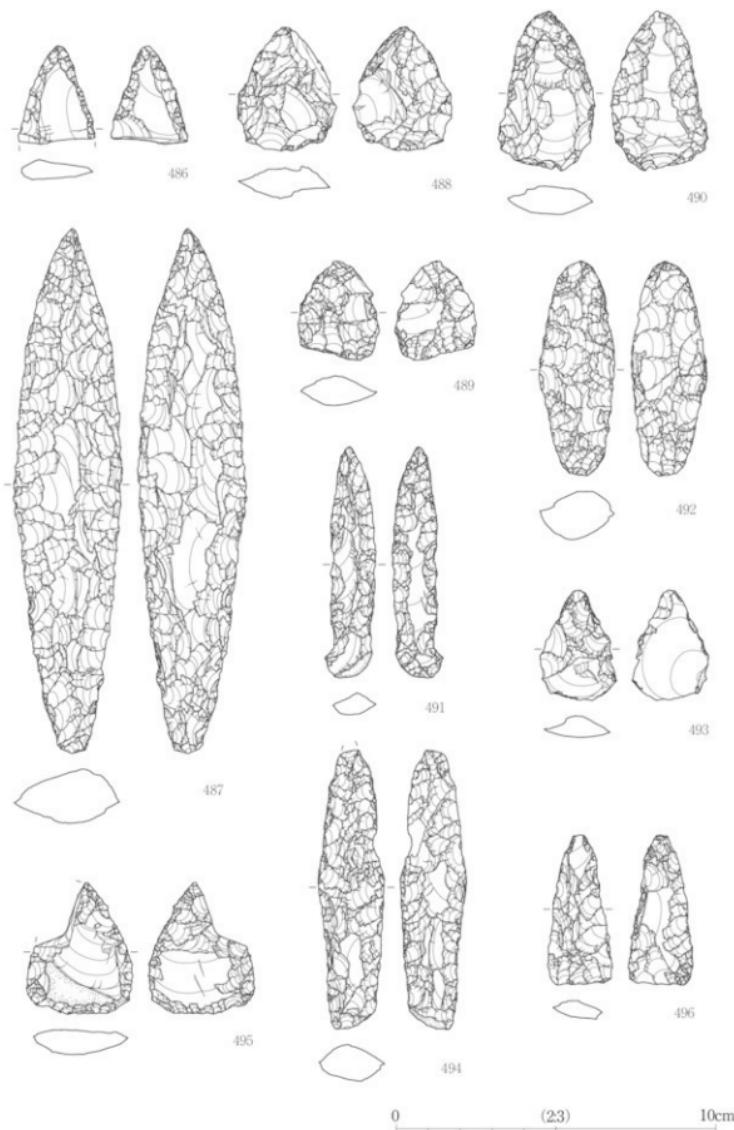
第65図 剥片石器(5)



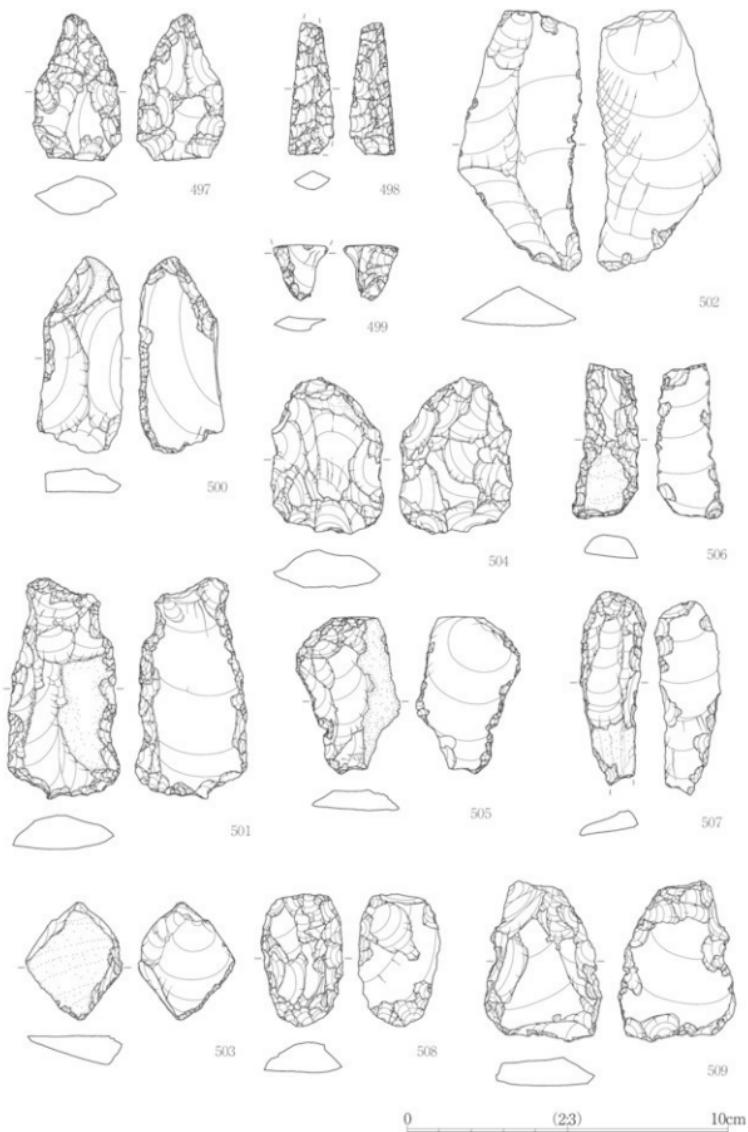
第66図 剥片石器(6)



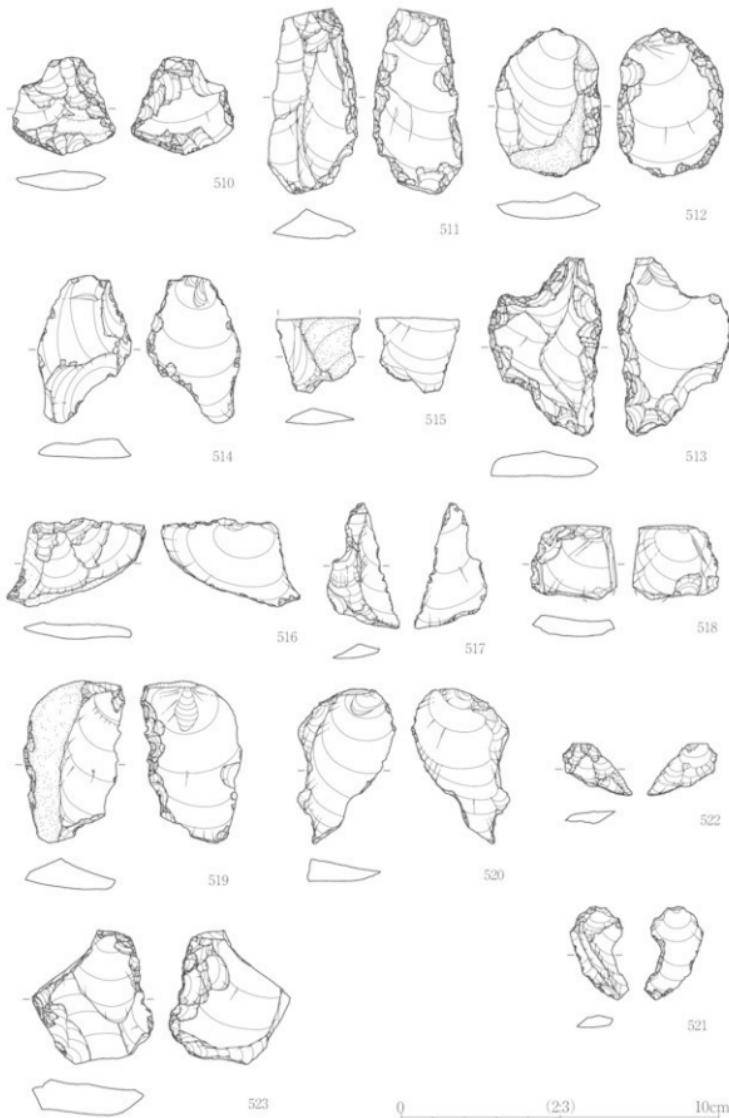
第 67 図 剥片石器 (7)



第68図 剥片石器(8)



第69図 剥片石器(9)



第70図 剥片石器(10)

(4) 石 製 品

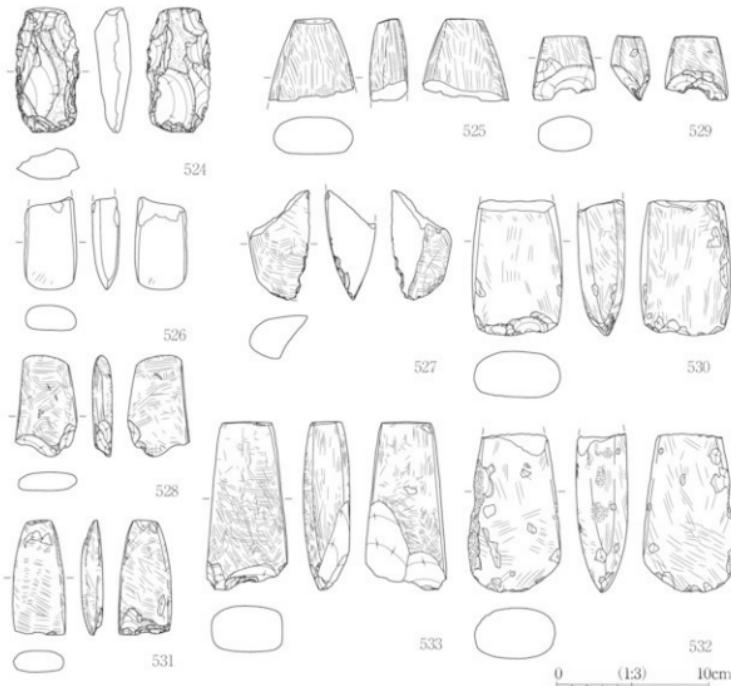
石製装身具(第80図、写真図版90・91)

今回出土した石製装身具のうち、大半の7点(616~622)が玦状耳飾りである。いずれも欠損しており、完形のものは出土しなかった。

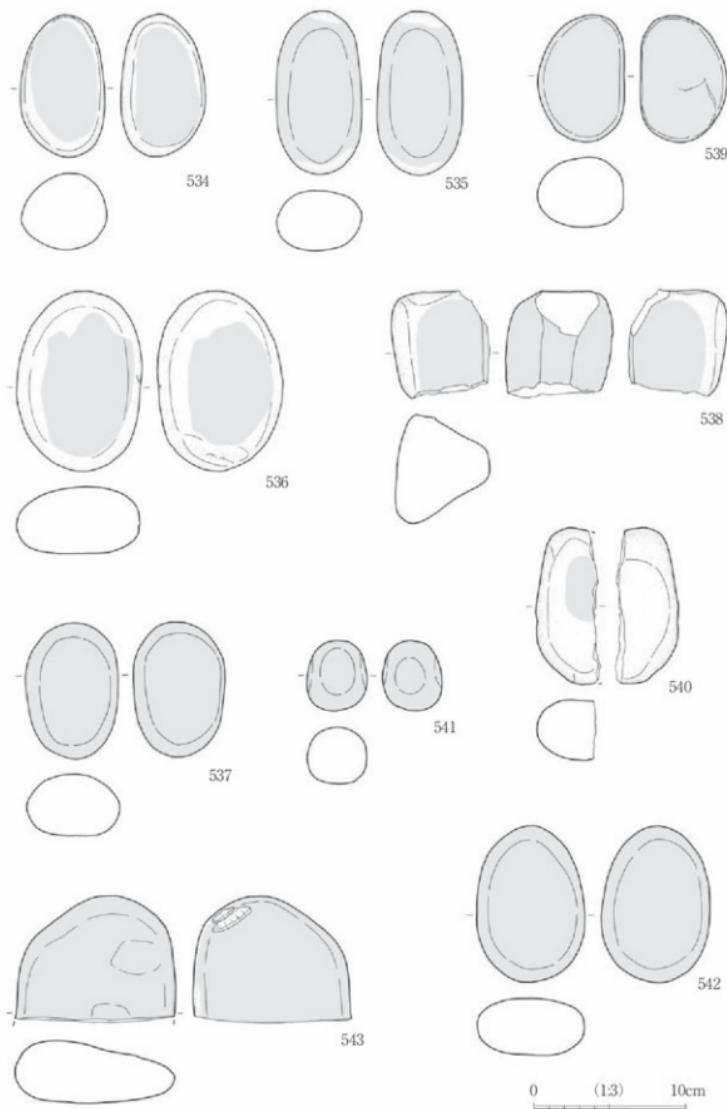
616は断面円形であり、玦状耳飾り以外の装身具である可能性も考えられる。617~622はいずれも中心部付近で折れ、半分のみ残存している。残りは左右対称で同じような形状のものへと続くものとみられる。それぞれ大きさ・形状は様々であるが、綫長基調の617・619、円形基調の618・620~622と形状によって2大別できる。石材は7点中6点が滑石製であるが、622のみ凝灰岩製であり、色調もこの1点黄橙色を呈する。なお、同じく凝灰岩製の未完成と考えられる626が認められ、これには穿孔がなされているが、この部分で破損している。破損部は接合したが、製作途中、特に穿孔時の破損により破棄されたものと考えられ、玦状耳飾りの製作工程を示す遺物であると推測される。

その他石製品(第80図、写真図版91)

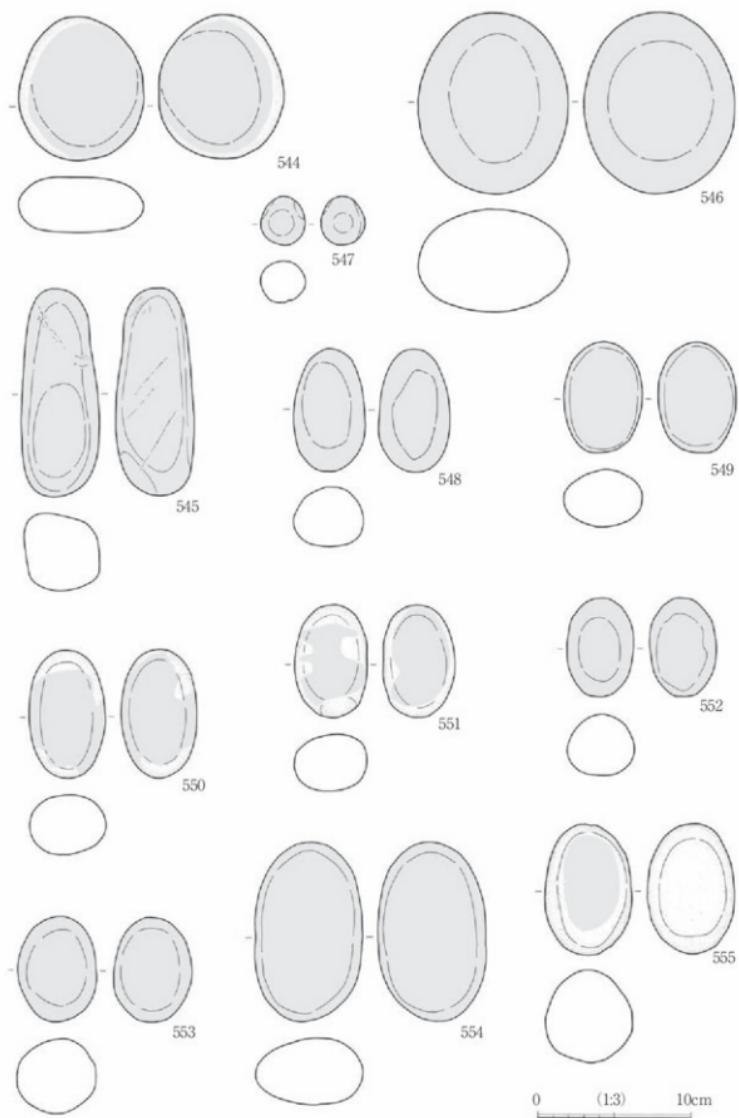
266は薄く長い板状の石製品である。滑石製であり、丁寧に研磨されている。片側先端に向けて

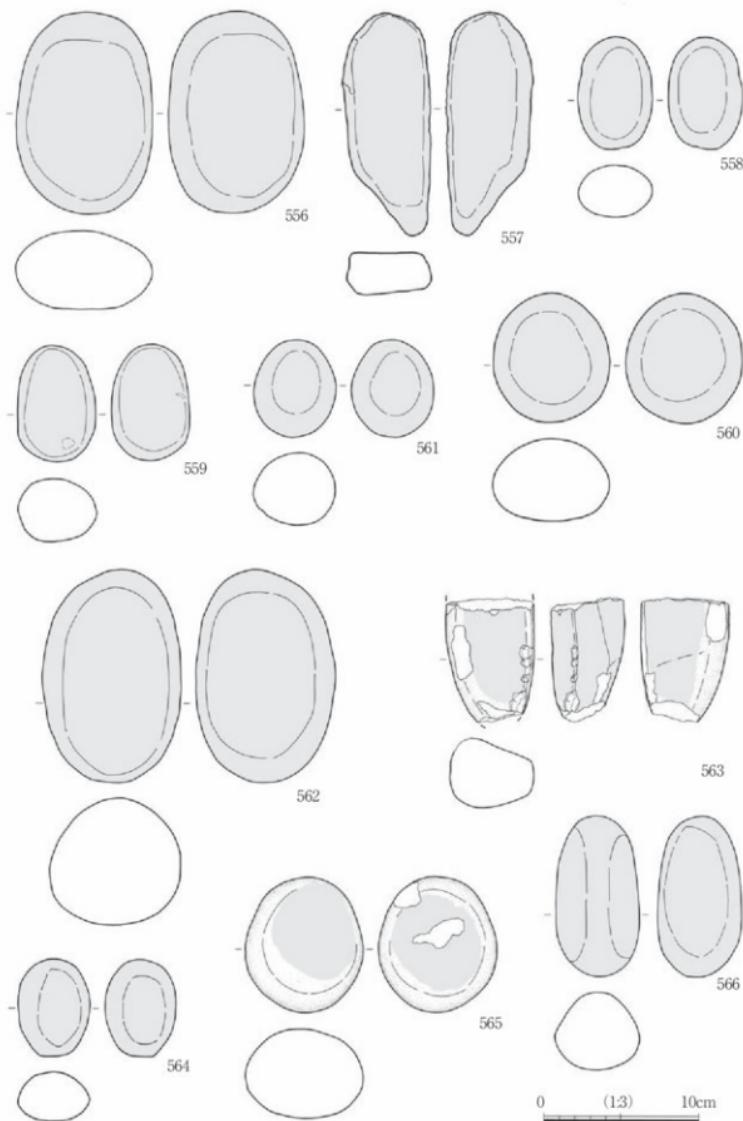


第71図 石斧

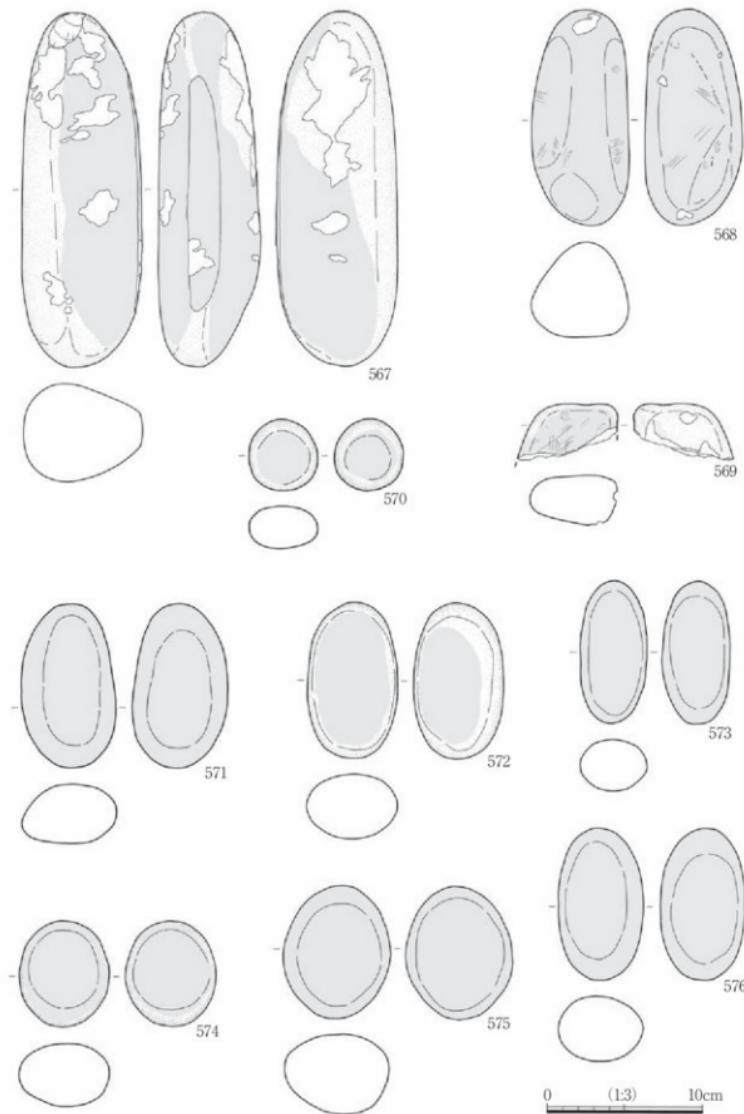


第 72 図 碾石器 (1)

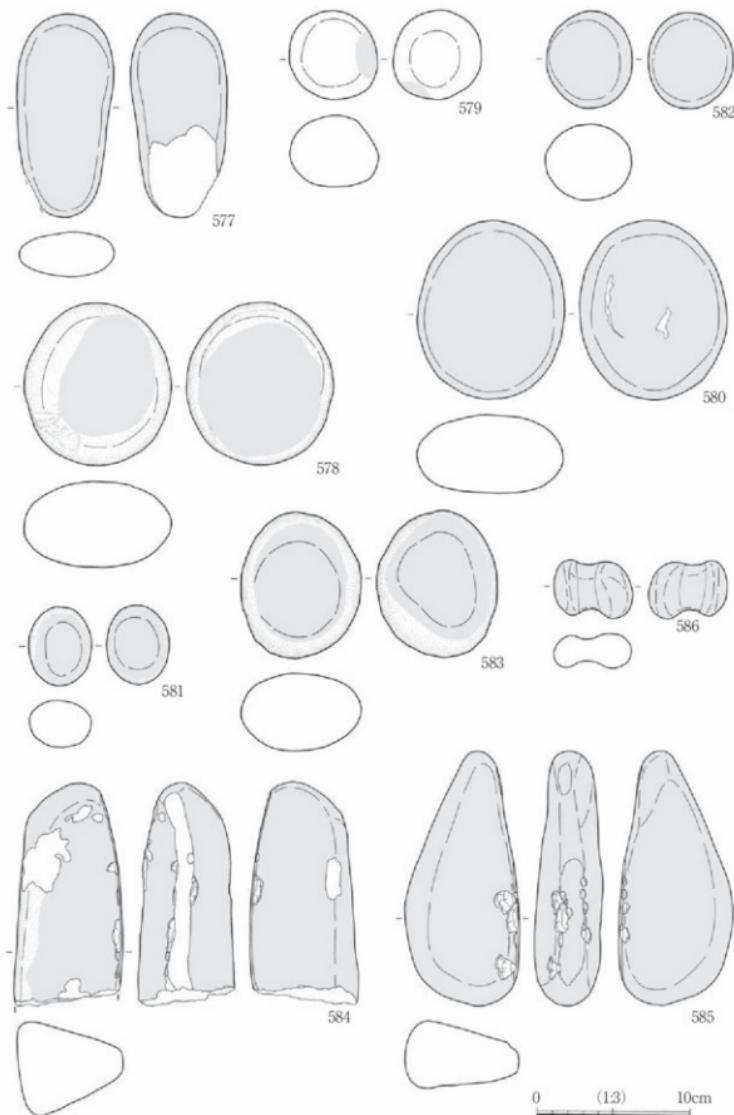




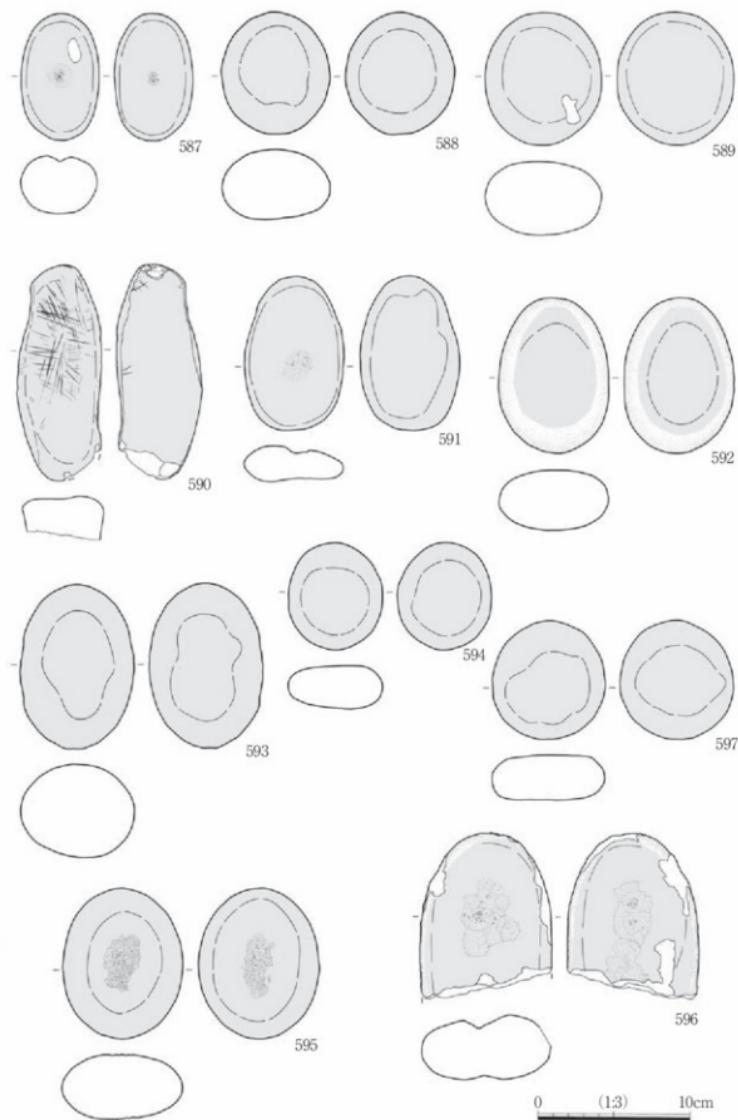
第 74 図 磚石器 (3)

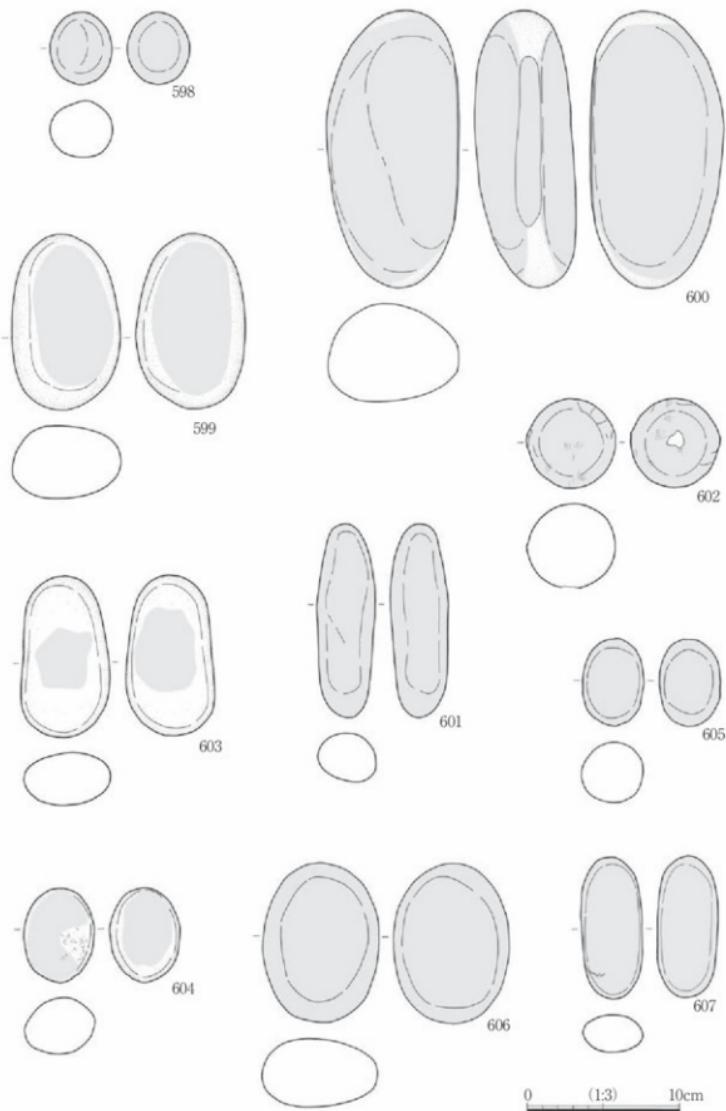


第 75 図 磚石器 (4)

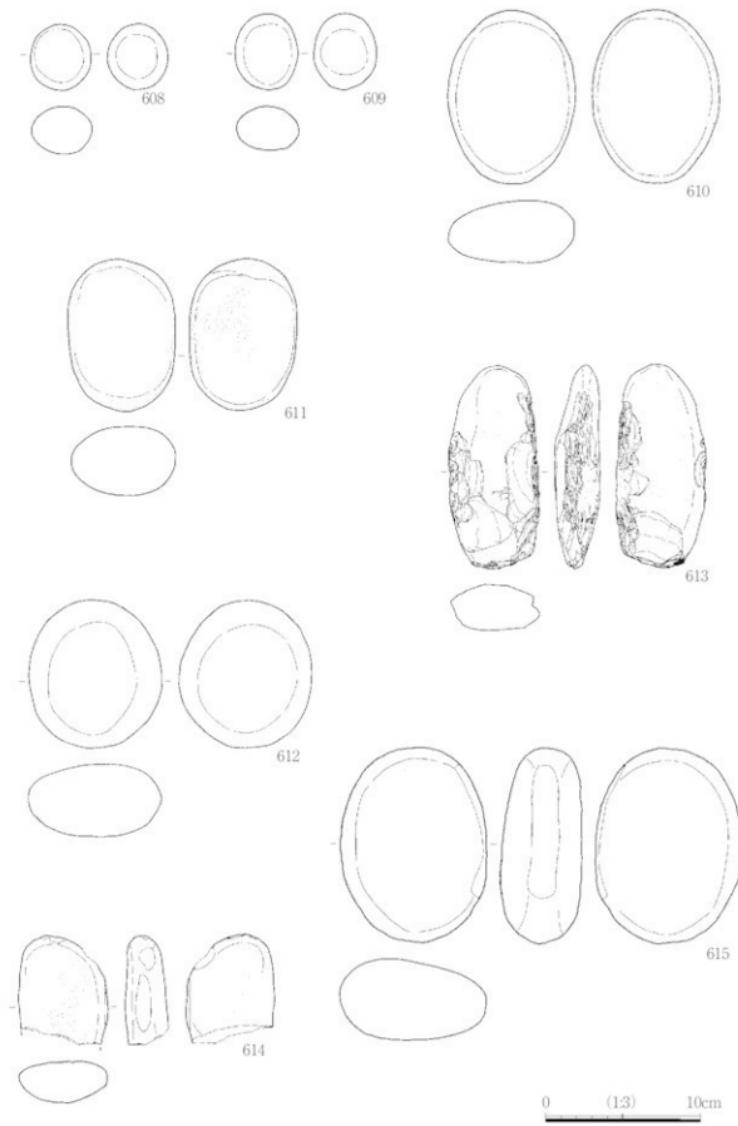


第 76 図 積石器 (5)

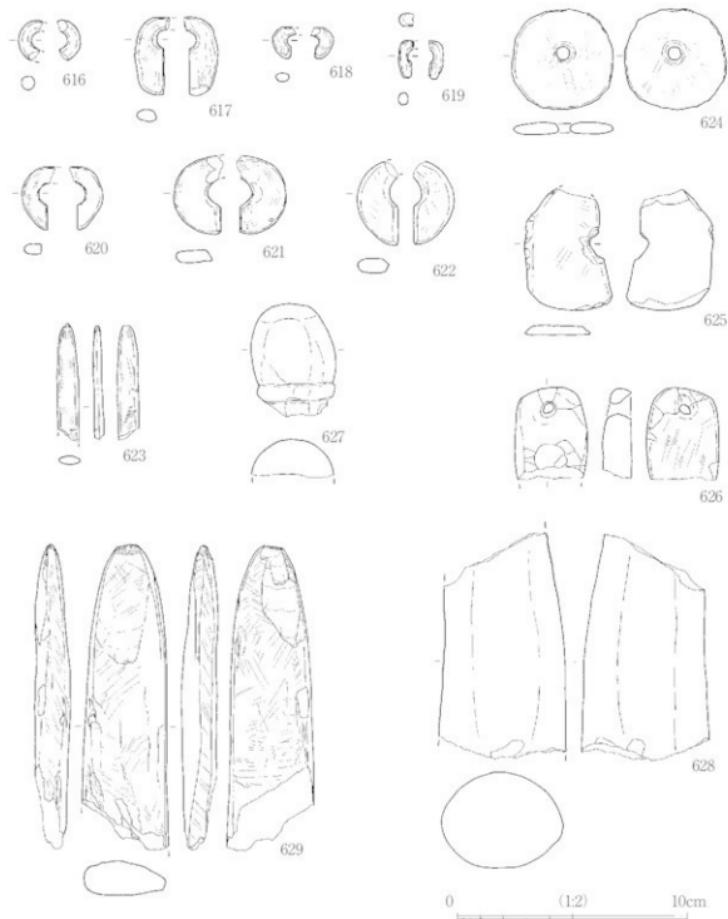




第 78 図 積石器 (7)



第 79 図 積石器 (8)



第80図 石製品

幅が減じる形状であるが、もう一端は折れて欠損している。よって全体の形状および用途は不明である。

その他、石棒が2点出土した。いずれも全面研磨されている。627は削り出された帯状の突出部が認められる。

629は片側先端部が欠損している。刃部が欠損した、やや長大な磨製石斧の可能性も考えられるが、長さに対して幅や厚みが無く、石劍のような製品も想定できるかもしれない。

(福島)

表3 掲載遺物一覧(土器)

No.1 ~ 50

編號 No.	種別	出土状況	文様	胎土	色調	寸法(cm)			備考
						高さ	幅員	底径	
1	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居1号土上部	绳文のみ(縄文)	やや粗	黒褐色	~	[6.1]	~	
2	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居1号出面~蓋部	绳文(外腹全面ケリ)	粗	褐色~暗褐色	~	[18.1]	~	
3	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居1号全面~蓋部	绳文のみ(縄文)	やや粗	褐~灰黃褐色	~	[21.0]	~	
4	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居1号出面~蓋部	押し引き浅縄文	粗良	褐灰褐色	~	[5.0]	~	
5	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居1号出面	不明	やや粗	明褐色	~	[1.4]	G.78	底部に極厚のようないの土痕あり。
6	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文(堅い付合)	绳文	やや粗	黑褐色	~	[8.2]	~	
7	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居1号土下層	粘土縫貼付文	粗良	黑褐色	~	[5.5]	~	波状口縁。
8	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居1号土下層	粘土縫貼付文	粗良	黑褐色	~	[8.9]	~	
9	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居5号土上層~下層	粘土縫貼付文	粗良	にふい黄褐色	~	[12.4]	~	1箇所既成或後の穿孔有り。
10	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居5号土上層~下層	粘土縫貼付文(崩みあり)	粗良	褐色	~	[4.8]	~	
11	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居5号土下層	粘土縫貼付文(崩みあり)	粗良	黑褐色	~	[5.6]	~	胎土に微量の礫雜を含む。
12	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居5号土上層	不明	やや粗	褐色~黑色	~	[5.7]	[9.5]	
13	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居5号土上層~下層	绳文のみ	やや粗	黑褐色	~	[6.2]	~	
14	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居5号土上層~下層	竹管による内文	粗良	黑褐色	~	[5.1]	~	
15	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居5号土上層~下層	不明	粗良	褐色	~	[4.4]	[10.9]	
16	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居5号土下層	绳文	粗良	褐色	~	[3.3]	~	
17	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居5号~無土上層	粘土縫貼付文	粗良	灰黃褐色	~	[4.8]	~	AMS測定試料と同一箇所
18	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居5-A-A' 2層目	粘土縫貼付文	粗良	黒褐色~灰褐色	[21.9]	[9.2]	~	
19	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居5-A-A' 2層目、無土上層~下層	粘土縫貼付文	粗良	[にふい] 黄褐色~褐色	[0.38]	[4.9]	[9.7]	
20	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居5-A-A' 2層目	粘土縫貼付文	粗	黒褐色~[にふい] 黄褐色	[21.0]	[23.5]	[10.0]	
21	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居5号奥壁上層	不明	粗良	[にふい] 黄褐色	~	[2.9]	6.7	底部外縁に本剥痕あり。
22	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居5号奥壁上層~下層	绳文?	粗良	黒褐色	~	[4.5]	[6.3]	
23	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居5号奥壁上層	绳文のみ(縄文)	粗良	褐色	~	[6.3]	~	
24	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居6号土上層	不明	やや粗	[にふい] 黑色	~	[4.9]	[7.7]	
25	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居6号A-B-1ベルト1層目	竹管による内文	粗良	黑褐色	~	[10.9]	~	
26	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居6号A-B-1ベルト1層目	绳文	粗良	黑褐色	~	[15.4]	~	
27	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居7号A-A'-ベルト7層目	竹管による内文、沈柵	通常に粗良	褐色	~	[5.4]	~	
28	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居7号奥壁上層	不明	粗良	[にふい] 黄褐色	~	[6.2]	~	
29	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居7号C-B-1ベルト4層目	地文	粗良	[にふい] 黑色	~	[6.7]	~	
30	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居7号C-B-2層目	粘土縫貼付文	粗良	黑褐色	~	[4.6]	~	
31	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居7号土下層	粘土縫貼付文	通常に粗良	黑褐色	~	[6.3]	~	
32	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居8号土上層	粘土縫貼付文	粗良	黑褐色	~	[6.4]	~	
33	縄文土器・深鉢	Ⅱ区 縄文住居8号土面	粘土縫貼付文(崩みあり)	やや粗	黒褐色	~	[8.3]	~	
34	縄文土器・深鉢	Ⅰ区 縄文住居10	不明	やや粗	明褐色~[にふい] 黄褐色	~	[1.3]	[17.0]	
35	縄文土器・深鉢	Ⅰ区 縄文住居10 地理上3層目	地文(崩みあり)	通常に粗良	褐色	~	[6.8]	~	
36	縄文土器・深鉢	Ⅰ区 縄文住居10 地理上	绳文	粗良	褐色	~	[7.8]	~	
37	縄文土器・深鉢	Ⅰ区 縄文住居10 地理上	半截竹管沈柵文	粗良	褐色	~	[4.8]	~	
38	縄文土器・深鉢	Ⅰ区 縄文住居11 地理上	無	粗良	黒褐色	~	[5.7]	~	胎土に微量の礫雜を含む。
39	縄文土器・深鉢	Ⅰ区 縄文住居11 柱出面	半截竹管沈柵文	粗良	黒褐色	~	[3.7]	~	
40	縄文土器・深鉢	Ⅰ区 縄文住居11 地理上	绳文のみ(燃赤文)	粗良	褐色	~	[6.0]	~	
41	縄文土器・深鉢	Ⅰ区 縄文住居11 北西壁上層	不明	やや粗	明褐色	[22.4]	[8.2]	~	
42	縄文土器・深鉢	Ⅰ区 縄文住居11 北西壁上層	绳文	粗良	褐色	~	[4.0]	[10.1]	
43	縄文土器・深鉢	Ⅰ区 縄文住居11 北西壁下層	粘土縫貼付文	粗良	黒褐色	~	[10.1]	~	
44	縄文土器・深鉢	Ⅰ区 縄文住居11 地理上1層	不明	粗良	明褐色	~	[7.5]	[14.5]	
45	縄文土器・深鉢	Ⅰ区 縄文住居12 地理上	不明	通常に粗良	褐色	~	[1.1]	~	
46	縄文土器・深鉢	Ⅰ区 縄文住居12 地理上	绳文	粗良	褐色	~	[6.6]	~	
47	縄文土器・深鉢	Ⅰ区 縄文住居12 北西壁上層	不明	粗良	黒褐色	~	[2.0]	[6.2]	
48	縄文土器・深鉢	Ⅰ区 縄文住居12 北西壁上層	不明	粗良	褐色	~	[4.4]	~	
49	縄文土器・深鉢	Ⅰ区 縄文住居12 北西壁上層	粘土縫貼付文	粗良	褐色	~	[6.4]	~	
50	縄文土器・深鉢	Ⅰ区 縄文住居12 南西壁上層	粘土縫貼付文	粗良	褐色	~	[0.3]	~	

表3 掘載遺物一覧(土器)

No.51～100

開敷 No.	種別	出土状況 地区	文様	胎土	色調	寸法(cm)			備考
						口徑	身高	底径	
51	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 13北西埋土下層	不明	織良	褐色	—	14.4	6.29	
52	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 13北西埋土上層	不明	織良	褐色	—	12.9	10.2	
53	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 13北西埋土下層	不明	織良	灰黃褐色	—	15.2	—	
54	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 13A 無土中層	粘土被貼付文	織良	灰黃褐色	—	15.6	—	
55	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 13北東埋土上層	不明	織良	褐色	—	14.3	6.2	
56	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 13北東埋土下層	地文(織文)	織良	褐灰色	—	15.4	—	
57	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 13北東埋土下層	不明	やや粗	褐色	—	13.8	13.7	
58	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 13北東埋土下層	地文のみ(織文)	やや粗	黑褐色	—	13.0	—	
59	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 13北西埋土上層、混合 層、蓋 F2e・5d) 棚出頭	粘土被貼付文(丸)	織良	褐色	—	17.1	—	
60	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 13北西埋土上層	化粧土、竹管による円 筒文	織良	灰黃褐色	—	17.6	—	
61	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 13北東埋土	粘土被貼付文	織良	褐灰色	—	15.4	—	
62	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 13北東埋土上層	不明	やや粗	褐灰色	—	13.8	13.9	
63	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 13北東埋土上層	地文被貼付文	やや粗	黑褐色	—	17.2	—	
64	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 13北東埋土上層	地文のみ(然赤)	織良	黑褐色	—	12.5	—	
65	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 13北東埋土上層	利支文	やや粗	黑褐色	—	11.0	—	胎土に微量の鐵面を含む。
66	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 13北東埋土上層	汎織文	織良	黑褐色	—	17.3	—	胎土に微量の鐵面を含む。
67	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 13北東埋土上層	地文のみ(織文)	やや粗	灰黃褐色	—	10.2	—	
68	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 13北東埋土上層	地文のみ	織良	明赤褐色	—	11.8	0.07	底部網代瓦あり。
69	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 13北東埋土	不明	織良	に赤い黃褐色	—	13.3	—	
70	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 15中央埋土下層	粘土被貼付文	織良	に赤い黃褐色	—	13.6	—	
71	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 16東側側面張部裏	不明	織良	褐色	—	15.2	12.2	
72	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 17南西埋土上層	汎織文	織良	黃褐色	—	31	—	
73	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 17北東埋土上層	不明	やや粗	半褐色	—	2.3	—	底部網代瓦あり。
74	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 17北東埋土上層	汎織文	やや粗	黑褐色	—	7.6	—	
75	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 17南西埋土上層	不明	やや粗	褐灰色	—	14.0	—	底部網代瓦あり。
76	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 17	不明	やや粗	褐灰色	—	13.7	—	
77	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 17	不明	織良	に赤い黃褐色	—	18.2	—	
78	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 17 土坑 25	手抜竹被貼付文	織良	半褐色	—	12.0	—	
79	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 17 南東埋土上層	汎織文	織良	灰黃褐色	—	9.6	—	
80	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 17 土坑 25	無文	織良	褐灰色	—	14.8	—	
81	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 17 土坑 25	不明	織良	褐色	—	11.8	—	底部網代瓦あり。
82	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 17 南東上層	隕面(刷みあり)	織良	黑褐色	—	22.3	—	92・157と同一個体の可能性 あり。
83	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 17 多少の丸隕面	隕面、沈織文	やや粗	半褐色	—	19.2	—	
84	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 20 南東埋土上層	不明	織良	褐色	—	15.6	1.5	底部網代瓦あり。
85	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 20 南東埋土上層	利支文	やや粗	褐灰色	—	17.0	—	
86	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 20 南東上層	汎織文、粘土被貼付文	織良	に赤い黃褐色	—	19.2	—	
87	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 20 上層上	隕面(刷みあり)	織良	灰黃褐色	—	18.0	—	
88	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 20 南東埋土上層	隕面、利支文	やや粗	褐灰色	—	10.0	—	
89	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 20 棚出頭	貼付文、沈織文、竹管	やや粗	褐灰色	—	12.4	—	
90	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 20 北東埋土	隕面(刷みあり)	沈織	半褐色	—	12.4	—	
91	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 20 上層上	隕面(刷みあり)、沈織	やや粗	黑褐色—明 半褐色	—	10.3	—	
92	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 20 北側埋土	不明	織良	褐灰色	—	13.9	7.7	
93	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 20 棚出頭	隕面(刷みあり)	織良	に赤い褐色	—	18.2	—	個状突起あり。波状口縁。
94	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 20 棚出頭	隕面	やや粗	灰黃褐色	—	18.7	—	
95	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 20 棚出頭	利支文	やや粗	褐灰色	—	15.9	—	
96	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 20 南東上層上	不明	織良	黑褐色	—	15.1	0.2	
97	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 20 南東埋土上層出頭	汎織文、竹管利支文	織良	褐灰色	—	15.8	—	個状突起あり。波状口縁。
98	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 20 南東上層上	不明	やや粗	明赤褐色	—	12.2	0.2	
99	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 20 南東上層上-中位	隕面(刷みあり)、沈織	織良	灰黃褐色	—	17.0	—	波状口縁。
100	陶文土器・深鉢	1区 豊六住居 20 上層	隕面(刷みあり)	織良	灰黃褐色	—	11.0	—	

表3 掘載遺物一覧(土器)

開 拓 年 数	種 類	地 区	遺 構 ・ 位 置 ・ 層 位	出 土 状 況	文 様	胎 土	色 調	寸法(cm)			備 考
								口徑	厚 度	底 径	
101	陶文土器・泥鉢	Ⅲ区	遺構・位置・層位	遺文のみ(陶文)	やや粗	褐灰色	62.0	8.6	—	—	—
102	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	野藏穴1埋下層	刺突文	非常に精良	灰褐色～ふい褐色	—	5.6	—	胎土に多量の纖維を含む。	—
103	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	野藏穴1埋上	无文様	非常に精良	明赤褐色	—	5.0	—	—	—
104	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	野藏穴2～7埋下層	孔縫文、柄上細點付文	やや粗	褐褐色	—	8.2	—	—	—
105	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	野藏穴2～2埋下層	粘土細點付文(刷みあり)	精良	浅黄褐色	—	8.0	—	—	—
106	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	野藏穴2～2埋下層	无文様	非常に精良	灰褐色～灰褐色	—	2.8	—	—	—
107	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	野藏穴2～2埋下層	孔縫文	非常に精良	灰褐色～灰褐色	—	5.6	—	—	—
108	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	野藏穴2～2埋下層	孔縫文、竹管文	精良	褐灰色	—	5.4	—	—	—
109	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	野藏穴2埋下層(3cm)	无文様	精良	褐褐色	—	4.9	—	—	—
110	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	野藏穴2埋下層(3cm)	粘土細點付文	非常に精良	褐色	—	4.0	—	—	—
111	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	野藏穴2埋下層(3cm)	無文	非常に精良	浅黄褐色	—	5.2	—	—	—
112	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	野藏穴2埋下層(3cm)	遺文のみ	精良	灰褐色～褐色	—	21.9	63.0	—	—
113	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	野藏穴3埋上	孔縫文、竹管文	精良	浅黄褐色	—	5.8	—	—	—
114	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	野藏穴3埋上(3cm)	无文様	精良	褐灰色	—	3.8	—	—	—
115	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	野藏穴3埋上(3cm)	孔縫文、竹管文	非常に精良	褐褐色	—	4.0	—	胎土に纖維を含む。	—
116	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	野藏穴3埋上(3cm)	粘土細點付文(刷みあり)	非常に精良	浅黄褐色	—	7.8	—	胎土に纖維を含む。	—
117	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	野藏穴3埋下層	刺突文	精良	褐褐色	—	9.8	—	—	—
118	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境5埋上	无文様	精良	褐褐色	—	5.4	—	—	—
119	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	野藏穴6～1層	不明	非常に精良	明赤褐色	—	11.0	—	—	—
120	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	野藏穴6～1層	无文様、竹管による凹文	精良	褐褐色	—	5.2	—	胎土に微量の纖維を含む。	—
121	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	野藏穴6埋上	无文様	精良	褐褐色	—	5.4	—	胎土に微量の纖維を含む。	—
122	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	野藏穴6埋上	不明	非常に精良	褐灰色	—	1.6	6.5	—	—
123	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	野藏穴6埋上	無文(刷みあり)	精良	褐色	—	19.3	—	—	—
124	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	野藏穴6埋上	遺文のみ(陶文)	やや粗	褐灰色	—	8.4	—	—	—
125	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境9埋上	手打ち泥瓦文	精良	褐色	—	9.5	—	—	—
126	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境9埋上	竹管剥壳文	非常に精良	褐色	—	3.6	—	—	—
127	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境12半埋上	多条手抜竹管瓦文、円形 位 付	やや粗	褐色	—	8.9	—	胎土に微量の纖維を含む。	—
128	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境12半埋上	粘土細點付文	精良	褐灰色	—	4.0	—	—	—
129	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境12半埋上	粘土細點付文	精良	褐色	—	14.1	—	—	—
130	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境12西側埋上	遺文のみ	やや粗	褐褐色～黒褐色	—	22.2	22.9	底部に微かな副底板あり。	—
131	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境16埋上	粘土細點付文	精良	灰褐色～ふい褐色	—	12.3	—	胎土に微量の纖維を含む。	—
132	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境18埋上	粘土細點付文	精良	褐灰色	—	3.2	—	—	—
133	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境22埋中位	无文様	粗	褐色	—	7.0	—	—	—
134	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境22埋上	刺突文	精良	灰褐色～灰褐色	—	14.2	—	—	—
135	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境34埋下層	不明	精良	明赤褐色	—	28.8	65.9	—	—
136	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境34埋上	不明	精良	灰褐色～灰褐色	—	33.1	0.23	底部副底板あり。	—
137	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境34埋下層	不明	精良	褐灰色	—	34.6	0.6	—	—
138	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境34埋下層	粘土細點付文、手打ち管式 位 付	精良	明赤褐色～ふい褐色	—	16.2	—	上手部スス付着。	—
139	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境34埋上	泥縫(刷みあり)	非常に精良	灰褐色～灰褐色	—	13.0	—	胎土に雲母顯著。	—
140	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境36B埋下層	不明 2層目	精良	褐色	—	15.7	0.46	底部副底板あり。	—
141	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境36B埋下層	不明	精良	褐灰色	—	14.4	6.1	—	—
142	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境36B4F2埋下層	遺文のみ(陶文)	精良	灰白色	—	13.9	—	—	—
143	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境36B4F3埋下層	泥縫(刷みあり)	やや粗	褐色	—	15.9	—	—	—
144	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境36B4F3埋下層	泥縫(刷みあり)、泥縫文	やや粗	明赤褐色～褐色	—	16.5	—	—	—
145	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境36B4F3埋下層	不明	精良	褐色	—	12.4	13.9	—	—
146	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境36B4F3埋下層	泥縫(刷みあり)	精良	褐灰黒	—	27.4	17.8	—	—
147	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境36B5埋下層	泥縫	やや粗	褐灰色	—	15.5	—	堆積孔あり。	—
148	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境14埋上	遺文のみ(陶文)	やや粗	褐灰色	—	13.5	—	—	—
149	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	上境14埋上	不明	精良	褐白色	—	4.1	0.10	—	—
150	陶文土器・深鉢	Ⅲ区	SP30埋上	遺文のみ(陶文)	精良	褐灰色	—	8.9	—	—	—

表3 掘載遺物一覧(土器)

No.151～200

開拓 No.	種別	出土状況	文様	胎土	色調	寸法(cm)			備考
						口径	部高	瓶径	
151	縄文土器・深鉢	目付	性筋・崩壊・位置・傾倒	斜口引き足高文	縦良	黒灰～褐色	—	122.3	—
152	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1トレンチ	鏡面、直底竹管沈縄文	非常に横良	灰黄褐色	—	(7.1)	—
153	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1トレンチ	手ぬ竹管沈縄文	非常に横良	黒褐色	—	(7.1)	—
154	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1トレンチ	沈縄文。竹管による凹文	非常に横良	黒褐色	—	96.0	—
155	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1トレンチ	不明	やや粗	暗～黒褐色	—	(29)	0.28
156	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1	不明	非常に横良	黒褐色	—	(46)	0.10
157	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1複数	角形状刺突文	やや粗	黒灰～褐色	—	(19.0)	—
158	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	沈縄文	縦良	黒褐色	—	(12.2)	—
159	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	円形貼付文、沈縄文	縦良	褐色	—	(6.7)	—
160	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	鏡面、撲打仕上痕あり	やや粗	黒褐色	—	(19.6)	—
161	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	粘土・絆貼付文	縦良	黒褐色	—	(27.1)	—
162	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	鏡面(斜削あり)、沈縄文	やや粗	赤褐色	—	(9.3)	—
163	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	地文のみ(沈縄文)	やや粗	褐色	—	(5.3)	—
164	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	沈縄文、押し引き沈縄文、竹管刺突文	縦良	黒褐色	—	(5.4)	—
165	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	無文	縦良	黒褐色	(12.2)	(9.1)	—
166	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1～2層	地文のみ(赤系文)	縦良	褐色	—	(15.7)	—
167	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1～2層	無文	縦良	灰黄褐色	—	(4.4)	0.28
168	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・(底面上面1小)	地文のみ(赤系文)	縦良	赤褐色	—	(17.3)	10.2
169	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・底面上面、底含繩2・(目F5d)底面	円形刺突文	やや粗	赤・赤・黄褐色	(19.0)	(38.1)	—
170	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	竹管文	非常に横良	赤・赤・黒褐色	[19.0]	[19.0]	—
171	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	不明	縦良	赤褐色	—	(2.1)	0.25
172	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	円形貼付文、沈縄文、赤帯に横良	赤褐色	—	(6.4)	—	
173	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	粘土・絆貼付文	縦良	赤・赤・黒褐色	—	(8.2)	—
174	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	粘土・絆貼付文(崩み非常に横良)、(崩み非常に横良)、沈縄文	縦良	赤・赤・黒褐色	—	(4.1)	—
175	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	沈縄文	縦良	黒灰～黒褐色	—	(6.5)	—
176	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	地文のみ(沈縄文)	縦良	黒灰～黒褐色	—	(7.4)	—
177	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	沈縄文。竹管による刺突文	縦良	黒灰～黒褐色	—	(6.7)	—
178	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	不明	縦良	赤・赤・褐色	—	(8.5)	0.48
179	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	沈縄文	縦良	黒灰～褐色	—	(11.0)	—
180	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	半井竹管による刺突文、沈縄文	縦良	赤・赤・黒褐色	—	(6.3)	—
181	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	縫縄、沈縄文	非常に横良	黒褐色	—	(6.4)	—
182	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	不明	縦良	褐色	—	(5.5)	0.11
183	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	沈縄文	縦良	赤・赤・黒褐色	(25.3)	(24.6)	—
184	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	粘土・絆貼付文	縦良	黒褐色	—	(5.5)	—
185	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	不明	やや粗	黒褐色	—	(3.4)	0.18
186	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	沈縄文	縦良	黒褐色～赤褐色	(19.7)	(28.9)	—
187	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・1層	半井竹管沈縄文、半井竹管刺突文	縦良	黒褐色～赤褐色	—	(11.8)	—
188	縄文土器	目付	底含繩1トレンチ直層	縫縄、側突文、沈縄文	非常に横良	黒褐色	—	(5.5)	—
189	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・直層上段	不明	縦良	赤・赤・黒褐色	—	(2.1)	0.20
190	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・直層上段	沈縄文	非常に横良	黒灰～褐色	—	(4.8)	—
191	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・直層上段	沈縄文。側伏貼付文	非常に横良	黒褐色	—	(7.8)	—
192	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・直層上段	不明	やや粗	赤・赤・黒褐色	—	(3.1)	0.61
193	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・直層	沈縄文、縫帶(崩みあり)、貼付円文	縦良	赤・赤・黒褐色	(32.9)	(28.5)	—
194	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・直層上段	沈縄文	非常に横良	赤・赤・黒褐色	(16.0)	(13.8)	—
195	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・直層上段	沈縄文、刺突文	縦良	赤・赤・黒褐色	—	(6.7)	—
196	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・直層上段	沈縄文	やや粗	黒褐色	—	(6.5)	—
197	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・直層下段	沈縄文	縦良	赤・赤・黒褐色	—	(6.1)	—
198	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・直層下段	沈縄文	非常に横良	褐色	—	(7.5)	—
199	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・直層下段	沈縄文	やや粗	赤・赤・黒褐色	—	(7.1)	—
200	縄文土器・深鉢	目付	底含繩1・直層下段	梅瓶沈縄文	縦良	黒褐色	—	(14.9)	—

表3 掘載遺物一覧(土器)

件数 No.	種別	出土地況 地区	文様	胎土	色調	寸法(cm)			備考	
						口径	標高	底径		
201	陶文土器・深鉢	東京 狛文二丁目・深鉢	弦纹縦貫沈羅文	精良	黒褐色	-	[8.8]	-		
202	陶文土器・深鉢	東京 狛文二丁目・深鉢	精良	精良	褐色	-	[7.3]	-		
203	陶文土器・深鉢	Ⅱ区 狛文二丁目・深鉢	弦文	精良	褐色	-	[4.7]	-		
204	陶文土器・深鉢	Ⅱ区 狛文二丁目・深鉢 (追削形)	弦文	精良	灰褐色	-	[5.5]	-		
205	陶文土器・深鉢	Ⅱ区 狛文二丁目・深鉢	半纏竹管沈羅文 刺突文	やや粗	褐灰色	-	[6.8]	-		
206	陶文土器・深鉢	Ⅱ区 狛文二丁目・深鉢	沈羅文	やや粗	褐灰色	-	[6.2]	-		
207	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢 P5d1	弦文縦貫1・弦文縦貫2(直 P5d1)	粗	褐色	67.0	[22.1]	-		
208	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢 P5d1	弦文縦貫1・弦文縦貫2(直 P5d1)	精良	にふい・黄褐色	67.0	[18.4]	-		
209	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	弦文縦貫2(直P2d)	難窓(軋突あり)	精良	黒褐色～にふい・褐色	-	[6.7]	-	
210	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	粘土縫貼付文	精良	にふい・黄褐色	-	[8.4]	-		
211	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	粘土縫貼付文	精良	黒褐色～灰褐色	-	[7.6]	-		
212	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	粘土縫貼付文	精良	浅黄褐色	-	[4.2]	-		
213	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	粘土縫貼付文	精良	黒褐色	-	[4.9]	-		
214	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	地文のみ(繩文)	精良	黒褐色	-	[6.2]	-		
215	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	地文のみ(繩文)	精良	黒褐色～褐色	62.0	[16.9]	-		
216	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	縫襻(麻あわり)	非常に精良	黒褐色	24.0	[18.7]	-	胎土に極微量の纖維合む。	
217	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	地文のみ(繩文)	やや粗	にふい・黄褐色～褐色	-	[13.5]	-		
218	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	沈羅文	精良	にふい・黄褐色	-	[5.2]	-		
219	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	沈羅文	精良	褐色	-	[5.6]	-		
220	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	沈羅文	精良	黒褐色	-	[7.4]	-		
221	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	弦文縦貫2(直P5d2)	不明	精良	黒褐色	-	[2.0]	[8.0]	
222	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	弦文縦貫2(直P5d2) 桃山 面(直P5d2)	沈羅文、刺突文	精良	黒褐色	-	[6.7]	-	縫状空松。
223	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	弦文縦貫2(直P5d2)	精良	17.0	にふい・黄褐色	-	[10.8]	-	胎土に極微量の纖維合む。
224	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	不明	非常に精良	褐色	-	[2.4]	[6.0]		
225	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	沈羅文	非常に精良	黒褐色	-	[4.7]	-		
226	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	地文のみ(繩文)	粗	黒褐色～褐色	-	[8.5]	-		
227	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	地文のみ(繩文)	精良	褐灰色	-	[5.0]	-		
228	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	丸文	やや粗	灰褐色	-	[5.8]	-		
229	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	粘土縫貼付文	精良	褐灰色	-	[7.8]	-		
230	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	地文のみ(繩文)	精良	褐灰色	-	[5.3]	-		
231	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	粘土縫貼付文	精良	褐灰色	-	[4.2]	-		
232	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	粘土縫貼付文	精良	にふい・黄褐色	-	[6.8]	-		
233	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	白線部巻き加飾	精良	17.0	にふい・黄褐色	-	[3.8]	-	
234	陶文土器・深鉢 (追削形)	I区 狛文二丁目・深鉢	内形・帯状筋貼付文	精良	黒褐色～褐色	Ø0.8	[24.6]	-	4単位の波状口縁。	
235	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	粘土縫貼付文	精良	黑色	-	[6.8]	-		
236	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	不明	非常に精良	褐色	-	[5.4]	[8.8]		
237	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	不明	非常に精良	褐灰色～褐色	-	[3.6]	[12.0]		
238-1	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	弦文縦貫2(直P3d)	精良	にふい・黄褐色	-	[7.3]	-	縫孔あり。	
238-2						-	[11.7]	-		
239	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	弦文縦貫2(直P3d)	精良	褐灰色	-	[4.7]	-		
240	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	白線部巻き加飾	精良	褐灰色	-	[4.3]	-		
241	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	粘土縫貼付文	精良	赤褐色	-	[16.4]	-		
242	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	不明	精良	褐色	-	[5.6]	[11.4]	底部に網代模様あり。	
243	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	地文のみ(繩文)	精良	褐灰色	-	[8.9]	-	口縁部と全体で異なる纖維化 体。胎土に微量の纖維合む。	
244	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	粘土縫貼付文	精良	褐灰色	-	[10.2]	-		
245	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	地文のみ(繩文)	精良	褐色	[16.8]	[12.5]	-	胎土に多量の纖維を含む。	
246	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	粘土縫貼付文	精良	にふい・黄褐色	-	[5.8]	-	粘土縫貼付文は一部剥落。	
247	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	沈羅文(直P3e) 直唇(大 沈羅文、竹管による る凹溝)	精良	黒褐色	-	[6.2]	-		
248	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	粘土縫貼付文(火山 灰柱上)	精良	にふい・黄褐色	-	[8.4]	-		
249	陶文土器・深鉢	I区 狛文二丁目・深鉢	沈羅文、竹管による る凹溝	精良	褐灰色	-	[5.0]	-		

表3 掘載遺物一覧(土器)

No.250 ~ 299

開 紙 No.	種別	出土状況 地図	文様	胎土	色調	寸法(cm)			備考
						口徑	脚高	底径	
250	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 東端上層) (火山灰土上)	虎斑文、内面に墨手印	精良	褐灰色	—	[4.4]	—	
251	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 東端上層) (火山灰土上)	粘土研磨付文 (削みあわし)	精良	褐灰色	—	[8.3]	—	胎土に微量の纖維含む。
252	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 東端上層) (火山灰土上)	口縁部に削み	精良	褐色	—	[5.5]	—	胎土に微量の纖維含む。
253	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 東端上層) (火山灰土上)	粘土研磨付文 (削みあわし)	精良	褐灰色	—	[4.2]	—	
254	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 東端上層) (火山灰土上)	粘土研磨付文	精良	褐灰色	[26.1]	[5.9]	—	
255	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅱ層) (火山灰土上)	地表のみ (虎斑)	精良	褐灰色	—	[13.6]	—	胎土に少量の纖維含む。
256	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅱ層) (火山灰土上)	表面に精良	精良	褐灰色	[20.4]	[10.2]	—	
257	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅱ層) (火山灰土上)	粘土研磨付文 (削みあわし)	中や粗	褐灰色	—	[14.8]	—	
258	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅱ層) (火山灰土上)	削みあわし	精良	褐灰色～灰褐色	[11.6]	[10.9]	—	精孔孔あり。
259	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅱ層) (火山灰土上)	粘土研磨付文	精良	褐灰色	—	[8.3]	—	
260	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅱ層) (火山灰土上)	(虎斑文)	精良	褐灰色	—	[9.3]	—	
261	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅱ層) (火山灰土上)	粘土研磨付文 (削みあわし)	精良	褐灰色	—	[3.0]	—	
262	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅱ層) (火山灰土上)	不明	普通	褐灰色～褐色	—	[3.1]	6.4	底部に本革柄あり。
263	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅱ層) (火山灰土上)	前田洋介う粘土研磨付文 (削みあわし) レンガ	普通	褐色～灰褐色	[25.0]	[19.7]	—	
264	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅱ層) (火山灰土上)	地表のみ (虎斑)	小や粗	明小粒～厚色	—	[10.2]	[17.0]	底部に本革柄あり。
265	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅱ層) (火山灰土上)	粘土研磨付文	精良	褐灰色	—	[9.2]	—	
266	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅱ層) (火山灰土上)	削みあわし	精良	褐灰色	—	[4.3]	—	口縁の突出部分。
267	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅱ層) (火山灰土上)	粘土研磨付文	精良	褐灰色	—	[6.4]	—	
268	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅱ層) (火山灰土上)	前田洋介う粘土研磨付文 (削みあわし)	普通	褐灰色～褐色	—	[28.0]	—	胎土に微量の纖維含む。
269	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅱ層) (火山灰土上)	粘土研磨付文	精良	褐灰色	—	[6.3]	—	纖維。
270	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅱ層) (火山灰土上)	粘土研磨付文 (削みあわし)	精良	褐灰色	—	[8.3]	—	胎土に微量の纖維含む。
271	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅱ層) (火山灰土上)	(虎斑文)	普通	褐灰色～黒褐色	—	[6.1]	—	胎土に微量の纖維含む。
272	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅱ層) (火山灰土上)	粘土研磨付文 (削みあわし)	普通	褐灰色	[22.8]	[12.2]	—	胎土に纖維を含む。1箇所底成形の穿孔なり。
273	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅱ層) (火山灰土上)	千葉竹質沈文	精良	褐灰色～黒褐色	—	[8.6]	—	胎土に多量の纖維を含む。2箇所同一個体。
274	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅱ層) (火山灰土上)	不明	精良	褐色	—	[2.4]	[10.0]	
275	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅱ層) (火山灰土上)	地表のみ (虎斑)	小や粗	明小粒～厚色	—	[13.0]	—	胎土に多量の纖維を含む。
276	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅱ層) (火山灰土上)	千葉竹質沈文	精良	褐灰色	—	[12.1]	—	胎土に多量の纖維を含む。2箇所同一個体。
277	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅱ層) (火山灰土上)	粘土研磨付文	精良	褐灰色	—	[9.4]	—	胎土に少量の纖維を含む。
278	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 東端上レンガ) (遺物334)	不明	精良	褐色	—	[3.2]	[9.2]	
279	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 東端上レンガ) (遺物334、437、461)	壁帶 (剥落あり)	精良	褐灰色	[23.7]	[13.0]	—	胎土に多量の纖維を含む。
280	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 東端上レンガ) (遺物334)	沈文	精良	褐色	—	[9.1]	—	
281	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅲ層) (火山灰土上)	(虎斑文)	精良	褐灰色	—	[15.3]	—	胎土に多量の纖維を含む。
282	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅲ層) (火山灰土上)	千葉竹質沈文	精良	褐灰色	—	[12.0]	—	胎土に多量の纖維を含む。
283	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅲ層) (火山灰土上)	不明	精良	褐色	—	[6.5]	[14.8]	
284	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅲ層) (火山灰土上)	5号直底沈文	精良	褐灰色	—	[5.5]	—	胎土に多量の纖維を含む。
285	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅲ層) (火山灰土上)	粘土研磨付文	普通	褐灰色	—	[3.2]	—	
286	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅲ層) (火山灰土上)	壁帶 (剥落あり)	小や粗	厚色	—	[7.0]	—	
287	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅲ層) (火山灰土上)	不明	普通	褐灰色	—	[3.3]	[7.9]	
288	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅲ層) (火山灰土上)	千葉竹質沈文	普通	褐灰色	—	[7.0]	—	胎土に少量の纖維を含む。
289	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅲ層) (火山灰土上)	地表のみ (虎斑)	普通	褐灰色～褐色	—	[5.6]	[9.7]	
290	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅲ層) (火山灰土上)	壁帶 (剥落あり)	精良	褐色～厚色	—	[6.2]	[14.9]	
291	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅲ層) (火山灰土上)	粘土研磨付文 (削)	精良	褐灰色	—	[6.3]	—	
292	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅲ層) (火山灰土上)	不明	精良	褐灰色	—	[2.1]	[6.0]	
293	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅲ層) (火山灰土上)	壁帶 (削みあり)	精良	褐色	—	[4.0]	—	胎土に少量の纖維を含む。
294	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅲ層) (火山灰土上)	粘土研磨付文 (削みあり)	精良	褐灰色～灰褐色	—	[4.9]	—	
295	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅲ層) (火山灰土上)	虎斑文	精良	褐灰色	—	[4.0]	—	
296	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅲ層) (火山灰土上)	沈文	精良	褐灰色～黒褐色	—	[8.3]	—	
297	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅲ層) (火山灰土上)	壁 (剥落)	精良	褐灰色	—	[4.2]	—	
298	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅲ層) (火山灰土上)	虎斑文、削み文	精良	褐灰色	—	[5.6]	—	
299	陶土器・深鉢	1区 (玄含層2 [墨手印] Ⅲ層) (火山灰土上)	壁 (削みじり)	普通	褐灰色	[26.8]	[5.0]	—	

表3 掘載遺物一覧(土器)

No.300～332

開 戻 No.	種別	出土状況	文様	胎土	色調	寸法(cm)			備考
						口径	厚さ	底径	
300	縄文土器・深鉢 直径	施工理上層下層	沈縄文	精良	淡黄褐色～褐色	112.5	—	—	
301	縄文土器・深鉢 直径	施工理上層・直	沈縄文	精良	淡黄褐色～褐色	(19.3)	16.6	—	
302	縄文土器・深鉢 直径	施工理上層位(黒)	沈縄文、利剪文	精良	褐色	—	[7.1]	—	
303	縄文土器・深鉢 直径	施工理上層位(黒)	沈縄文、利剪文	精良	褐色	—	[11.9]	—	
304	縄文土器・深鉢 直径	住居跡自極出面	沈縄文	やや粗	褐色～褐色	—	[3.7]	—	
305	縄文土器・深鉢 直径	住居跡自極出面	沈縄文	やや粗	褐色	—	[5.9]	—	胎土に少量の纏織を含む。
306	縄文土器・深鉢 直径	住居跡自極出面	沈縄文	非常に精良	にふい黃褐色	—	[6.8]	—	
307	縄文土器・浅 B区	住居跡B極出面	陸帶(鉛突あり)	精良	にふい黃褐色	—	[5.8]	—	
308	縄文土器・深鉢 直径	住居跡自極出面	沈縄文	精良	褐色	—	[5.9]	—	胎土に極微量の纏織含む。
309	縄文土器・深鉢 直径	住居跡自極出面	沈縄文	精良	褐色	—	[6.8]	—	胎土に極微量の纏織含む。
310	縄文土器・深鉢 直径	住居跡自極出面	沈縄文、建縫	精良	褐色	(22.8)	5.6	—	
311	縄文土器・深鉢 直径	住居跡自極出面	地文のみ(縄文)	精良	褐色	(12.1)	[9.9]	—	
312	縄文土器・深鉢 直径	住居跡自極出面	沈縄文、粘土研磨付文	精良	褐色	—	[8.8]	—	
313	縄文土器・深鉢 直径	住居跡自極出面	粘土研磨付文	やや粗	褐色	—	[4.7]	—	
314	縄文土器・深鉢 直径	メインベルト上層	滑び粘土研磨付文(鉛突あり)	精良	にふい黃褐色	—	[9.9]	—	
315	縄文土器・深鉢 直径	メインベルト上層	鉛帶(鉛突あり)	精良	褐色	—	[31.2]	—	小さい液沈口印。
316-1	縄文土器・深鉢 直径	メインベルト上層	粘土研磨付文	やや粗	褐色	—	[14.6]	—	
316-2	縄文土器・深鉢 直径	—	—	—	—	—	[7.6]	—	
317	縄文土器・深鉢 直径	メインベルト上層	地文のみ(縄文)	精良	褐色	—	[9.9]	[13.0]	
318	縄文土器・深鉢 直径	—	—	—	—	—	[17.4]	[19.9]	—
319	縄文土器・深鉢 直径	メインベルト上層	手形竹管沈縄文、隆起(鉛突あり)	やや粗	褐色	(18.8)	[9.2]	—	
320	縄文土器・深鉢 直径	—	地文のみ(熱系文)	やや粗	褐色	—	[5.6]	[11.4]	
321	縄文土器・深鉢 直径	—	メインベルト上層	不明	精良	褐色	—	[1.8]	—
322	縄文土器・深鉢 直径	—	メインベルト上層	不明	粗	淡黄褐色	—	[11.1]	[10.6]
323	縄文土器・深鉢 直径	—	メインベルト上層	地文のみ(熱系文)	粗	褐色	—	[13.0]	—
324	縄文土器・深鉢 直径	—	メインベルト上層	粘土研磨付文	精良	淡黄褐色～褐色	—	[19.0]	—
325	縄文土器・深鉢 直径	—	—	—	—	—	[2.9]	[6.0]	口縁部突起あり。
326	縄文土器・深鉢 1区	私鉢部1層	手形竹管沈縄文、利剪文	精良	褐色	—	[3.9]	—	
327	縄文土器・深鉢 1区	—	鉛頭鉢表土～極粗	粘土研磨付文	非常に精良	褐色	—	[8.8]	—
328	縄文土器・深鉢 1区	鉛頭鉢表土～極粗	粘土研磨付文	非常に精良	褐色	—	[15.2]	—	
329	縄文土器・深鉢 1区	極粗	沈縄文	非常に精良	淡黄褐色	—	[7.4]	—	
330	縄文土器・深鉢 1区	表土	粘土研磨付文	精良	褐色	—	[7.2]	—	
331	縄文土器・深鉢 1区	塊見	粘土研磨付文	精良	褐色	—	[16.3]	—	塊状突起あり。
332	縄文土器・深鉢 1区	—	内側見込みに支模らしき色調変化	非常に精良	乳白色	—	[1.6]	[6.2]	内側面施釉。

表4 掘載遺物一覧(土製品)

No.333～335

開 戻 No.	種別	出土状況	文様	胎土	色調	寸法(cm)			備考
						長さ	幅	厚さ	
333	土器	直区	施合壁1(住居跡直) 施縄文	非常に精良	褐色	(4.6)	5.2	1.7	下半身のみ飾出し。
334	円錐形土製品	直区	住居跡自極出面	精良	黃褐色	3.5	3.1	1.1	上部分を西利用したもの。
335	円錐形土製品	直区	包含層1、直層1直	精良	黑褐色	5.3	5.5	1.0	下部分を再利用したもの。

表の凡例

胎土	「非常に精良」<「精良」<「やや粗」<「粗」
色調	外側の色調を標準色調にして比較
寸法	() 内の値→推定・復元値
	[] 内の値→残存値

表5 掘載遺物一覧（石器・石製品）

No.336～402

測量 No.	種別	地区	出土状況 （遺構・位置・層位）	寸法 (cm)			重量 (g)	石質・石材	備考
				長さ	幅	厚さ			
336	石器	聖火住居 5 棟共用		2.70	1.70	0.50	1.6	頁岩	
337	石器	聖火住居 5-1 地上土層		3.00	1.80	0.70	3.0	頁岩	
338	石器	聖火住居 5 棟共用 SII 分	[2.2]	[1.7]	0.50	1.1	頁岩		
339	石器	聖火住居 5-1 地上土層 SIII 分	2.70	1.80	0.50	1.8	頁岩		
340	石器	聖火住居 5-1 地上土層 SIV 分	[3.2]	1.50	0.30	1.5	頁岩		
341	石器	聖火住居 7A-A' ベルト土層	2.30	1.30	0.40	1.5	頁岩		
342	石器	聖火住居 8 番上層	[3.0]	1.80	0.80	3.8	端灰岩？		
343	石器	聖火住居 13 並立東側上層	[2.2]	1.50	0.30	1.0	端灰岩？		
344	石器	聖火住居 15 棟上土層	3.50	2.40	1.00	7.3	頁岩		
345	石器	聖火住居 15 棟上 5 層目	2.80	[1.3]	0.60	1.7	頁岩		
346	石器	聖火住居 15 棟上 5 層目	[2.1]	1.40	0.30	1.0	頁岩		
347	石器	聖火住居 15A-AA' ベルト土層	[2.1]	[1.2]	0.40	0.9	頁岩		
348	石器	聖火住居 13B-E-B' ベルト土層上層	1.80	1.60	0.30	0.9	頁岩		
349	石器	聖火住居 13B-E-B' ベルト土層上層	[3.6]	1.60	0.60	3.5	頁岩		
350	石器	聖火住居 13 外側南端溝西壁上	1.90	1.50	0.40	1.1	頁岩		
351	石器	聖火住居 15 並立東側	3.30	2.00	0.50	3.4	頁岩		
352	石器	聖火住居 20 棟共用	2.70	[1.8]	0.50	1.7	頁岩		
353	石器	聖火住居 20B(B') ベルト (SII 層上 21 層目)	3.10	1.40	0.30	1.4	頁岩		
354	石器	Ⅱ区 前蔵穴 2	2.40	1.40	0.50	1.4	頁岩		
355	石器	前蔵穴 2 横断面	[2.2]	1.50	0.40	1.2	頁岩		
356	石器	前蔵穴 3 地理上	3.50	1.40	0.50	1.7	頁岩		
357	石器	前蔵穴 3 地上土層	[2.7]	[1.9]	0.50	1.4	頁岩		
358	石器	前蔵穴 4 地理上土層	2.80	1.90	0.60	2.7	頁岩		
359	石器	前蔵穴 4 横断面	3.70	2.30	0.90	7.4	頁岩		
360	石器	前蔵穴 4 横断面	[2.7]	2.00	0.50	1.8	頁岩		
361	石器	前蔵穴 4 横断面	2.70	1.60	0.30	0.9	頁岩		
362	石器	前蔵穴 4 横断面	[3.6]	1.70	0.50	2.2	頁岩		
363	石器	前蔵穴 4 横断面	[2.9]	1.70	0.40	1.7	頁岩		
364	石器	前蔵穴 4 地上土層	[2.1]	1.90	0.40	1.4	頁岩		
365	石器	前蔵穴 4 地理上土層	2.50	2.00	0.40	1.9	頁岩		
366	石器	前蔵穴 4 (廻) 地上土層	3.00	1.50	0.30	1.0	頁岩		
367	石器	上坑 3 地理上土層	3.20	1.80	0.50	2.0	頁岩		
368	石器	上坑 10	[2.9]	[2.0]	0.50	2.2	頁岩		
369	石器	上坑 16 地理上	[4.8]	[2.0]	0.50	4.2	頁岩		
370	石器	上坑 24 地理上	[2.8]	1.60	0.40	2.2	頁岩		
371	石器	上坑 24 地理上	[3.1]	2.10	0.50	2.8	頁岩		
372	石器	上坑 29 地理上	[1.9]	1.70	0.40	1.1	頁岩		
373	石器	上坑 36 地理上 BII 層上層	[2.6]	1.30	0.60	1.4	頁岩		
374	石器	柱穴 1 地上	3.50	2.00	0.80	4.7	頁岩		
375	石器	柱穴 19 地上	2.00	1.90	0.30	1.0	頁岩		
376	石器	Ⅲ区 周穴 1 地理上	[3.6]	2.20	0.50	2.9	頁岩		
377	石器	Ⅲ区 周穴 23 地理上土層	[2.1]	1.50	0.40	1.0	頁岩		
378	石器	Ⅲ区 齐穴 100 地上	2.50	1.90	0.40	1.7	頁岩		
379	石器	Ⅲ区 齐穴 101 地理上	[2.5]	[1.3]	0.50	1.3	頁岩		
380	石器	Ⅲ区 齐穴 1 地理上	[3.1]	[2.2]	0.60	3.7	頁岩		
381	石器	Ⅲ区 齐穴 1 地理上	[2.6]	1.60	0.30	1.0	頁岩		
382	石器	Ⅲ区 齐穴 1 地理上	[2.4]	1.60	0.40	1.4	頁岩		
383	石器	Ⅲ区 齐穴 1 地理上	[3.5]	[1.8]	0.50	2.5	頁岩		
384	石器	Ⅲ区 齐穴 1 地理上	2.40	1.80	0.50	2.0	頁岩		
385	石器	Ⅲ区 齐穴 1 地理上土層	[3.2]	1.90	0.60	3.7	頁岩		
386	石器	Ⅲ区 齐穴 1 地理上土層	2.60	2.10	0.60	2.0	頁岩		
387	石器	Ⅲ区 齐穴 1 地理上土層	[2.8]	1.50	0.60	2.5	頁岩		
388	石器	Ⅲ区 齐穴 1 地理上土層	4.30	2.10	0.60	5.7	頁岩		
389	石器	Ⅲ区 齐穴 1 地理上土層	[2.4]	1.90	0.50	2.6	頁岩		
390	石器	Ⅲ区 齐穴 1 地理上土層	[2.6]	1.50	0.40	1.1	頁岩		
391	石器	Ⅲ区 齐穴 1 地理上土層	[2.5]	1.40	0.40	1.3	頁岩		
392	石器	Ⅲ区 齐穴 1 地理上土層	[2.3]	[1.7]	0.40	1.3	頁岩		
393	石器	Ⅲ区 齐穴 1 地理上土層	[3.3]	[1.7]	0.50	1.8	頁岩		
394	石器	Ⅲ区 齐穴 1 地理上土層	2.30	1.80	0.30	1.5	頁岩		
395	石器	Ⅲ区 齐穴 1 地理上土層	2.50	1.60	0.60	1.5	頁岩		
396	石器	Ⅲ区 齐穴 1 地理上土層	3.00	1.80	0.50	2.2	頁岩		
397	石器	Ⅲ区 齐穴 1 地理上土層	[2.6]	[2.1]	0.30	1.5	頁岩		
398	石器	Ⅲ区 齐穴 1 地理上土層	[3.3]	[1.8]	0.40	1.4	頁岩		
399	石器	Ⅳ区 (追合層 1) (遺物集中範囲) 並層上層	2.80	1.50	0.40	1.5	頁岩		
400	石器	Ⅳ区 (追合層 1) (遺物集中範囲) 並層上層	[2.3]	1.80	0.40	1.7	頁岩		
401	石器	Ⅳ区 (追合層 1) (遺物集中範囲) 並層上層	[2.6]	1.40	0.20	1.1	頁岩		
402	石器	Ⅳ区 (追合層 1) (遺物集中範囲) 並層上層	[2.6]	1.20	0.30	1.3	頁岩		

表5 掘載遺物一覧（石器・石製品）

No.403～469

開闢 No.	種別	地区	遺物名・位置・層位	寸法(cm)			重量(g)	石質・石材	備考
				長さ	幅	厚さ			
403	石器	Ⅱ区	包含層1（遺物集中範囲）・黒層上段	[25]	130	0.90	1.0	頁岩	
404	石器	Ⅱ区	包含層1（遺物集中範囲）・黒層下段	[30]	130	0.80	2.4	頁岩	
405	石器	Ⅰ区	包含層2（東側）・黒層	[29]	120	0.30	1.5	頁岩	
406	石器	Ⅰ区	包含層2（東側）・黒層	[29]	130	0.50	3.1	頁岩	
407	石器	Ⅰ区	包含層2（東F1C）・黒層	[24]	[16]	0.30	0.9	頁岩	
408	石器	Ⅰ区	包含層2（東F1d）・黒層	[22]	160	0.60	2.0	頁岩	
409	石器	Ⅰ区	包含層2（東F1d）・黒層	[20]	160	0.30	1.0	頁岩	
410	石器	Ⅰ区	包含層2（E F1d）・黒層下段	[35]	210	0.80	5.5	頁岩	
411	石器	Ⅰ区	包含層2（E F2d）・黒層	[38]	220	0.60	4.1	頁岩	
412	石器	Ⅰ区	包含層2（E F2d）・黒層	[25]	150	0.30	0.9	頁岩	
413	石器	Ⅰ区	包含層2（E F2e）・黒層	[24]	180	0.50	1.4	頁岩	
414	石器	Ⅰ区	包含層2（E F2f）・黒層	[26]	200	0.60	2.3	頁岩	
415	石器	Ⅰ区	包含層2（E F2f）・黒層	[25]	140	0.20	0.9	頁岩	
416	石器	Ⅰ区	包含層2（E F3e）・黒層	[37]	190	0.50	2.5	頁岩	
417	石器	Ⅰ区	包含層2（E F3e）・黒層下段	[31]	170	0.40	1.7	頁岩	
418	石器	Ⅰ区	包含層2（E F5d）・黒層	[19]	150	0.10	1.3	頁岩	
419	石器	Ⅰ区	包含層2（E F5d）・黒層	[30]	150	0.60	3.0	頁岩	
420	石器	Ⅰ区	包含層2（E F5d）・黒層	[19]	160	0.50	1.2	頁岩	
421	石器	Ⅰ区	包含層2（E F5e）・黒層	[25]	170	0.60	2.0	頁岩	
422	石器	Ⅰ区	包含層2（E F5e）・黒層	[22]	140	0.40	1.1	頁岩	
423	石器	Ⅰ区	包含層2（E F7e）・黒層	[31]	140	0.40	1.7	頁岩	
424	石器	Ⅰ区	包含層2（E F10e）・黒層	[29]	190	0.30	1.8	頁岩	
425	石器	Ⅰ区	包含層2（E F10e）・黒層	[25]	150	0.60	2.0	頁岩	
426	石器	Ⅰ区	包含層2（E F10e）・黒層	[24]	180	0.30	1.5	頁岩	
427	石器	Ⅰ区	包含層2（E F5b）・黒層	[18]	160	0.30	0.9	頁岩	
428	石器	Ⅰ区	包含層2（E F5b）・黒層	[22]	140	0.50	1.3	頁岩	
429	石器	Ⅰ区	メイパンベント・東側表土・椚出面	[4.9]	120	0.60	4.0	頁岩	
430	石器	Ⅰ区	メイパンベント・東側表土・椚出面	[28]	170	0.50	2.0	頁岩	
431	石器	Ⅰ区	メイパンベント・北側表土	[24]	170	0.40	1.2	頁岩	
432	石器	Ⅰ区	メイパンベント・椚出面	[25]	170	0.50	2.0	頁岩	
433	石器	Ⅰ区	メイパンベント・南側表出面	[31]	150	0.40	2.1	頁岩	
434	石器	Ⅰ区	メイパンベント・中後表土	[34]	190	0.50	2.6	頁岩	
435	石器	Ⅰ区	メイパンベント・南側表出面	[47]	260	0.60	6.2	頁岩	
436	石器	Ⅰ区	メイパンベント・椚出面	[21]	180	0.50	1.5	頁岩	
437	石器	Ⅰ区	メイパンベント・南側表出面	[32]	140	0.30	1.9	頁岩	
438	石器	Ⅰ区	メイパンベント・未端	[22]	130	0.50	1.2	頁岩	
439	石器	Ⅰ区	メイパンベント・未端	[21]	150	0.30	1.2	頁岩	
440	石器	Ⅰ区	メイパンベント・未端	[17]	130	0.60	0.9	黒曜石	
441	石器	Ⅰ区	メイパンベント・未端	[30]	190	0.40	2.7	頁岩	
442	石器	Ⅰ区	メイパンベント	[29]	150	0.50	2.0	頁岩	
443	石器	Ⅰ区	メイパンベント	[42]	190	0.60	3.8	頁岩	
444	石器	Ⅰ区	住居群B 植出面	[3.3]	140	0.40	1.7	頁岩	
445	石器	Ⅰ区	住居群B 表土	[31]	[26]	0.40	3.2	頁岩	
446	石器	Ⅰ区	住居群B-1 植出面	[26]	160	0.30	1.1	頁岩	
447	石器	Ⅰ区	住居群A 植出面	[1.9]	120	0.30	1.0	頁岩	
448	石器	Ⅰ区	住居群B-1・レンガ・椚出面	[3.2]	[1.7]	0.40	2.2	頁岩	
449	石器	Ⅰ区	植出面	[3.1]	160	0.30	2.1	頁岩	
450	石器	Ⅰ区	南側表出面	[4.4]	240	0.90	7.0	頁岩	
451	石器	Ⅰ区	住居群A 植出面	[2.4]	160	0.40	1.7	頁岩	
452	石器	Ⅰ区	斜面側表土・椚出面	[3.0]	240	0.60	4.1	頁岩	
453	石器	Ⅰ区	包含層2・ペルト・黒	[1.2]	150	0.30	0.4	頁岩	
454	石器	Ⅰ区	II層	[30]	200	0.60	4.0	頁岩	
455	石器	Ⅰ区	灰瓦2	[5.6]	180	0.50	4.4	頁岩	
456	石器	Ⅰ区	灰瓦2・下流	[2.1]	120	0.30	0.7	頁岩	
457	石器	Ⅰ区	灰瓦2	[2.9]	[1.7]	0.40	2.1	チャート	
458	石器	Ⅰ区	灰瓦3	[3.3]	180	0.40	2.1	頁岩	
459	石器	~	不明（表探）	[1.9]	[1.4]	0.40	0.8	頁岩	
460	石器	~	陶瓦	[3.5]	[1.7]	0.50	2.0	頁岩	
461	石器	Ⅰ区	表土	[2.6]	140	0.40	1.5	頁岩	
462	石器	Ⅰ区	表土	[2.3]	170	0.30	2.0	頁岩	
463	石器	Ⅰ区	表土	[2.2]	140	0.50	1.6	頁岩	
464	石器	Ⅰ区	表土	[2.3]	150	0.30	0.8	頁岩	
465	石器	Ⅰ区	表土	[2.7]	200	0.40	2.5	頁岩	
466	石器	~	表探	[2.2]	150	0.30	1.2	頁岩	
467	石器	~	表探	[2.1]	170	0.30	1.6	頁岩	
468	石器	~	堅穴住居11号・上下層	[6.5]	300	0.60	13.7	頁岩	
469	石器	~	堅穴1	[5.2]	220	0.90	14.5	頁岩	

表5 掘載遺物一覧（石器・石製品）

No.470～536

編號 No.	種別	出土状況			寸法(cm)	重量(g)	石質・石材	備考
		地区	遺構・位置・層位	長さ	幅	厚さ		
470	石器	豊島穴3横面削	生坑42埋土	230	130	0.40	1.8	青石
471	石器	豊島穴3横面削	生坑42埋土	450	200	0.50	6.2	青石
472	石器	豊島1埋土上位		510	260	0.80	9.5	青石
473	石器	豊島1埋土上位		370	[24]	0.50	3.8	青石
474	石器	豊島1埋土上位		820	370	1.20	35.3	青石
475	石器	豊島1埋土上位	玄合層1(中央基壇)	370	120	0.60	2.6	チャード
476	石器	豊島1埋土上位	玄合層1(中央基壇)	500	[16]	0.60	4.5	青石
477	石器	豊島1埋土上位	玄合層1(中央基壇)	590	390	1.00	21.6	青石
478	石器	工区 造作壁(東面) 壁端		380	390	0.60	7.2	青石
479	石器	豊島1埋土上位(F5)	壁端	730	260	1.00	13.7	青石
480	石器	豊島1埋土上位(F5)	壁端	490	[29]	0.40	2.1	青石
481	石器	工区 浴槽(中央) 横面削出		360	[40]	0.20	9.4	青石
482	石器	豊島1埋土上位	洞開トレンチ下層	630	580	1.00	22.8	青石
483	石器	豊島1埋土上位	洞開トレンチ下層	130	190	0.50	3.7	青石
484	石器	豊島1埋土上位		110	230	0.60	2.7	青石
485	石器	豊島1埋土上位		390	460	1.00	25.1	青石
486	天頭器	豊穴住居11埋土上位		[31]	240	0.60	4.2	青石
487	天頭器	豊穴住居13北横埋土上位		1650	330	1.20	82.2	青石
488	天頭器	豊島穴3埋土上位		390	310	0.90	9.8	青石
489	天頭器	豊島穴3埋土上位(赤)		330	250	0.90	6.7	青石
490	天頭器	豊島1埋土上位		500	290	0.90	12.8	青石
491	天頭器	豊島1埋土上位		720	160	0.60	7.6	青石
492	天頭器	豊島1埋土上位(造物集中範囲) 豊1基壇		670	240	1.50	23.1	青石
493	天頭器	豊島1埋土上位(造物集中範囲) 豊1基壇		350	230	0.60	4.4	青石
494	天頭器	豊島1埋土上位(F5C) 壁端下層		871	210	1.10	21.1	青石
495	天頭器	豊島1埋土上位	メイショルト基礎表面	141	330	0.20	30.4	青石
496	天頭器	豊島1埋土上位	メイショルト基礎表面	470	200	0.50	5.5	青石
497	天頭器	豊島1埋土上位	洞開トレンチ下層	460	220	1.30	15.1	青石
498	天頭器	豊島1埋土上位	中央表土～Ⅱ層	141	[14]	0.60	3.1	青石
499	天頭器	豊島1埋土上位	住居跡表土上	[17]	[16]	0.50	1.1	青石
500	石器	工区 造作壁(東面) 壁端		610	250	0.80	15.5	青石
501	石器	工区 造作壁(東面) 壁端		680	350	1.00	29.7	青石
502	スクレーパー	豊穴住居13埋土上位		820	390	1.30	36.9	青石
503	スクレーパー	豊島穴3埋土上位		370	300	0.90	9.5	青石
504	スクレーパー	豊穴1埋土上位		490	350	1.30	25.6	青石
505	スクレーパー	豊島1埋土上位		490	330	0.60	14.0	青石
506	スクレーパー	豊島1埋土上位	壁端上位	480	200	0.70	8.3	青石
507	スクレーパー	豊島1埋土上位		610	190	0.60	9.5	青石
508	スクレーパー	豊島1埋土上位(造物集中範囲) 壁端下層		410	300	0.90	12.5	青石
509	スクレーパー	豊島1埋土上位	メイショルト基礎表面	520	370	0.90	21.0	青石
510	スクレーパー	豊島1埋土上位	メイショルト基礎表面	300	320	0.60	5.8	青石
511	スクレーパー	豊島1埋土上位	メイショルト	580	280	0.90	16.0	青石
512	スクレーパー	豊島1埋土上位	住居跡表土	470	340	0.60	15.0	青石
513	スクレーパー	工区 横面削出		530	360	0.80	26.0	青石
514	スクレーパー	豊島1埋土上位		460	280	0.60	8.7	青石
515	Uフレ	豊島穴3埋土上位(赤)		[23]	260	0.50	3.1	青石
516	Uフレ	豊島穴3埋土上位		260	430	0.60	6.0	青石
517	Uフレ	豊島穴3埋土上位		400	230	0.40	3.0	青石
518	Uフレ	豊島穴3埋土上位		230	270	0.60	5.8	青石
519	Uフレ	豊島1埋土上位(造物集中範囲) 壁端下層		520	290	0.90	28.6	青石
520	Uフレ	豊島1埋土上位(造物集中範囲) 壁端下層		500	300	0.70	20.0	青石
521	Uフレ	豊島1埋土上位	洞開面表土インベントリ削出	300	190	0.40	2.0	青石
522	Uフレ	豊島1埋土上位	住居跡表土	160	220	0.30	0.9	青石
523	二次加工作調片	工区 造作壁(東面) 壁端		420	390	1.00	27.1	青石
524	打削石斧	豊島1埋土上位	玄合層1(豊P5) 壁端	780	390	2.00	72.3	青石
525	打削石斧	豊島1埋土上位	玄合層1(東面) 壁端	521	540	2.40	99.7	青石
526	打削石斧	豊島1埋土上位	洞開面表土	580	330	1.70	52.0	アサイド
527	打削石斧	豊島1埋土上位		690	[28]	320	66.2	板岩
528	打削石斧	豊島1埋土上位(造物集中範囲) 壁端下層		640	[29]	130	46.5	板岩
529	打削石斧	豊島1埋土上位(造物集中範囲) 壁端下層		141	400	250	45.5	板岩
530	打削石斧	豊島1埋土上位	洞開面表土(東面) 壁端大火炎上	885	520	300	249.4	板岩
531	打削石斧	豊島1埋土上位	中央表土	720	280	1.40	55.6	青石
532	打削石斧	豊島1埋土上位	洞開面表土	1100	580	3.30	299.8	洞開面表土
533	打削石斧	豊島1埋土上位	洞開面表土	1060	510	2.00	227.2	青石
534	磨石	豊穴住居5埋土上位	表土	925	550	4.96	219.8	板岩
535	磨石	豊穴住居5埋土上位	表土	1060	555	3.85	379.8	板岩
536	磨石	豊穴住居5埋土上位	A-Hベルト2層目	1160	820	4.35	659.8	板岩

表5 掘載遺物一覧（石器・石製品）

掘載 No.	種別	地区	出土状況			寸法(cm) 長さ 幅 厚さ	重量(g)	石質・石材	備考	
			遺構・位置・層位	層位	幅					
537	磨石	聖穴住居5北壁上層		8.75	6.00	4.00	3318	花崗岩		
538	磨石	聖穴住居5北壁上層		6.90	6.50	6.90	4308	花崗岩		
539	磨石	聖穴住居5北壁上層		8.20	5.70	4.50	3107	花崗岩		
540	磨石	聖穴住居5北壁上層		10.05	6.15	3.90	2445	花崗岩		
541	磨石	聖穴住居1上層		4.55	3.95	3.20	957	花崗岩		
542	磨石	聖穴住居1上層		10.10	7.10	3.10	4193	花崗岩		
543	磨石	聖穴住居1上層		8.15	10.35	3.90	4700	花崗岩		
544	磨石	聖穴住居1上層		9.20	8.00	3.55	4284	花崗岩		
545	磨石	聖穴住居1上層		13.35	5.10	5.00	5414	花崗岩		
546	磨石	聖穴住居1上層		11.60	9.75	6.60	10939	花崗岩		
547	磨石	聖穴住居13北西壁上層		3.15	2.90	2.70	328	花崗岩		
548	磨石	聖穴住居13北東壁上層		7.90	4.55	3.80	2082	花崗岩		
549	磨石	聖穴住居13北西壁上層		7.10	5.10	3.65	1940	花崗岩		
550	磨石	聖穴住居13北壁上層		8.20	5.00	3.85	2350	花崗岩		
551	磨石	聖穴住居13A北理上層		7.20	4.70	3.70	1928	花崗岩		
552	磨石	聖穴住居13A北理上層		6.35	4.25	3.90	1623	花崗岩		
553	磨石	聖穴住居13南西壁上層		6.75	5.15	4.80	2331	花崗岩		
554	磨石	聖穴住居13北東壁上層		11.60	7.00	4.25	5339	花崗岩		
555	磨石	聖穴住居13南西壁上層		8.40	5.65	6.90	4108	花崗岩		
556	磨石	聖穴住居13南西壁上層		13.00	8.70	5.00	8961	花崗岩		
557	磨石	聖穴住居13南西壁上層		13.70	5.50	3.85	3905	花崗岩		
558	磨石	聖穴住居15北端上層		7.15	4.80	3.30	1708	花崗岩		
559	磨石	聖穴住居15南端上層		7.40	5.00	4.05	2204	花崗岩		
560	磨石	聖穴住居17B北壁上層		8.25	7.45	5.30	4436	デイサイト		
561	磨石	聖穴住居17上層		6.20	5.25	4.60	3062	花崗岩		
562	磨石	聖穴住居17上層		13.55	8.95	8.10	14553	花崗岩		
563	特殊磨石	土坑	聖穴住居17上層		6.95	5.70	4.80	2910	花崗岩	
564	磨石	聖穴住居18上層		6.25	4.55	3.20	1374	花崗岩		
565	磨石	聖穴住居20中央面		8.70	7.55	5.70	5352	花崗岩		
566	磨石	聖穴住居20東側上層		10.35	5.40	5.00	3943	花崗岩		
567	磨石	聖穴住居20東側上層		22.80	7.75	6.55	17002	花崗岩		
568	特殊磨石	新竪穴	聖穴住居13上層		13.90	6.30	6.10	7631	花崗岩	
569	特殊磨石	新竪穴	聖穴住居13上層		13.65	6.45	3.70	832	花崗岩	
570	磨石	新竪穴	聖穴住居13上層		4.55	4.40	2.70	708	花崗岩	
571	磨石	土坑2側上層		10.50	6.00	3.80	3885	花崗岩		
572	磨石	土坑4側上層		11.00	5.80	4.20	3824	花崗岩		
573	磨石	土坑5側上層		9.10	4.25	3.30	1941	花崗岩		
574	磨石	土坑5側上層		6.75	5.75	4.00	2306	花崗岩		
575	磨石	土坑12側上層		8.50	6.85	5.10	4088	花崗岩		
576	磨石	土坑23側上層		9.90	5.40	4.20	3340	花崗岩		
577	磨石	土坑29側上層		13.10	6.20	3.05	3368	花崗岩		
578	磨石	土坑30側上層		10.40	9.60	5.55	795	花崗岩		
579	磨石	土坑30側上層		5.70	5.75	4.60	1808	デイサイト		
580	磨石	土坑35側上層		11.50	9.00	5.00	8271	花崗岩		
581	磨石	土坑36側上層		5.05	4.10	3.00	894	花崗岩		
582	磨石	土坑36B北理上層		6.20	5.60	4.90	2414	花崗岩		
583	磨石	土坑36B北理上層		9.45	7.80	4.95	5061	花崗岩		
584	磨石	區區1埋上層		14.35	7.05	6.25	8533	花崗岩		
585	磨石	區區1埋上層		16.25	7.45	4.45	7072	デイサイト		
586	石斧	區區1埋上層		3.75	5.15	2.20	523	デイサイト		
587	凹石1磨石	區區1埋上層		8.10	5.05	3.70	1860	デイサイト		
588	磨石	區區1埋上層		2.80	7.10	4.45	3623	花崗岩		
589	磨石	區區1埋上層		8.50	7.60	4.20	4544	花崗岩		
590	磨石	區區1埋上層		13.85	5.55	3.10	2762	デイサイト		
591	門石	區區1埋上層		9.85	6.55	2.20	1899	デイサイト		
592	磨石	E区1埋上層		9.90	7.20	3.80	4324	花崗岩		
593	磨石	E区1埋上層		10.50	7.40	6.00	7028	花崗岩		
594	磨石	E区1埋上層		7.60	7.40	2.85	2708	花崗岩		
595	凹石1磨石	E区1埋上層		9.60	7.85	4.10	4567	デイサイト		
596	凹石1磨石	E区1埋上層		10.65	8.65	4.20	5128	花崗岩		
597	磨石	E区1埋上層		6.85	6.15	2.65	1826	花崗岩		
598	磨石	E区1埋上層		4.70	4.10	3.65	978	花崗岩		
599	磨石	E区1埋上層		11.70	7.10	4.20	5849	花崗岩		
600	磨石	E区1埋上層		17.80	8.70	6.65	15032	花崗岩		
601	磨石	1区1區合體2(II F4e) 豆瓣下位		12.50	3.80	3.45	2631	頬粒閃緑岩		
602	磨石	1区1區合體2(II F4e) 豆瓣下位		5.70	5.85	5.40	2004	デイサイト		
603	磨石	1区1區合體2(II F4e) 豆瓣下位		10.40	5.80	3.40	3371	デイサイト		

表5 掘載遺物一覧（石器・石製品）

No.604 ~ 629

掘載 No.	種別	地区	出土状況 遺構・位置・層位	寸法(cm)			重量(g)	石質・石材	備考
				長さ	幅	厚さ			
604	磨石	I区	追合壁2(Ⅲ-F3e)・重層	560	435	3.90	1267	砂岩	
605	磨石	I区	追合壁2(Ⅲ-F3e)・重層下段	610	490	3.00	1449	砂岩	
606	磨石	I区	追合壁2(Ⅲ-F3e)・重層	1300	725	4.45	5152	ディサイト	
607	磨石	I区	追合壁2(Ⅲ-F3e)・重層上段	900	400	2.40	1423	砂岩	
608	磨石	I区	追合壁2(Ⅲ-F10e)・重層	420	390	3.00	693	砂岩	
609	磨石	I区	追合壁2(Ⅲ-F3e)・重層下段	490	405	2.85	837	砂岩	
610	磨石	I区	追合壁2(Ⅲ-F3e)・重層	1105	810	4.05	5634	砂岩	
611	磨石	I区	追合壁2(Ⅲ-F3e)・重層	970	695	4.50	4298	砂岩	
612	磨石	I区	追合壁2(Ⅲ-F4d)・重層	900	855	5.70	5787	砂岩	
613	磨石	I区	追合壁2(Ⅲ-F30)・重層下段	1305	580	2.90	3027	細粒閃長岩	
614	凹石(磨石)	I区	追合壁2(Ⅲ-F3e)・重層下段	7000	520	2.80	1427	砂岩	
615	磨石	I区	塊丸	1260	940	5.25	9429	花崗閃長岩	
616	不明石製品	I区	櫛穴住居9埋土	175	0.80	0.60	141	滑石	
617	球状耳飾	I区	表土	340	150	0.55	44	滑石	
618	球状耳飾	I区	櫛穴住居1-3-B-H-ペルト-2埋目	140	0.95	0.40	07	滑石	
619	球状耳飾	I区	櫛穴住居1-3-B-H-ペルト-3埋目	165	0.55	0.55	08	滑石	
620	球状耳飾	I区	櫛穴住居13-A-ペルト-3埋土上部	280	1.45	0.45	21	滑石	
621	球状耳飾	I区	追合壁3(F5e)・重層	335	205	0.55	45	滑石	
622	球状耳飾	I区	追合壁3(F5e)・重層	345	140	0.60	67	細閃岩	
623	不明石製品	I区	櫛穴住居30埋土上部	560	0.95	0.40	28	滑石	
624	凹輪形石製品	I区	追合壁2-6-ト丘層	435	440	6.20	158	滑石	
625	凹輪形石製品	I区	堆土埋土表土上部	530	385	0.40	127	板岩	中央に円孔あり。
626	不明石製品	I区	追合壁1種別面	500	320	1.30	176	細閃岩	円孔あり。朱塗品?
627	石棒	I区	追合壁2東端重層	490	370	11.71	320	砂岩	要筋あり。
628	石作	I区	追合壁1(住居群B4-2)・重層	950	550	4.20	3367	砂岩	空山研磨。
629	不明石製品	I区	櫛穴住居20裸出面	1330	380	1.60	994	安山岩	全面研磨。磨斧。

表6 不掲載石器・石製品集計

出土遺構	基準器類				台石・ 基盤	石製品		陶様 器類	調査類 器類	珊瑚石 調査	石核
	磨石	圓石	閃石	特殊磨石		基盤	地灰				
縄文住居1	1	1				11		26972			
縄文住居5	3		3			2		62232			
縄文住居6								68188			
縄文住居7	1							1771			
縄文住居8								1983			
縄文住居9								3581			
縄文住居10	1							737			
縄文住居11	5							3919			
縄文住居12	3							945			
縄文住居13	15				3	1		14029			
縄文住居15								2967			
縄文住居16								3912			
縄文住居17	2							40183			
縄文住居18								358			
縄文住居20	3					1	1	58955			
石斧穴1								31196			
石斎穴2	1					1	1	90387	2		
石斎穴3	1							89779			
石斎穴4								6466			
石斎穴5								31611			
石斎穴6								16498			
石斎穴7								1392			
石斎穴8								1097			
石斎穴10								17087			
工具	8		3					13942			
柱穴								1	6908		
玄令層1	20	21	3		4	2	2	765603	2	1	
玄令層2	2				1	2		3	59058		
廻1	59	3	1	3	4	2		348005		3	
遺構外	60	2	3	4	4	5	5	4	116557	1	6
地上施設	237	8	10	53	19	15	5	8	2634098	5	10

遺構内・・・埋土やより出土したもの。検出面等出土のものは遺構外に含む。

包含層・・・Ⅲ層以下のもののみ。それ以外のものは遺構外に含む。

V 分析と測定

1 試料と目的

純然たる考古学的手法では、判断できない事柄については委託による自然科学的な分析および測定をおこなった。これらのうち、一つは遺物包含層および遺構埋土で検出した火山灰の分析であり、もう一つは出土した炭化物・土器付着の炭化物の加速器分析による年代測定である。

火山灰分析は、調査現場にて発掘調査担当者自ら採取したものを試料として2点使用した。分析試料1はⅢ区に広がる縄文時代前期の遺物包含層中で検出した。堆積状況を観察するための断面で比較的厚みをもって堆積している箇所を狙って採取した。分析試料1の火山灰堆積状況は、厚さ3~5cmのものが広範囲に広がっている。肉眼の観察では、上下2層に明瞭な色調変化が看取され、上位は灰色基調、下位はやや黄色味掛かった乳白色を基調とする。また、下位のものは非常に細かな粉状を呈する。いずれも土圧のためか著しい硬化が認められ、層中のテフラ等も隙間無く密な状態である。そのため、調査時も表面を削ると石膏を削っているような感触を覚えることもあった。一方、分析試料2は、I区住居群Aの竪穴住居2埋土に検出面上方から流入している状況である。おそらく、竪穴住居埋没後何らかの自然的な要因で生じたくぼみに充填されたような状況が考えられる。平面的な範囲は直径約50cmの不整な円形であり、断面は橢形を呈する。厚みは最大で約10cmである。分析試料1とは色調が異なり、全面灰白色を呈する。これは、分析試料1でみられた色調の違う上下の層が混ざるとこのような色調になるのではないかと想像され、堆積環境による差異の可能性が考えられる。ただし、硬化度合いは同様で、層中のテフラも非常に密である。これら2点の分析試料のテフラ同定をおこなうため、検出したテフラの屈折率を測定し、その値をこれまで同定されているテフラと比較する旨を依頼した。また、そのテフラの成分分析をおこない、火山灰ガラス・鉱物等の組成等からもアプローチすることも併せて依頼した。これにより、峯岸跡地でみられた火山灰を特定できれば、遺構・遺物の時期判定の参考となると考えた。

年代測定は、発掘調査で得られた各種炭化物5点を測定試料として提供した。測定試料1~4は竪穴住居の床面で検出した炭化材であり、測定試料5のみ出土土器片に付着した炭化材である。測定試料1は竪穴住居5の北側床面、測定試料2・3は竪穴住居7の中央床面、測定試料4は竪穴住居13北側床面、これら4点はそれぞれまとめてみられた炭化材であり、堆積土壤と一緒にとなっていた。そのため試料は肉眼で炭化物を多く含むとみられる部分を抽出して提供し、測定時に土壤と炭化物とを分離・抽出して実施してもらった。これらは調査所見より、いずれも竪穴住居廃絶時に近い時期の炭化材であると考えられ、場合によっては各竪穴住居の建築部材であった可能性も考えられる試料である。測定試料5は竪穴住居5埋土より出土した土器片の粘土紐貼付文に滲まっていた炭化物を分析者に採取して実施してもらった。この土器片は前章で掲載した17と同一個体の土器片であることは間違いない、口縁部に施された波形の粘土紐貼付文を有する前期後葉の土器の実年代を知る絶好の試料であると考えた。この時期の土器付着物を用いたAMS年代測定は実施例が少ないため非常に有益であると考えられる。また、今後同様の測定がなされれば、より実年代が絞られよう。

(福島)

2 火山灰分析

(1) はじめに

本報告では、峯岸遺跡の発掘調査で確認された遺物包含層や堅穴住居埋土中に挟まれる火山灰とされた堆積物を対象として分析を行い、堆積物を構成する碎屑物の特性を確認することにより、指標テフラとの対比を行う。指標テフラとの対比がされた場合には、堆積物を挟む遺物包含層や堅穴住居の年代資料となるものである。

(2) 試 料

分析試料は、火山灰とされる堆積物2点である。それぞれ分析試料1と分析試料2という試料名が付されている。

分析試料1は、調査区東部で作成された縄文時代前期遺物包含層のセクションベルトより採取された堆積物であり、発掘調査資料によれば、遺物包含層中に厚さ数cm程度で明るい色調を呈した堆積層として認められている。試料の外観は、黄褐色を呈する砂質シルトである。

分析試料2は、調査区北西部で検出された縄文時代前期の堅穴住居埋土のセクションベルトより採取された堆積物であり、分析試料1と同様に埋土中に厚さ数cm程度の明るい色調を呈した堆積層として認められている。試料の外観も分析試料1と同様に黄褐色を呈する砂質シルトである。

(3) 分析方法

テフラ分析

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察はテフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

重鉱物・火山ガラス比分析・屈折率測定

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム(比重約2.96に調整)により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。火山ガラス比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を250粒を数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスの形態分類は、上述したテフラ分析と同様である。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

(4) 結 果

テフラ分析

テフラ分析の結果を表1に示す。2点の分析試料からは、中量の火山ガラスが検出された。火山ガラスの特徴は、2点ともに同様であり、無色透明の軽石型がほとんどを占め、僅かに無色透明のバブル型が混在する。スコリアおよび軽石は、いずれの試料からも認められなかった。

なお、両分析試料ともに砂分を構成する主な碎屑物は、白色を呈する斜長石の鉱物粒であり、これに石英の鉱物粒や輝石類および不透明鉱物などの鉱物粒が少量混在する。

重鉱物・火山ガラス比分析・屈折率測定

結果を表2、図1に示す。重鉱物組成は、処理後の重鉱物量が十分に得られなかつたが、組成の傾向としては、2点とも概ね類似している。合計数の多い試料1の組成でみれば、斜方輝石が多く、次いで單斜輝石が多く、少量の不透明鉱物と微量の角閃石を作りうる傾向である。火山ガラス比では、分析試料1は火山ガラス全体の量比が低く、分析試料2は火山ガラス全体の量比が高い。軽石

表1. テフラ分析結果

試料名	層位	スコリア		火山ガラス		軽石 量
		量	量	色調・形態	量	
分析試料1	縄文時代前期 遺物包含層	—	+++	cl·pm>>cl·bw	—	—
分析試料2	縄文時代前期 堅穴住居跡覆土	—	+++	cl·pm>>cl·bw	—	—

凡例 一:含まれない、(+)きわめて微量、+ : 微量、++ : 少量、+++ : 中量、++++ : 多量、
cl:無色透明、br:褐色、bw:バブル型、md:中間型、pm:軽石型。

表2. 重鉱物・火山ガラス比分析結果

試 料 名	斜 方 輝 石	單 斜 輝 石	角 閃 石	不 透 明 鉱 物	そ の 他	合 計	バ ブル 型 火 山 ガ ラ ス		中 間 型 火 山 ガ ラ ス		軽 石 型 火 山 ガ ラ ス		そ の 他	合 計
							火 山 ガ ラ ス	火 山 ガ ラ ス	火 山 ガ ラ ス	火 山 ガ ラ ス	火 山 ガ ラ ス	火 山 ガ ラ ス		
試料1	41	23	3	10	0	77	9	3	12	226	250	—	—	—
試料2	13	6	2	10	2	33	10	3	140	97	250	—	—	—

(5) 考 察

分析試料1および分析試料2の2点の分析試料からは、火山ガラスが比較的多く検出された。この火山ガラスの産状と、分析試料が採取された堆積物の土層における層相とを考慮すると、分析試料の採取された堆積物は、火山ガラス質テフラの降下堆積層であると考えられる。なお、火山ガラス比分析

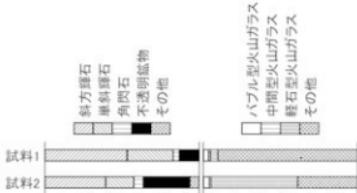


図1. 重鉱物組成および火山ガラス比

では、分析試料1では少量しか火山ガラスが計数されなかったが、テフラ分析による砂分の状況では、火山ガラスの産状にそれほどの違いは認められない。この分析方法による産状の違いは、火山ガラス比分析において細砂径の碎屑物を計数していることに起因する。おそらく、降下堆積後の局所的な土壤化作用の影響等により、分析試料

1採取地点と分析試料2採取地点とでは、

テフラ層中に混在する周囲の土壤に由来する碎屑物の量が異なっていると考えられ、分析試料1では細砂径の碎屑物の中に、テフラ層を挟む上下の土壤に由来する斜長の鉱物粒などの碎屑物が多量に混入したために、火山ガラスの量比が相対的に低くなったと考えられる。

いずれにしても、分析試料の採取された堆積物はテフラの降下堆積層であると考えられることから、テフラは、縄文時代前期の遺物包含層が形成されている時期および縄文時代前期の堅穴住居が廃棄後に降下堆積したことになる。この年代観と火山ガラスの形態と屈折率および峯岸遺跡の地理的位置とこれまでに研究された東北地方におけるテフラの産状(町田ほか(1981;1984)、Arai et al.(1986)、町田・新井(2003)など)との比較から、検出されたテフラは、十和田カルデラを給源とする十和田中振テフラ(To-Cu:Hayakawa,1985)に対比されると考えられる。なお、To-Cuの重鉱物組成は斜方輝石と單斜輝石を主体とし、角閃石は含まれない(町田・新井,2003)が、今回の試料では、2点ともに微量ながらも角閃石が含まれている。重鉱物の全体量が微量であったことも考慮すれば、重鉱物のはほとんどは To-Cu の本質物質ではなく、上述した斜長石と同様にテフラ層を挟む土壤に由来する可能性がある。

To-Cu の噴出年代は、暦年でおよそ6,200年前とされている(工藤・佐々木,2007)。したがって、縄文時代前期の遺物包含層の形成時期は、その前後の年代が想定され、堅穴住居の廃絶時期もその頃になると考えられる。発掘調査資料によれば、今回の発掘調査では縄文時代前期大木4~5式の土器が最も多く認められており、遺物包含層、堅穴住居ともに前に帰属するものと考えられている。今回のテフラの産状は、現地調査成果による年代観とともに概ね整合することができる。

(パリノ・サーヴェイ株式会社)

引用文献

- Arai,F.・Machida,H.・Okumura,K.・Miyauchi,T.・Soda,T.・Yamagata,K.1986,Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II - Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido -.Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21,223-250.
- 古澤 明.1995.火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的解析に基づくテフラの識別.地質学雑誌,101,123-133.
- Hayakawa,Y.1985.Pyroclastic Geology of Towada Volcano. Bulletin of The Earthquake Reserch Institute University of Tokyo.vol.60,507-592.
- 工藤 崇・佐々木 寿.2007.十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年.地学雑誌,116,653-663.町田 洋・新井房夫.2003.新編 火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広.1981.日本海を渡ってきたテフラ.科学,51,562-569.
- 町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・達藤邦彦.1984.テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－.渡辺直継(編)古文化財に関する保存科学と人文・自然科学.同朋舎,865-928.

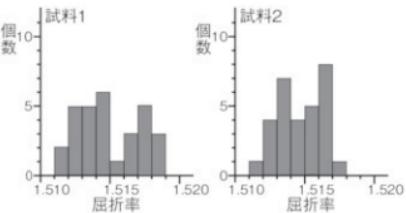
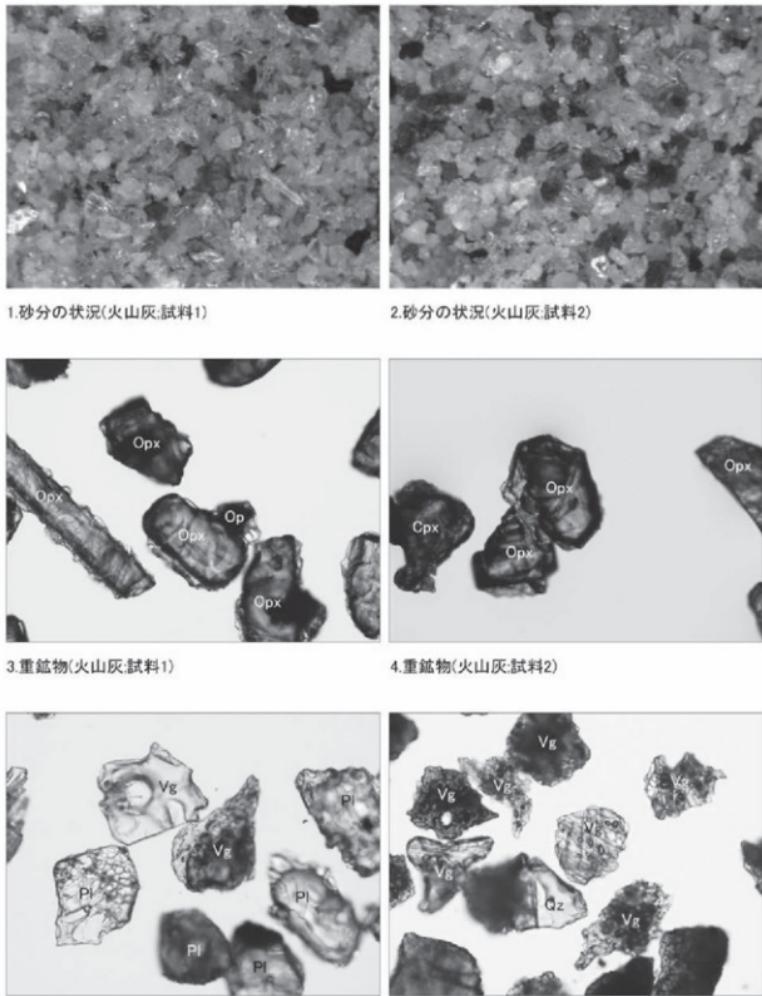


図2. 火山ガラスの屈折率

図版1 テフラ・重鉱物・火山ガラス



Opx:斜方輝石, Cpx:単斜輝石, Op:不透明鉱物, Vg:火山ガラス, Qz:石英, Pl:斜長石

1.2 0.5mm
3-6 0.2mm

3 年代測定

(1) 測定対象試料

測定試料は、堅穴住居から出土した炭化物と土器付着炭化物の合計5点である(表1)。土器付着炭化物試料5点は、深鉢口縁部付近の内面に波状に貼付された粘土紐貼付文の間や周辺より採取した。土器は大木4式に位置づけられている。

測定試料が出土した堅穴住居の時期は、すべて縄文時代前期と考えられている。

(2) 測定の意義

測定試料の年代測定により、縄文時代前期と考えられる堅穴住居の実年代を考察し、出土土器の型式と比較する。

(3) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- 2) 酸-アルカリ-酸(AAA : Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塗酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(4) 測定方法

加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹³C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(5) 算出方法

- 1) $\delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素の¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(%)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- 2) ¹⁴C年代(Libby Age : yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として測る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach1977。¹⁴C年代は $\delta^{14}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。

また、 $^{\text{C}}$ 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の $^{\text{C}}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{\text{C}}$ 濃度の割合である。

pMC が小さい("C が少ない")ほど古い年代を示し、pMC が100以上("C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modern とする。この値も δ^{C} によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

4) 暈年較正年代とは、年代が既知の測定試料の $^{\text{C}}$ 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{\text{C}}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暈年較正年代は、 $^{\text{C}}$ 年代に対応する較正曲線上の暈年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が $^{\text{C}}$ 年代、横軸が暈年較正年代を表す。暈年較正プログラムに入力される値は、 δ^{C} 補正を行い、下1桁を丸めない $^{\text{C}}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暈年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCal v4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暈年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暈年較正年代は、 $^{\text{C}}$ 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」という単位で表される)。

(6) 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

測定試料の $^{\text{C}}$ 年代は、測定試料1が 5090 ± 30 yrBP、測定試料2が 4950 ± 30 yrBP、測定試料3が 5030 ± 30 yrBP、測定試料4が 5070 ± 30 yrBP、土器付着炭化物測定試料5が 5340 ± 30 yrBPである。暈年較正年代(1σ)は、古い方から順に測定試料5が繩文時代前期前葉頃、測定試料1、3、4が前期中葉から後葉頃、測定試料2が前期後葉頃に相当する(小林編2008)。すべて繩文時代前期の中に収まるが、堅穴住居5出土測定試料1、5の間には明瞭な年代差がある。一方、堅穴住居7出土測定試料2、3の値は、 1σ 暈年代範囲ではわずかに離れるが、おおむね近い。

年代差が大きい堅穴住居5出土測定試料について検討すると、土器付着炭化物測定試料5は、大木4～5式とされる土器から採取されたが、年代値は前期前葉頃の古い値となった。この測定試料の δ^{C} は、 $-23.33 \pm 0.36\%$ で、C3植物やそれを食べる草食動物等の範囲に含まれるが、その中では比較的海生生物に近い(赤澤ほか1993)。土器付着炭化物の炭素の由来は單一とは限らないことを踏まえると、測定試料中に海生生物由来の炭素が含まれることも考えられる。その場合、海洋リザーバー効果の影響によって、実際より古い年代値が示されている可能性があり、同じ堅穴住居5出土測定試料1との間にある年代差を見かけより小さく考える必要がある。

測定試料の状態を確認すると、炭化物1～4は土と同化しかけており、輪郭が不明瞭な炭化物を集めて測定試料としている。これらの炭素含有率は、測定試料2を除く3点がいずれも50%を超える適正な値であるのにに対し、測定試料2は12%という低い値を示した。測定試料2に土等の混入は確認されていないが、測定された炭素の由来に注意を要する。土器付着炭化物測定試料5は、炭素含有率48%で、炭化物としてわずかに低いが、おおむね適正な値であり、化学処理、測定上の問題は特に認められない。

(株式会社 加速器分析研究所)

表1 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 補正値)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-133467	測定試料1	整穴住居5床面直上	炭化物	AaaA	-24.94 ± 0.30	5.090 ± 30	53.04 ± 0.18
IAAA-133468	測定試料2	整穴住居7床面直上	炭化物	AaaA	-21.78 ± 0.32	4.960 ± 30	53.98 ± 0.18
IAAA-133469	測定試料3	整穴住居5床面直上	炭化物	AaaA	-22.28 ± 0.39	5.030 ± 30	53.48 ± 0.17
IAAA-133470	測定試料4	整穴住居13床面直上	炭化物	AAA	-21.11 ± 0.34	5.070 ± 30	53.21 ± 0.19
IAAA-133471	測定試料5	整穴住居5壁土下層	土殼付着炭化物	AaaA	-23.33 ± 0.36	5.340 ± 30	51.47 ± 0.17

[#6397]

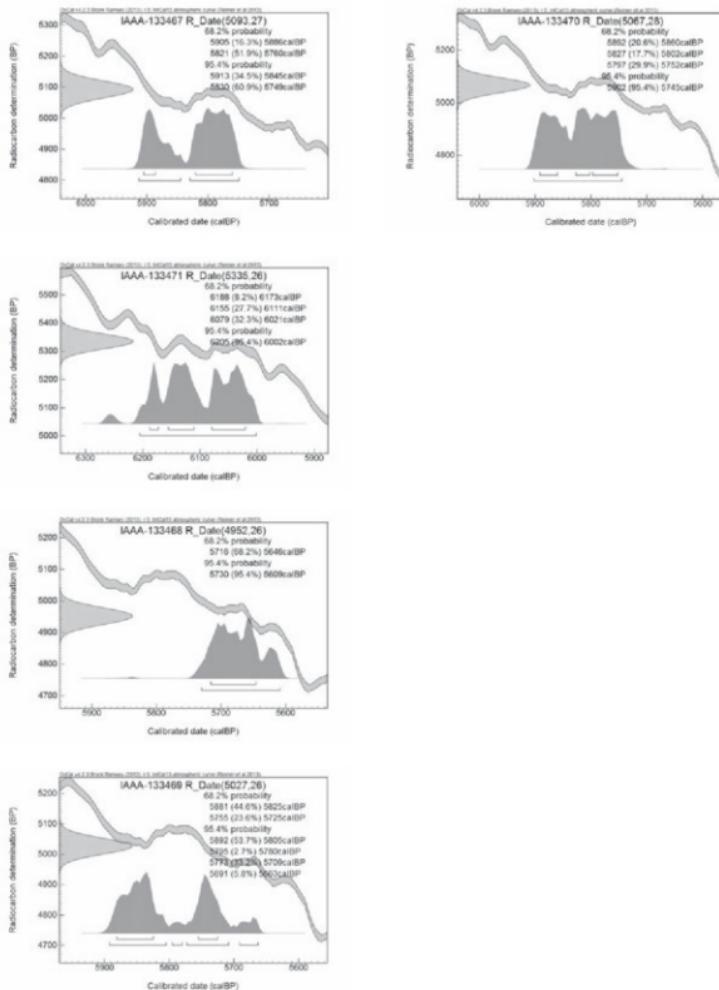
表2 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正値、歴年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		歴年較正用yrBP	1 σ 年代範囲	2 σ 年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-133467	5.090 ± 30	53.05 ± 0.18	5.093 ± 27	5905calBP - 5886calBP (16.3%) 5821calBP - 5766calBP (51.9%)	5913calBP - 5845calBP (4.5%) 5830calBP - 5749calBP (60.9%)
IAAA-133468	4.900 ± 30	54.34 ± 0.18	4.952 ± 26	5719calBP - 5646calBP (68.2%)	5727calBP - 5636calBP (4.5%) 5802calBP - 5865calBP (63.2%)
IAAA-133469	4.980 ± 30	53.78 ± 0.17	5.027 ± 26	5881calBP - 5825calBP (44.6%) 5755calBP - 5725calBP (23.6%)	5796calBP - 5780calBP (2.7%) 5773calBP - 5709calBP (33.2%) 5691calBP - 5663calBP (5.8%)
IAAA-133470	5.000 ± 30	53.64 ± 0.19	5.067 ± 28	5892calBP - 5860calBP (20.6%) 5827calBP - 5802calBP (17.7%) 5797calBP - 5752calBP (29.9%)	5902calBP - 5745calBP (65.4%)
IAAA-133471	5.310 ± 30	51.65 ± 0.17	5.335 ± 26	6188calBP - 6173calBP (8.2%) 6155calBP - 6111calBP (27.7%) 6079calBP - 6021calBP (32.3%)	6205calBP - 6002calBP (65.4%)

[参考値]

引用・参考文献

- 赤澤成、米田積、吉田邦夫 1993 北村縄文人骨の同位体食性分析。
 中央自動車道長野源埋蔵文化財発掘調査報告書11 一明科町内一
 北村遺跡 本文編((財))
- 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14。長野県教育委員会。(財)
- 長野県埋蔵文化財センター、445-468
- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51(1), 337-360
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器、総覧縄文土器刊行委員会、アム・プロモーション
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves.
 0-50,000 years cal BP.
- Radiocarbon 55(4), 1869-1887
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{13}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363



4 結果と意義

火山灰分析の同定結果を受けてその意義について簡単に述べる。火山灰分析の結果、2点の分析試料から検出されたテフラは、いずれも十和田中振火山灰であると同定された。これについては調査時の所見とも概ね合致するため異議を差し挟む余地は無い。しかし、遺物包含層より採取した分析試料1については、厳密に述べると基本層序で言うところのⅢ層中にみられ、火山灰を挟んで上下2層に分層可能であり、上層をⅢa層、下層をⅢb層とした。Ⅲa層は縄文時代前期中葉～末葉の遺物を含み、Ⅲb層は縄文時代前期中葉～後葉を含むことが判明している。現段階での研究成果を考慮すると、十和田中振火山灰の降下は縄文時代前期であることは間違いないとされている。これらを単純に考えると、峯岸遺跡では前期中葉～後葉にかけての時期に火山灰が堆積したことが想定されるが、注意を要するのは分析結果でもある通り、斜長石の鉱物粒などの碎屑物が多量に混入している可能性が指摘されている点である。この事実は、すなわち多量の混入物が含まれるような堆積環境を想定しなければならない。これは検出された火山灰が降下後ある程度の時間を経た後の再堆積であることを示唆しているのではないかと考えられる。今回の峯岸遺跡調査区内で認められた火山灰と出土遺物の関係については、火山灰降下時の状況を反映していない可能性が高く、単純に層位と火山灰とを比較できないことが想定できる。検出されたテフラは十和田中振火山灰であるとしても、その降下時期について素直に言及できない試料と言ふことができる。

年代測定については、前節の測定結果に示されたように5点の試料すべてが縄文時代前期の範疇で収まる年代であると考えられる。示された測定結果を遺構毎にみると、堅穴住居5の床面炭化物で得られた年代が、libby Age 5,090±30(測定試料1)～5,030±30(測定試料3)であり、概ね5,060辺りの年代で落ち着く可能性がある。しかし、同じ堅穴住居5埋土下層出土の付着炭化物では、これらより大幅に古い年代である libby Age 5,340±30(測定試料5)となっており、測定者は海洋リザーバー効果によって実年代よりも古い結果が得られていることを指摘している。発掘調査成果では、この堅穴住居5は前期中葉～後葉にかけての遺構であるとした。この調査成果に近い年代値は測定試料1・3の床面炭化物から得られたものであり、土器付着炭化物を用いた測定試料5は古過ぎる感は否めない。ちなみに、この土器は大木4～5式に相当するものであり、前期後葉であることに間違いくなく、測定年代が前期前葉を示していることは、測定者の述べた通り海洋リザーバー効果の影響なのかもしれない。次に、堅穴住居7の床面炭化物では、libby Age 4,950±30(測定試料2)という結果であり、堅穴住居5よりもやや古い年代を示している。発掘調査成果では、埋土下位の出土遺物の中に大木3式の土器片も含まれていることから前期中葉～後葉の遺構であると判断した。これは測定年代の相対的な比較でも大きな矛盾はないものと考えられる。最後に、堅穴住居13の床面炭化物では、libby Age 5,070±30(測定試料4)という結果が得られている。この年代は堅穴住居5とほぼ同一年代であると言ふことができ、発掘調査成果とも合致するものと考えられる。特に両遺構は共通する点がいくつか認められることからも遺構の年代は近い時期に構築されたものであると考えられる。

(福島)

VI 総括

1 遺構のまとめ

今回の発掘調査で検出した遺構は、堅穴住居20棟、貯蔵穴10基、土坑37基、柱穴150個、焼土遺構1基、堀1条である。堀以外の遺構については縄文時代であり、堀は中世の遺構である可能性が高い。

(1) 堅穴住居

調査した20棟の堅穴住居は出土した遺物から縄文時代前期中葉～中期初頭にかけて営まれたものである。堅穴住居はおもに今回の調査区北側に分布する。地形は南西から北東に向かって下る緩斜面であるため堅穴住居の分布は調査区内に限ればより低い位置に集中している。これはより高位面である南側が後世の削平によって本来の地形面より低くなっている可能性が高いため、本来ここに存在した堅穴住居がすでに失われてしまっていることも考えられる。このことは、より高位に立地する貯蔵穴の分布が堅穴住居の分布域よりも北に広がっている点、本来の地形面が削平され、本来の地山であるIV層が認められず、これより下位層であるV層が露出している点などから、より蓋然性を持って言及できる。しかし、これを差し引いたとしても遺構の検出状況を考えると集落の主体は、この台地上のより低い位置にあったものと推測される。

20棟の堅穴住居は擾乱等により形態不明のものもみられるが、平面形態により大きく2分類可能である。一つは方形基調の堅穴住居で、もう一つは円および楕円形基調の堅穴住居である。方形基調の堅穴住居は出土遺物から縄文時代前期中葉～後葉に限定され、円および楕円形基調の堅穴住居は縄文時代前期後葉のものも存在するが、その多くは縄文時代前期末～中期初頭に帰属する堅穴住居である。また、方形基調の堅穴住居の中には、一つの隅が鍵形に折れ曲がる形態のものも存在する。これらはその平面構造に特殊性があるものの、その内部構造等に不明な点が多く詳しく述べ難い。今後、検出事例をつぶさに当たる必要がある。

堅穴住居の群構造は大きく分けると2時期のグルーピングが可能である。古くは縄文時代前期中葉～後葉にかけての堅穴住居のまとまり、新しくは縄文時代前期末葉～中期初頭にかけての堅穴住居のまとまりである。前者はこの台地上でもより低位において展開し、後者はこの台地上のやや高位において展開する。古い住居は新しい時期の遺物包含層によって覆われていることからもこのことに言及できる。すなわち、新しい住居を営む段階に古い居住域は使用が停止しており、少なくとも大半が埋没した状況であったと想定される。このように峯岸遺跡では、時期によって集落の占地が微妙に異なっている点が興味深い成果として挙げられる。

さらに、今回の調査では自然災害の痕跡ではないかと推測される知見を得られたためこれについて追記する。先述したより高位に立地する新しい住居群の多くには巨礫が落ち込んでいる例が多く認められ、縄文時代前期末～中期初頭以降に人力で動かすことができないような巨礫が転落するような災害があったのではないかと推測される。地形を考慮すると、南側の丘陵が今回の調査地よりも高い標高であり、この遺跡背後ともいるべきエリアでの山塊の崩壊、そしてこれにより引き起こされる崩落・落石・転石といった現象が調査地へも影響している可能性が考えられる。

(2)貯 藏 穴

堅穴住居以外で性格が推測できる遺構として貯蔵穴が挙げられる。貯蔵穴は堅穴住居の分布とほぼ重なるように占地しており、堅穴住居の近くで機能していた可能性が考えられる。これら貯蔵穴の平面形態は正円形のものが多いが、その規模はそれぞれやや異なる。特に、深さについては様々であるため一定ではなかった可能性が考えられる。しかし、調査区南側の高位面に位置する貯蔵穴はいずれも底面のみが残存しており、本来の遺構上部が後世の削平によって損なわれているものとみられる。したがって、前述した通り、貯蔵穴の深さが一定でないことを考慮すると、この高位エリアには残存する貯蔵穴よりも浅い貯蔵穴の姿が完全に失われている可能性が想定できる。これは堅穴住居等においても同様のことが考えられ、今回の調査で検出できた遺構はそのごく一部であった可能性も想定する必要がある。

検出した貯蔵穴の調査では貯蔵対象となる堅果類の痕跡は見出せなかつたが、埋土最上層お中心に石器の剥片（おもにチップ類）が多量に廃棄されている例が認められた。貯蔵穴としての機能が停止した後、その窪地を利用して剥片の廃棄場所として利用された状況が考えられる。このことから、当時の人々が集落内で石器の製作および加工をおこなっており、これにより生じた多量の剥片を廃棄する場所に一定のルールを設けていたことが想像できる。

(3)土 坑・柱 穴

いずれも縄文時代に帰属すると考えられるが、性格の不明確な遺構である。時期は他の遺構と同様縄文時代前期を主体とすると考えられる。土坑類は遺物を多量に有するI区の大形のもの以外の大半は小規模な遺構である。貯蔵穴である可能性がある土坑も含まれるが確認がないため形態等に貯蔵穴の特徴が認められないものは土坑として扱った。

柱穴は埋土が縄文時代の遺構に類することから前期の建物を構成するものと考えられる。斜面等高線に平行するような軸方向が想定される。この柱穴群がみられるエリアではその他の遺構が存在しないため、集落の中でも居住区域から外れた何らかの施設であるという可能性が考えられる。しかし、その構造および性格は不明である。

(4)堀

縄文時代以外の遺構では唯一中世の遺構であると考えた堀を1条検出し、調査した。性格は不明であり、詳細な時期も判然としない。堀であれば、調査地を含め中世の居館あるいは城館を想定しなければならないが、これらの存在の有無に関して調査では判明しなかつた。この遺構が存在する調査区西端は縄文時代の遺構も含めこれ以外の遺構は認められない。調査区外へ目を向け、堀の西側を地表面から観察すると人工的な段差と平場が2段認められ、これより西は落差のある急峻な斜面になっており、直下の沢筋へと通じる。しかし、この段差・平場は植林の際に造成されたものであると考えられ、急斜面は自然の谷地形であるとみられる。これらが、中世に人工的に造成されたものであるとするならば、堀の内側である今回の調査区に何らかの痕跡が認められるはずである。しかし、今回の調査区内ではそのような施設、痕跡等は認められなかつた。このことからも段差・平場については積極的に遺構とは認めがたい。したがって、この堀は導水か排水をおこなうための施設である可能性が考えられ、これと併走するように堀や東側には裸の詰まった近世以降の暗渠は、その後継の機能を有するかもしれない。



第81図 調査区全体図

2 遺物のまとめ

縄文時代の出土遺物は土器、石器、土製品、石製品からなる。これらは竪穴住居等の遺構より出土したものと2箇所の遺物包含層より出土したものが大半を占める。縄文時代以外の遺物は僅少であるが、堀より出土した中世の陶器が1点挙げられる。

(1) 縄文土器

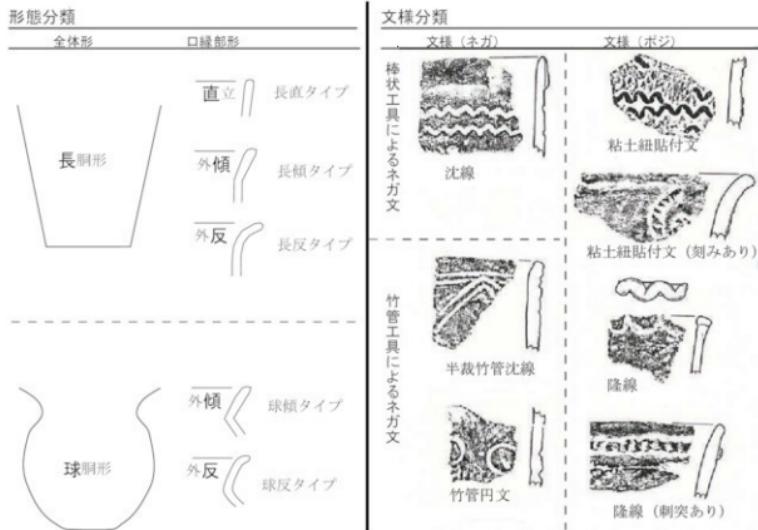
出土した縄文土器は、縄文時代前期を中心とした土器である。ここでは、これら雑然とした土器類をそれぞれ特徴により分類、整理することを主眼としたい。分類項目としては、器形、文様について着目したいと考える。

形態分類

大半の土器が長胴形を指向するが、中には球胴形を指向するものも含まれる。これらをさらに細分するために口縁部～頸部の形態を分類した。これら形態は全体の器形を左右するものであり、長胴・球胴の別にも大きく作用する属性である。長胴形土器の口縁部形態については、直立する形態(以下、長直タイプ)・外傾する形態(以下、長傾タイプ)・外反する形態(以下、長反タイプ)の3分類を設定した。一方、球胴形土器の口縁部形態については、外傾する形態(以下、球傾タイプ)・外反する形態(以下、球反タイプ)の2分類を設定した。

文様分類

次に文様は多種多様であるが、大別すると地文以外の文様が施されているもの、地文のみで構成さ



第82図 土器の分類

れるものに分けることができる。地文以外の文様は粘土紐貼付文、沈線、刺突など様々であるが、その組み合わせは多種多様である。文様を施文の観点から大きく2種類に分類可能である。一つは土器の器表面に直接陰刻するネガティブな文様である。沈線文、刺突文などがこれに類する。さらに、これらは使用工具によって細分され、単純な棒状工具を使用する文様(沈線文・刺突文)、竹管状の工具を使用する文様(半裁竹管沈線文、竹管による円文など)もう一つは土器の器表面に対してポジティブな文様である。粘土紐貼付文、隆線文などがこれに類する。なお、平行する2条の沈線と半裁竹管沈線との区別は難しいが、前者はどこかでパラレルな関係が崩れる箇所が認められ、後者は文様が続く限りきれいなパラレルな関係である。粘土紐貼付文と隆線文との区別も曖昧であるが、今回観察した土器では細く紐状のものと貼り付けたものと、幅の大小はあるものの板状の粘土を貼り付けたもの、あるいは貼付後表面を平滑にするものに分けられる。前者を粘土紐貼付文、後者を隆線文として扱った。

時期・土器型式

器形と文様の組み合わせから既存の土器型式に当てはめると、大木2b式～大木7a式までの土器が出土している。それぞれ出土した土器群について分類とその特徴について記述する。

大木2b式に相当すると考えられる土器の器形は長直タイプが主体である。これらには、工具等による文様がみられなくとも、特徴的な地文(いわゆるS字状連鎖沈文)が認められ、胎土に纖維を含むものが大半を占める。文様は口縁部直下に隆線文が巡り、隆線の表面には連続する刺突(先端の丸い工具を斜めに押し当てる)が伴っている。

大木3式に相当すると考えられる土器を器形で分類御すると長胴形、球胴形の両方が認められる。口縁部形態を組み合わせると、長直タイプはほとんど認められず、長頸タイプ・長反タイプ・球反タイプが主体を占める。器形は頭部に屈曲または括れが創出されているようである。文様はネガの文様とポジの文様とともにみられ、沈線文・竹管円文・刻みのある粘土紐貼付文が多用される。出土土器の傾向としては、括れが緩やかで流麗なフォルムの土器には刻みのある粘土紐貼付文がやはり曲線を描きながら施文される。使用される粘土紐は非常に細く、刻みも鋭利で細かいのが特徴的である。器形と文様の組み合わせが明確にマッチングしている土器群である。

大木4式に相当すると考えられる土器は長胴形のものと球胴形のものの両者が認められる。これに口縁部形態の分類を組み込むと、長直タイプ・長頸タイプ・長反タイプ・球反タイプがみられるが、球頸タイプはみられない。頭部に緩やかな括れを有するものがある一方で、鋭利な角度で屈曲するものは認められないという傾向である。文様は粘土紐貼付文が主流であるが、大木3式のものよりやや太く、基本的に刻みを持たず波形などの曲線が多用される。

大木5式に相当すると考えられる土器は出土資料が少なく、全体形が不明なものが多いが、大半が長胴形に分類される。文様はおもに隆線文と沈線文によるものが多く、隆線は刻みの無い平板状を主とし、沈線文は先端の角張った工具で施されているものが多い。また、これら文様は曲線もみられるが、大木4式の曲線的なものに比べ屈曲が強い印象である。

大木6式に相当すると考えられる土器は器形を分類すると長胴・球胴いずれも認められ、口縁部は直立するものの以外は各種認められるが、肥厚させるものが多い。文様は沈線文・隆線文等が刺突文などと呼応しながら配される。

大木7a式に相当すると考えられる土器は長胴のものが多く、口縁部はいずれの形態も認められる。文様は各種施文されるが、より立体的な文様構成であり、沈線文も太さが様々で使用される工具の種類も豊富であることが推測される。

器形に着目した場合、峯岸遺跡出土の土器群は、大木2b式相当の土器が長胴形のものに特化しているところからスタートし、大木3式相当の土器で長胴形・球胴形の2種に分化され、大木5式で球胴形のものが減少し、大木6式相当の段階で再び球胴形のものが創出される。ただし、大木6式相当の土器には球胴形でも体部が極端に丸みを持ち、体部下半が直立するように体部に続くものも存在する。いわゆる金魚鉢形のものである。また、大木7a式相当の土器群には少数であるが浅鉢も認められる。口縁部および頭部の形態については全体の器形に左右され、器形の変化が口縁部形態の変化と相俟っていると思われる。特に、大木3式相当の土器群は器形変化的画期であるとみられる。

文様に着目した場合、峯岸遺跡出土の土器群は、大木2b式相当の土器が工具を多用しないのに対して、大木3式相当の土器において一気に工具が多用される。竹管状工具が多用される点も注目され、次の大木4式相当の土器にはほとんど竹管状工具が使用されない。沈線文は大木3式相当の細く深いものから幅広で浅いものへと変化し、大木5式相当では角棒状工具で屈曲が明瞭な文様へと変遷するようである。また、ボジティブ文様では大木3式相当で最も細く繊細な文様が採用されるが、その後徐々に粘土紐の幅が増し、大木5式相当の土器のように平坦になっていく傾向である。文様変化も器形変化同様の変遷の画期であるとみられる。そして、最終的に大木5式相当の土器群がやはり画期を持っているものと思われる。つまり、大木3式相当の土器から大木5式相当の土器にかけて型式学的な変遷がスムーズに認められるという意味で一つのまとまりとして考えることができる。その後の大木6式相当の土器群以降のものとは別のまとまりで考えられる。

以上のように、既存の土器型式と大筋で合致するようであるが、峯岸遺跡では型式の特徴を跨ぐような土器も存在する(第83図)。このような土器の存在から、抽出した属性は型式学的な変化の重要であり、今後も注視する必要がある。なお、胎土・色調についてもIV章で触れており参照されたい。

(2) 石 器

出土した石器類は土器に比して出土数量が少ない傾向である。剥片石器の利用は通常通りであった可能性が高いが、磨石類の利用はさほどでもないのかもしれない。特に、特殊磨石が少なく、これらを多用する習慣のない集落であったかの印象を受ける。

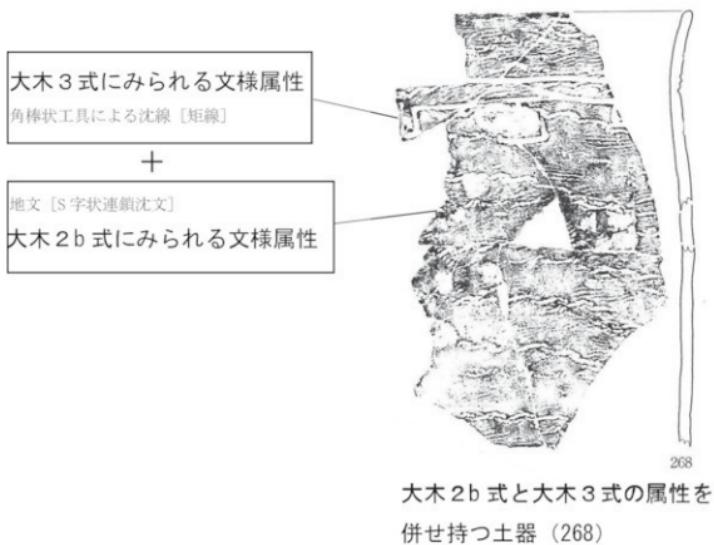
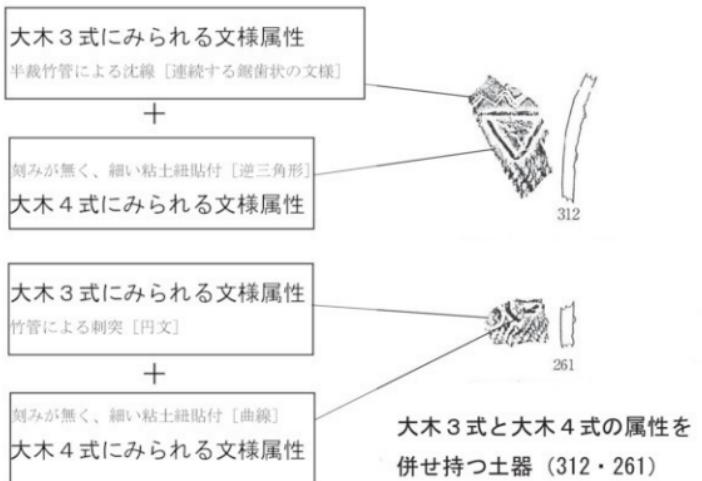
石鏸は131点出土し、これは剥片石器全体の約40%を占める点数である。これは最も割合が高い器種であることが窺える。次に石匙は15点出土している。比較的欠損品が多い傾向である。

石斧はほとんどが磨製石斧である。これらも欠損品が非常に多い傾向である。特に使用に際して欠損したものが多いのではないかと推測される。

礫石器は大半が円礫を用いた磨石類である。全面使用されたものが圧倒的に多く、大きさも拳大のものが大半である。

(3) 土製品・石製品

土製品は土偶1点、土製円盤2点が出土した。その他性格不明の粘土塊が数点出土しているが、本書には掲載していない。块状耳飾りが比較的多くみられるが、これは北上山地で産出する素材としての滑石が容易に入手できる環境であったことが想起される。とくに、縄文時代前期の集落である奥州市江刺区大中田遺跡では、多くの滑石製耳飾りが出土しており、背後の種山高原等で入手できるものと推測される。この種山高原一帯は岩手県南部の内陸と沿岸を結ぶ地域であることから、沿岸の峯岸遺跡もこのような滑石産出地のものを盛んに取り入れていたものと考えられる。



第 83 図 型式と文様属性

3 集落の消長

遺構および遺物を検討すると、峯岸遺跡は堅穴住居を中心とする集落が縄文時代前期を中心に広がり、さらに遺構、遺物にある程度の時期差があることが明らかになった。この集落の変遷を検討するためにここでは、峯岸遺跡の集落における画期の設定を以下のようにおこなうこととした。

縄文時代前期中葉を峯岸遺跡Ⅰ期、縄文時代前期後葉を峯岸遺跡Ⅱ期、縄文時代前期末～中期初頭を峯岸遺跡Ⅲ期として設定する。これは遺構のあり方、遺物出土傾向等を加味するとこのような期の設定が可能である。以降、期毎に集落の様相および特徴を今回得られた考古学的知見によって想定される。

峯岸遺跡Ⅰ期(前期中葉)は、集落の黎明あるいは萌芽期である。遺物包含層中にはこの時期の遺物が含まれるが、これら遺物を有する遺構はほとんど存在しない。このことは、集落經營の開始時期に当たっており、未だ定住化が促進していないか、あるいは周辺に小規模な集住域が点在するような状況であったと推定する。ただし、遺物出土量を考え、大木3式相当の土器がいくつかの遺構から出土することを考慮するならば、この時期に集落經營の本格化の兆しが看取できるかもしれない。

峯岸遺跡Ⅱ期(前期後葉)は峯岸遺跡で本格的に集落經營がおこなわれた時期であると評価できる。特に、調査区北側に帯状に分布する大木4式期の住居群は、地形に沿って展開しており、その計画性と継続性が注目される。ただし、大木5式の堅穴住居がほとんどみられないため、この時期は集落中心域がずれている可能性がある。

峯岸遺跡Ⅲ期(前期末～中期初頭)は集落が再び拡大する時期である可能性が考えられる。ただし、大木4式期の集落域よりやや高位面に展開する可能性がその分布からも推測できる。この要因については、不明であるが、占地に関して何らかの規制あるいは条件面での不合理があったのかもしれない。なお、大木7b式以降の土器が出土しない点を考えれば、この台地一帯では中期以降の集落經營がなされず、その他のエリアへと移動したものと考えられる。

その後の様相は、今回の調査では遺物が出土していないため多くを語ることはできない。遺跡周辺では縄文時代中期を主体とする遺跡も存在するようである。通常、縄文時代中期は人口も集落も爆発的に増加する時代であるとされており、その時期の遺物が一切認められない今回の調査区はこの時代に活動の拠点とはならなかった理由があるのかもしれない。

最後に、峯岸遺跡における集落の消長を簡潔に述べると、峯岸遺跡Ⅰ期とした縄文時代前期中葉頃、集落が営まれ始め、峯岸遺跡Ⅱ期とした縄文時代前期後葉頃には太平洋に近い台地北側で方形基調の堅穴住居群が作られたものと考えられる。これら堅穴住居群には貯蔵穴が伴い、本格的で安定的な定住生活がおこなわれたと推測される。その後、峯岸遺跡Ⅲ期の縄文時代末葉～中期初頭に入ると台地北側縁辺よりも少し高い位置に、楕円形を中心とした堅穴住居群が展開したと考えられる。この時期も前代同様、継続的に貯蔵穴を伴う集落經營が想定される。その後、この台地は土砂災害等の自然災害を受けたと想像したが、集落の存続時期に起こったものではないかもしれない。したがって、災害とその後の集落存続との関係性は導き出せない。いずれにせよ、縄文時代中期前葉以降には少なくとも同一台地上の一角であるこの縁辺部から縄文時代の人々の生活拠点である集落が消えるのは確かである。また、陥し穴等の遺構も調査区内に存在しないため、考古学的に読み取ることができる縄文時代の人々の活動はここで見失ったかのような状況である。



第 84 図 遺構の変遷

4 結 語

今回の峯岸遺跡の発掘調査では、縄文時代前期後葉を中心とする集落の一端が良好に認められた。特に、今回調査した集落の中心時期は大木4式相当の時期であると考えられる。岩手県において当該期は、集落の様子が必ずしも明確となっておらず、不明な点が多い時期である。その中で、この峯岸遺跡は長期にわたり存続する集落のあり方を理解する上で欠くことのできない調査成果となった。今後、資料が蓄積されることで、考古学的によりこの集落の占める位置は高まるものと考えている。

(福島)

引用・参考文献

- 小林達雄編 2008 『総覧 縄文土器』 アム・プロモーション
白鳥真一 1989 「前期大木式土器様式」「縄文土器大観1 前期」
陸前高田市教育委員会 2006 『陸前高田市文化財報告書第26集 霊南遺跡』
－岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書－
第629集 2014 「屋形遺跡」 岩手県文化振興事業団
第598集 2012 「山脈地遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団
第432集 2004 「船遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
第429集 2004 「大中田遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
第241集 1996 「牧田貝塚発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

写 真 図 版



調査区遠景(南西から)



調査区遠景(南から)



調査区遠景(上が北)



調査区遠景(上が北)

写真図版2 航空写真(直上)



II・田区近景(南東から)



I区近景(南西から)

写真図版3 調査区近景



メインベルト断面(南西から)



メインベルト断面北端(西から)

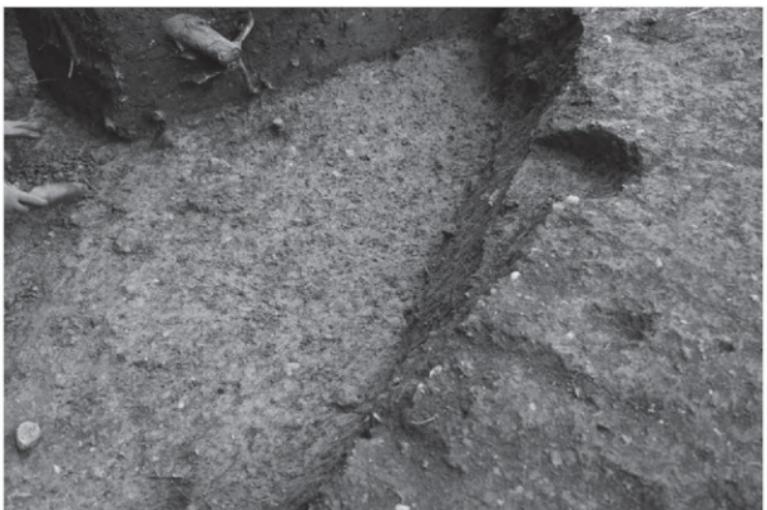
写真図版 4 基本層序



全景(東から)



断面(東から)



周溝棱出(北東から)



柱穴断面(東から)

写真図版 6 積穴住居 1 (2)



竪穴住居2・3全景(南東から)



竪穴住居2・3断面(北西から)



竪穴住居2断面(西から)



竪穴住居3断面(西から)

写真図版8 竪穴住居2・3(2)



竪穴住居 2断面(南東から)



竪穴住居 3断面(南東から)



竪穴住居 4 断面(北東から)



竪穴住居 4 断面(北西から)

写真図版10 竪穴住居 4



竪穴住居5全景(北東から)



竪穴住居5断面(南東から)



竪穴住居5断面(北から)



竪穴住居5断面(北東から)

写真図版12 竪穴住居5(2)



竪穴住居6断面(東から)



竪穴住居6断面(南から)



竪穴住居7全景(北から)



竪穴住居7断面(東から)

写真図版14 竪穴住居7(1)



竪穴住居 7 床面炭化物検出(北から)



竪穴住居 7 断面(北から)



竪穴住居 8 断面(東から)



竪穴住居 8 断面(南から)

写真図版16 竪穴住居 8



豊穴住居9断面(東から)



豊穴住居9断面(南から)



竪穴住居10断面(西から)



竪穴住居10断面(北から)



竪穴住居11全景(北から)



竪穴住居11断面(北から)



竪穴住居11断面(北から)



竪穴住居11断面(北東から)



竪穴住居11断面(東から)



竪穴住居12全景(南から)



竪穴住居12棟出(南から)

写真図版20 竪穴住居12(1)



豊穴住居12断面(東から)



豊穴住居12断面(東から)



豊穴住居12断面(東から)



豊穴住居12断面(南から)



作業風景

写真図版21 豊穴住居12(2)・作業風景



竪穴住居13・15・21全景(東から)



竪穴住居13・15・21全景(南から)

写真図版22 竪穴住居13・15・21(1)



竪穴住居13・15・21断面(南から)



竪穴住居13・15・21断面(西から)



竪穴住居16全景(西から)



竪穴住居16棲出(南から)



竪穴住居16断面(南から)



竪穴住居16柱穴(P1)断面(西から)



作業風景

写真図版24 竪穴住居16・作業風景



竪穴住居17・19・20全景(西から)



竪穴住居17・19・20断面(北から)



竪穴住居17断面(西から)



竪穴住居17柱穴(P1)断面(東から)



竪穴住居20遺物出土状況(北西から)



竪穴住居17・19・20床面精査風景(南西から)



竪穴住居17・19・20断面実測風景(西から)



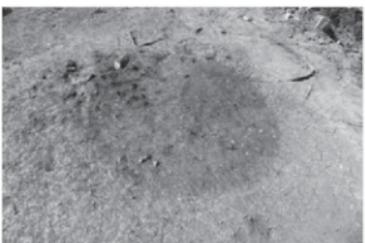
竪穴住居18断面(北から)



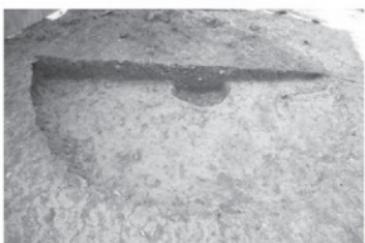
竪穴住居18断面(西から)



貯蔵穴1 全景(南から)



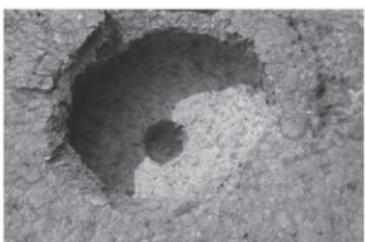
貯蔵穴1 棚出(南から)



貯蔵穴1 断面(南から)



貯蔵穴2 全景(西から)



貯蔵穴3 全景(南から)



貯蔵穴2 断面(北東から)



貯蔵穴3 全景(南東から)



貯蔵穴3 副穴断面(南東から)

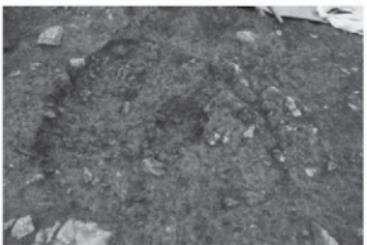
写真図版28 貯蔵穴1～3



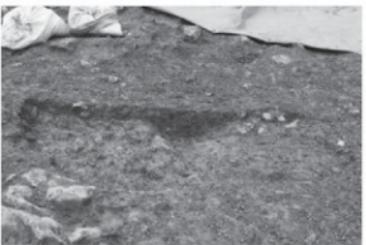
貯蔵穴4全景(東から)



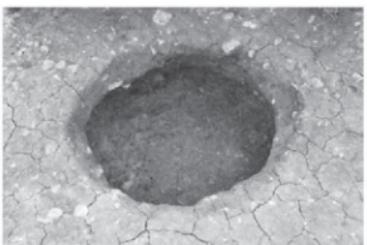
貯蔵穴4断面(南東から)



貯蔵穴5全景(南から)



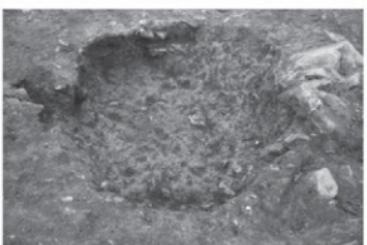
貯蔵穴5断面(南から)



貯蔵穴6全景(北から)



貯蔵穴6断面(東から)



貯蔵穴7全景(南東から)



貯蔵穴7断面(南東から)



貯蔵穴8全景(東から)



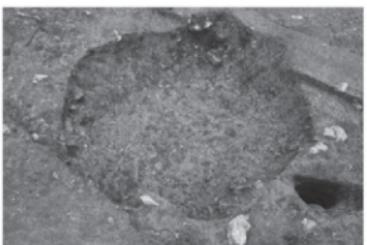
貯蔵穴8断面(北から)



貯蔵穴9全景(南東から)



貯蔵穴9断面(南から)



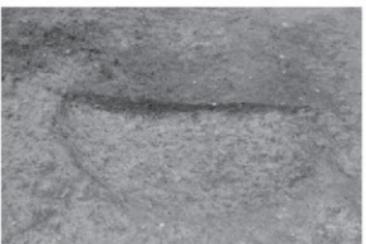
貯蔵穴10全景(北から)



貯蔵穴10断面(西から)



土坑1検出(南から)



土坑1断面(南から)

写真図版30 貯蔵穴8～10・土坑1



土坑2全景(北西から)



土坑2断面(北東から)



土坑3全景(東から)



土坑3断面(南から)



土坑4全景(東から)



土坑4断面(南から)



土坑5全景(南から)



土坑5断面(東から)



土坑6全景(北から)



土坑6断面(東から)



土坑7全景(東から)



土坑7断面(東から)



土坑8全景(南東から)



土坑8断面(南東から)



土坑9全景(南東から)



土坑9断面(東から)

写真図版32 土坑6～9



土坑10断面(南から)



土坑11全景(東から)



土坑11断面(東から)



土坑12～13全景(東から)



土坑12～13断面(東から)



作業風景



土坑14稼出(南西から)



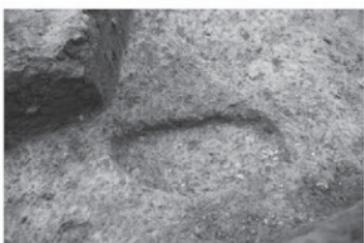
土坑14断面(南から)



土坑15断面(東から)



土坑16全景(南東から)



土坑16断面(南東から)



土坑17全景(南東から)



土坑18断面(南から)



土坑19断面(西から)



土坑20全景(東から)



土坑20断面(東から)

写真図版34 土坑15~20



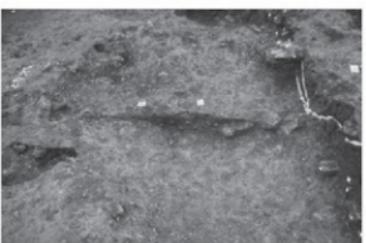
土坑21全景(北東から)



土坑21断面(東から)



土坑22全景(西から)



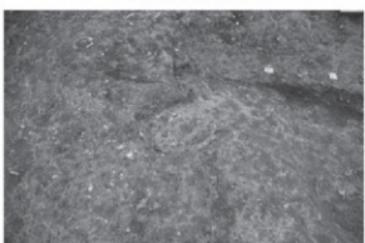
土坑22断面(西から)



土坑23全景(西から)



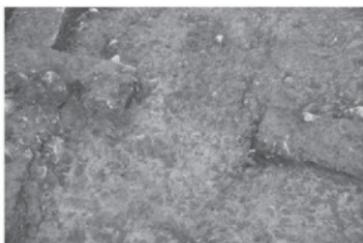
土坑23断面(西から)



土坑24全景(西から)



土坑24断面(西から)



土坑25全景(西から)



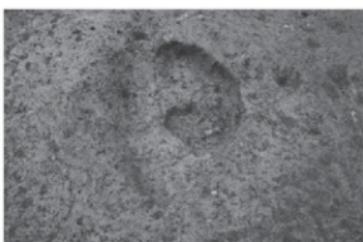
土坑25断面(西から)



土坑26全景(北東から)



土坑26断面(東から)



土坑27全景(西から)



土坑27断面(南から)



土坑28全景(南から)



土坑28断面(南から)

写真図版36 土坑25~28



土坑29全景(西から)



土坑29断面(南から)



土坑30全景(西から)



土坑30断面(西から)



土坑31全景(西から)



土坑31断面(南から)



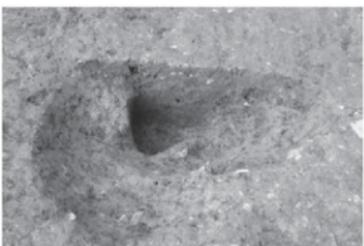
土坑32全景(北東から)



土坑32断面(南東から)



土坑33全景(北東から)



土坑33断面(南から)



土坑34全景(東から)



土坑34・35・36・37断面(南東から)



土坑34・35・36・37・38断面(北東から)



土坑34・35・36・37・38断面(北西から)

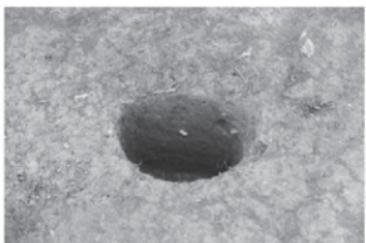


焼土遺構1検出(西から)



焼土遺構1断面(南東から)

写真図版38 土坑33～37・焼土遺構1



柱穴2断面(南から)



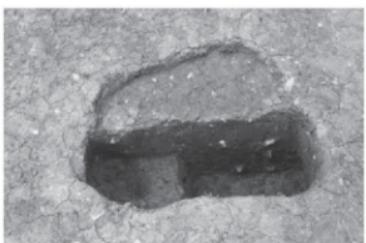
柱穴3断面(南から)



柱穴4断面(南から)



柱穴5断面(南から)



柱穴16断面(南から)



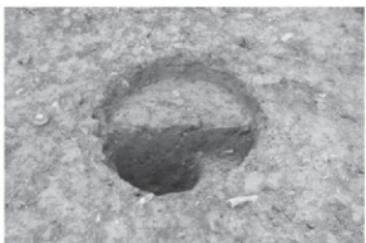
柱穴19断面(南から)



柱穴52断面(南から)



柱穴63断面(南から)



柱穴67断面(南から)



柱穴35断面(南から)



柱穴36断面(南から)



柱穴64断面(南から)



柱穴65断面(南から)



柱穴69断面(南から)



柱穴71断面(南から)



柱穴72断面(南から)

写真図版40 柱穴67・35・36・64・65・69・71・72



遺物包含層1土器出土状況1



遺物包含層1土器出土状況2



遺物包含層1土器出土状況3



遺物包含層1土器出土状況4



遺物包含層1土器出土状況5



遺物包含層1土器出土状況6



遺物包含層1土層ベルト(東から)



遺物包含層1土層ベルト(南から)

写真図版41 遺物包含層1



遺物包含層2全景(南西から)



遺物包含層2土層ベルト(東から)



遺物包含層2土層ベルト(南東から)



遺物包含層2土層ベルト(南東から)

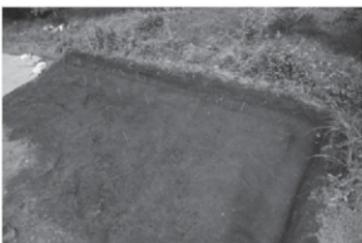


遺物包含層2土層ベルト(南から)

写真図版42 遺物包含層2



遺物包含層2遺物出土状況(南から)



遺物包含層2遺物出土状況(南西から)



塚1 棚出(南西から)



塚1 (C-C')断面(南西から)



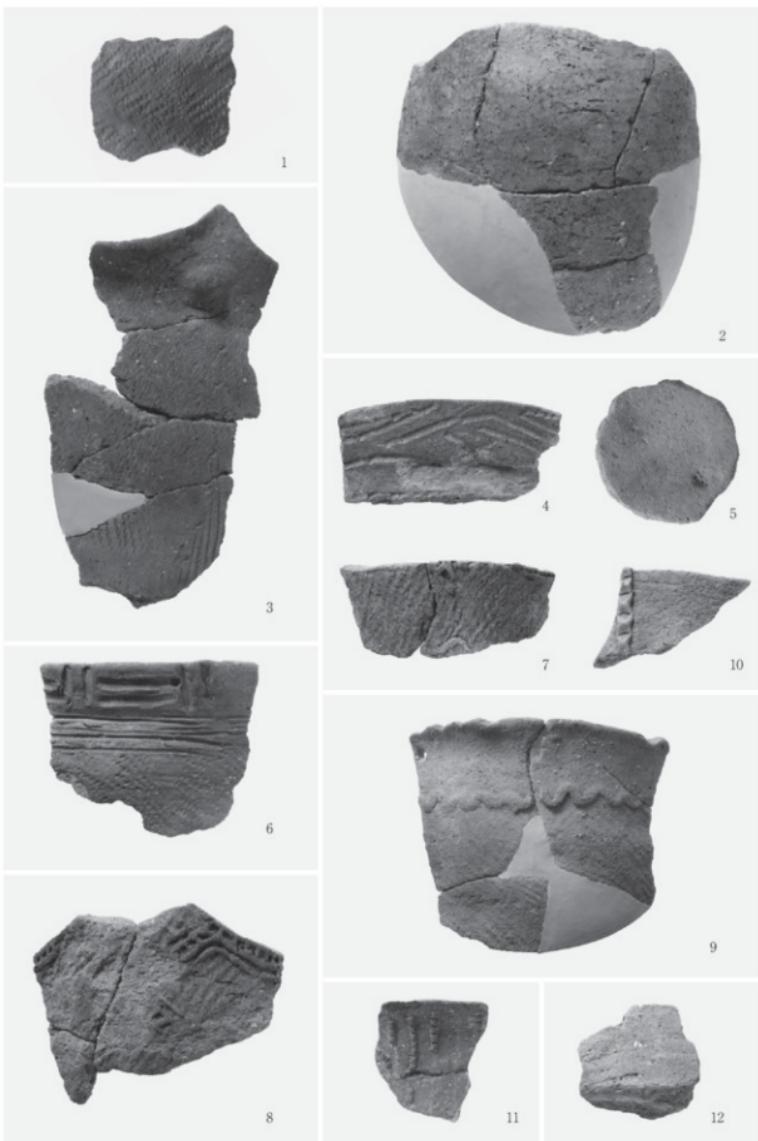
塚1 (A-A')断面(南西から)



塚1 全景(南西から)



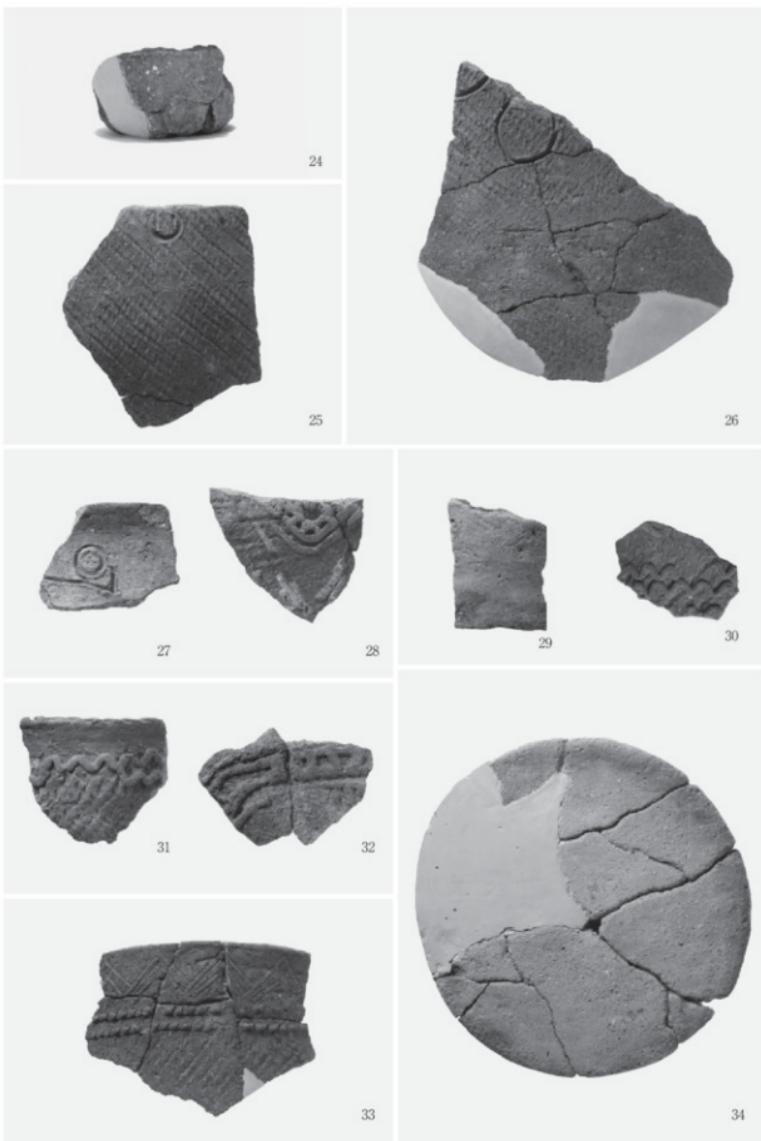
塚1 (B-B')断面(南西から)



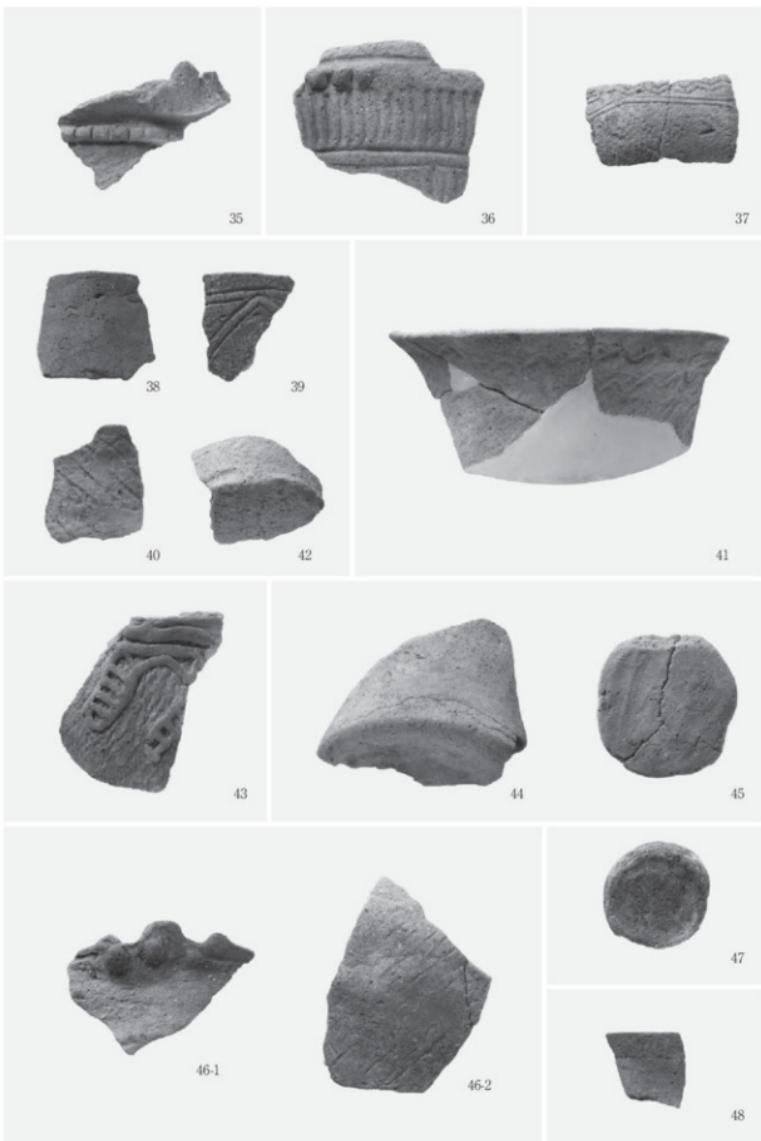
写真図版44 繩文土器(1~12)



写真図版45 繩文土器(13~23)



写真図版46 繩文土器(24~34)



写真図版47 繩文土器(35~48)



写真図版48 繩文土器(49~63)



64



65



68



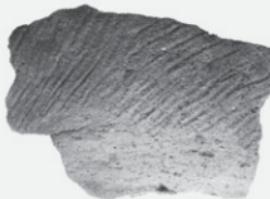
66



69



70



67

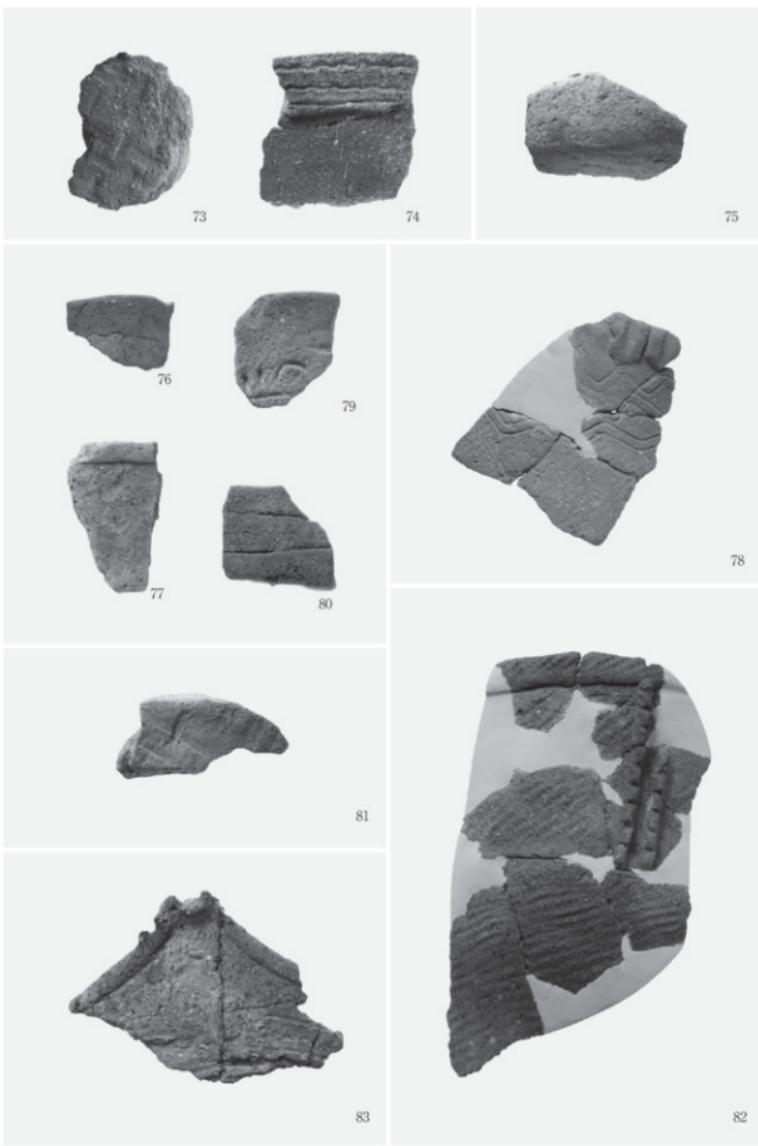


71



72

写真図版49 繩文土器(64~72)



写真図版50 繩文土器(73~83)



写真図版51 繩文土器 (84~94)



写真図版52 繩文土器(95~109)



写真図版53 繩文土器(110~123)



124



125



126



127



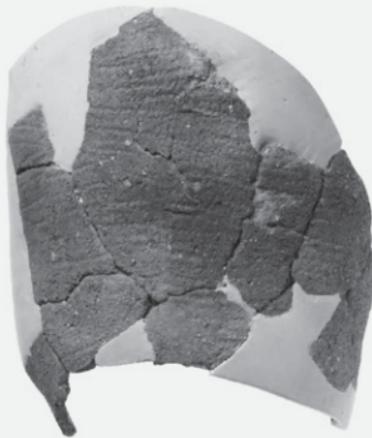
128



129



130-1



130-2

写真図版54 繩文土器(124~130)



131



133



132



134



135



136

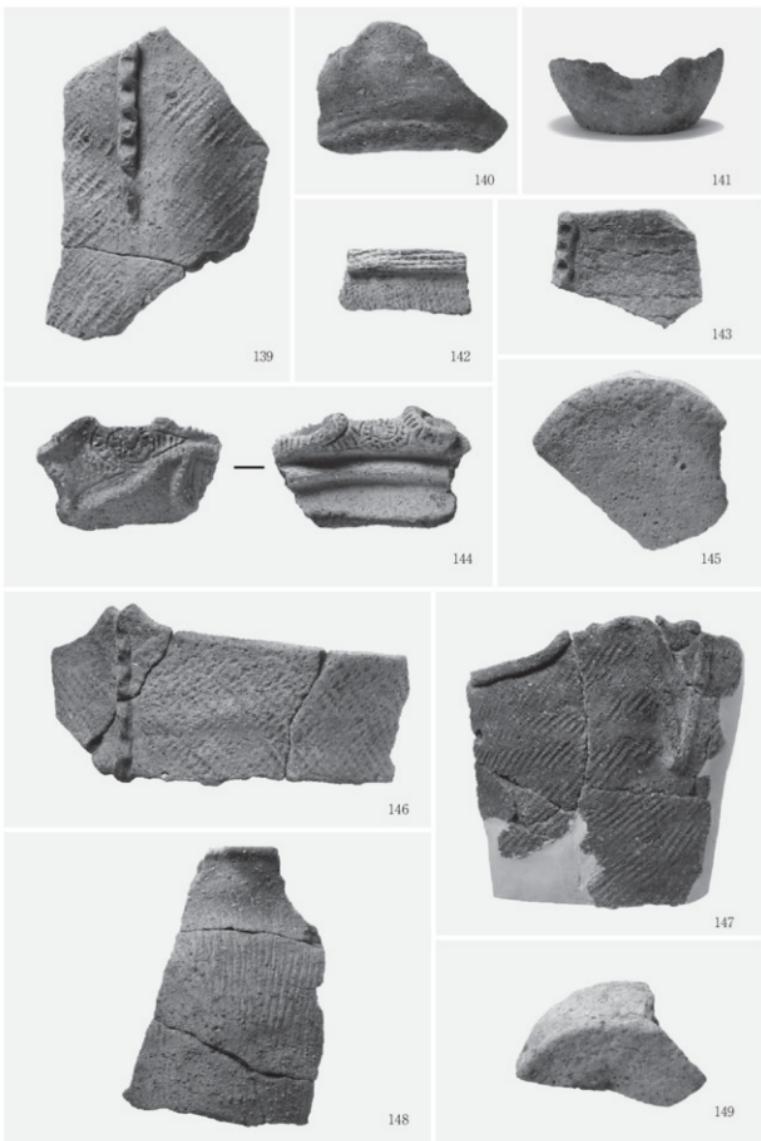


137



138

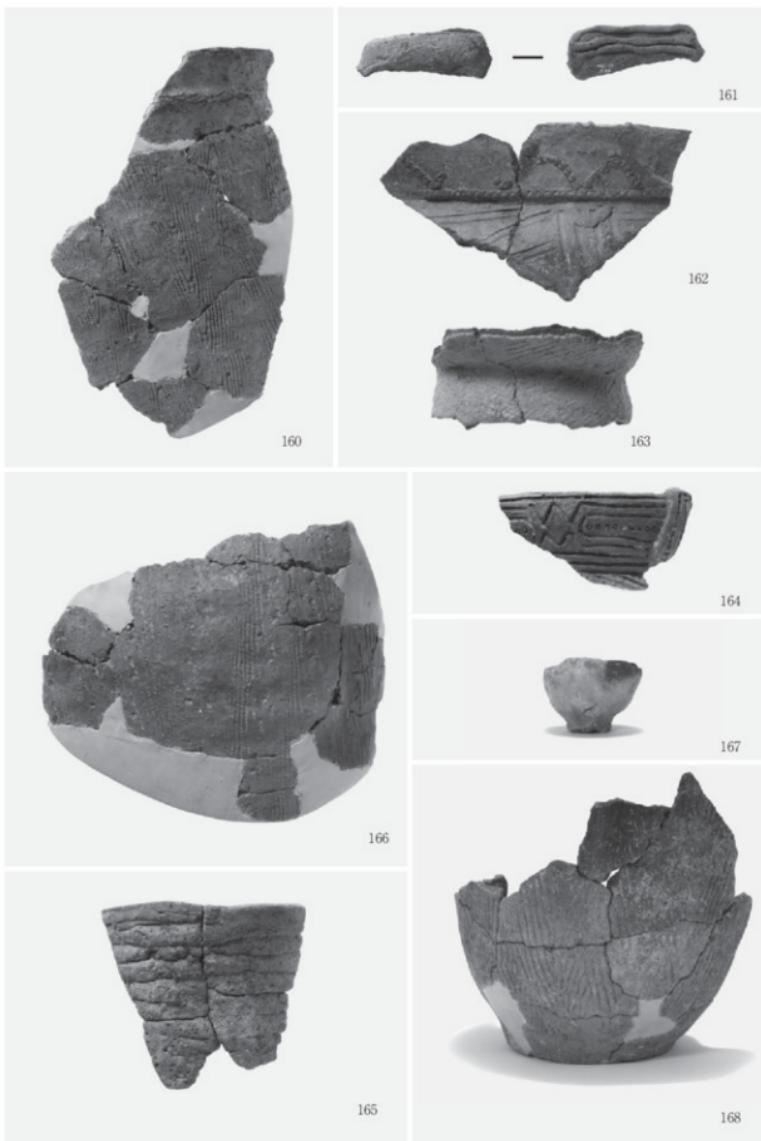
写真図版55 繩文土器(131~138)



写真図版56 繩文土器(139~149)



写真図版57 縄文土器(150~159)



写真図版58 繩文土器(160~168)



169



171



170



172



174



173



175



176



177



178

写真図版59 繩文土器(169~178)



179



180



183



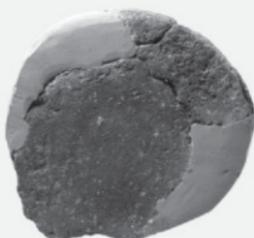
181



182



184



185

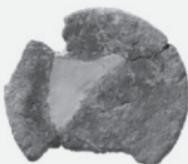


186

写真図版60 繩文土器(179~186)



187



189



190



192



188

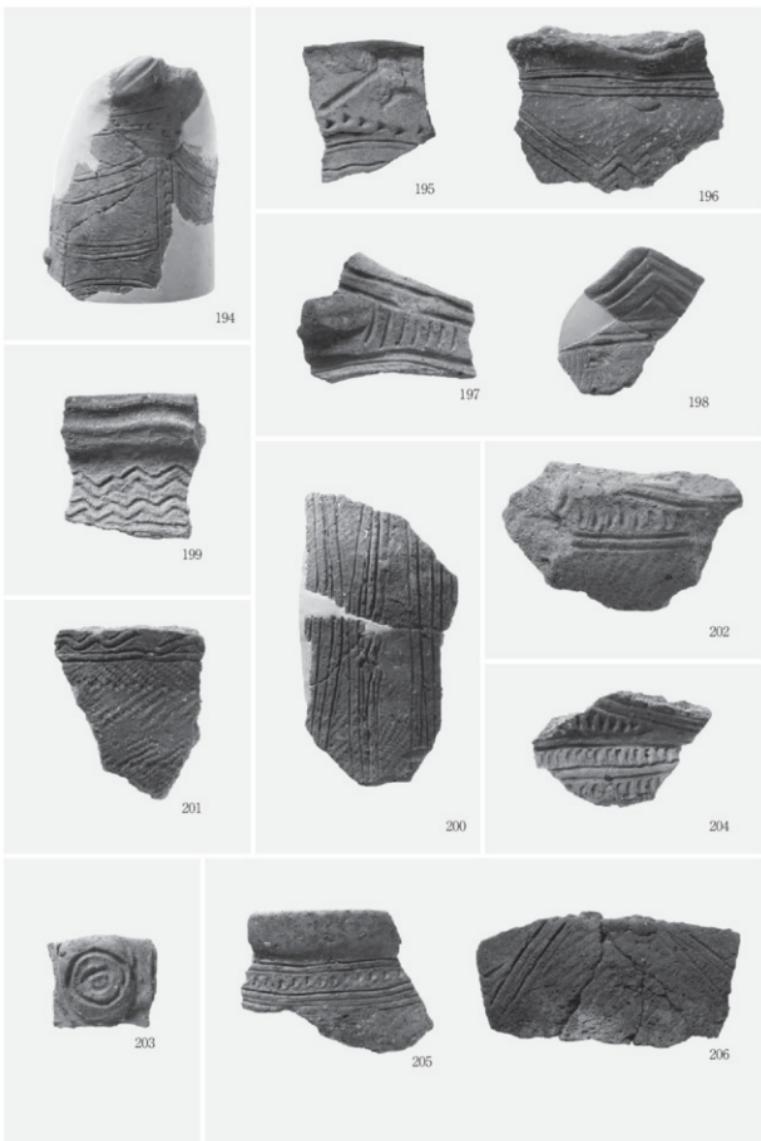


191



193

写真図版61 繩文土器(187~193)



写真図版62 繩文土器(194~206)



207



210



212



208



211



209



213

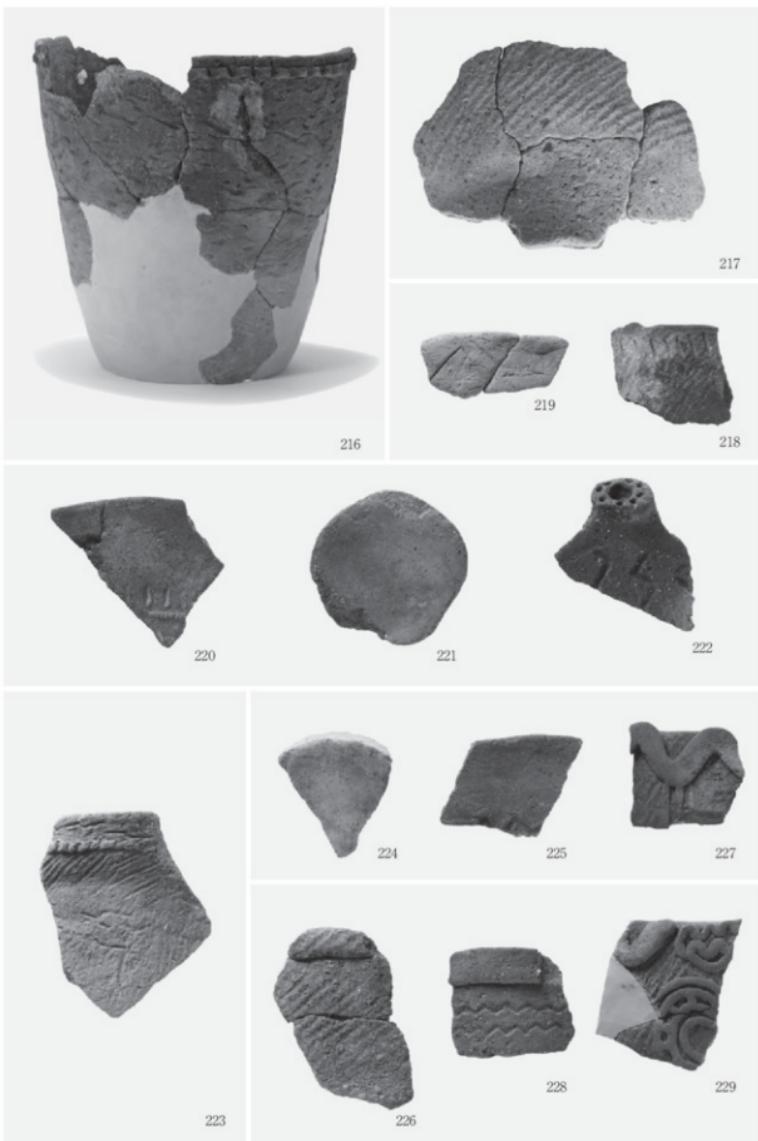


214



215

写真図版63 繩文土器(207~215)



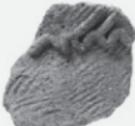
写真図版64 繩文土器 (216~229)



230



231



232



233



234



235



236



237

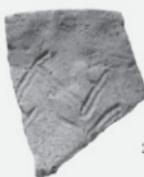
写真図版65 繩文土器(230~237)



写真図版66 繩文土器(238~246)



247



248



249



250



251



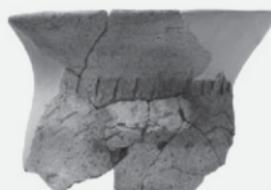
252



253



254



256



255



257



258

写真図版67 繩文土器(247~258)



259



260



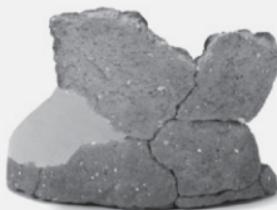
261



262



263



264



265

写真図版68 繩文土器(259~265)



—



266



267



269



268



270



271



272



273



274



275

写真図版69 繩文土器(266~275)



276



277



278



280



279

写真図版70 繩文土器(276~280)



281



282



283



284



288



285



286



287

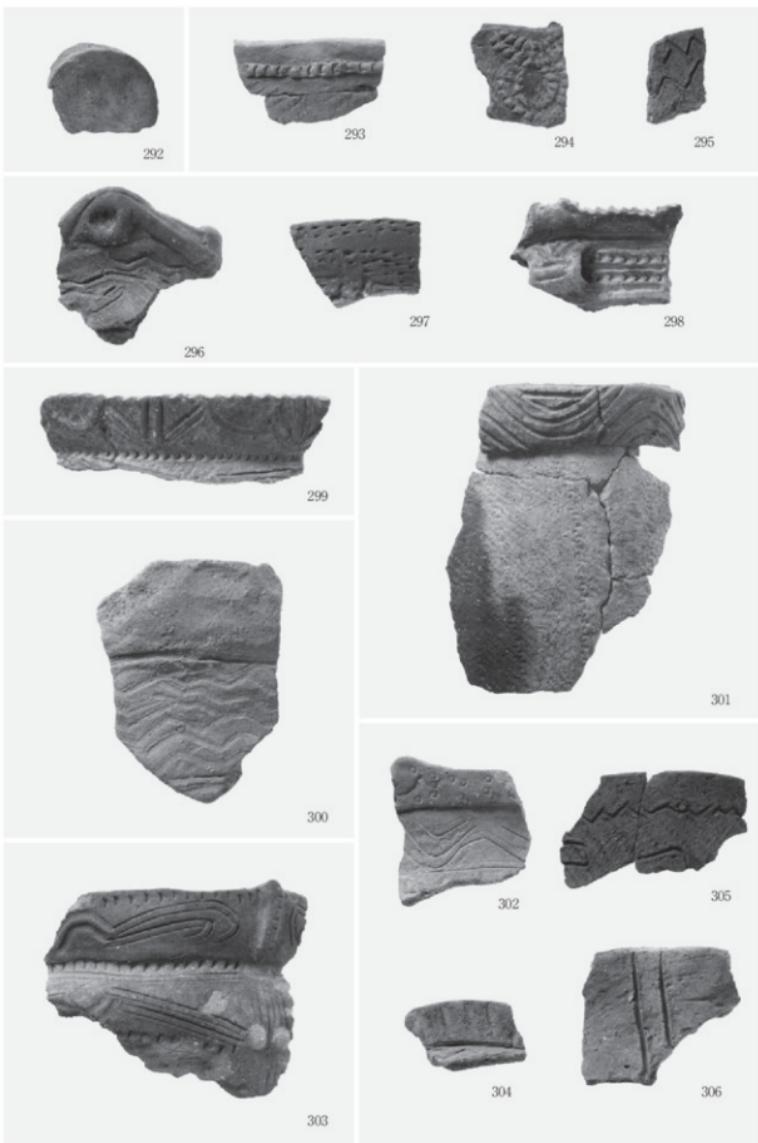


289



290

写真図版71 繩文土器(281~291)



写真図版72 繩文土器(292~306)



307



308



313



310



314



309



315



311



312

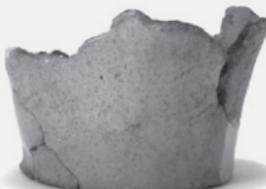
写真図版73 繩文土器(307~315)



316-1



316-2



317



318



319



320



321



322



323

写真図版74 繩文土器(316~323)



324



328



325



326



329



327

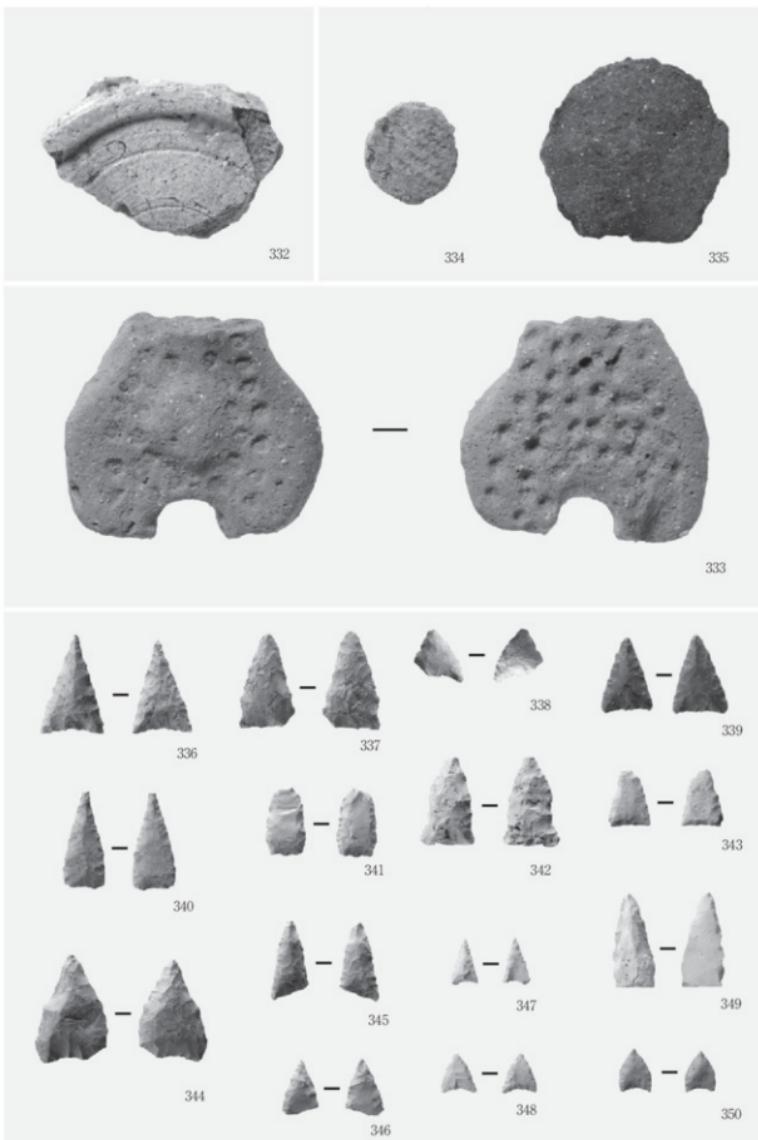


330

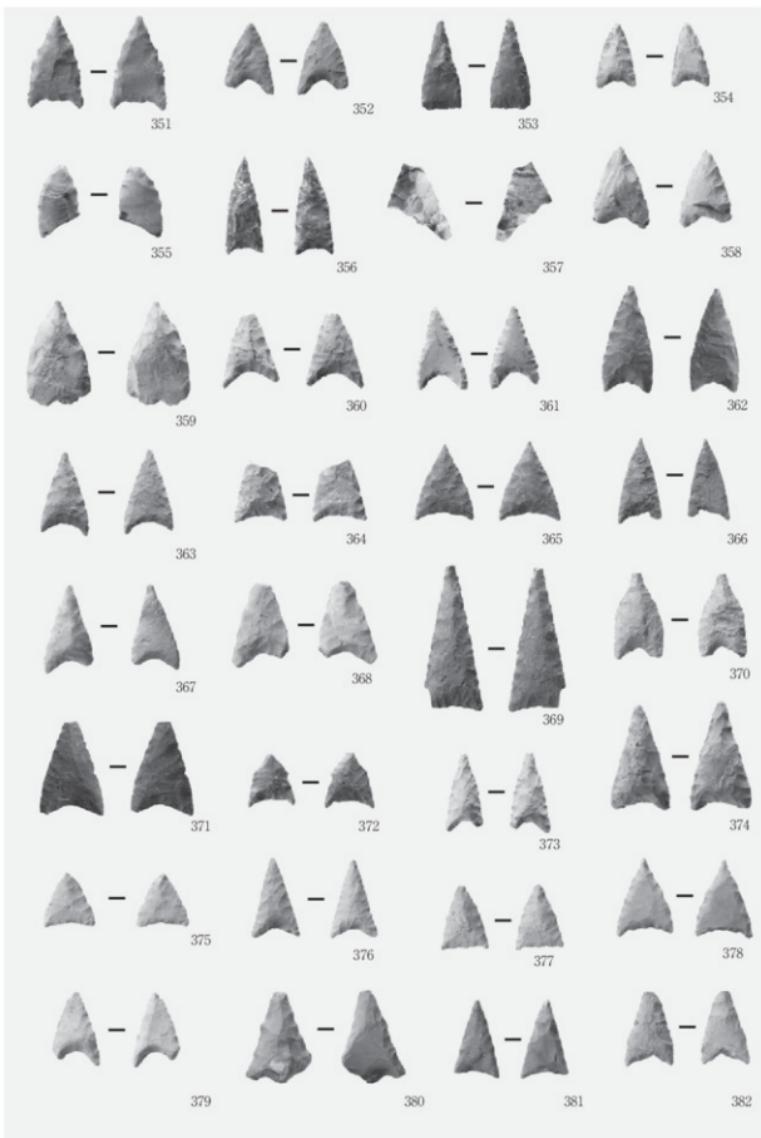


331

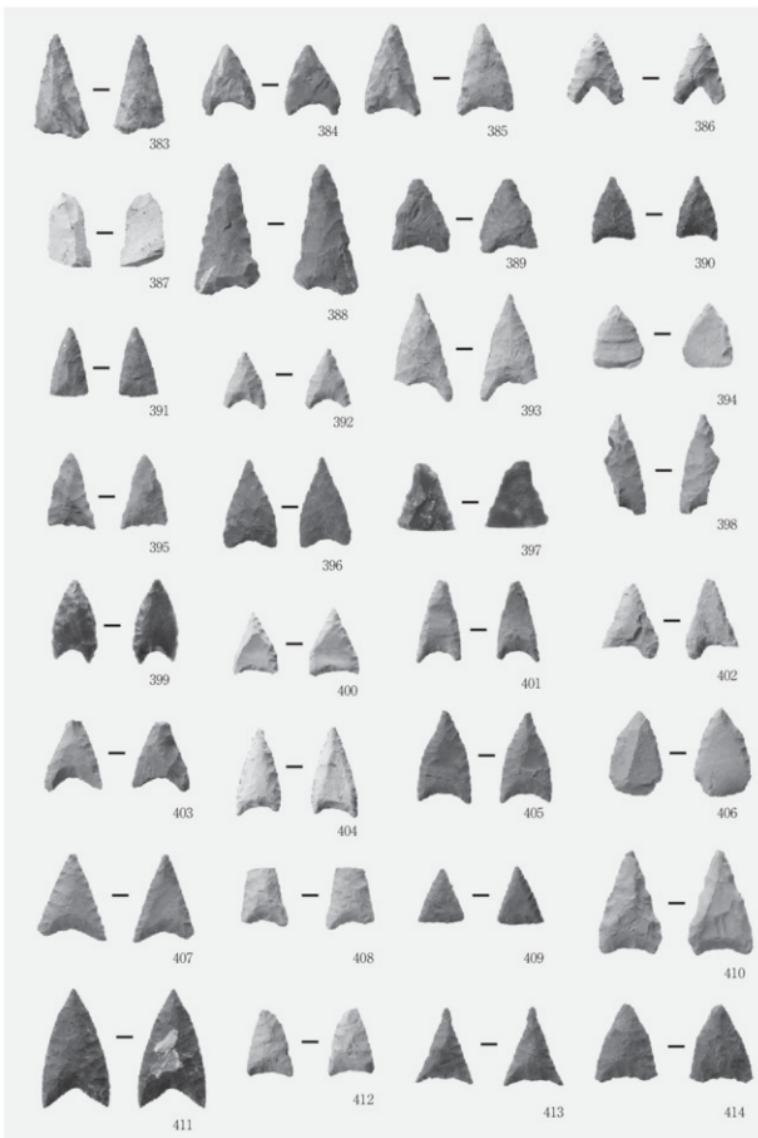
写真図版75 繩文土器(324~331)



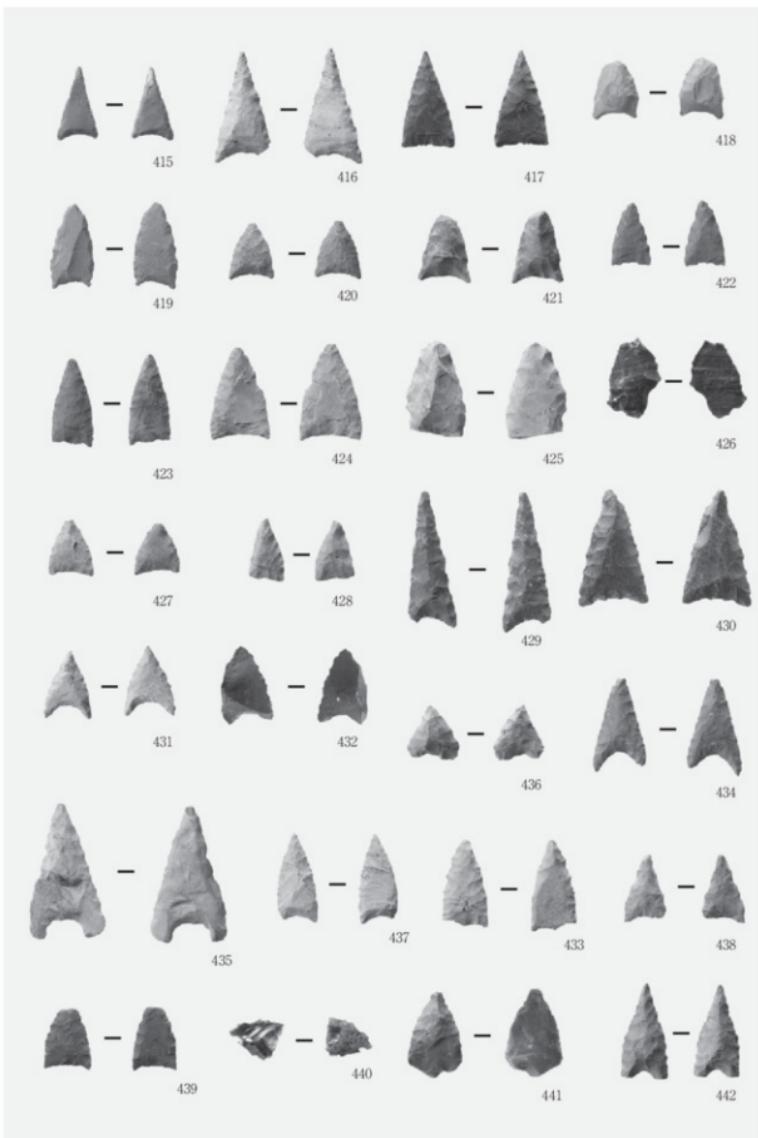
写真図版76 陶器(332)・土製品(333~335)・石器(336~350)



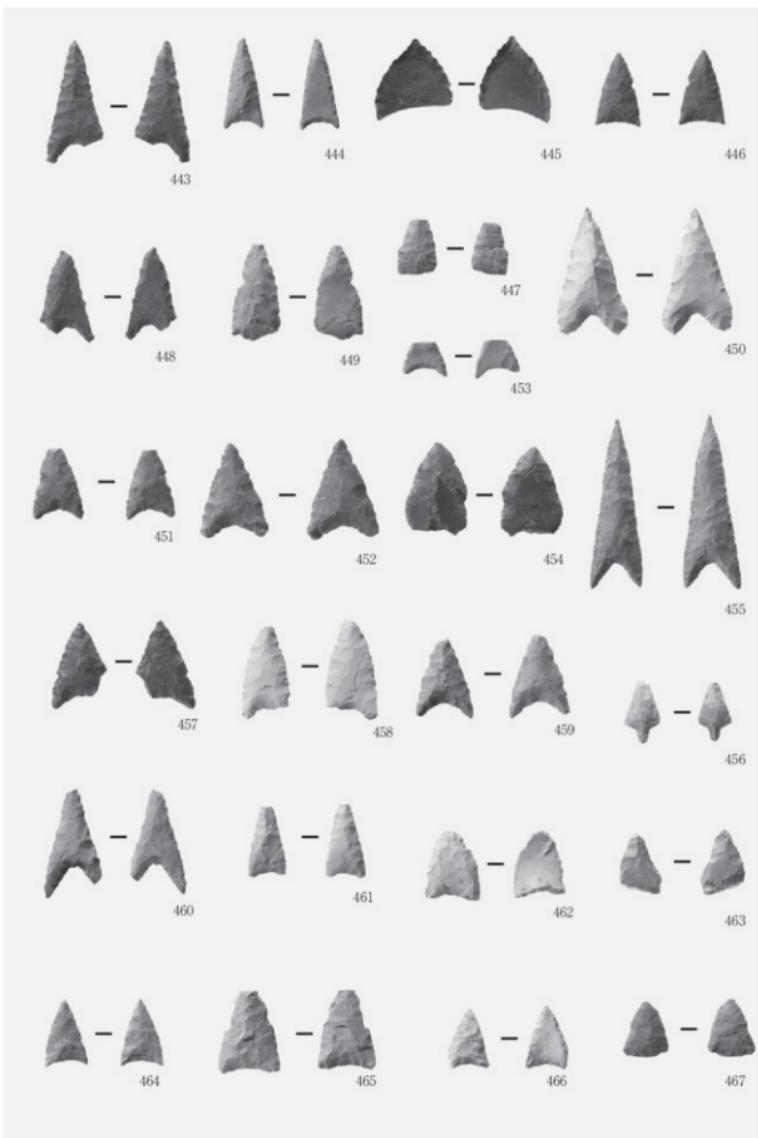
写真図版77 石器(351~382)



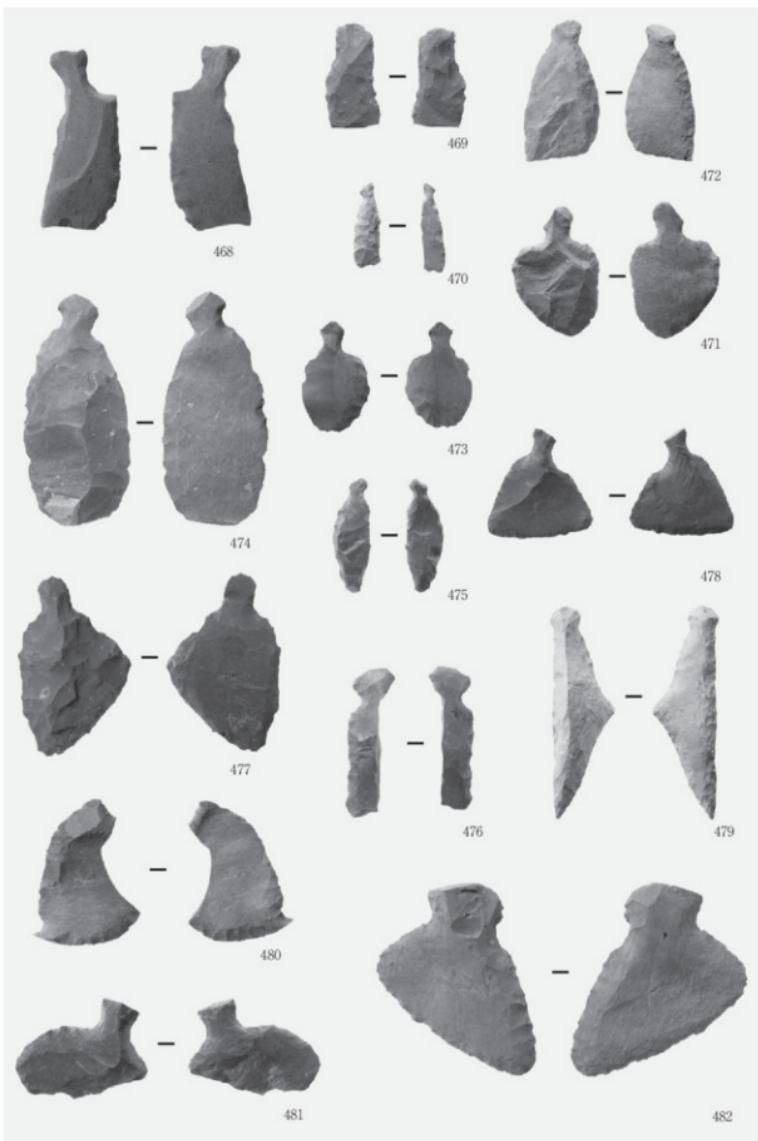
写真図版78 石器(383~414)



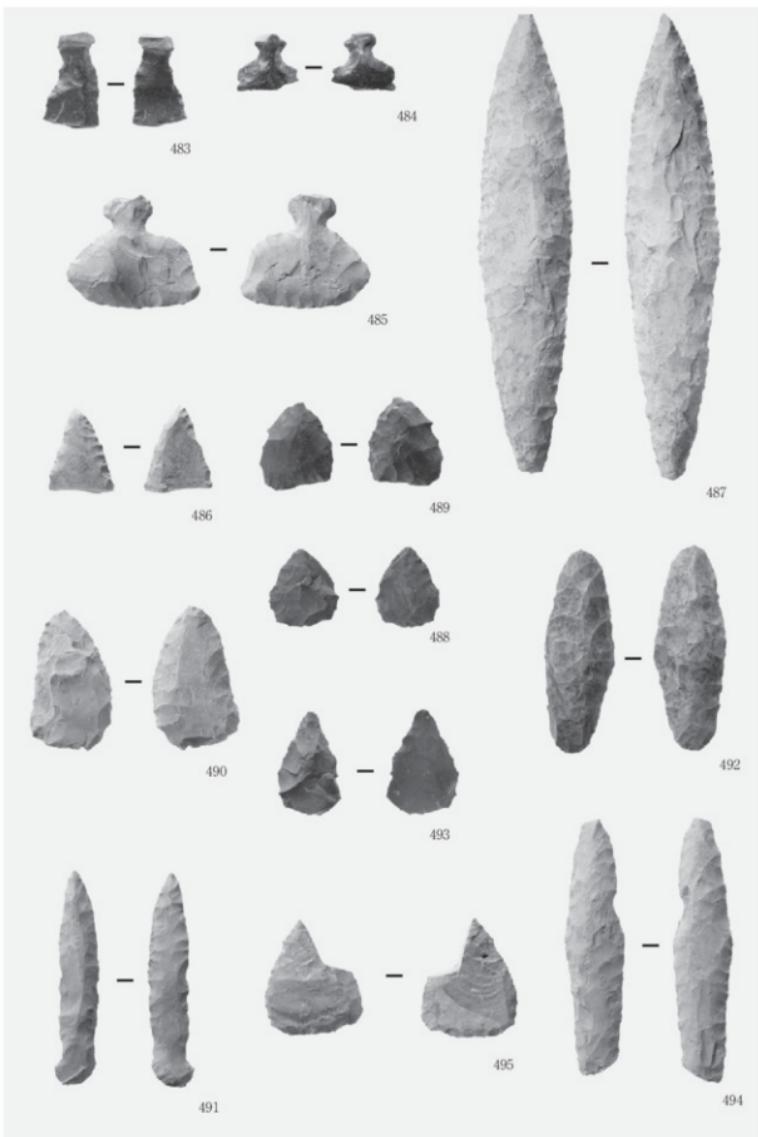
写真図版79 石器(415~442)



写真図版80 石器(443~467)



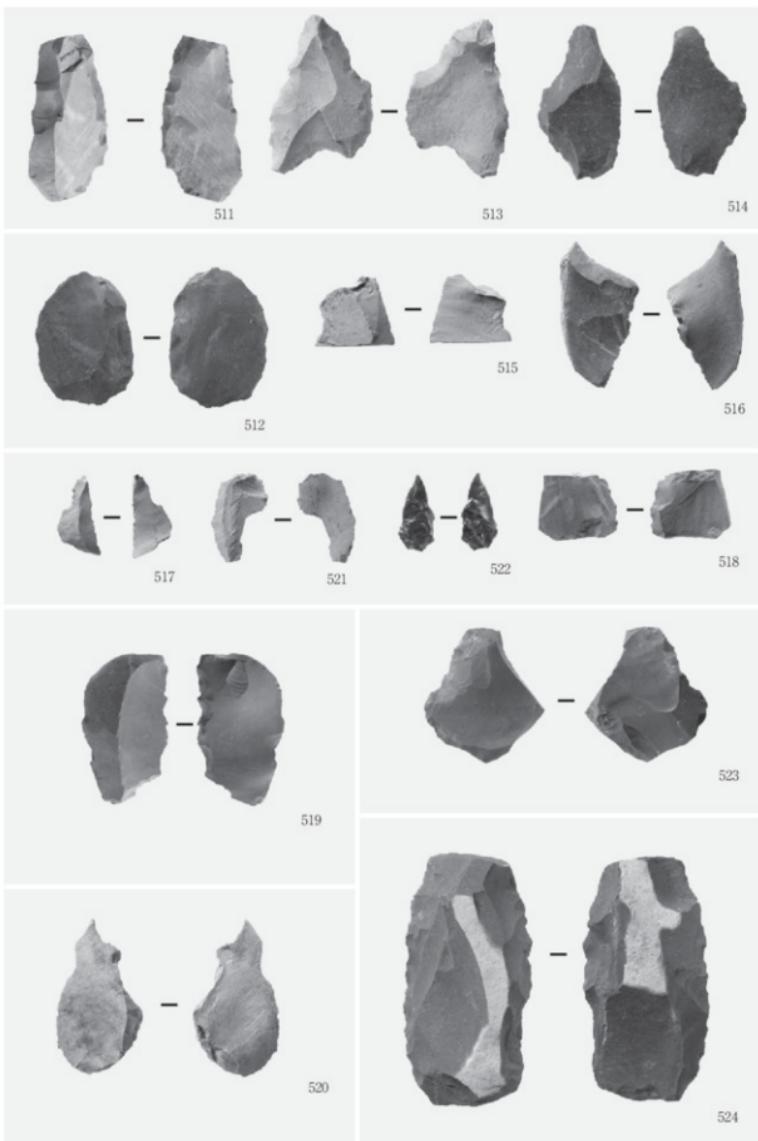
写真図版81 石器(468~482)



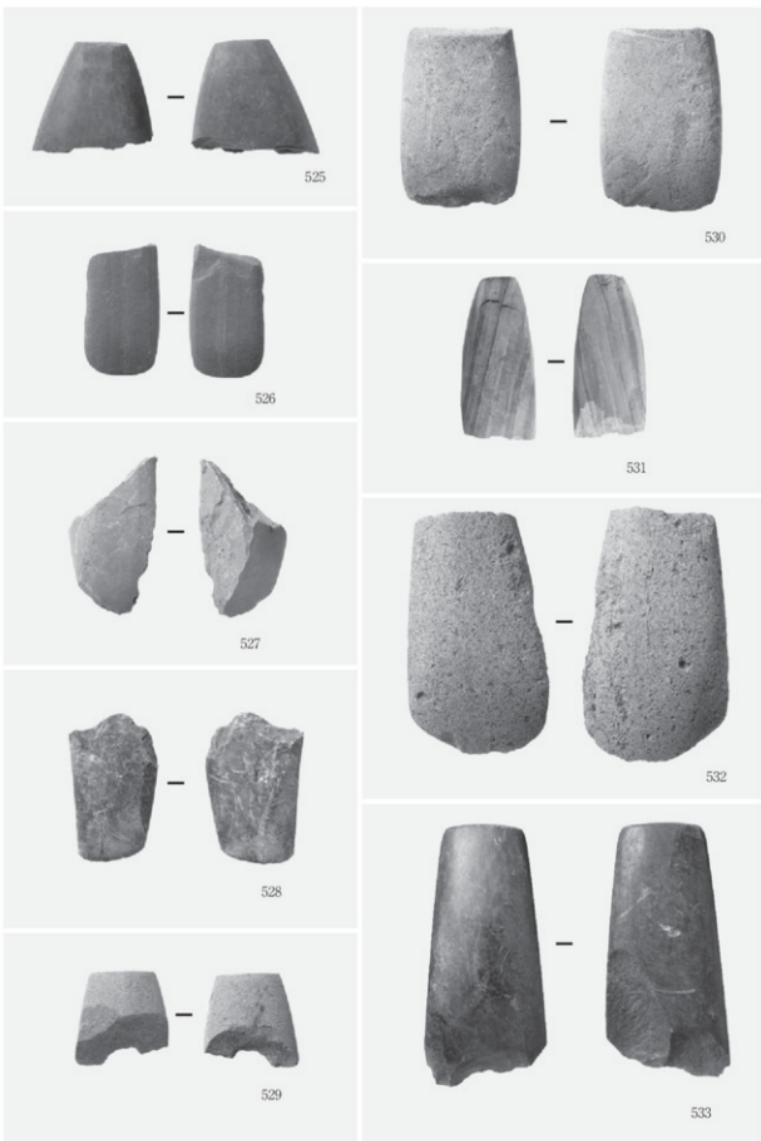
写真図版82 石器(483~495)



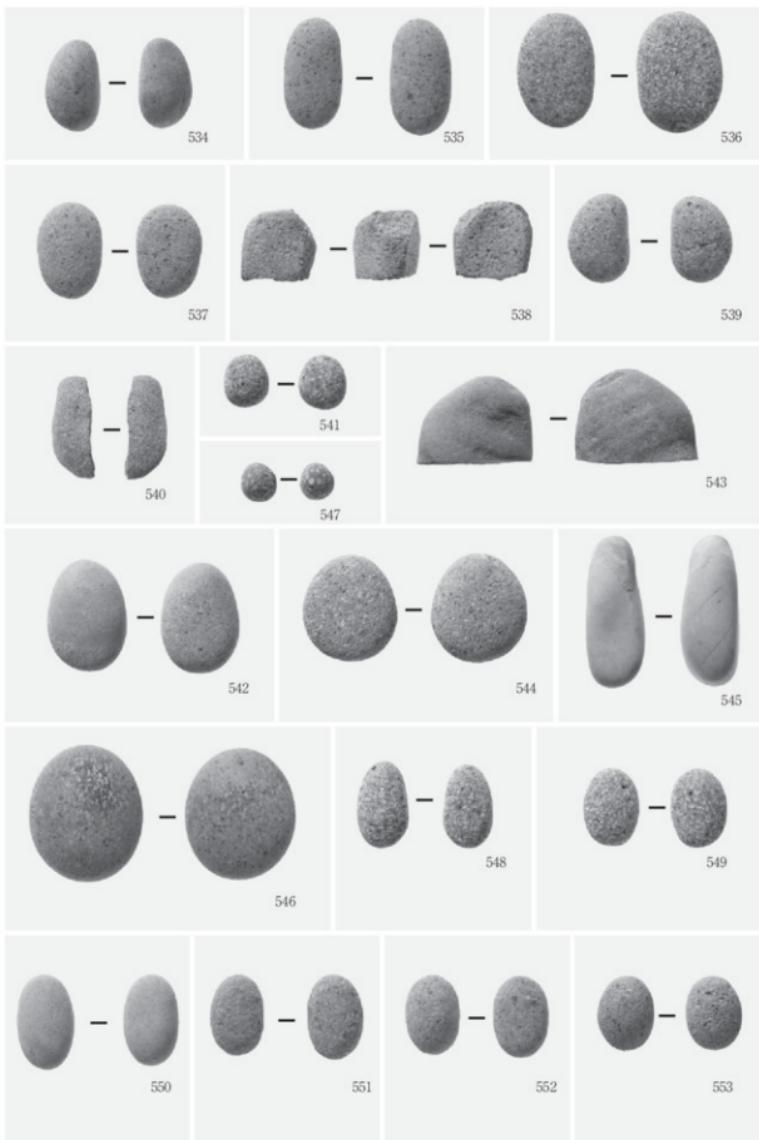
写真図版83 石器(496~510)



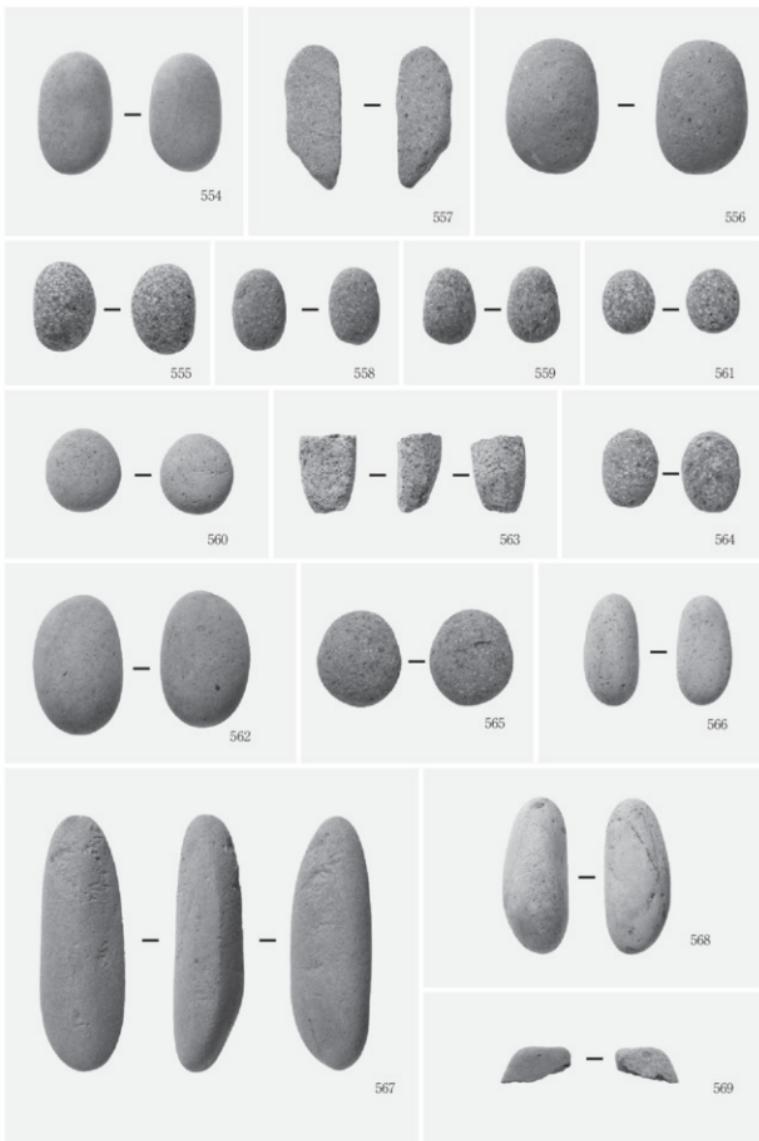
写真図版84 石器(511~524)



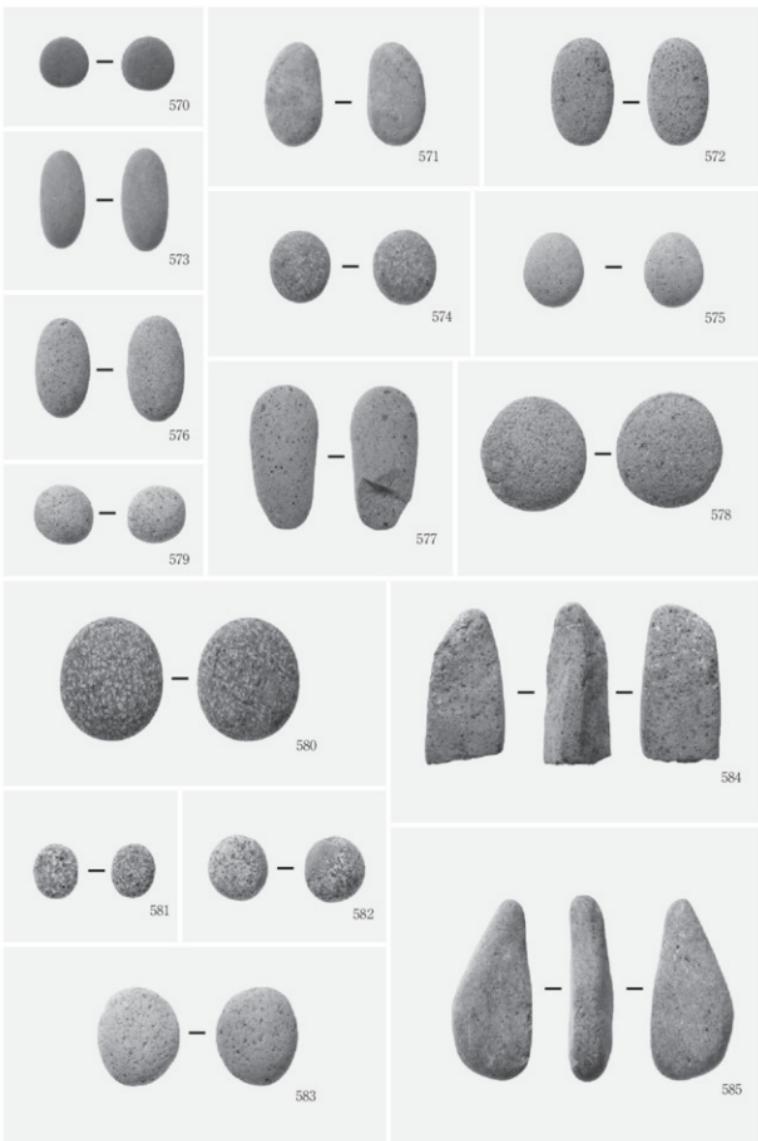
写真図版85 石器(325~533)



写真図版86 石器(534~553)



写真図版87 石器(554~569)



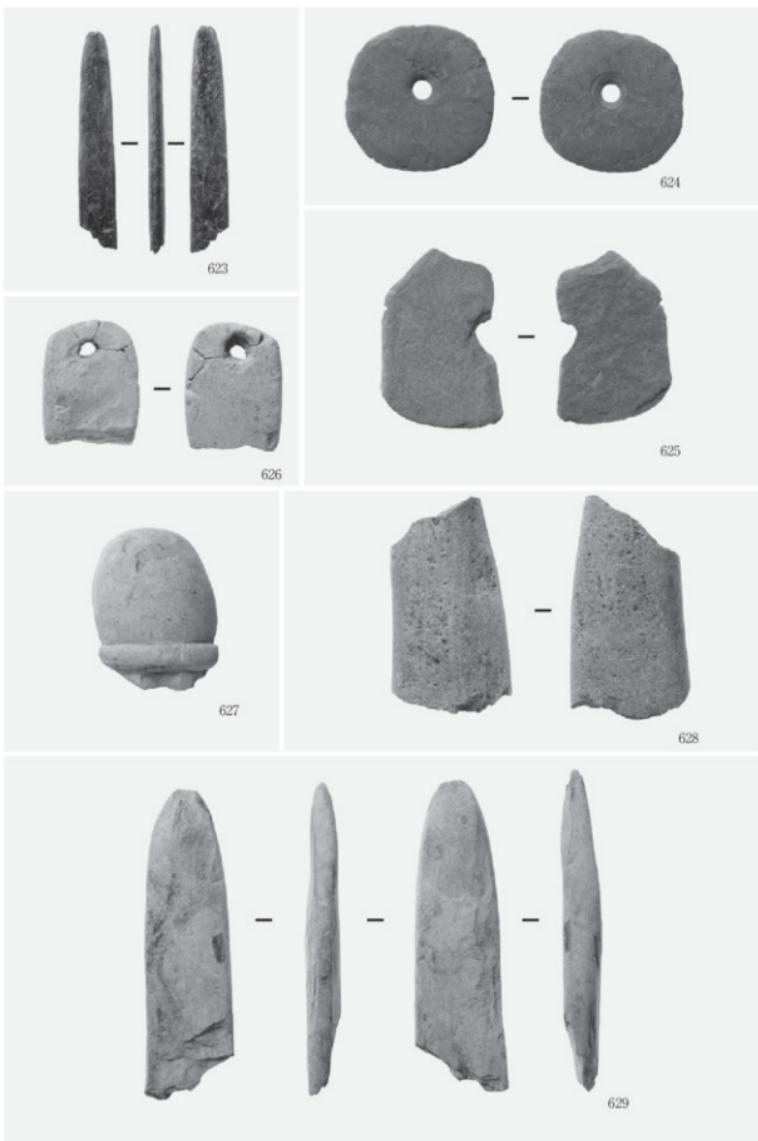
写真図版88 石器(570~585)



写真図版89 石器 (586~604)



写真図版90 石器(605~615)・石製品(616~622)



写真図版91 石製品(623~629)

報告書抄録

ふりがな	みねぎしいせきはつくつちょうさほうこくしょ						
書名	峯岸遺跡発掘調査報告書						
副書名	防災集団移転促進事業（峯岸地区）関連遺跡発掘調査						
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第637集						
編著者名	福島正和・星 雅之・亭坪祐樹						
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001						
発行年月日	2015年3月20日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
みねぎしいせき 峯岸遺跡	おおふなとし 大船渡市 まちきうちょうみねぎし 末崎町峯岸 ばんざいちょう 121番地ほか	03203	NF69-0063	39度 01分 15秒	141度 12分 41秒	2013.04.08 ~ 2013.10.31	4,512 防災集団 移転促進 事業（峯 岸地区）
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
峯岸遺跡	集落	縄文時代 前期～中期	竪穴住居 貯蔵穴 土坑 焼土遺構 柱穴 中世	21 10 37 1 169 1	縄文土器・石器・不明 石製品・土偶・块状耳 飾	縄文時代前期後葉～中 期初頭にかけての大規 模集落	
要 約	峯岸遺跡は、大船渡湾を見下ろす高台に立地する縄文時代前期～中期初頭の集落遺跡である。今回の調査では大木3～7式までの土器群が出土する竪穴住居や貯蔵穴を多数検出した。また、同時期の遺物包含層も調査した。						

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第637集

峯岸遺跡発掘調査報告書

防災集団移転促進事業(峯岸地区)関連遺跡発掘調査

印 刷 平成27年3月13日

発 行 平成27年3月20日

編 集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話(019)638-9001

発 行 岩手県大船渡市灾害復興局

〒022-8501 岩手県大船渡市盛町字津野沢15

電話(0192)27-3111

(公財)岩手県文化振興事業団

〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号

電話(019)654-2235

印 刷 株式会社白ゆり

〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ6丁目1-50

電話(019)643-6060
